富田林埋蔵文化財調査報告 26

平成６年度

富田林市内遺跡群発掘調査報告書

１９９５・３

富田林市教育委員会

『平成６年度　富田林市内遺跡群発掘調報告書』正誤表

頁	行	誤	正
P. 62	L. 28	草摺部分が出土しているが、	人物埴輪の一部が出土しているが、

はじめに

富田林市は、中心を石川が流れ、緑豊かな丘陵と美しい田園風景が調和した自然環境に恵まれたまちです。南部は特に自然が残り、西部丘陵地は計画的な市街地として整備され、中央部の石川によって形成された平野部には古くから人々の営みが行われていたところです。

富田林市域の中でも、中央平野部は特に遺跡の多く存在する地域で、毎年数多くの発掘調査を実施しています。

本書は、平成６年度に実施しました国庫補助事業の発掘調査概要報告書です。なかでも、従来、弥生時代の集落遺跡として周知されてきた喜志遺跡から、弥生時代の遺物に加え、まとまった埴輪が出土し、石川中流域に埋没した古墳が存在することを物語るものとして注目されています。

最後になりましたが、調査および本書の刊行にご協力いただきました関係各位に厚く感謝いたします。

平成７年３月

富田林市教育委員会

教育長　清　水　冨　夫

例　　言

1．本書は、富田林市教育委員会が平成６年度に、国庫および府費の補助を受け、実施した緊急発掘調査の概要報告書である。
2．調査は、富田林市教育委員会社会教育課、中辻亘・今西淳・粟田薫を担当者とし、平成６年４月１日に着手し、平成７年３月３１日に終了した。
3．本書の執筆は、各々文末に記す者があたった。本書の編集は中辻亘の指導のもとに粟田薫と田川友美が行った。
4．本書で使用した方位と標高は、すべて磁北と東京湾標準潮位で表示した。
5．調査の実施および本書の作成にあたっては、下記の諸氏に協力を得た。ここに記して感謝を表します。
北野耕平(神戸商船大学教授・富田林市文化財調査会委員)、山中一郎(京都大学)、森山義博(大阪府立富田林高等学校教諭)、福永信雄(東大阪市立郷土博物館)、西口陽一、小浜成(大阪府教育委員会)、中西和子(河内長野市教育委員会)、西山昌孝(千早赤坂村教育委員会)、笠井敏光(羽曳野市教育委員会)

発掘調査参加者

〈調　査　員〉　田川友美・楠木理恵

〈調査補助員〉　平方扶左子・高木伸子・瀬戸哲也・湯元　剛・川合和代

〈作　業　員〉　中川正博・坂本竹雄・森　幸彦・増原賢志・西野繁太郎
岩瀬訓子・山本節子

本 文 目 次

はじめに
例　言
Ⅰ　平成６年度調査概要 …… 1
Ⅱ　毛人谷遺跡 …… 2
　１．層序 …… 2
　２．遺構と出土遺物 …… 3
　３．まとめ …… 10
Ⅲ　喜志遺跡 …… 11
　１．層序 …… 11
　２．遺構 …… 12
　３．出土遺物 …… 15
　　３－１弥生時代の出土遺物 …… 15
　　　１　弥生土器 …… 15
　　　２　石器 …… 18
　　３－２古墳時代の出土遺物 …… 32
　　　１　埴輪 …… 32
　　３－３平安時代の出土遺物 …… 40
　　　１　土壙１出土土師器 …… 40
　　３－４近世の出土遺物 …… 41
　　　１　銭貨 …… 41
　　　２　土人形 …… 41
　４．まとめ …… 42
　　４－１弥生土器の所属時期とその特色 …… 42
　　４－２整地層出土のサヌカイト製剥片の属性分析 …… 44
　　４－３石川中流域、段丘上の埋没古墳 …… 56
Ⅳ　中野遺跡 …… 71
　１．層序 …… 72
　２．遺構 …… 72
　３．出土遺物 …… 77
　４．まとめ …… 84

挿 図 目 次

図１　毛人谷遺跡発掘調査地位置図 …… 2
図２　毛人谷遺跡調査区位置図 …… 3
図３　第１トレンチ(第２面)平面図・断面図 …… 4
図４　出土土器 …… 4
図５　第２トレンチ平面図・断面図 …… 5・6
図６　第３・５トレンチ平面図・断面図 …… 7・8
図７　第５トレンチ断面図 …… 9
図８　出土石器 …… 9
図９　喜志遺跡発掘調査地位置図 …… 11
図10　喜志遺跡調査区位置図 …… 12
図11　西壁断面図 …… 13
図12　遺構平面図 …… 14
図13　弥生土器 …… 16
図14　弥生土器 …… 17
図15　基部形態別石鏃の長幅関係 …… 19
図16　基部形態別石鏃の長幅示数と厚幅示数の相関 …… 19
図17　石鏃 …… 20
図18　石鏃 …… 21
図19　石槍 …… 23
図20　打製石剣 …… 24
図21　打製石剣 …… 25
図22　打製石剣 …… 26
図23　石錐，ベック，ノッチ削器，石小刀 …… 27
図24　削器 …… 29
図25　削器,楔 …… 30
図26　石包丁,砥石 …… 31
図27　円筒埴輪 …… 33
図28　円筒埴輪 …… 35
図29　朝顔形埴輪 …… 36
図30　形象埴輪 …… 37
図31　形象埴輪 …… 39

図32　土壙１出土の皿,小皿 ……41
図33　銭貨 ……41
図34　土人形 ……41
図35　平面形と形態分類 ……46
図36　中央断面形と形態分類 ……47
図37　縦断面形と形態分類 ……47
図38　打撃角と形態分類 ……48
図39　打撃角と打面形態 ……48
図40　打撃角と打面平面形 ……49
図41　打撃角と打面縁部形 ……49
図42　打撃角と打面の傾き ……50
図43　打面形態と最大長 ……50
図44　打面形態別の剥片の形態分類 ……51
図45　打面形態別の打点位置の分布 ……52
図46　打面の傾きと形態分類 ……52
図47　打面の傾きと平面形 ……53
図48　バルブの発達度と最大長 ……53
図49　打面形態とバルブの発達度 ……54
図50　原面残存率と最大長 ……54
図51　喜志遺跡（ＫＳ86地区）出土の埴輪 ……58
図52　喜志遺跡周辺の埴輪出土地点と小字名の分布状況 ……59
図53　中野遺跡周辺の埴輪出土地点と小字名の分布状況 ……61
図54　甲田南遺跡周辺の埴輪出土地点と小字名の分布状況 ……63
図55　「川西古墳群」の墓域構成 ……64
図56　中野遺跡発掘調査地位置図 ……71
図57　中野遺跡発掘調査区位置図 ……72
図58　遺構平面図・断面図 ……73・74
図59　出土土器 ……79
図60　出土石器 ……81

表　目　次

表１　発掘届出件数 ……１
表２　発掘調査一覧表 ……１

表3　土壙・ピット一覧表 ……10
表4　出土石器一覧表 ……18
表5　石核の単純最大長と単純最大幅の相関 ……31
表6　最大長と最大幅の相関 ……45
表7　長幅示数と厚幅示数の相関 ……46
表8　平面形と形態分類 ……46
表9　中央断面形と形態分類 ……47
表10　縦断面形と形態分類 ……47
表11　打撃角と形態分類 ……48
表12　打撃角と打面形態 ……48
表13　打撃角と打面平面形 ……49
表14　打撃角と打面縁部形 ……49
表15　打撃角と打面の傾き ……50
表16　打面形態と最大長 ……50
表17　打面形態別の剥片の形態分類 ……51
表18　打面形態別の打点位置の分布 ……52
表19　打面の傾きと形態分類 ……52
表20　打面の傾きと平面形 ……53
表21　バルブの発達度と最大長 ……53
表22　打面形態とバルブの発達度 ……54
表23　原面残存率と最大長 ……54
表24　垂直割れと最大長 ……55
表25　喜志遺跡出土弥生土器観察表 ……67
表26　喜志遺跡出土石器観察表 ……68・69
表27　喜志遺跡出土埴輪観察表 ……70
表28　中野遺跡ピット一覧表 ……76
表29　中野遺跡出土土器観察表 ……85
表30　中野遺跡出土石器観察表 ……85

図　版　目　次

図版1　毛人谷遺跡(ＥＴ94)調査地全景航空写真　南から
図版2　(上)ＥＴ94　第1トレンチ全景　北東から
　　(下)ＥＴ94　　同　　上　東から

図版３　(上)ＥＴ94　第１トレンチ北断面　南西から
　　(下)ＥＴ94　第１トレンチ北断面　遺物出土状況　南から
図版４　(上)ＥＴ94　第２トレンチ全景　北から
　　(下)ＥＴ94　第２トレンチ河道２断面　東から
図版５　(上)ＥＴ94　第３トレンチ全景　北から
　　(下)ＥＴ94　　同　　上　南から
図版６　(上)ＥＴ94　第３トレンチ土壙２全景　西から
　　(下)ＥＴ94　第３トレンチピット群　南から
図版７　(上)ＥＴ94　第３トレンチ河道２全景　南から
　　(下)ＥＴ94　第３トレンチ河道２断面　西から
図版８　(上)ＥＴ94　第３トレンチ下層流路断面　南西から
　　(下)ＥＴ94　出土遺物
図版９　喜志遺跡(ＫＳ94)調査地周辺航空写真　東から
図版10　(上)ＫＳ94　溝１　蓋形埴輪出土状況　北から
　　(下)ＫＳ94　溝１　埴輪出土状況　西から
図版11　(上)ＫＳ94　溝１　遺物出土状況　西から
　　(下)ＫＳ94　溝１　埴輪出土状況　東から
図版12　(上)ＫＳ94　溝１　人物埴輪出土状況　南から
　　(下)ＫＳ94　　同　　上　北から
図版13　(上)ＫＳ94　溝１断面　東から
　　(下)ＫＳ94　溝１全景　東から
図版14　(上)ＫＳ94　土壙１　土師器小皿出土状況　北から
　　(下)ＫＳ94　土壙１断面　北から
図版15　(上)ＫＳ94　溝２南北断面　北東から
　　(下)ＫＳ94　溝２東西断面　　北から
図版16　(上)ＫＳ94　溝２南北トレンチ全景　南から
　　(下)ＫＳ94　溝２東西トレンチ全景　西から
図版17　(上)ＫＳ94　調査区全景　北から
　　(下)ＫＳ94　調査区南部全景　西から
図版18　(上)ＫＳ94　弥生土器(広口壷，無頸壷)
　　(下)ＫＳ94　弥生土器(高杯，鉢)
図版19　(上)ＫＳ94　弥生土器(器台，蛸壷，台部)
　　(中)ＫＳ94　弥生土器(甕)
　　(下)ＫＳ94　弥生土器(土製品)

図版20　(上)ＫＳ94　石鏃(Ａ面)
　　(下)ＫＳ94　石鏃(Ｂ面)
図版21　(上)ＫＳ94　石鏃(Ａ面)
　　(下)ＫＳ94　石鏃(Ｂ面)
図版22　(上)ＫＳ94　石槍(Ａ面)
　　(下)ＫＳ94　石槍(Ｂ面)
図版23　(上)ＫＳ94　打製石剣(Ａ面)
　　(下)ＫＳ94　打製石剣(Ｂ面)
図版24　(上)ＫＳ94　石錐，ベック，ノッチ削器，石小刀(Ａ面)
　　(下)ＫＳ94　石錐，ベック，ノッチ削器，石小刀(Ｂ面)
図版25　(上)ＫＳ94　削器，楔(Ａ面)
　　(下)ＫＳ94　削器，楔(Ｂ面)
図版26　(上)ＫＳ94　石包丁，砥石(Ａ面)
　　(中)ＫＳ94　石包丁，砥石(Ｂ面)
　　(下)ＫＳ86　円筒埴輪
図版27　ＫＳ94　円筒埴輪，朝顔形埴輪
図版28　ＫＳ94 人物埴輪(頭部，肩部，手，衣装)，鳥形埴輪
図版29　(上)ＫＳ94　形象埴輪(衣装，みずら，眉庇付冑，靭，盾，馬，蓋)
　　(下)ＫＳ94　蓋形埴輪
図版30　(上)ＫＳ94　土壙１出土土師器，銭貨，土人形
図版31　(上)ＮＮ94－１　Ａ地区全景　南西から
　　(下)ＮＮ94－１　Ａ地区全景　北東から
図版32　(上)ＮＮ94－１　Ｂ地区北半全景　北から
　　(下)ＮＮ94－１　Ｂ地区南半全景　南から
図版33　(上)ＮＮ94－１　Ｃ地区西半全景　北西から
　　(下)ＮＮ94－１　Ｃ地区東半全景　西から
図版34　(上)ＮＮ94－１　Ｃ地区東端溝４　南から
　　(下)ＮＮ94－１　Ｃ地区東半南壁断面　北東から
図版35　ＮＮ94－１　出土遺物（弥生土器，須恵器，青磁，韓式系土器，統一新羅系土器，石皿，石器，砥石）
図版36　ＮＮ94－１　出土遺物（土師質土器，瓦質土器，陶器，瓦）

Ⅰ　平成６年度調査概要

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合　計
発　　掘	4	3	2	1	2	4	3	2	1	0	1	4	27
立　　会	2	0	7	3	5	4	4	1	3	4	6	6	45
慎重工事	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
発見届	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
計	6	3	9	4	7	8	7	3	4	6	7	10	74

表１　発掘届出件数（平成７年３月15日まで）

No.	調査期間	遺　跡　名	位　　置	申請書	規模（㎡）	用途	備　　考
1	6．4．12	錦聖遺跡	錦織2104－3	左近惣一	165	個人住宅	浄化槽部分1.5×２ｍを人力掘削遺構・遺物なし
2	6．4．20	中野遺跡	中野町2丁目536－1	西條　勇	200	個人住宅	浄化槽部分１×２ｍを人力掘削ピットを検出
3	6．4．25	甲田遺跡	甲田470－2	石田光司	294	個人住宅	浄化槽部分2.5×１ｍを人力掘削遺構・遺物なし
4	6．5．25	甲田遺跡	甲田257－2	中尾寿男	283	個人住宅	浄化槽部分1.5×２ｍを人力掘削遺構・遺物なし
5	6．7．11～8．5	毛人谷遺跡	寿町２丁目576他４筆	ニチモ㈱	3473	共同住宅	本書掲載
6	6．9．5～10．8	喜志遺跡	木戸山町584他８筆	田中　宏	1962	分譲住宅	本書掲載
7	6．12．15～12．28	中野遺跡	若松町5丁目629－１	杉山　茂	1148	共同住宅	本書掲載
8	7．2．7～2．8	甲田南遺跡	甲田58･61-1	㈲タカヨウ	2574	店舗	２×２ｍを人力掘削

表２　発掘調査一覧表

Ⅱ　毛人谷遺跡

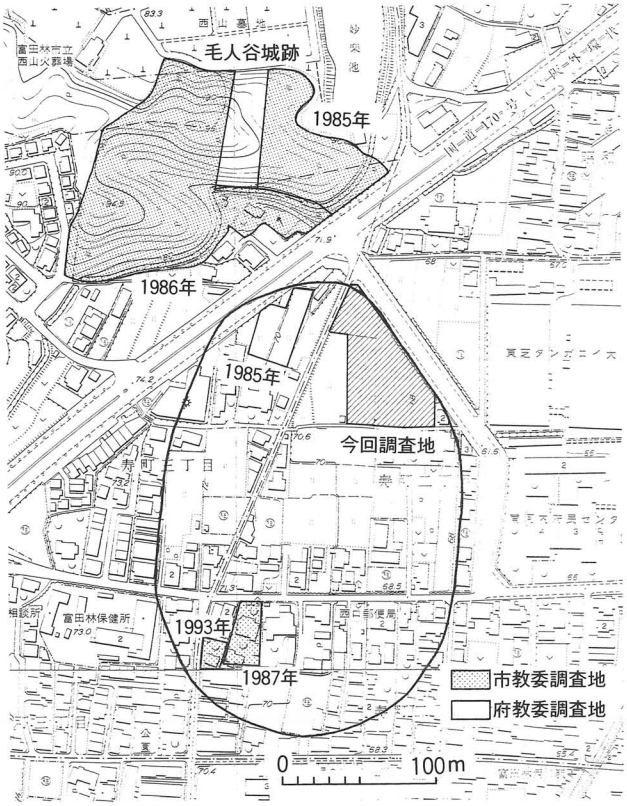


図１　毛人谷遺跡発掘調査地位置図

毛人谷遺跡は1985年大阪府教育委員会の調査で発見された遺跡(註1)で、羽曳野丘陵と石川の形成した中位段丘の境にあたる緩傾斜地に広がっている。本市教育委員会では1987年と1993年にも調査を行っていて、古墳時代の溝、建物などを検出している。

なお、毛人谷遺跡の西側の丘陵突端部は、かつて「城山」と呼称され、南北朝期の城跡として伝承された地域であるが、1985年度の本市教育委員会が行った調査でその時期の残濠と考えられるものが確認され、伝承の一部が証明されている。続く1986年に前年度の西側を調査した時には古墳を４基確認している。この1986年の古墳の調査は毛人谷遺跡を考える上では重要な調査で、毛人谷遺跡がこの古墳の被葬者の基盤集落であった可能性の高いことが判明している(註２)。

ＥＴ94
調査地：富田林市寿町2－576
調査面積：252.32㎡

今回の調査は国道170号(大阪外環状線)の交差点「昭和町１」から南東にのびる府道寿町１号線と南西にのびる市道に挟まれた三角形状の水田域を共同住宅建設に伴って実施した。毛人谷遺跡発見のきっかけになった1985年の大阪府教育委員会の調査地は市道を挟んで西側に位置する。

調査は６本のトレンチを設定して行った。第１トレンチは調査区の北端部に7.0m×4.0mの規模で、第２トレンチと第３トレンチは調査区のほぼ中央に、南北に細長く並行して、それぞれ0.7m×49.0mと2.2m×55.0mの規模で設定した。第４トレンチは当初、第３トレンチの南側に1.2m×5.5mの規模で、その西側にほぼ同じ規模で第５トレンチを設定したが、その後、下層の堆積状況を確認するため、第３トレンチ、第４トレンチ、第５トレンチの規模を拡大して、一つのトレンチとして調査した。第６トレンチ、第７トレンチは第２トレンチの南側に1.2m×4.0m、1.1m×5.2mの規模で設定した。

１.層序

調査区は当初、南西部から北東部に向かって下る緩やかな傾斜地であったが、切土、盛土によ

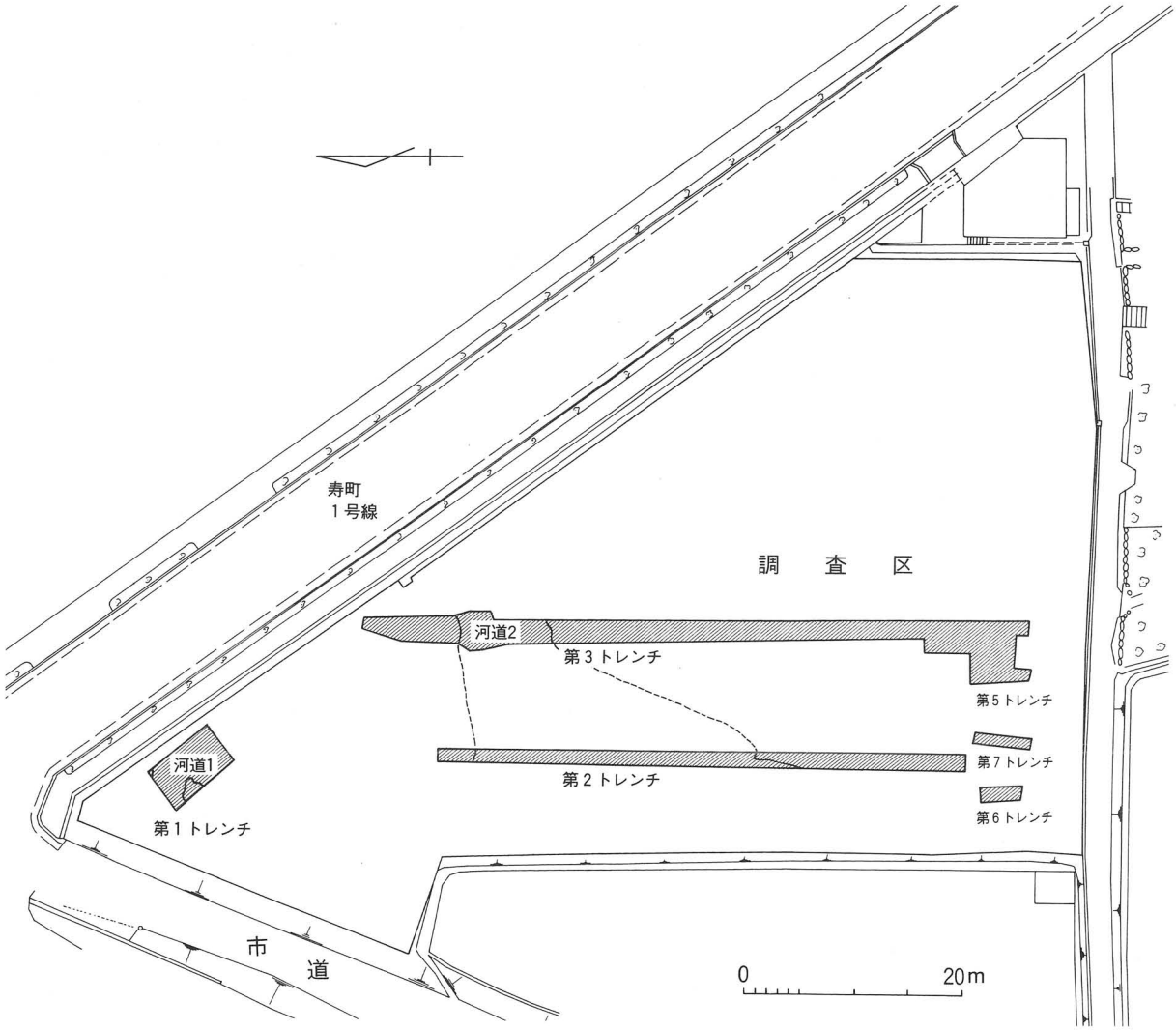


図2　毛人谷遺跡調査区位置図

って2段の耕作面が造成されていたと考えられる。耕作面は南西部で2回以上、北東部では5回以上あったと思われるが、その後、北東部の下段耕作面を南西部の上段耕作面と同じ高さまで整地を行って、一枚の大きな耕作面とし、現況に至っていると考えられる。

堆積層は現耕土を含めて10層認められるが、すでに述べたようにそれらはすべて耕土と床土である。遺構はピット11と落ち込み1を除いて、これらの10層を取り除いた地山面で検出した。なお、ピット11は第9層の耕作面(最古の水田面)で、落ち込みは第5層の耕作面で検出した。

2．遺構と出土遺物

河道1(図版2・3，図3)

第1トレンチで検出された。深さは約2.0mあるが、幅については確認できなかった。堆積は12枚に分層できたが、大きく分けると4層に分かれる。

遺物は4層に分層したうちの第4層から土師器の甕が1点、第2層と第1層から須恵器の蓋杯が計5点、第3層目から砂岩礫1点が出土している。

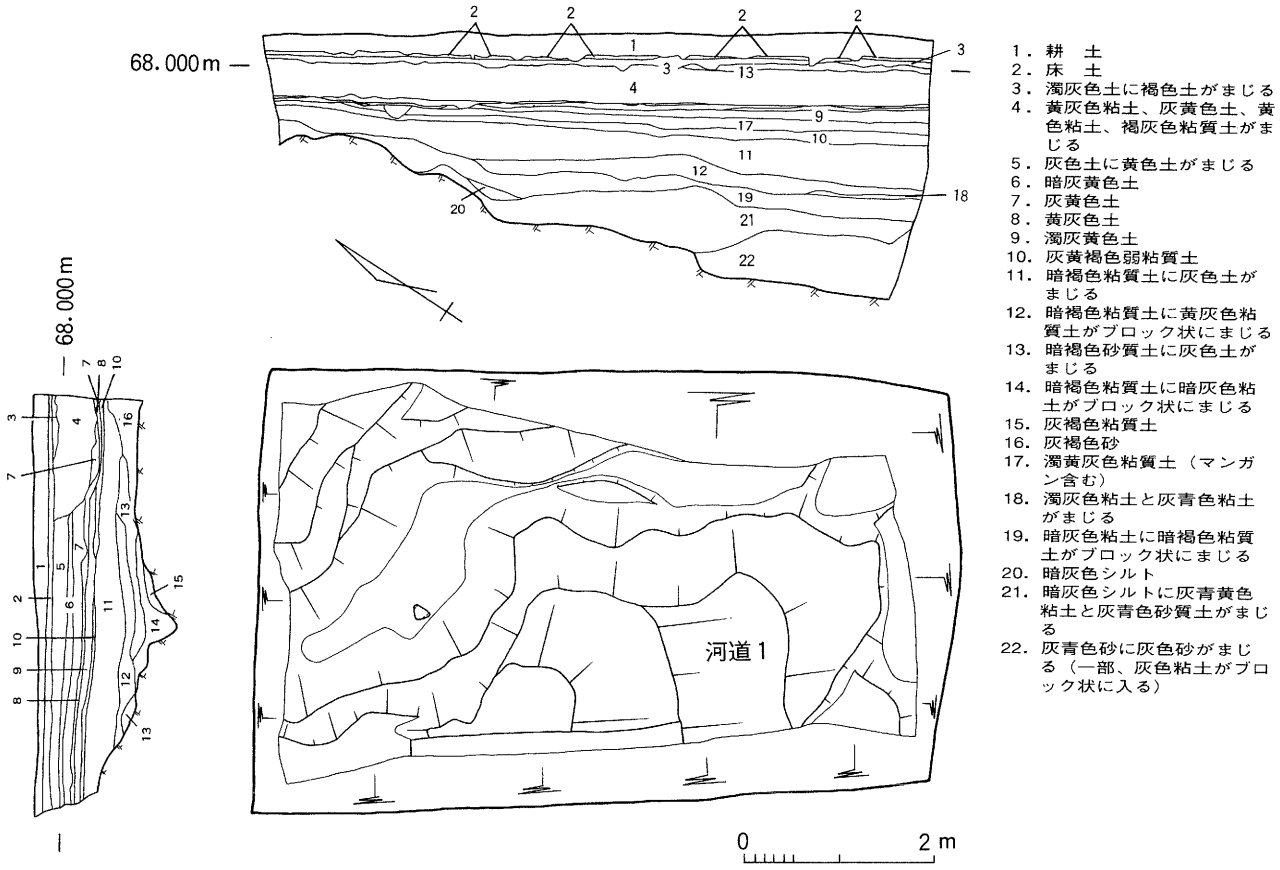


図３　第１トレンチ(第２面)平面図・断面図

土師器の甕(図版８，図４－２)は口径18.4cm、残存器高10.0cmを測る。

須恵器はすべて古墳時代後半のもので、中村浩氏の陶邑須恵器編年(註3)のⅡ型式第３～４段階の時期に該当する。蓋杯のうち蓋か身か判断できるのは、第１層から出土した蓋と第２層から出土した(図４－１)の身だけである。(１)は口径13.0cm、残存器高3.3cm、受部径15.3cm、たちあがり高1.1cmを測る。底部外面約2／3に回転ヘラ削り調整、他は回転なで調整を施している。ヘラ削り時のロクロの回転方向は右まわりである。色調は灰色で焼成は堅緻である。

河道１の堆積状況は後述の河道２と類似していることから、同時期頃に機能し、埋没したと考えられる。

河道２(図版４・７，図５・６)

第２レンチと第３トレンチの北側で検出された西から東に流れる河道である。第３トレンチでは幅8.2～8.7m、深さ1.9mを、第３トレンチでは幅26.7～30.6m、深さ0.3～2.0mを測る。

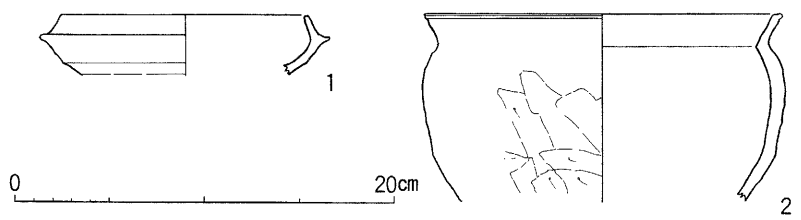
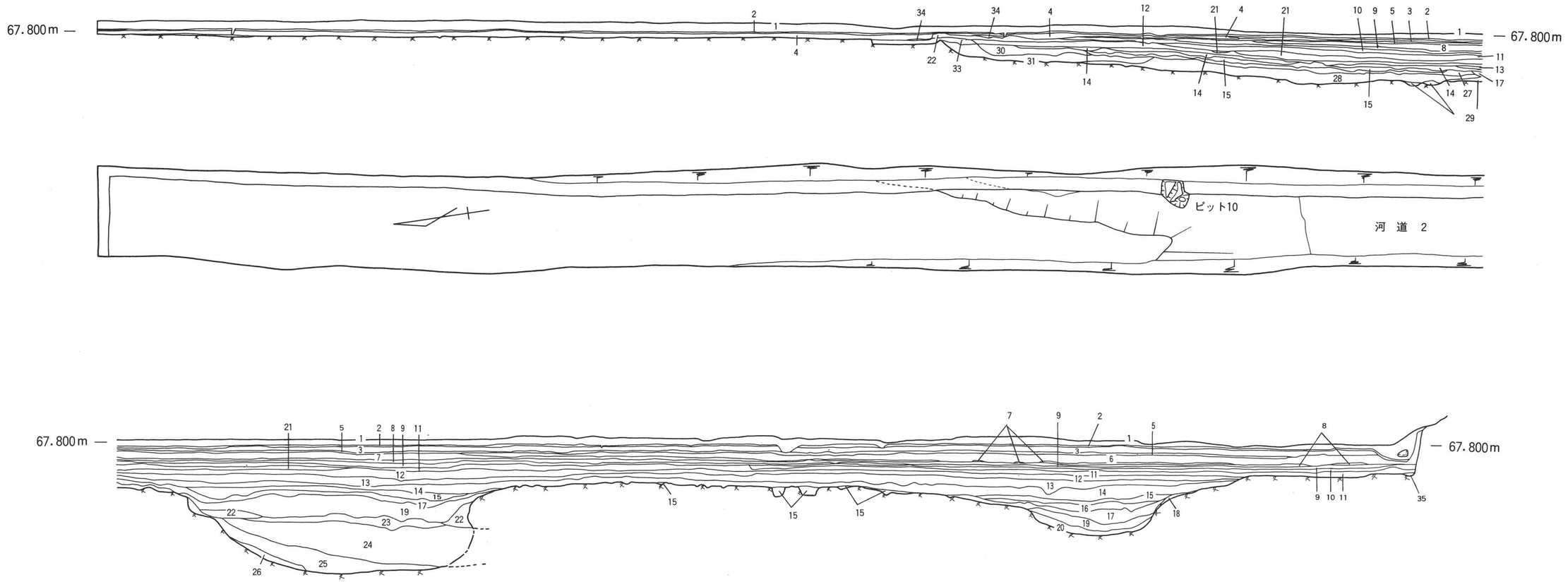


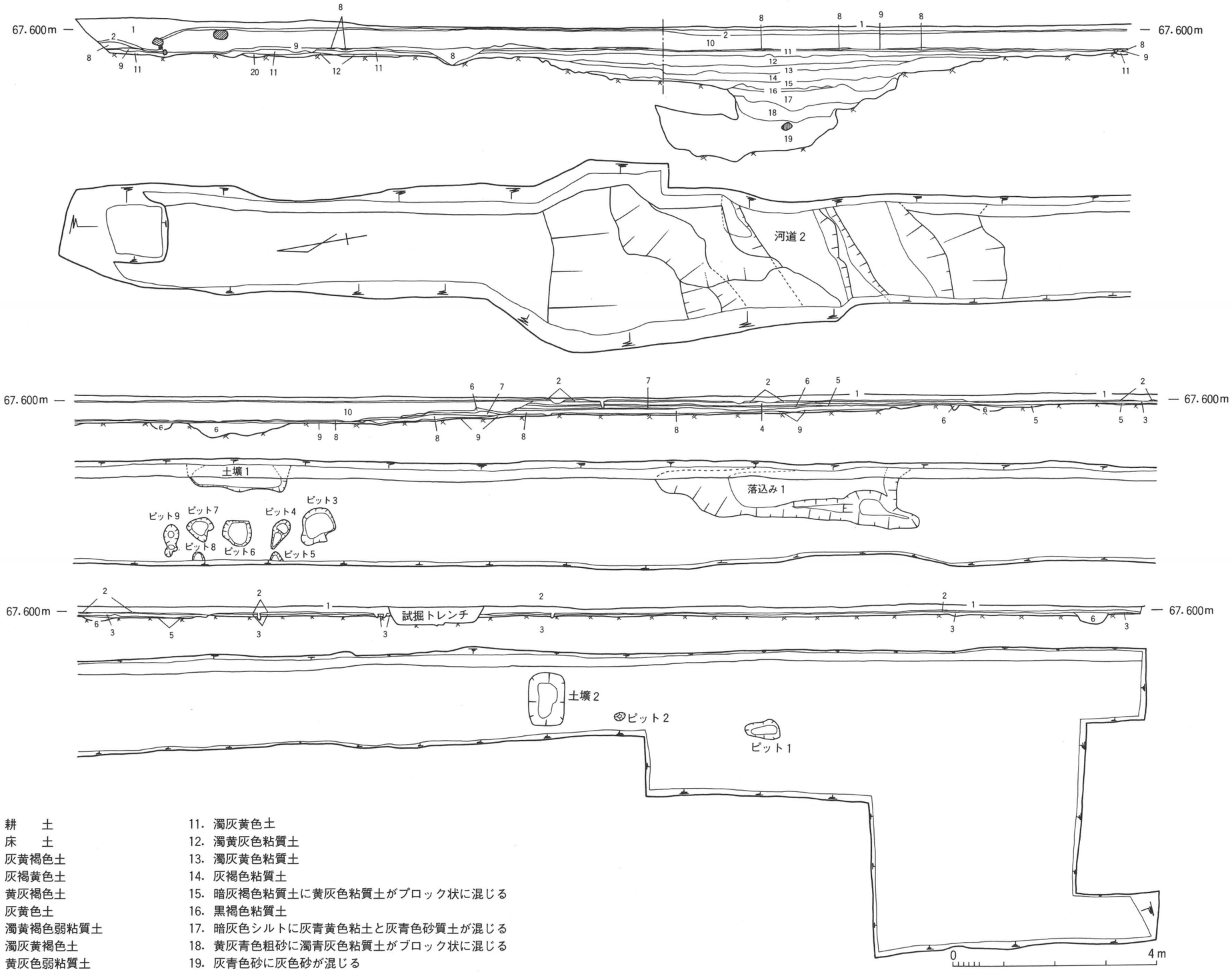
図４　出土土器

この河道は本来、第３トレンチで検出された幅で東に向かって流れていたと考えられる。第２トレンチで大きく溝幅が広がっているが、溝の南西端で湾処の様な深み検出された以外は浅く広がってい



1．耕　土
2．床　土
3．灰褐黄色土
4．灰黄褐色土
5．黄灰褐色土
6．灰黄色土
7．濁黄褐色弱粘質土
8．濁灰黄褐色土
9．黄灰色弱粘質土
10．濁灰黄色土
11．濁黄灰色粘質土
12．濁灰黄色粘質土
13．濁黄灰褐色粘質土
14．灰褐色粘質土
15．暗灰褐色粘質土に黄灰色粘質土がブロック状に混じる
16．灰褐色粘質土に灰黄色粘土がブロック状に混じる
17．黒灰色シルトに灰黄色粘土が混じる
18．暗灰褐色砂質土
19．暗灰色シルト
20．灰青色砂に灰色砂が混じる
（一部、灰色粘土がブロック状に混じる）
21．淡灰黄色粘質土
22．灰色粗砂
23．灰青色シルトに灰色砂が混じる
24．灰青色粘土と灰色砂と暗褐色粘土が葉層状に混じる
（植物遺体も含む）
25．灰青色粘質土に灰青色砂が混じる
26．暗灰褐色粘土
27．黒褐色粘質土
28．淡灰黄色粘質土に灰色粘土がブロック状に混じる
29．灰褐色砂
30．暗灰褐色土に暗褐黄色土と暗褐色土が混じる
31．濁灰黄褐色粘質土に灰黄色粘土がブロック状に混じる
32．濁灰黄褐色粘質土
33．濁灰黄色粘質土に暗褐色土がブロック状に混じる
34．濁黄灰褐色土
35．濁黄灰色粘質土に礫が混じる

図5　第2トレンチ平面図・断面図

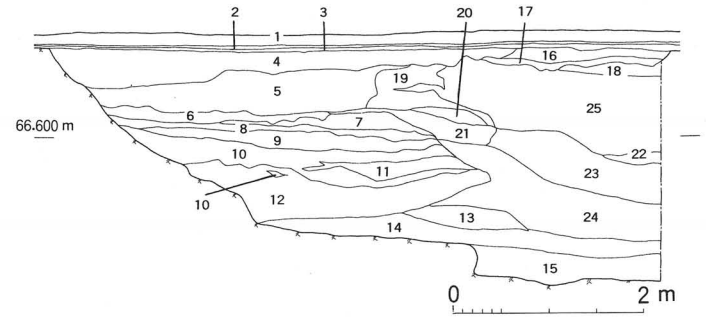


1．耕　　土
2．床　　土
3．灰黄褐色土
4．灰褐黄色土
5．黄灰褐色土
6．灰黄色土
7．濁黄褐色弱粘質土
8．濁灰黄褐色土
9．黄灰色弱粘質土
10．黄灰色粘質土と灰黄色土と黄色粘質土が混じる
11．濁灰黄色土
12．濁黄灰色粘質土
13．濁灰黄色粘質土
14．灰褐色粘質土
15．暗灰褐色粘質土に黄灰色粘質土がブロック状に混じる
16．黒褐色粘質土
17．暗灰色シルトに灰青黄色粘土と灰青色砂質土が混じる
18．黄灰青色粗砂に濁青灰色粘質土がブロック状に混じる
19．灰青色砂に灰色砂が混じる（一部、灰色粘土がブロック状に混じる）
20．灰褐色砂質土に黄褐色土が混じる

図6　第3・5トレンチ平面図・断面図

る。

遺物のほとんどは第２トレンチで出土しているが、第２・第３トレンチとも大きく５層に分層して取りあげた。第５層からは土師器、第４層からは弥生土器、土師器、サヌカイトの剥片と石核、第３層からは土師器、サヌカイト製の木葉形石器(図版８，図８－２)、剥片、第２層からは土師器、サヌカイトの剥片、第１層からは土師器、須恵器、砂岩製のたたき石が出土している。



1．耕　土
2．床　土
3．灰黄褐色土
4．濁黄灰色弱粘質土に明黄色粘質土が混じる
5．黄灰色弱粘質土に明黄色粘質土が混じる
6．淡灰黄色砂質土
7．灰青色砂質土
8．灰青色砂質土に暗灰色砂質土が葉層を呈する
9．灰青色細砂に暗灰色砂質土が葉層を呈する
10．濁灰青色細砂に暗灰色砂質土を明青灰色粗砂が葉層を呈する（植物遺体を含む）
11．灰色砂質土
12．灰青色砂と明灰色砂が葉層を呈する
13．灰青色砂
14．灰青色粗砂
15．青灰色粗砂
16．灰黄色細砂
17．濁灰黄色砂質土
18．茶灰黄色細砂
19．黄灰色シルト
20．灰青色シルトに灰青色砂が混じる
21．灰黄色砂
22．灰色粗砂
23．淡青灰黄色砂
24．青灰黄色粗砂に暗灰色砂質土が葉層を呈する
25．茶灰黄色砂

図７　第５トレンチ断面図

弥生土器は器種のわかるものがないが、外面調整に粗い平行タタキの施されたものが確認されていることから弥生時代後期の時期を考えておきたい。

土師器は時期、器種とも不明である。

須恵器は蓋杯の蓋が１点出土している。陶邑須恵器編年のⅡ型式第３～５段階の時期に該当する。

サヌカイト製の石器遺物は石核が１点と剥片が14点出土している。これらのサヌカイト製の石器遺物はすべて後述するピット11から出土した石鏃より風化が進んでおらず、また、出土したもののすべてが同じ程度の風化度であることから弥生時代のものと考えておきたい。

石核は80.7×61.8×20.1mmを測る剥片素材の石核で、表面中央に石核作製時より前の風化の著しい剥離面が１枚大きく残っている。作業面は２面ある。原面を打面にして３方向から剥片を取っているが、最終の剥離は前述の作業面の一辺を打面にして原面側に作業面を求めて剥離を行っている。周縁に残る原面の状況からみて原材はせいぜい拳大程度の角礫であったと推測できる。

剥片の内訳は横形剥片が８点、剥片が３点、不明が３点である。横形剥片の内、原面を打面にしているものは６点、剥離面打面のものは１点、調整打面のものは１点である。原面打面の横形剥片の中に１点、垂直割れをおこしているものがある。剥片は剥離面を打面にしているものが１点あるが、他は打面がハジケているため不明である。

木葉形石器(図版８，図８－２)は横形剥片を素材にし、素材の剥離軸を短軸に設定して、非極厚細部調整で整形を施した石器である。両面とも調整は施しておらず、表面には素材時の先行剥離面と原面が残っている。長さ65.3mm、幅25.1mm、厚さ10.4mmを測る。

河道２直上の水田面(第９層)から奈良時代の須恵器が出土していることと、堆積状況および、遺物の出土状況を考え合わせると、古墳時代以降から奈良時代に

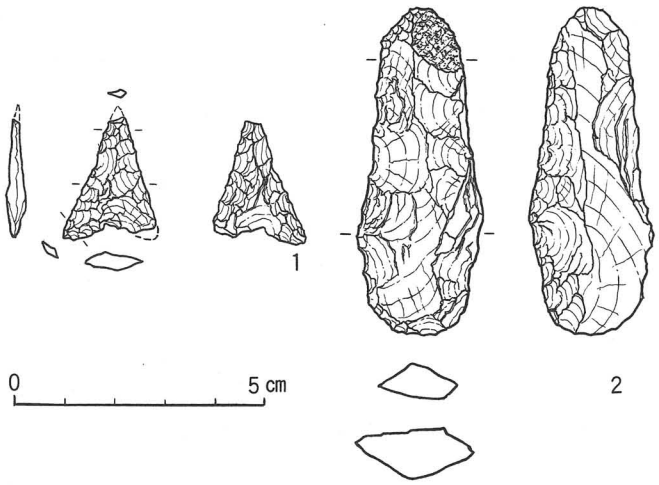


図８　出土土器

遺構番号	平面形	規模(m)	深さ(m)	土色・土質	出土遺物
D. 1	不整形	(1.96)×(0.25)	0.1	灰黄褐色弱粘質土に淡黄灰色弱粘質土（地山の土）が混じる	
D. 2	隅丸方形	1.06 × 0.7	0.22	灰色土に黄灰色粘質土（地山の土）がブロック状に混じる	
P. 1	不整形	0.7 × 0.38	0.17	灰黄色土（木片・鉄を含む）	
P. 2	楕円形	0.2 × 0.13	0.08	灰黄色土	
P. 3	不整形	0.64 × 0.83	0.28	灰褐色弱粘質土	
P. 4	不整形	0.63 × 0.3	0.3	灰褐色弱粘質土	
P. 5	不整形	(0.19)× 0.27	0.05	灰褐色弱粘質土に礫が混じる	
P. 6	不整形	0.47 × 0.51	0.13	灰褐色弱粘質土	
P. 7	不整形	0.56 × 0.48	0.08	灰褐色弱粘質土	
P. 8	不整形	(0.16)× 0.23	0.05	灰褐色弱粘質土	
P. 9	不整形	0.64 × 0.29	0.16	灰褐色弱粘質土	
P. 10	不整形	(0.6)×(0.45)	0.4	褐灰色粘質土に灰色弱粘質土と黄灰色土が混じる	
P. 11	不整形	0.56 × 0.54	0.15	濁灰黄色土	石鏃

表３　土壙・ピット一覧表

かけて徐々に埋没していったと考えられる。

落ち込み１

第３トレンチのほぼ中央、東側で検出された。確認できたのは南北5.3m、東西1.01m分のみで、深さは0.09mを測る。埋土は黄灰褐色土である。遺物は出土しなかった。

土壙１～２、ピット１～11については、遺構・遺物一覧表(表３)を参照されたい。

なお、ピット11から出土した石鏃(図８－１)は基部形態が凹基形で、残存長24.0mm、最大幅18.1mm、最大厚3.6mmを測る。基部の作りだしは平形裏面細部調整の後、平形表面細部調整によっている。調整は両面調整で、中央断面は両凸形である。整形は非極厚細部調整で、表面右縁、裏面左縁、裏面右縁、表面左縁の順に整形されている。尖端部と片脚部が折損している。

３．まとめ

今回の調査は、1985年の大阪府教育委員会の発掘調査の東側にあたるが、今回の調査で検出された河道は大阪府教育委員会の調査で検出された溝３に続く流路と考えられる。この調査では溝３の堆積を上・中・下の３層に分層し、上層部は茶褐色から暗茶褐色系の土、中層部は暗褐色から黄茶灰色系のシルト層、下層部は灰色系の粘土層と砂層が堆積していたことから、中層以下は流水堆積と判断し、また、下層部からサヌカイトが出土したと報告されている。今回の調査では河道１・２ともその堆積状況、および方向のどちらも大阪府教育委員会調査時の溝３と類似するが、その検出位置からみて河道１に続いていった可能性が考えられる。

（中辻亘・栗田薫）

(註)

1．大阪府教育委員会（1983）「毛人谷遺跡の調査」,『錦織遺跡発掘調査概要』,17～25頁

2．富田林市（1986）「毛人谷遺跡の調査から」,『富田林市広報－埋蔵文化財発掘レポート(その26)－』

3．中村浩(1978)「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」,『陶邑3』, 大阪府教育委員会

Ⅲ 喜 志 遺 跡

喜志遺跡は羽曳野市の中央南端から富田林市の北端部に広がる遺跡で、石川の中流域西岸に立地する。過去数十度にわたる調査の結果、サヌカイト製品の多量に出土する遺跡として注目され、弥生時代の石器製作集団の集落址として位置づけられている。

ＫＳ94

調査地：富田林市木戸山町584他

調査面積：233.35㎡

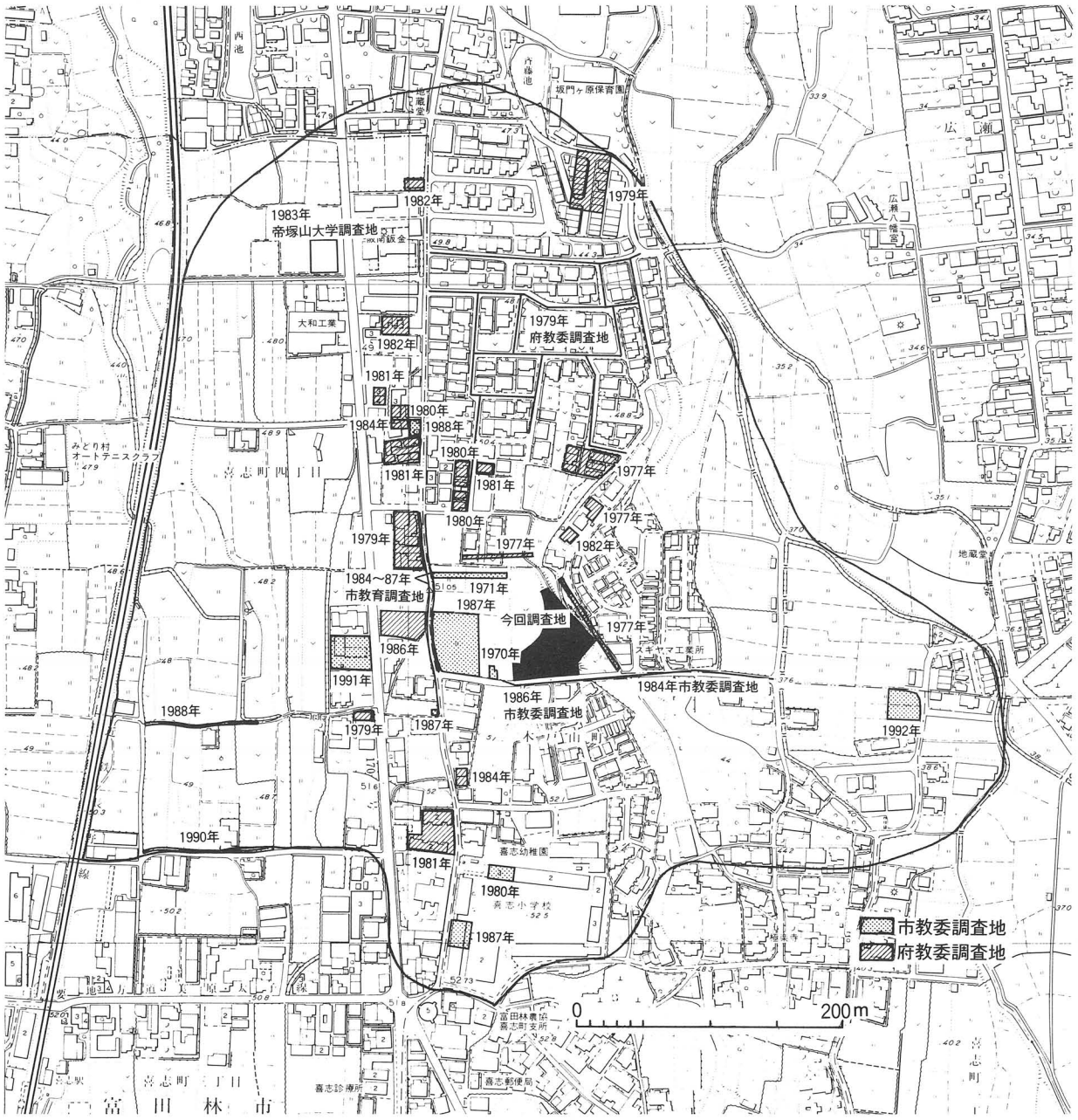


図９　喜志遺跡発掘調査地位置図

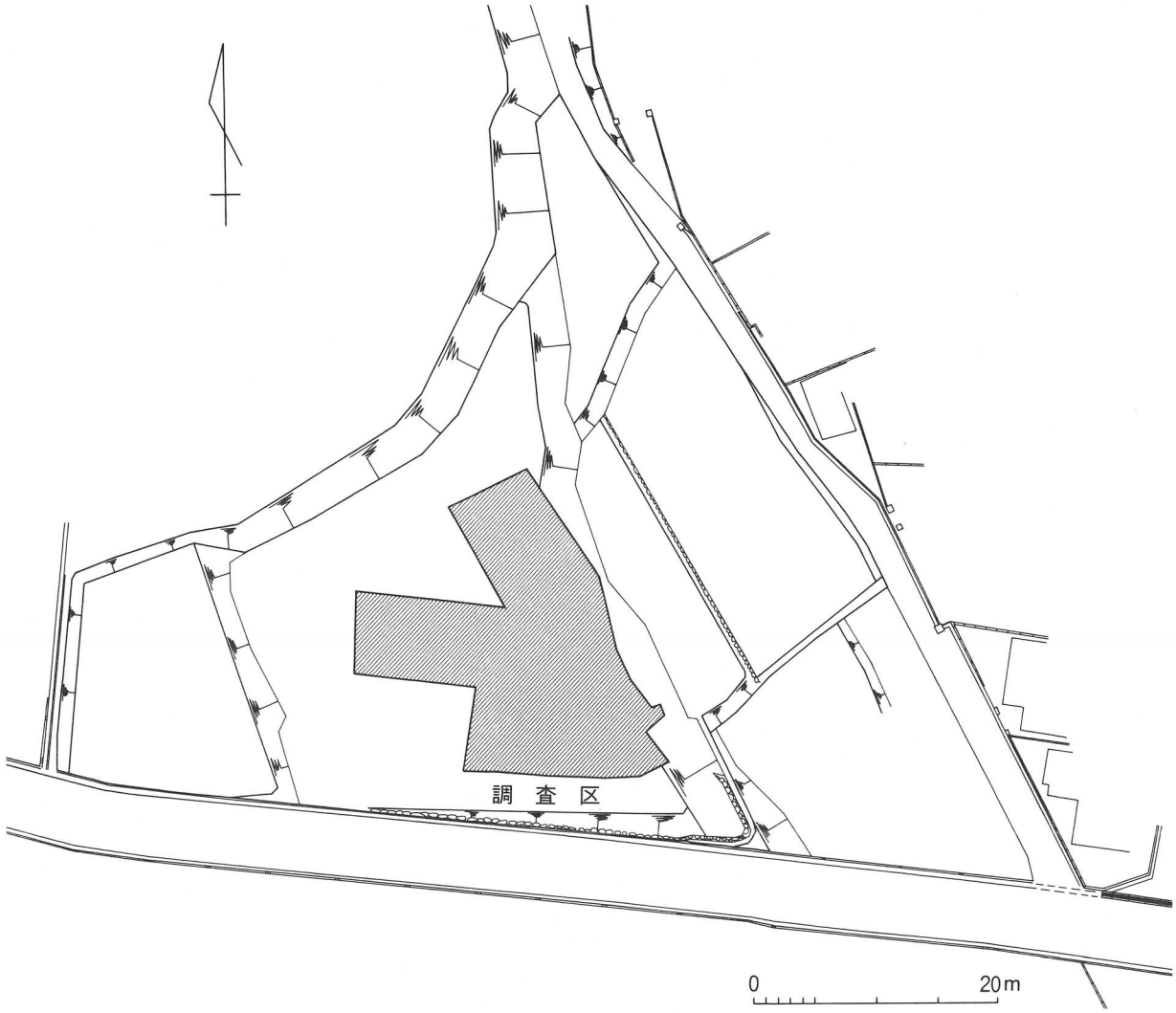


図10　喜志遺跡調査区位置図

今回の調査は喜志遺跡のほぼ中央に位置し、弥生集落の立地する中位段丘から低位段丘にいたる傾斜地にあたる。また、調査地の現況は西から東に大きく開く開析谷の中にあるひな壇状の水田である。中位段丘面との比高差は約３mある。住宅建設に伴い発掘調査を実施した。

１．層序

調査区は中位段丘を切り込む開析谷の中に位置している。谷の底から現況の耕作面まで約３mの厚さがある。地表面から2.1mまでの間に３面の水田面が確認できる。もっとも古い水田は、谷に堆積したと思われる灰青色混礫砂質土および濁灰青色混砂礫粘質土層の上面に作られている。そして、谷の中央部では約0.3mの厚さで濁黄灰色弱粘質土および濁灰褐黄色混礫粘質土の整地を行った後、次の新しい水田が作られている。その後、黒灰色砂質土がブロック状に混じる褐黄色混礫粘質土を約1.2mの厚さで大規模に整地が行われ、現在の水田に至っている。

２．遺構

工事の関係上、調査区の南半部のみで溝、土壙を検出している。北半部についてはトレンチ調査で止めた。

また、調査区南東端の水田整地層から大量のサヌカイト片が出土しており、埋土ごとに取りあげ、

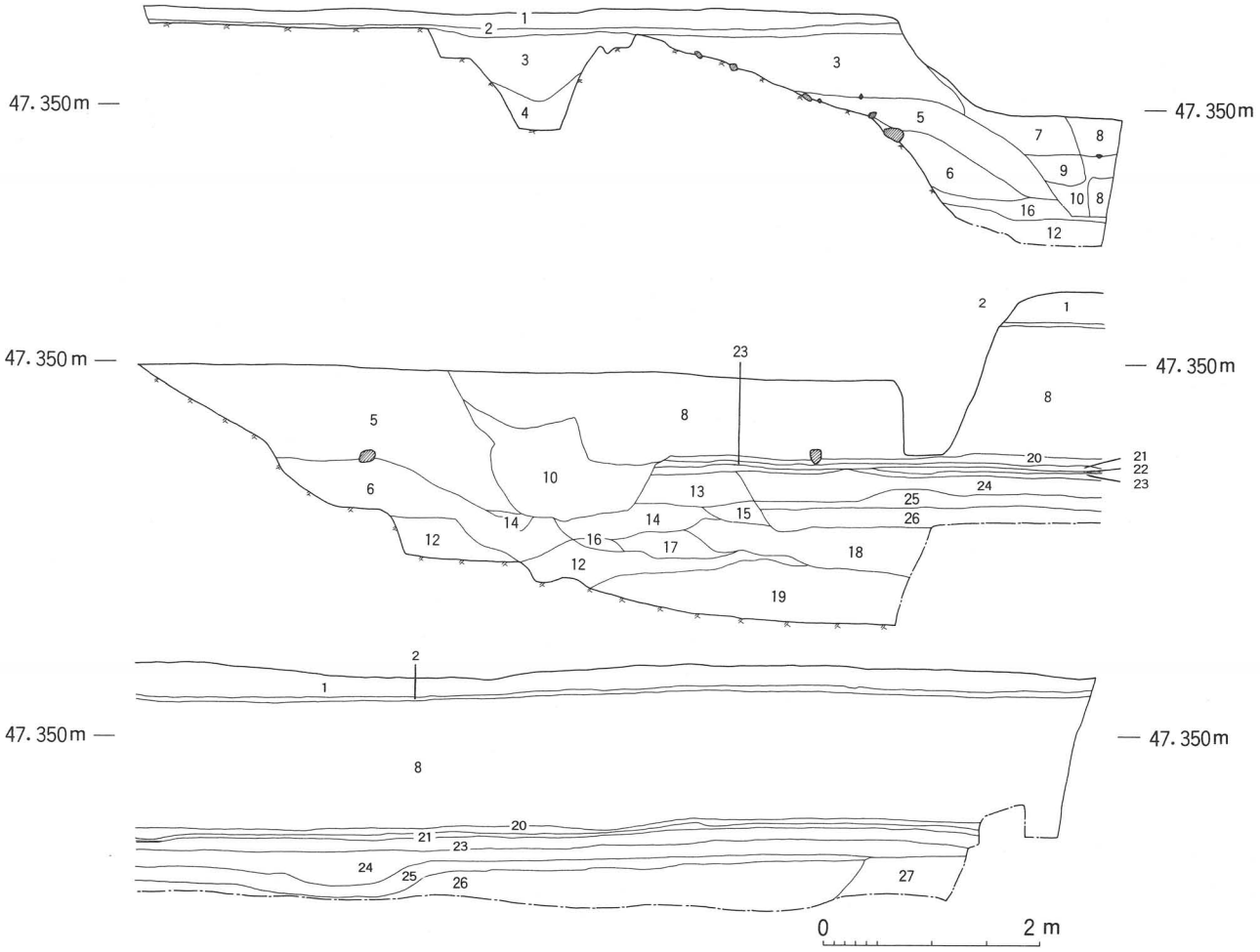
洗浄フルイがけをおこなった。

溝1

溝2の南西肩付近で検出した東西方向の溝である。幅1.6m、深さ0.9mを測る。溝の南端から4.2m分を検出した。埋土は2層に分かれる。上層は濁褐色混礫土(厚さ0.6m)で、下層は濁褐灰黄色混礫土(厚さ0.3m)である。遺物には多量の埴輪とともに弥生土器、サヌカイトの他、近世の土器や土人形があり、大半が上層から出土している。

溝2

調査区の中央を西から東に流れる。調査区の南端で南肩を検出した。北肩は調査区外にあるが、北側の段丘崖がそれに該当するかと思われる。この溝は開析谷の底を流れるもので、調査区内での



1．耕　土
2．床　土
3．濁褐灰色混礫土
4．濁褐灰黄色砂質土
5．濁褐灰黄色混礫土
6．濁黄褐色混礫粘質土
7．灰褐色土
8．褐黄色混礫粘質土に黒灰色砂質土がブロック状に混じる
9．灰褐色粘質土
10．灰褐色混礫弱粘質土
11．灰青色粘土
12．黄褐色混砂粘質土
13．灰黄褐色混礫粘質土
14．濁灰白色混砂礫粘質土
15．濁黄灰色砂質土
16．灰青色粘土に黄褐色混砂粘質土がブロック状に混じる
17．灰黄青色混礫砂質土
18．濁灰青色混砂礫粘質土
19．灰青色混礫砂質土
20．濁灰色弱粘質土
21．黄灰青色粘質土
22．濁灰黄色弱粘質土
23．濁黄灰色弱粘質土
24．濁灰黄褐色混礫粘質土
25．青灰色粘質土
26．濁黄灰青色粘質土
27．黄褐色混砂粘質土

図11　西壁断面図

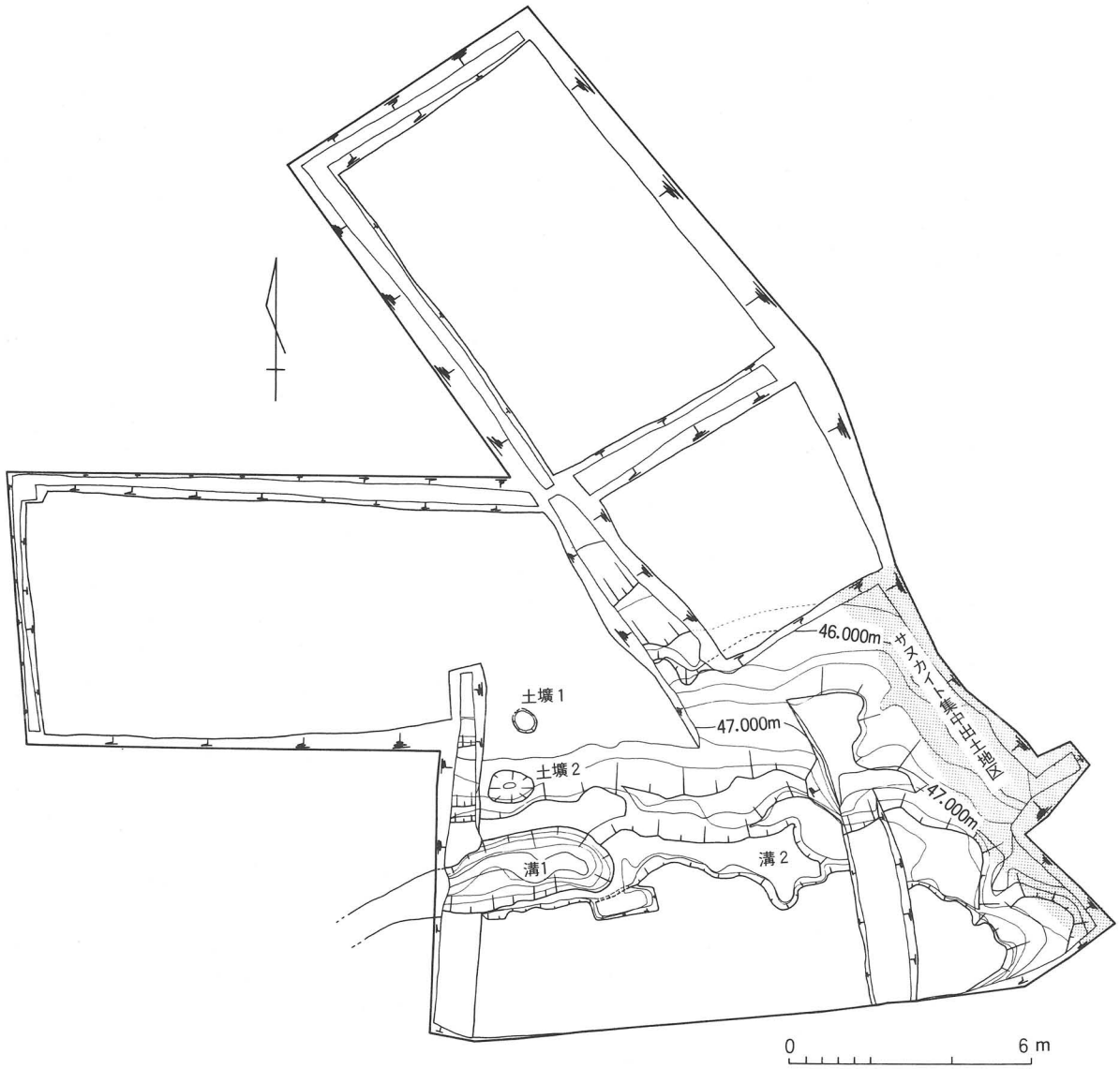


図12　遺構平面図

幅は約10mと推測される。現況の耕作面から溝底までの高低差は約３mを測る。

土壙１

溝２の南肩から北に約５mの地点で検出した。濁褐灰黄色混礫土層を掘り込んでいる。直径0.6mの円形を呈している。深さ0.25mを測る。灰褐色土の埋土中に多量の土師器の小皿が重なって出土している。

土壙２

土壙１と溝１の中間に位置する。東西1.1m、南北0.8mの楕円形を呈している。深さ0.4mを測る。濁褐灰色混礫土の埋土中から埴輪が出土している。

（中辻亘）

3．出土遺物

今回の調査では弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器、石器、埴輪、土製品、銭貨、鉄製品、骨、炭片が出土している。

遺物の大半は溝１と溝２から出土している。これらの中でも、弥生土器とサヌカイトは溝２上層の南東端部からまとまって出土している。

ここでは出土遺物の中でもまとまって出土したもののみ、時期毎にまとめ、弥生時代の遺物として弥生土器と石器、古墳時代の遺物として埴輪、平安時代の遺物として土壙１出土の土師器について述べた後、近世の遺物として土製品と銭貨について概観する。

3－1　弥生時代の出土遺物

1.弥生土器(図版18・19，図13・14－1～38，表25)

弥生土器には広口壷、細頸壷、無頸壷、水差し、高杯、鉢、器台、蛸壷、甕などの容器類の他に円盤、紡錘車が出土している。図示したものについての細かい観察は表25を参照されたい。(註1)

広口壷は口頸部が外反して大きく開く広口壷Ａ(１～６)と外反した後、曲折して立ち上がる口縁部をもつ広口壷Ｂ(７～９)がある。広口壷Ａの中には口縁部が下方に拡張するもの、上下に拡張するもの、ほとんど拡張しないものが認められるが、下方に拡張するものが圧倒的に多い。広口壷はＡ・Ｂともに頸部が大きく傾斜する形態をもつもので占め、筒状の頸部をもつものは認められない。

広口壷Ａの紋様は口縁部に簾状紋、直線紋、波状紋、列点紋、斜格子紋、刺突紋、凹線紋、刻み目などがそれぞれ単独で、もしくは組み合わせて施されている。なお、凹線紋が施されているのは口縁部が上下に拡張された形態をもつものだけである。口縁部上面に紋様の施されたものは少ないが波状紋、列点紋、円形浮紋が認められる。頸部には簾状紋、直線紋が認められる。

広口壷Ｂの紋様は口縁部に簾状紋、波状紋、扇形紋、斜線紋、列点紋、刺突紋が施されている。頸部には直線紋、簾状紋が認められる。

広口壷の頸部から体部にかけての紋様には簾状紋、直線紋、波状紋、円形浮紋、指頭圧痕貼り付け凸帯が認められる。

細頸壷は頸部片が出土しているが、凹線紋と簾状紋が施されている。

無頸壷は図示したタイプ(10)の他に、段状口縁をもつ鉢Ｂに似たタイプで口縁直下に円孔を穿ったものも認められる。口縁部と体部には列点紋が施されている。

水差しは把手片が出土しているだけである。

高杯には浅い鉢状の形態をもつ高杯Ａ(11，12)と水平の口縁部に貼り付け凸帯がめぐる形態をもつ高杯Ｂ(13)がある。

高杯Ａは紋様のあるものとないものがある。紋様のあるものには細かい列点紋が施されたものと一見、列点紋風の斜線紋、凹線紋の施されたものがある。

高杯Ｂの中で口縁部が残っているものはすべて垂下する形態をもつ。口縁部は無紋のものと有紋のものがある。紋様には斜線紋、斜格子紋、凹線紋がある。

高杯の脚柱部は中空のもの(22)と、半中実のものがある。裾端部は拡張して面をもつものが多い。裾部に紋様をもつものは少ないが、刺突紋を施したもの(24)、竹管紋を施したものが各１点づつで

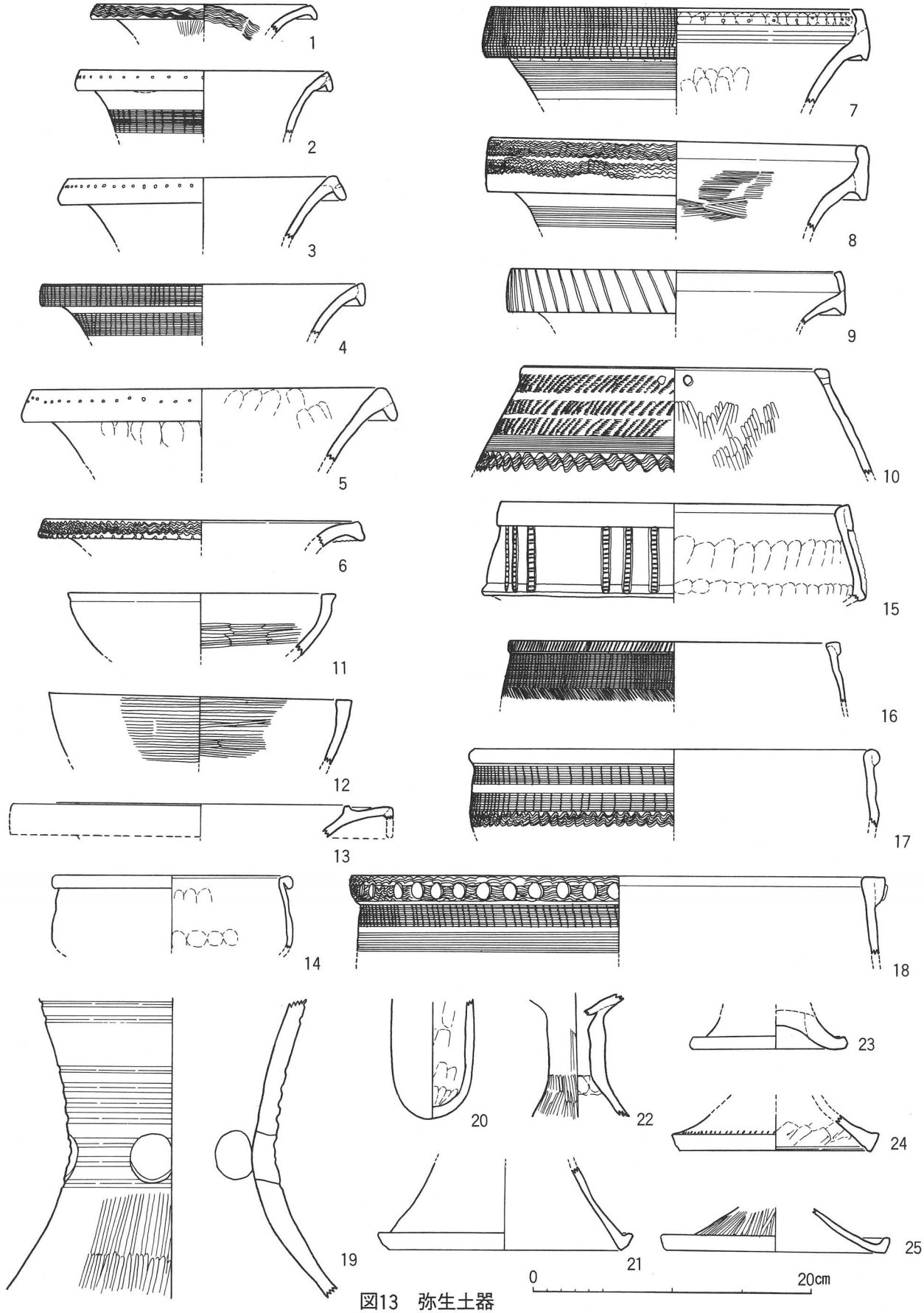


図13　弥生土器

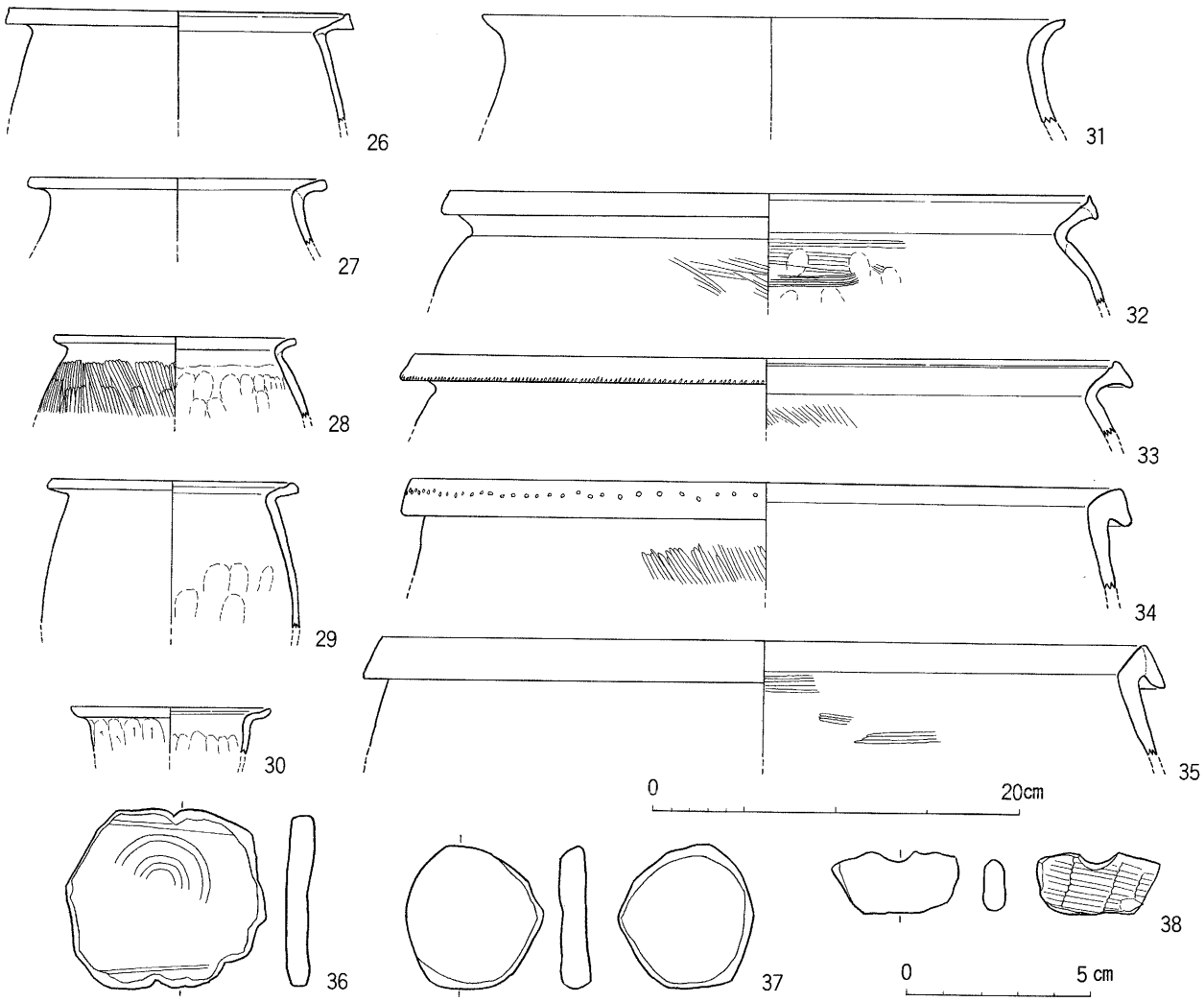


図14　弥生土器

はあるが認められる。なお、後者は生駒西麓産の胎土をもつものである。

鉢には直立する口縁部をもつ鉢A、段状の口縁部をもつ鉢B(14～18)、外反して下方へ拡張する口縁部をもつ鉢Cがある。鉢の中には把手の付くものも認められる。鉢Aは高杯と、鉢Cは大型の甕と区別がつき難いという理由もあるが、鉢Bが目立つ。また、台部の付くものと付かないものがある。

台部の中には高杯の脚部と区別が難しいものもあるが、裾部の傾きのおおきいもの(21)、脚柱部の径の大きいもの(23)を鉢の台部と認定した。台部には円孔をあけたものが認められる。

鉢Aには凹線紋の施されたもの、波状紋と貼り付け凸帯の施されたものがある。

鉢Bの段状の口縁部には、巻き込むような形態をもつものと折り込んで平坦な面を作るものが認められるが、後者の方が多く出土している。後者の平坦面の幅の広さは様々あるが、狭いもので幅0.8cm、広いものでは2.4cmを測る。口縁部には紋様を施したものが多く認められるが、無紋のものも認められる。無紋のものの大半は口縁部が巻き込む形態のものである。紋様は列点紋、斜線紋が多いが、簾状紋、波状紋、円形浮紋も認められる。体部は簾状紋、直線紋、波状紋、列点紋のほか、棒状浮紋も認められる。

鉢cは紋様の有無で甕と区別つけているため、すべて有紋のものに限られる。紋様には簾状紋と

刻み目が認められる。

器台(19)は１点出土している。凹線紋と円孔スカシの認められるものである。

蛸壷(20)は１点出土している。蛸壷は富田林市内での出土例としては、1988年度調査の甲田南遺跡から出土した例に続いて２例目である。

甕(26～30)には小型のものから大型のものまである。小型のものに生駒西麓産のものは少ないが、大型のものは生駒西麓産のものが多い。大型の甕の中には刻み目の施されたものと刺突紋の施されたものがある。

甕用蓋は２点出土している。高杯の裾部と類似するが、周縁部内面に煤が付着していることから認定した。

円盤(36，37)は２点、紡錘車(38)は１点出土している。すべて土器の破片を再利用したものである。

(註)

弥生土器の分類は次の文献によっている。

１．忍　薫(1984),「出土遺物」,『中野遺跡調査概要Ⅴ』.

２．石器資料

出土した石器資料はサヌカイト製の石器117点、剥片100,105点、石核182点、結晶片岩製の石包丁10点、粘板岩製の砥石１点、砂岩、チャート、紅廉片岩の石片などである。今回の調査で石器資料が最も多く出土したのは整地層からであるが、この他、溝１、溝２と現水田の床土(第２層)からも検出されている。調査区全体に約1.2mの厚さで堆積している整地層は平安時代末から近世に至る時期に形成されたと考えられるが、それらの中でも多量の石器資料を検出したのは調査区南東端の遺構平面図で網がけした範囲(図12)である。そこでサヌカイトの集中して確認できる部分の発掘土を持ち帰り、洗浄フルイかけを行った。その結果、サヌカイト製の石器110点・剥片97,037点・細部調整剥片208点・石核170点、結晶片岩製の石包丁９点、粘板岩製の砥石１点の他、紅廉片岩・チャート・砂岩などの石片を検出した。

以下、各々の石器について記述していくが(註1)、個々の石器の詳しい製作技術については表26を参照されたい。また、今回出土の石器資料には多量の剥片と石核が含まれているが、剥片については項を改めて分析しているので、そちら(４－2)を参照されたい。なお、資料の観察に際して、実測図の左の図を(A)、右の図を(B)と呼称する。また、特に(A)、(B)を規定せず、右縁、左縁とだけ記述してある場合は(A)を基準にして左右を決めている。

石器の出土状況は表４の通りである。

	溝２	整地層	包含層	合計
石　鏃	4	44	48	
石　槍	1	11	12	
打製石剣	1	28	1	30
石　錐	1	7	8	
石小刀	2	2		
削　器	1	14	1	16
楔	1	1		
石包丁	1	9	10	
砥　石	1	1		
合　計	9	117	2	128

表４　出土石器一覧表

石鏃(図版20・21，図15～18－1～33，表26)

石鏃は48点出土している。基部形態別に記述すると凹基式1点、円基式5点、平基式4点、凸基無茎式15点、凸基有茎式12点、不明11点である。点数が少ないので問題を残すかも知れないが、計測値の結果を示して石鏃の特色を示しておく。

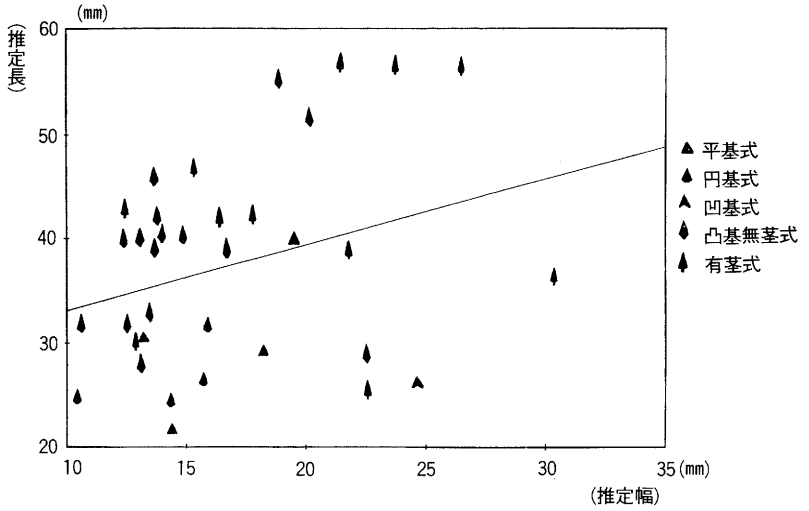


図15　基部形態別石鏃の長幅関係

推定長は非凸基式群(凹基式・円基式・平基式)が22～40mm、平均28.5mmであるが、凸基式群(凸基無茎式・凸基有茎式)は25～57mm、平均40.6mmである。推定幅は非凸基式群が11～24mm、平均16mm、凸基式群は11～30mm、平均17mmである。厚さは非凸基式群で3～5mm、平均4mm、凸基式群は3～11mm、平均5mmである。このことから非凸基式群と凸基式群の間にある大きな差異が長さに認められ、幅、厚さにはそれほどの差異がないことが分かる。

図15は石鏃を基部形態別に長さ(推定長)と幅(推定幅)の相関関係を示したものである。図上のラインは長さと幅の比率が平均値を示す一次回帰線である。これによるとこのラインの下に非凸基式群が、ラインより上に凸基式群が多く分布する状況が見て取れる。すなわち、非凸基式群には小型のものが多く、凸基式群に大型のものが多いことを示し、他の遺跡出土の石鏃の分析結果と整合する。

図16は石鏃の基部形態別に長さと幅の復元値から割りだした長幅示数と厚幅示数の相関関係を示したものである。図上のラインはそれらの平均値を示す一次回帰線である。これによると、長幅示数が1.5～3.0に、厚幅示数が0.2～0.4のところに集中することが分かる。また基部形態別にみてみると、凸基有茎式には幅広であっても薄身のものが多く、凸基無茎式は幅狭で、厚身のものが多い。円基式と平基式はその中間の位置を占めることが分かる。

次に製作技術を観察する。石鏃の約半数が両面、もしくは片面に素材面を残すことから、素材剥片の変形度が少ないことが分かる。基部形態別にみると円基式は80%、平基式は50%、凸基無茎式は53%、凸基有茎式は36%に素材面が残る。さらに、素材の厚みが分かる調整の施されていない石鏃11点を、両面に調整の施された石鏃18点と比較してみ

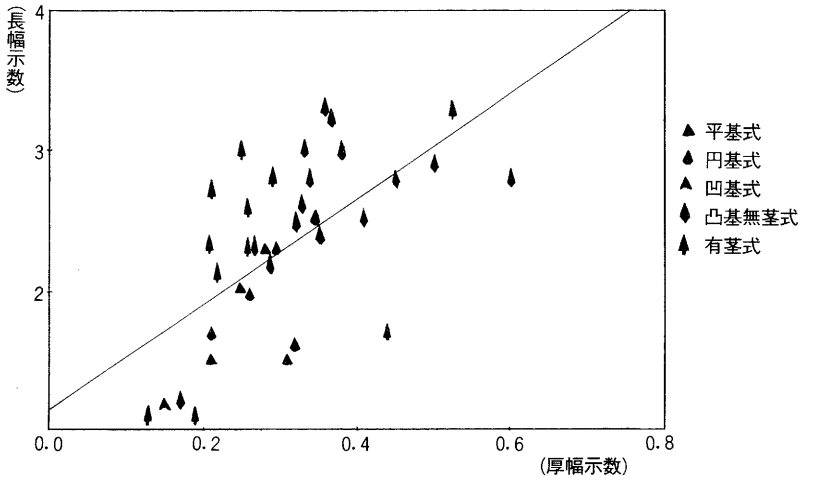


図16　基部形態別石鏃の長幅示数と厚幅示数の相関

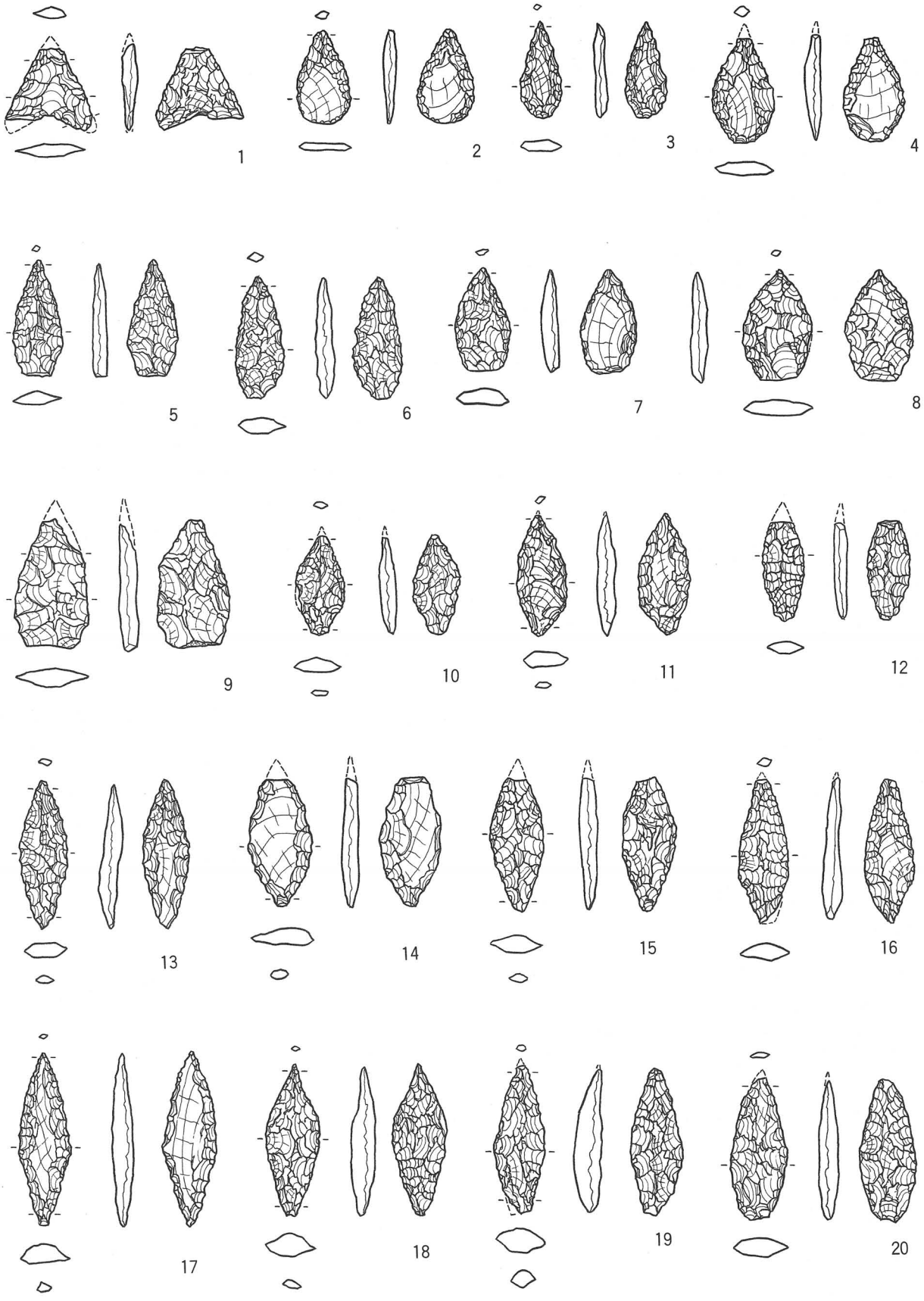


図17　石鏃

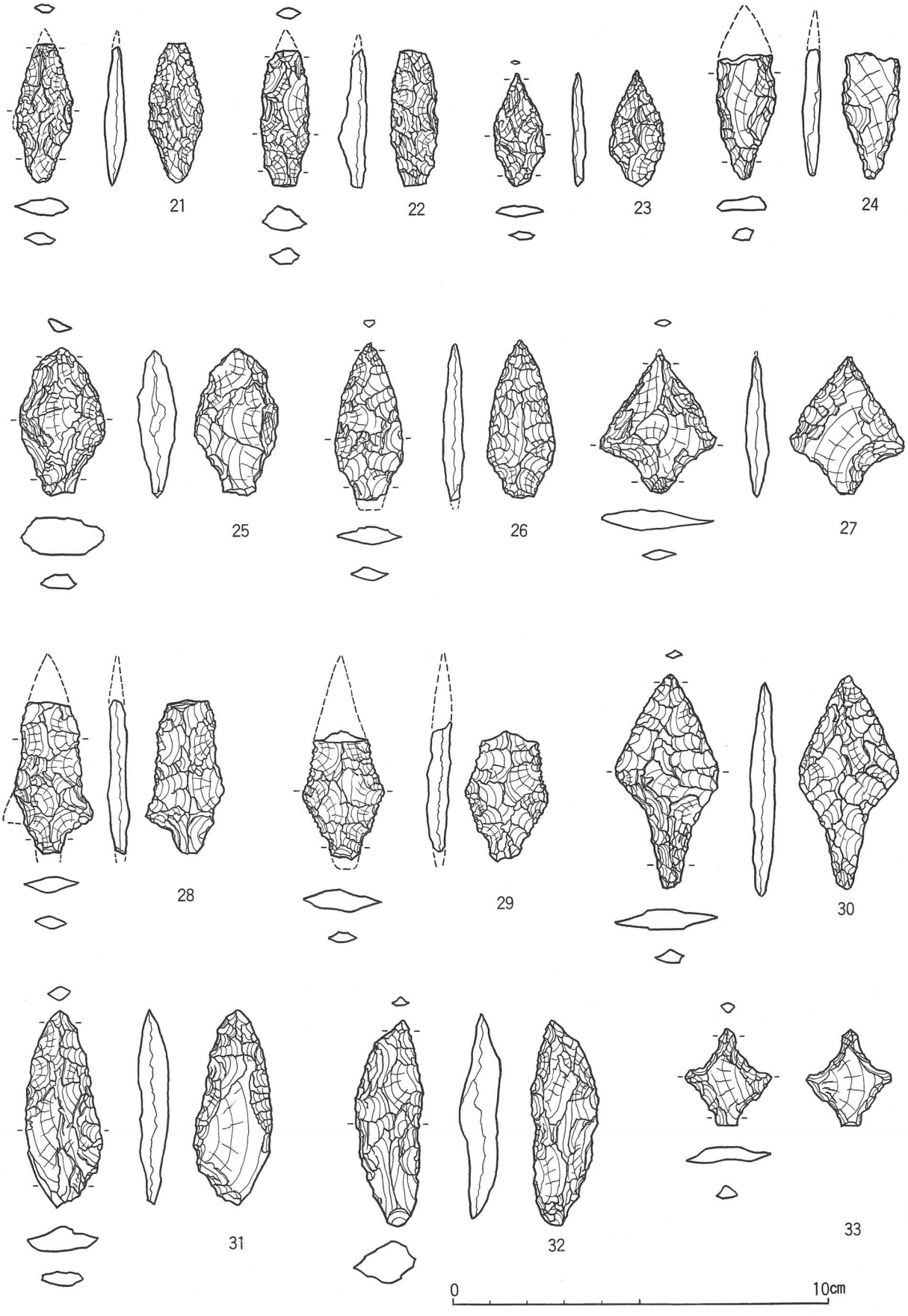


図18　石鏃

ると前者の長幅示数の平均値は2.19、厚幅示数は0.23、後者の長幅示数の平均値は2.46、厚幅示数の平均値は0.27になり、両面に調整の施された石鏃の方が細身の割に厚みがあり、調整の施されていない石鏃は前者より幅広の割に厚みのないことが分かる。すなわち、両面に調整の施された石鏃の素材は幅を狭めることによって厚みを減らしていても、素材の厚さを残す石鏃ほど薄くなっていないことを示し、逆に両面に調整の施されていない石鏃は素材に薄い剥片を選んだ結果、調整を施す必要がなく、形を整える作業だけですんだため、素材の幅も両面に調整の施された石鏃ほど狭められていないとも考えられる。以上のことと、両面調整の石鏃の方が幅の割に長さも長いことを合わせ考えると、両面に調整の施された石鏃の方が素材に大きな剥片を選んでいることが分かる。素材の形態が分かるものは18点あるが、内訳は剥片が6点、横形剥片は12点である。原面の残るものは1点(9)だけである。

器体整形の技術はすべて平形および薄形細部調整で行われていて、角度の高い細部調整は認められない。ただし1点、図示できなかったが、凸器無茎式の石鏃の中に尖端部の片縁と基部の片縁のそれぞれ相対する位置関係で折れ面が認められるものがある。折れ面は細部調整後に形成されているが、それらの位置と折れの結果できあがった形態から、そして使用による折れではないと考えられ、折り取りによって整形した可能性も考えられる。

石槍(図版22，図19－34～42，表26)

長さが50mm以上、100mm以下のもので、側縁が平行せず、その輪郭が木の葉形のものを「石槍」と呼ぶ。12点出土している。これらの中には製品(34，37，40)とするよりも製作途中品と認定した方がよいものも存在する。その場合、石鏃の未製品としてもよいものもあるが(35，36)、そうするには大きすぎるものもある。

打製石剣(図版23，図20～22－43～54，表26)

長さが100mm以上で、側縁が平行するものを打製石剣と呼ぶ。30点出土している。完形品はなく、その大半が製作途中の事故品で、折れ面から確実に使用による欠損品(43，47)と認定できるのは3点だけである。打製石剣に通常観察できる基部側縁の研磨の施されたものがないことは、完成品が尖端部片しか残っていないこと、また、その他のすべてが製作途中の事故品であって、最終工程まで行われていないことが原因として考えられる。また、今回の出土品の中には製作途中に施される表面の研磨は認められなかった(註2)。なお、(48)は磨滅が著しいが、その磨滅が折れ面にもおよんでいることから、事故後についたものと考えられる。原面残存のものは11点あるが、そのうち基端縁に残るものは7点、表面に残るものは4点ある。素材剥片の分かるものは2点だけで、いずれも横形剥片である。

石錐(図版24，図23－55～60，表26)

石錐は8点出土している。形態は4タイプ認められる。

1.頭部と錐部の境界がない棒状のもの。2点出土(55)。

2.頭部と錐部の境界が不明瞭で、全体の形状が涙滴形を呈するもの。2点出土(56，57)。

3.頭部と錐部の境界が明瞭なもので、頭部はほとんど調整が行われず、整形も雑で素材面を残

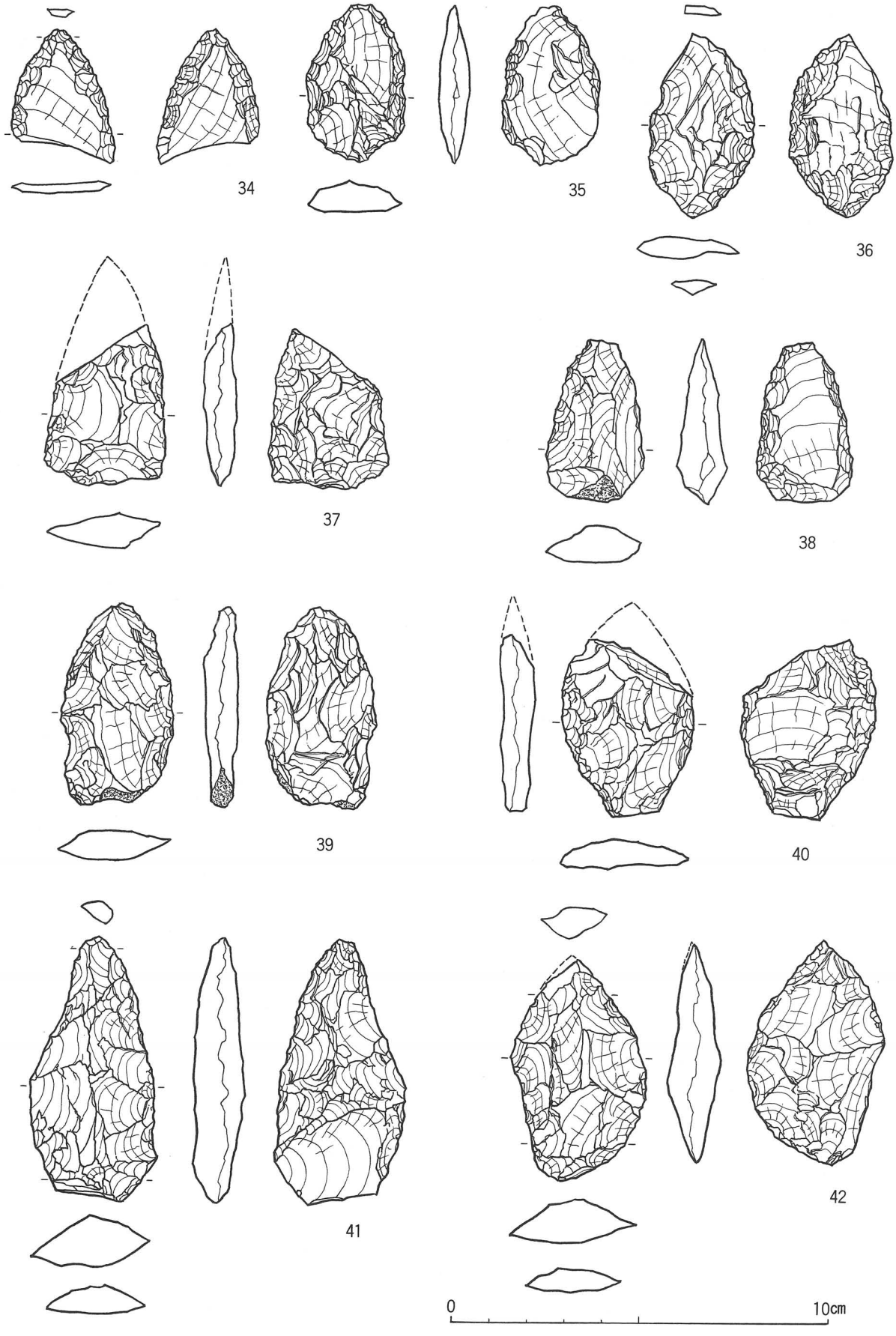


図19　石槍

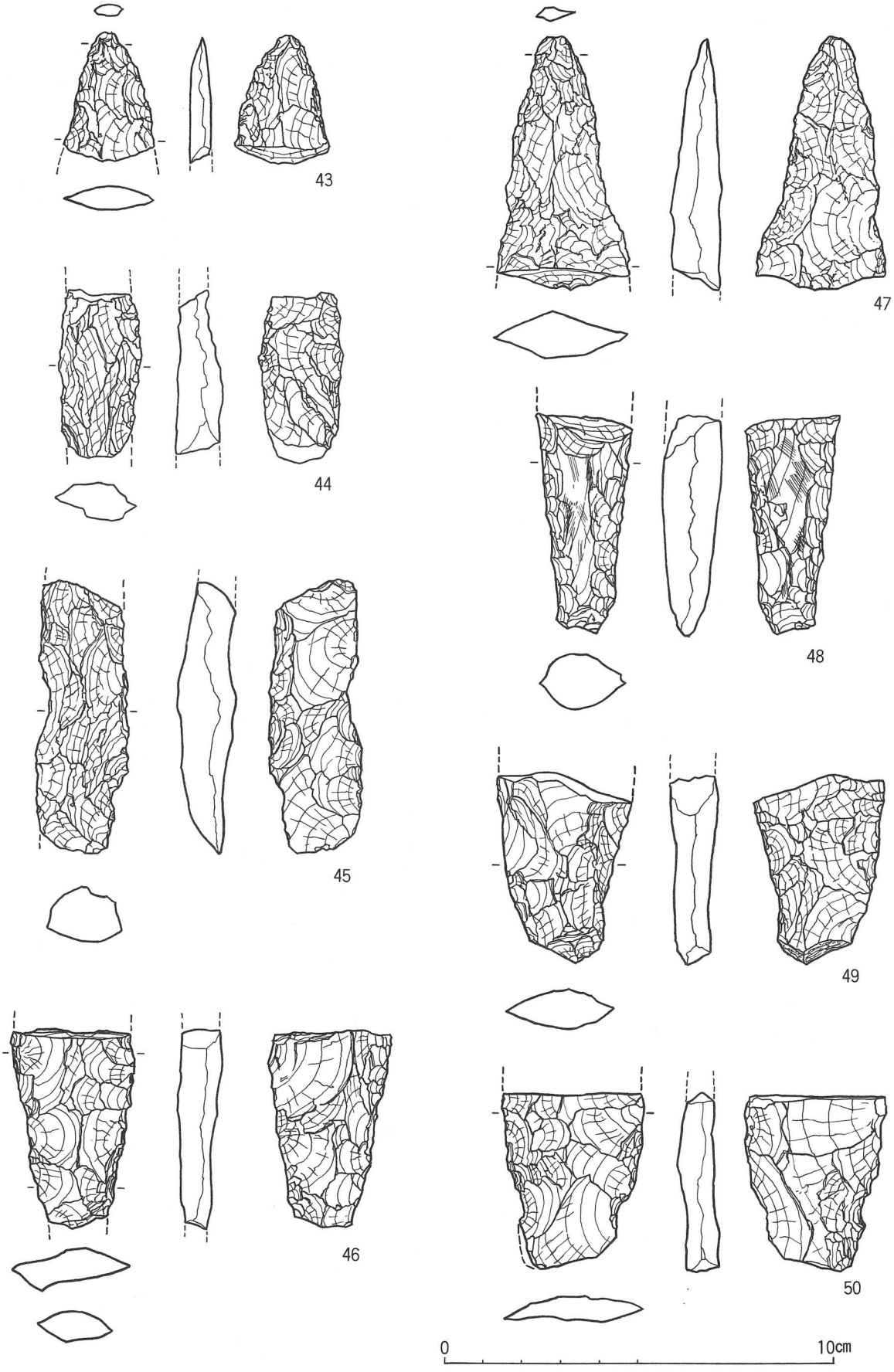


図20　打製石剣

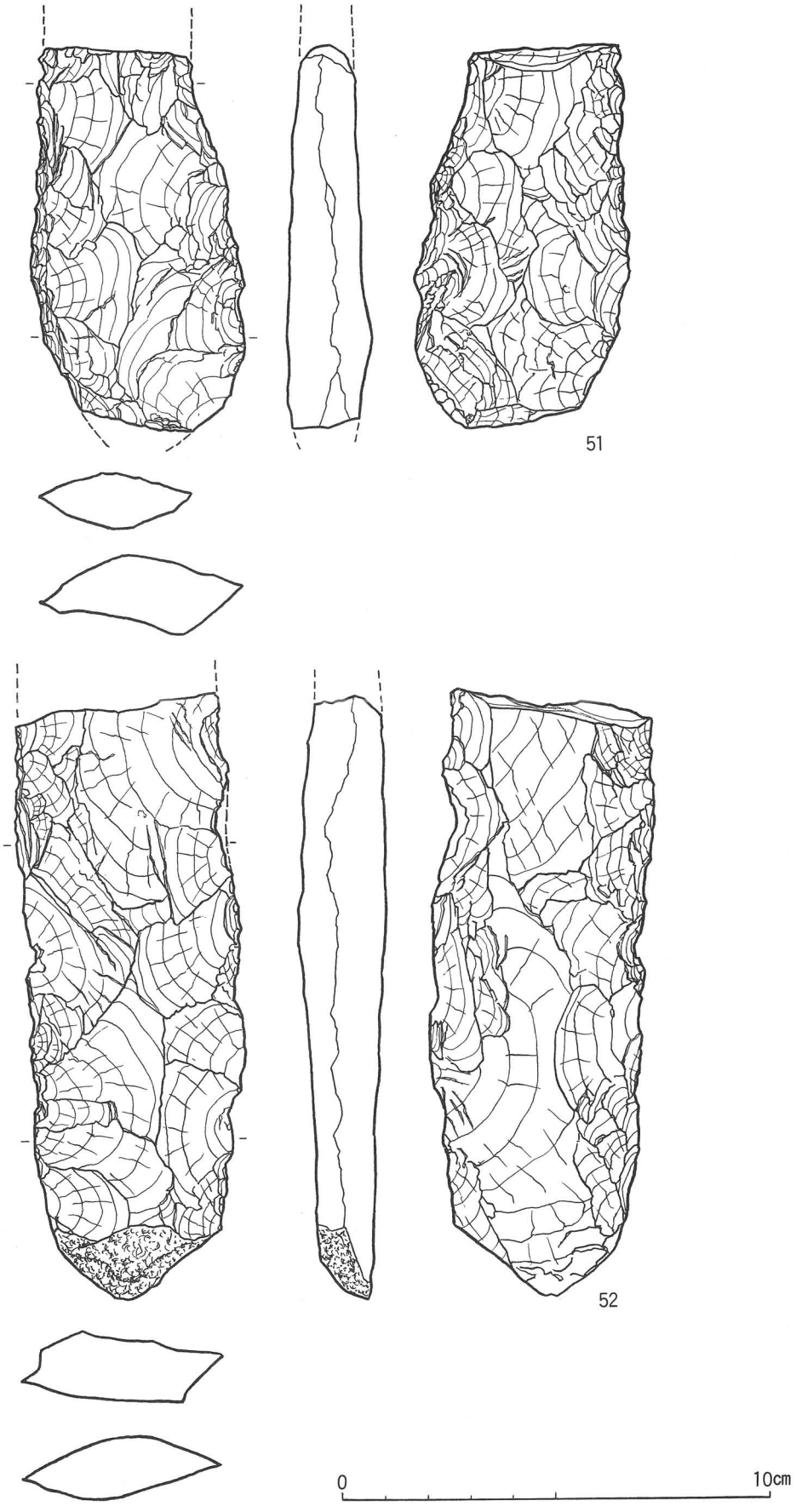
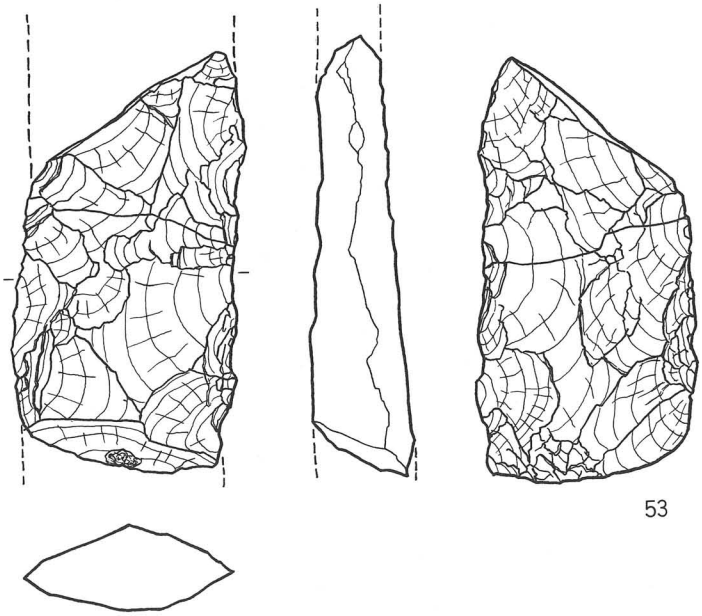
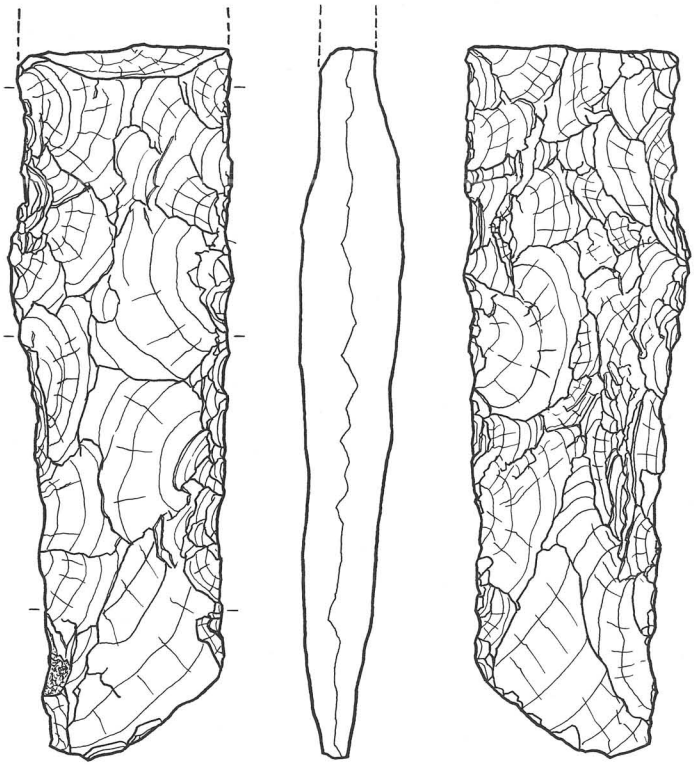


図21　打製石剣



53



54

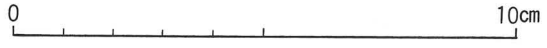


図22　打製石剣

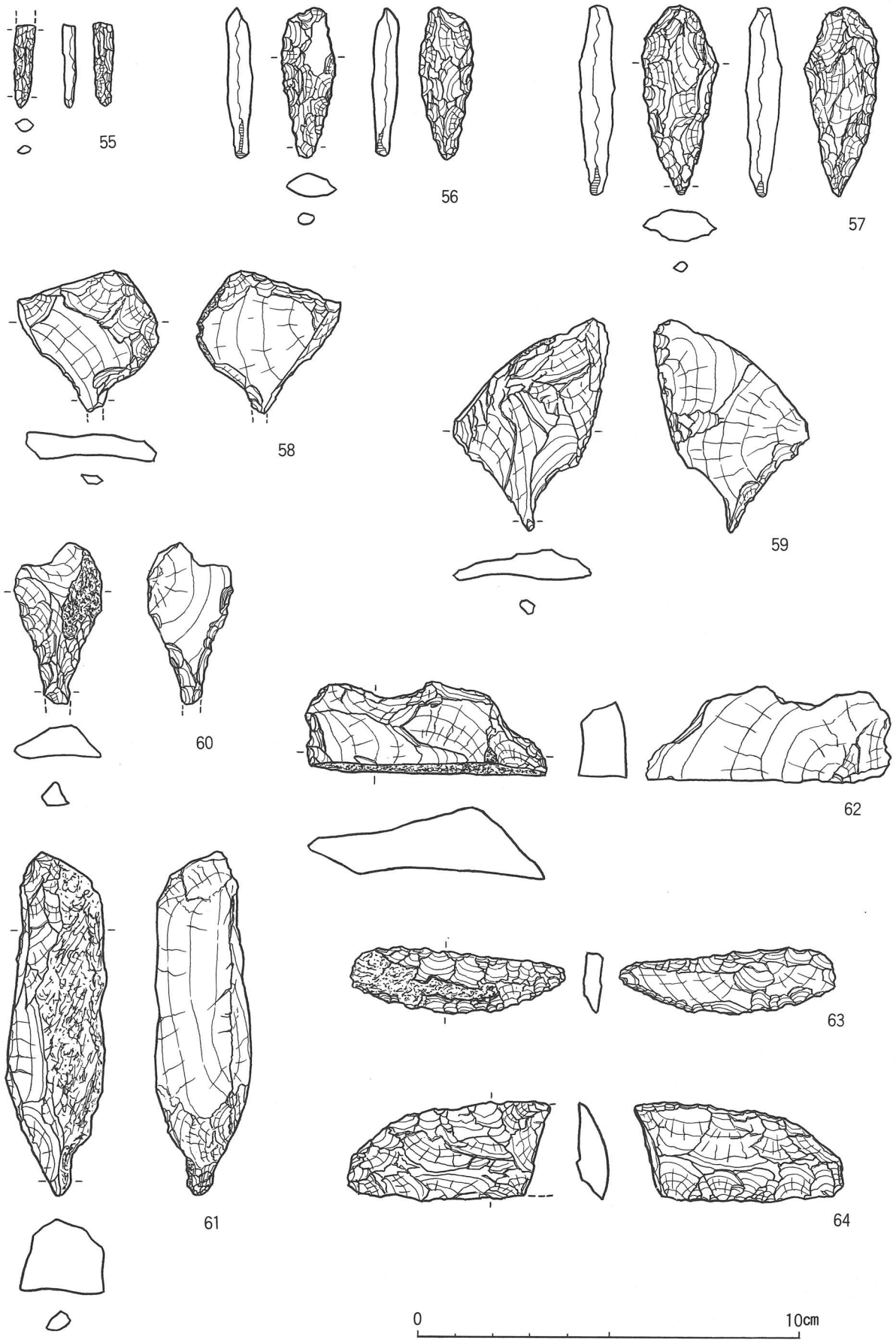


図23　石錐，ベック，ノッチ削器，石小刀

しているもの。3点出土(58～60)。

4.形態は3と類似するが、全体に厚みがあり、錐部の作りも頑丈でベックの範疇に入るもの。1点出土(61)。

1.2のタイプは平形、および薄形細部調整で整形されている。3.4のタイプは機能部である錐部の整形だけをみれば極厚形、厚形、薄形細部調整が施されているが、それらが全体におよぶことなく、素材面も一部に残している。

使用痕と考えられる磨滅は1と2のタイプに認められる。1は尖端部にごく狭い範囲での磨滅で、側縁にまでおよぶものではない。2は錐部に回転痕として磨滅が認められる。回転痕は尖端から両側縁にかけて器軸に直交して認められる。さらに尖端部は丸みをもっている。この回転痕ははっきりと残っていて、かなり堅いものの穿孔に使用したと考えられる。これら石錐にみられる使用痕の差異は穿孔の対象物の差と考えられる。

石小刀(図版24, 図23－63.64, 表26)

2点出土している。(63)は石小刀としては通常の大きさであるが、(64)は推定長が10cm近くなると推定でき大型の部類に入る。

石小刀の側縁に研磨が認められるものはない。

削器(図版24・25, 図23～25－62, 65～71, 表26)

16点出土している。刃部の数と形態によって細分すると、ノッチ削器1点(62)、横形削器1点(65)、凸刃削器4点(69)、凹刃削器1点、複刃削器9点(66～68, 70, 71)が検出されている。削器と認定したものの中には石核との区別がつけにくいものもあるが、そこから取られた剥片が石器の素材剥片として耐えられない大きさしかないと判断でき、なおかつ最終の細部調整が一辺に連続して認められるものをこの中にいれた。

ノッチ削器は剥離面打面の横形剥片を素材にして、その先端右縁に高い角度で細部調整をノッチ状に施している。

凸刃削器としたものの中に1点、磨滅の認められるものがある。原面打面で先端部が段で終わる正方形に近い平面形をもつ横形剥片を素材にした削器で、刃部は左側縁に薄形・深形・連続・凸形・表面細部調整で作り出されている。使用痕と思われる磨滅は主剥離面の先端部左側に、約2.5㎠の範囲に剥片剥離軸にほぼ直交する方向に認められる。この方向は刃部の方向と一致し、磨滅痕がつくぐらい堅い対象物を削るのに使用していたことを推測させる。

楔(図版25, 図25－72, 表26)

1点出土している。先端部が左角から斜め方向に石器平面に垂直な折れ(表面からの節理割れ)で新しく失った横形剥片(剥片の可能性もある)で、右縁全体に打撃痕が連続して認められ、その対象である左縁には大きな表面への剥離痕がある。左縁を何らかのものの上において、この剥片をたてて右縁上に打撃を与えた時に生じる剥離である。すなわち、楔としての使用を窺わせる。素材の打面は平坦な原面打面である。

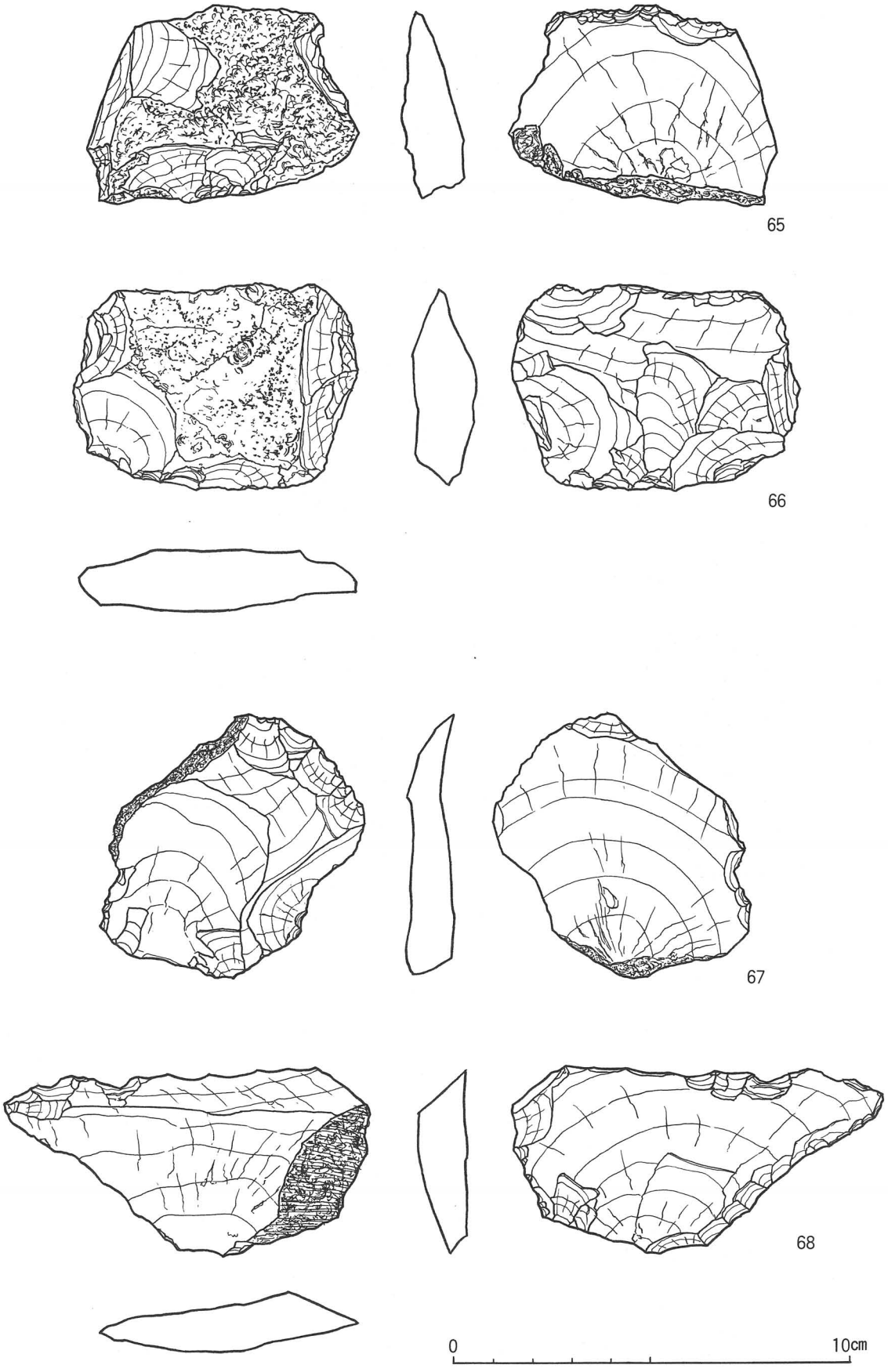


図24　削器

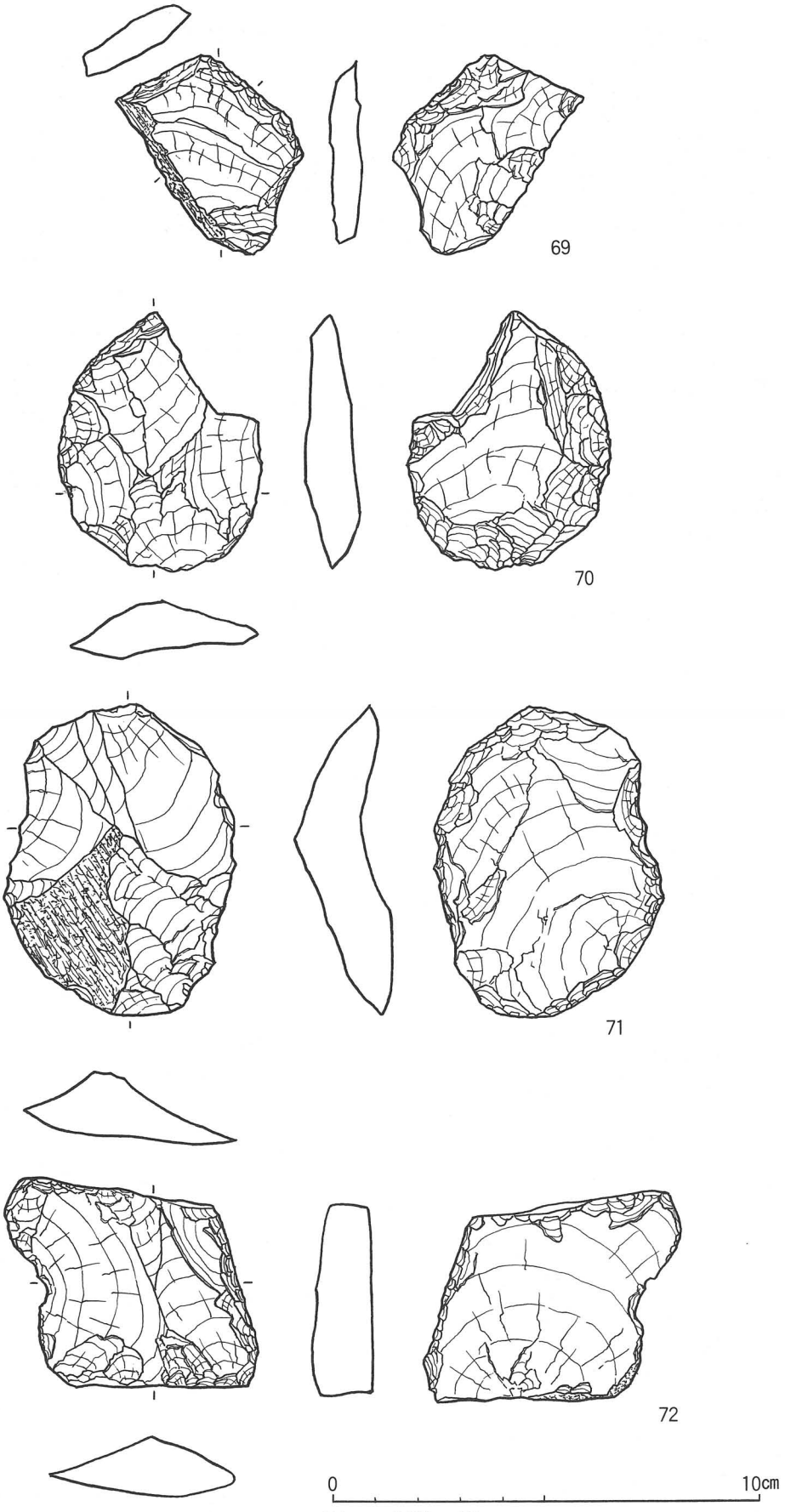


図25　削器，楔

最大幅(mm) ＼ 最大長(mm)	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59	60~64	65~69	70~74	75~79	80~84	85~89	90~94	95~99	100~104	105~109	110~114	115~119	130~134	135~139	合計
20~ 24					1																1
25~ 29		1											1								2
30~ 34	1		1	1	2	2	1		1												9
35~ 39			1	2	3		1	4	1	1											13
40~ 44			2	2	3	2	4	1	2	2	1						1				20
45~ 49					3	1	3	2	3	1	2										15
50~ 54					1		2	7	5	2	3	1				1					22
55~ 59							2	7	1	4	2	5	1			1		1			24
60~ 64							3	3	1	2	2	4	1	1		1					18
65~ 69							1	2	3	1	1	1	1								10
70~ 74										8	3	1	2								14
75~ 79										1		2	1	1			1				6
80~ 84											1	3	2		1						7
85~ 89													1								1
90~ 94									1					1			1				3
95~ 99															1						1
100~104															1		1			1	3
110~114																			1		1
合　計	1	1	4	5	13	5	17	26	18	22	15	17	10	3	3	3	4	1	1	1	170

表５　石核の単純最大長と単純最大幅の相関

石核(表５)

170点出土している。これらの中で剥片素材の石核は39点ある。表５は石核の単純最大長(第一長)と単純最大幅(第二長)の相関関係を集計したものである。

石包丁(図版26，図26－73～75，表26)

10点出土している。すべて結晶片岩製であるが、全体の形状の分かるものはない。かろうじて幅の計測できるものからみると、45mm程度の幅の狭いものと62mm程度の幅の広いものがあったことが分かる。

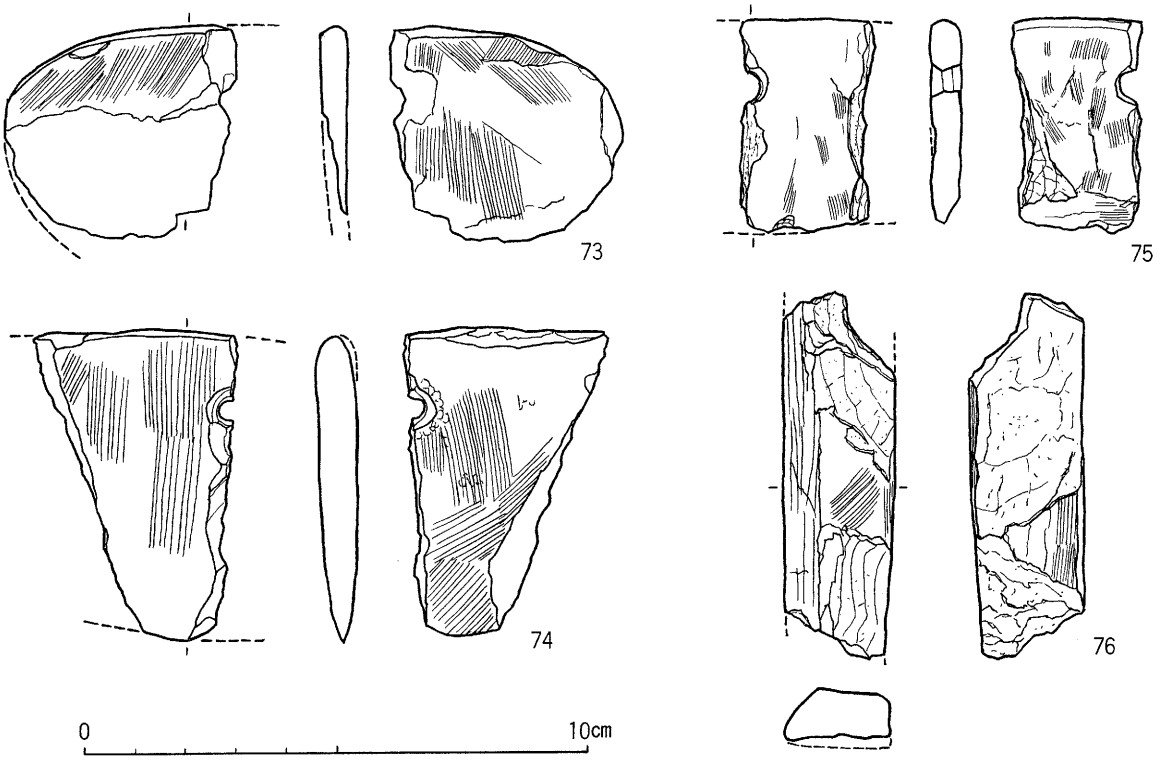


図26　石包丁，砥石

砥石(図版26，図26－76，表26)

1点出土している。粘板岩製の砥石である。金属製品用の砥石と思われる。

(註)

1．用語については基本的には山中一郎氏と森本晋氏に従っているが、一部の石器の型式名については必ずしもその定義に従っていないものもある。
山中一郎(1978)「森の宮遺跡出土の石器について」，『森の宮遺跡　第3.4次発掘調査報告書』，難波宮址顕彰会，124～147頁.
山中一郎(1982)「石器遺物」，『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』，(財)大阪市文化財協会，158～204頁.
森本晋(1983)「喜志遺跡'80－3区の石器」，『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要・Ⅵ』，大阪府教育委員会，31～46頁.

2．栗田薫(1995)「打製石剣の製作技法」，『弥生文化博物館研究報告』，第4集.
栗田薫(1995)「打製石剣を観察するための新しい視点－中間研磨と加工具の変化－」，『大阪府下埋蔵文化財研究会(第32回)資料』，(財)大阪府分化財調査研究センター，36～42頁.

3－2　古墳時代の出土遺物

1．埴輪

今回の調査で円筒埴輪と形象埴輪が出土している。そのほとんどは溝1と溝2の第1層目から検出された。遺構の項で述べたとおり、これらの出土状況は本来の姿ではなく、平安時代以降の整地によってこの場所に捨て去られたものである。

以下、円筒埴輪、形象埴輪の順に観察していく(註1)。なお、個々の埴輪の詳しい観察は表27を参照されたい。

円筒埴輪(図版27，図27・28，表27)

円筒埴輪は上田睦氏の分類によれば(註2)、すべて小型品の範疇に入るものばかりであるが、その中でも今回の出土埴輪をみてみると、大、小2つのサイズに分類することができる。ただし、このサイズの差は口径の差によるものではなく、段数の差と底径の差に起因するものである。なお、すべて無黒班で、円形のスカシ孔をもつものばかりであるが、タガ形状、内外の調整方法から8タイプに分類できる。

Aタイプ(図版27，図27－1，2)

段数は5段で、出土した埴輪の中で最も古いタイプで、かつ大きなサイズに属するものである。口縁部がわずかに開く(1)と直立する(2)がある。スカシ孔は2段目と4段目に2孔づづ千鳥状に配されている。タガは低い断面台形である。外面調整は静止痕が斜めに明瞭に傾くBd種横ハケが施されている。内面は 1段目に斜め方向のハケ目が認められるが、2段目から基底部はなで調整である。なお、基底部外面は縦ハケ一次調整だけで、横ハケは施されていない。工具幅は6cm前後で、横ハケは1段目が2回、2～4段目が1回の操作で施されている。なお、各調整ごとに工具の使い分けはなされていない。4点出土している。

Bタイプ(図27－3)

段数は不明。タガは低い断面台形であるが上方の方が突出度が高い。外面調整は縦ハケ一次調整の後、静止痕の認められない（全体の1/3しか残っていないが、その間に静止痕が認められない。)ストロークの長いC種様の横ハケ二次調整が施されている。工具幅は3～4cm前後と狭く、横ハ

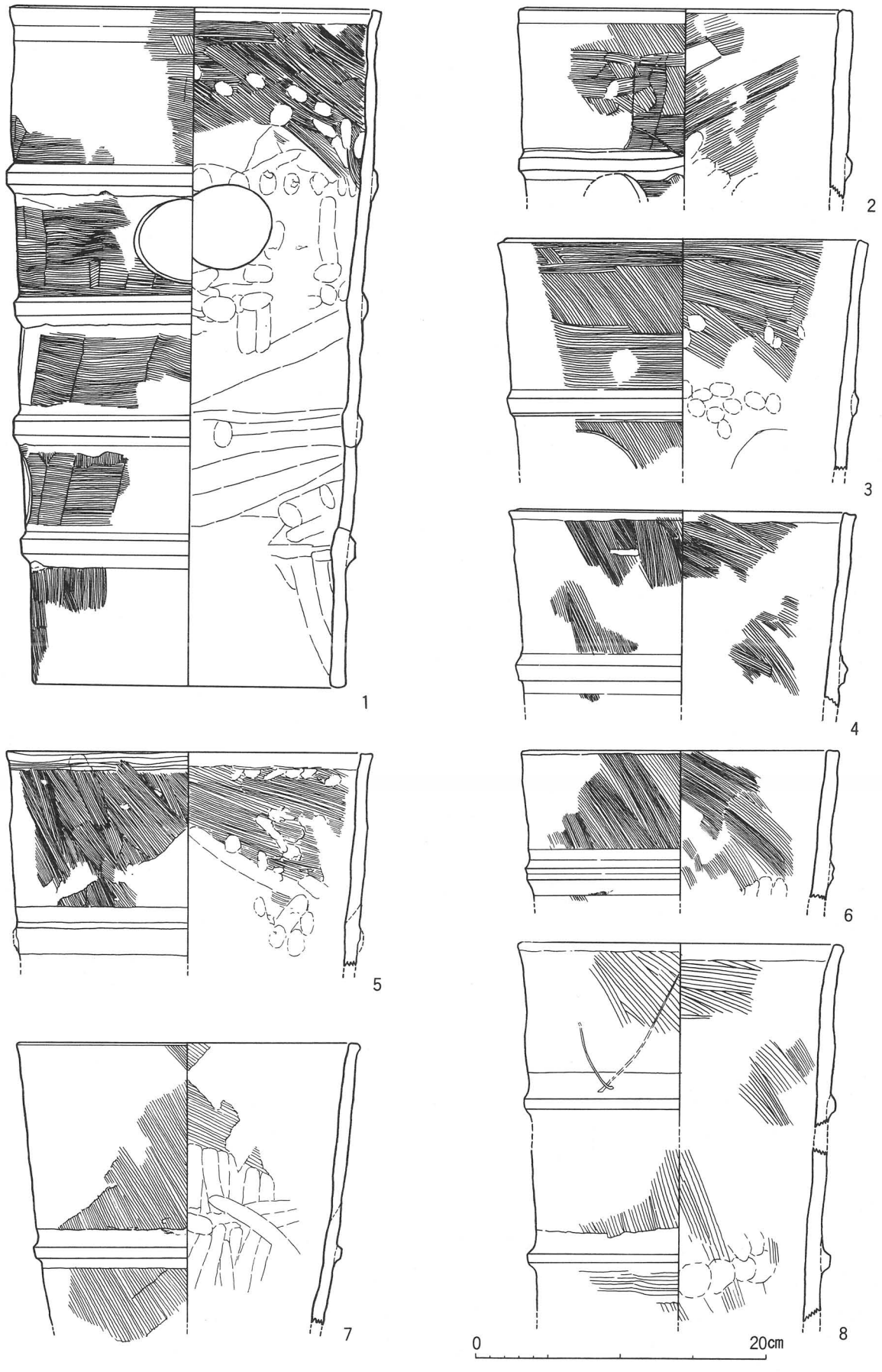


図27　円筒埴輪

ケは１回施されているだけで、最上段のタガ側に接して約1/2しか施されていない。なお、各調整ごとに工具の使い分けはなされていない。１点出土している。

Cタイプ(図27－4～6)

段数は不明。タガは低い断面M字形である。１段目が長い(４，５)と短い(６)がある。口縁部はほぼ直立する。外面調整は縦ハケ一次調整だけである。工具幅は狭く、３～４cm前後であるが、ハケの幅は細かく、７～18本/cmである。内面調整は斜め方向のハケのほか、なでによる場合もある。なお、各調整ごとの工具の使い分けはなされていない。14点出土している。

Dタイプ(図27－7)

段数は不明。タガは低い断面台形である。出土した埴輪の中で１段目が最も長い。外面調整は縦ハケ一次調整だけである。工具幅は狭く、３～４cm前後であるが、ハケの幅は粗く、６本/cmである。内面調整は斜め方向のハケのほか、なでによる場合もある。なお、各調整ごとに工具の使い分けはなされていない。１点出土している。

Eタイプ(図27－8)

段数は不明。タガは低い断面台形である。口縁部はわずかに外反して開く。外面調整は縦ハケ一次調整と３段目に右から左方向に回転を利用した横ハケ調整が施されている。工具幅は狭く、２～３cm前後である。ハケの幅は粗く、５本/cmである。内面調整は斜め方向のハケのほか、なでによる場合もある。各調整ごとに工具の使い分けはなされていない。１点出土している。

Fタイプ(図版27，図28－9)

段数はおそらく４段である。タガは低い断面台形である。口縁部はわずかに内湾する。スカシ孔は２段目と3段目に千鳥状に配されている。外面調整は縦ハケ一次調整が施されている。工具幅は３～４cm前後である。ハケの幅は粗く、５本/cmである。内面調整は斜め方向のハケのほか、なでによる場合もある。各調整ごとに工具の使い分けはなされていない。１点出土している。

Gタイプ(図版27，図28－10)

段数はおそらく４段である。タガは低い断面M字形である。口縁部は外反する。基底部はすぼまる形態をもつ。スカシ孔は２段目と４段目に千鳥状に配されている。外面調整は縦ハケ一次調整だけである。工具幅は４cm前後である。ハケの幅は粗く５本/cmである。内面調整は斜め方向のハケのほか、なでによる場合もある。各調整ごとに工具の使い分けはなされていない。１点出土している。

Hタイプ(図版27，図28－11，12)

段数はおそらく４段である。タガは断面三角形である。口縁部は大きく外反する。基底部ですぼまる形態をもつ。外面調整は縦ハケ一次調整だけである。工具の幅３～４cm前後である。ハケの幅は粗く５～６本/cmである。内面調整はなで調整である。ただし、口縁部は板状工具でなでている。９点出土している。

基底部片(図28－13～18)

基底部の破片の外面調整は縦ハケ一次調整だけである。内面調整はなで調整である。底端面の調整が施されているものと施されていないものがある。施されているものはなで調整がおこなわれている。底径は13～14cm前後のものと、20cm前後のものがある。基底部の破片は口縁部片に比べるとその出土量が少ない。このことはこれらの埴輪が廃棄された時の状況を推測させる。すなわち、墳丘に基底部を残したまま削平された土が、整地に使用されたと考えられる。

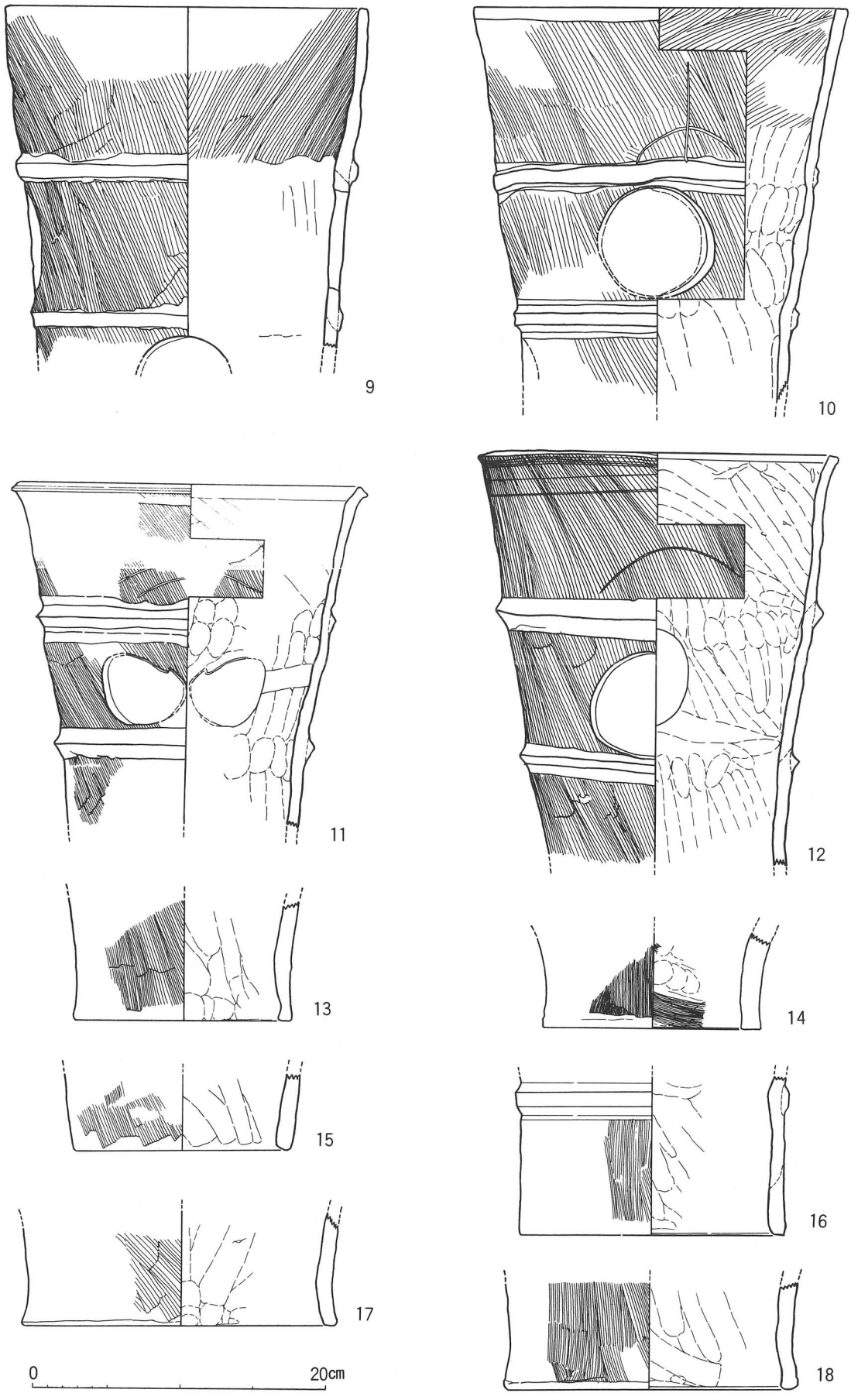


図28　円筒埴輪

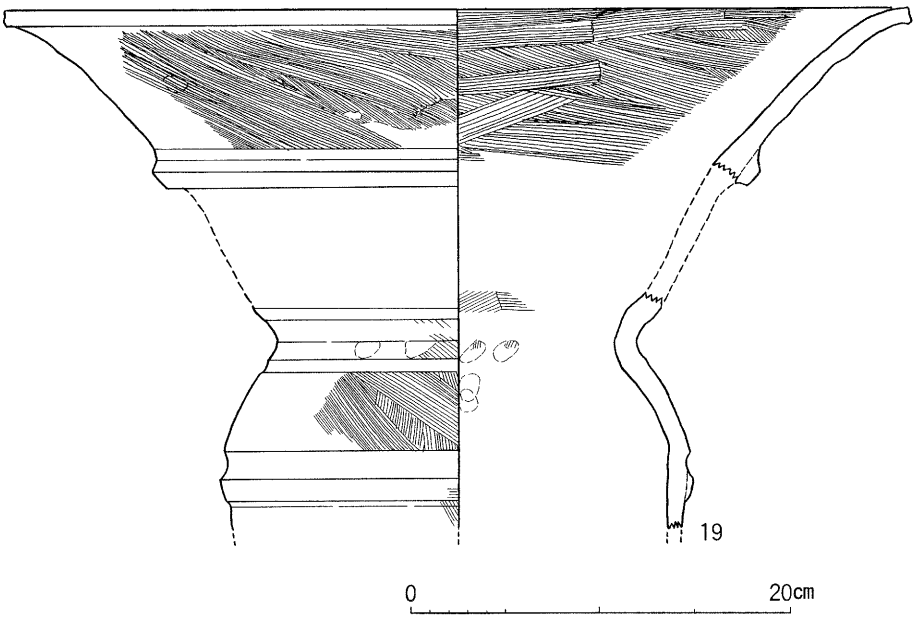


図29　朝顔形埴輪

円筒埴輪の中にはヘラ記号の施されているものが14点ある。図示したもの(図27－2．8，図28－10～12)以外に曲線と刺突を組み合わせたものがある。

朝顔形埴輪(図版27，図29－19，表27)

２点出土している。２点とも同じタイプのものである。口縁部は大きく外反して開く。頸部に断面台形のタガがめぐる。肩部は張り出さず、体部のタガまでの長さは短い。体部のタガは頸部よりも低い断面台形である。

形象埴輪(図版28・29，図30・31，表27)

形象埴輪には人物形埴輪４～５点、草摺形埴輪１点、短甲形埴輪２点、冑形埴輪１点、靭形埴輪２点、馬形埴輪２点、鳥形埴輪２点、蓋形埴輪４点の他、形態不明の形象埴輪が出土している。

人物形埴輪(図版28・29，図30－20～25，表27)

頭部と肩部残存のもの(20)、腕から手(21)と背部の衣装残存(22)のもの、耳片、衣装の裾部と考えられるもの(23)、衣装の一部と考えられるもの、みずらと考えられるもの(24)、眉庇付冑の一部と考えられるもの(25)が出土している。胎土と焼成具合からみて５～６体の人物埴輪があったと推測できる。

頭部と肩部残存の埴輪は巫女(20)を現している。頭部は粘土紐の巻き上げで球形に作り上げ、頭頂部に板状の髷を貼り付けている。髷にはヘラ工具で毛髪を表現し、髷のほぼ中央で毛髪を束ねている様子が表現されている。顔の表現は額、頬、顎の部分をわずかに膨らみをもたせ、立体感のある表現を行っている。眉は突出させることであらわしている。目は切れ長の杏仁形に長さ2.6cm、最大幅0.8cmの大きさで、口は長さ3.1cm、幅0.2cmの大きさで横一文字に穴をあけて表現している。鼻は粘土を貼りたして、底辺1.8cm、一辺3.9cm、最大高0.9cmの二等辺三角形状に形づくっているが、眉の膨らみのカーブと連続させることによって鼻筋の通った形になっている。鼻の穴は直径５mm、深さ５mmにあけている。耳は粘土紐を貼り付け、微妙に高低をつけて耳たぶの表現を行っている。

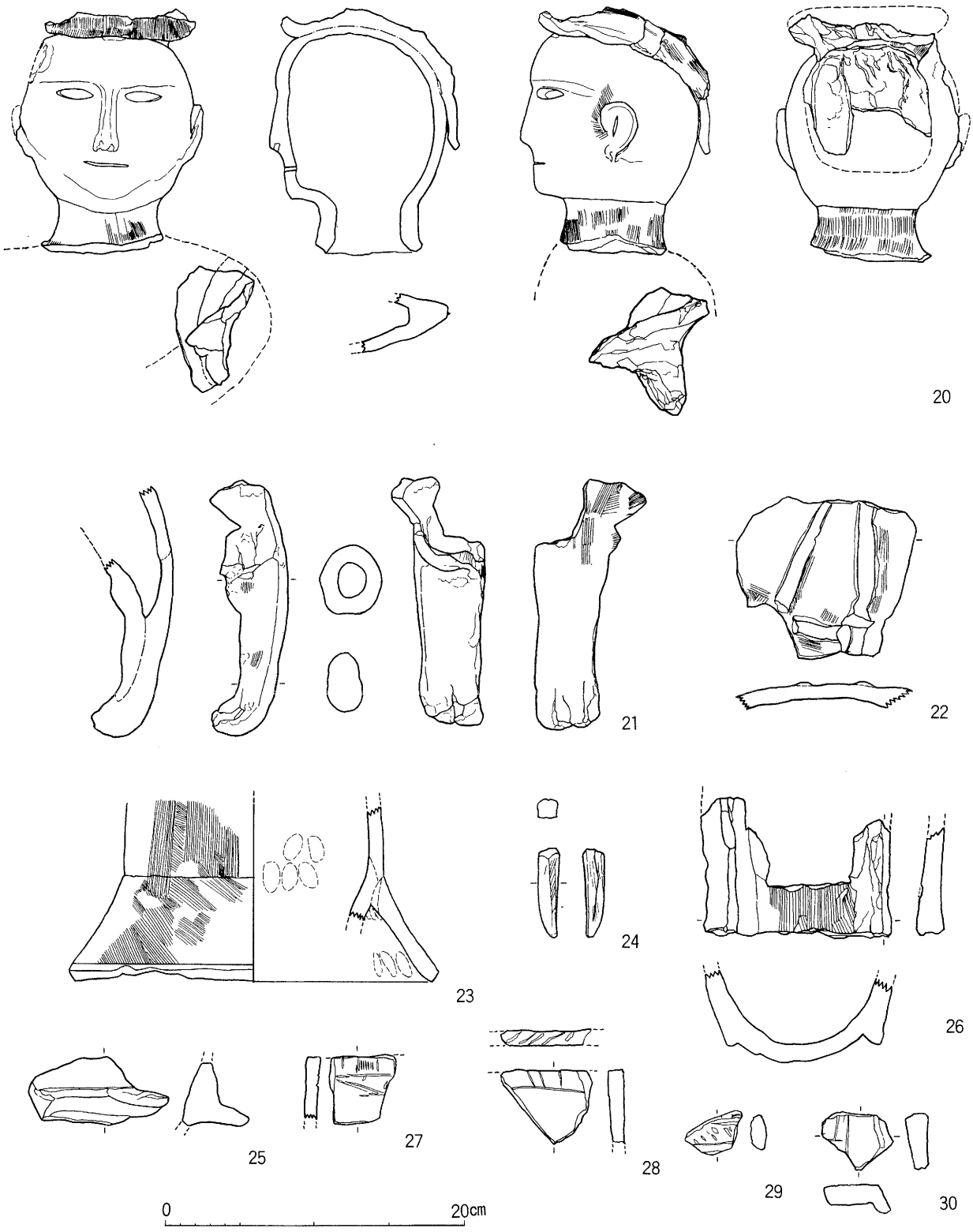


図30　形象埴輪

耳の中央には縦長方向に長さ1.2cm、最大幅0.3cmの杏仁形の穴をあけている。肩部は襷を掛け、腕を前に廻す表現がとられている。肩と腕は直接つなぐ方法が取られている。調整はハケとなでで行われている。

腕から手にかけて残存のもの(21)は、まず粘土板を丸めて手をつくり、指は4本分を粘土紐で貼りつけて表現している。上腕から肩にかけては粘土帯を巻き上げて作っているため中空である。調

整はハケとなでで行われている。

背部の衣装と考えられるもの(22)は前述の腕から手にかけて残存のもの、耳片と焼成や色調が似ていることから、これらは1体のものと推測できる。衣装は結び目を伴う襷が粘土紐で貼り付けられている。残存部分のカーブから背部と推定した。調整はなでとハケで行われている。耳片は前述の巫女の表現と同じである。

衣装の裾部と考えられる破片(23)の焼成と色調は後述のみずらの破片に似る。もし男性の埴輪があったとすれば、その埴輪の衣装と考えられる。調整はハケとなでで行われている。スカート状の裾部は別に作り、本体に貼りつけている。貼り付けの際、密着度を高めるために施したと考えられる粗いハケ調整(6本/cm)が認められる。

他に衣装の一部と考えられる破片が出土している。焼成、色調からみて前述のどの人物埴輪とも違い、黄橙色の焼きの甘いものである。なだらかなカーブをもつ破片に、縦方向に長く襞と考えられる粘土紐の貼り付けが認められる。調整は磨滅が著しいため不明である。

みずら(24)と考えられる破片は先端の尖る四角柱で角状を呈する。表裏2面に毛髪の表現と考えられるヘラ工具で施された沈線がみとめられる。焼成や色調は前述の巫女と類似するが、明らかに巫女とは別個体なので、もしこの破片が確実にみずらであれば、男性の埴輪があったことが推測できる。調整はハケとなでで行われている。

(25)を眉庇付冑の破片と考えたので、武人埴輪を想定した。しかし、馬の鞍の可能性も考えられる。調整は磨滅が著しいため不明である。

草摺形埴輪(図版29，図30－29，表27)

1点出土している。小破片であるため断定できないが、横方向に平行線を引き、その間に左上がりの斜線を上下2段にずらせて施している。

短甲形埴輪(図版29，図30－27，28，表27)

2点出土している。ともに短甲の上部の破片で革組覆輪の表現が認められる。(27)はさらに三角の地板を革で綴じている表現がなされており、いわゆる三角板革綴短甲を表したものであることが分かる。(28)は地板形態が分からないが、覆輪に施された革組の表現が上端面にも認められ、革紐で巻き綴じている様子が表されている。

靭形埴輪(図版29，図30－30，表27)

3点出土している。筒部の破片と背板の一部が出土している。筒部の周縁部の飾りを表現したと考えられる(28)は2本の縦方向の平行線の間に直交する横方向の分割線が施されている。背板の破片は張り出し部に表現される円弧紋を表現した破片と考えられる。円弧紋は粘土紐を貼り付けて表現している。

鳥形埴輪(図版28，図31－31，表27)

3点出土している。頭部と体部の大半が欠失しているため鳥の種類は分からないが、円筒部の2段目の体部を表現したと考えられる前後の開き角から推測すると、鶏の可能性が高い。1段目と2

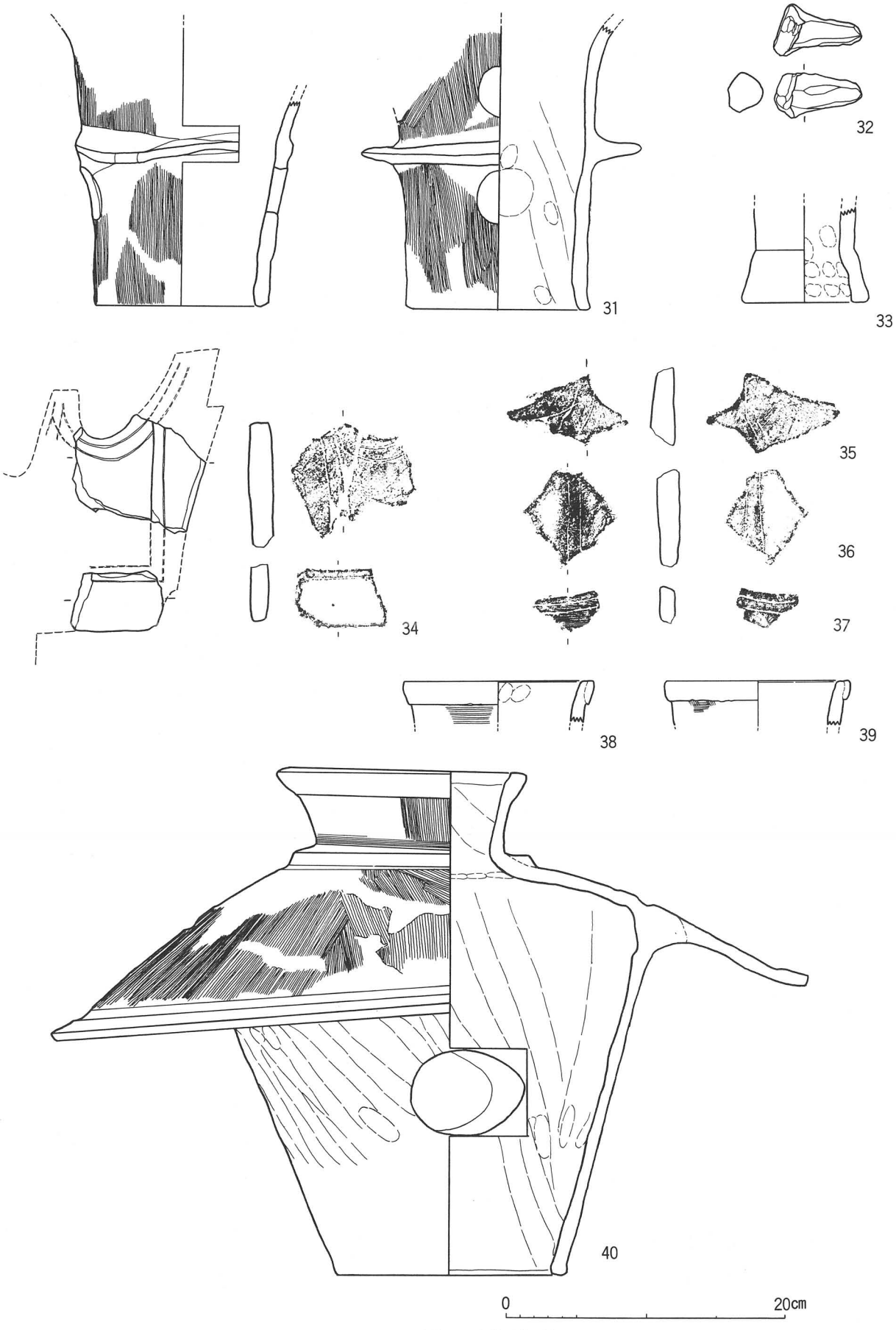


図31　形象埴輪

段目の間の凸帯は低い三角形に近い台形で、その凸帯の相対する位置(鳥の顔の位置を正面とすれば、左右の位置)に半円形の粘土板が貼り付けられている。これらに鳥の足としての表現が認められないが、足を表現したと考えておきたい。この半円形の粘土板と類似のものが、このほかに3点出土しているが、これらの内2点は前述のものより大きく、一組と考えられる。あと1点は前述のものと同じサイズであることから、大きめの鳥が1羽、小さめの鳥が2羽あったことが推測できる。

馬形埴輪(図版29, 図31－32, 33, 表27)

尾を表現したと考えられるもの(32)と脚部を表現したと考えられるもの(33)がある。尾は形態的には角状を呈していて、馬形埴輪の尾として通有の形ではあるが、体部との接合部にあたる部分の残存状況がきわめてきれいで、剥がれた痕跡を残していないことから、馬の尾と断定することに躊躇しないわけでもない。例えば、上部に切り込みなどが認められれば韓式土器の可能性を考えたりもできるが、今のところ、胎土、焼成、色調からみて形象埴輪の一部として考えておく。脚部を表現したと考えられる(33)は円筒形に段の付く形態で、段は蹄を表現していると考えられる。

蓋形埴輪(図版29, 図31－34～40, 表27)

立ち飾り部を除く部分が復元できたもの(40)、軸受け部分の破片(38, 39)、立ち飾り部の破片(34～37)があるが、それらの胎土、色調、焼成からみて4個体分の蓋形埴輪があったと推測できる。

軸受け部はすべて同じ形態で、口縁部に凸帯が貼り付けられている。立ち飾り部片(34, 35, 37)は胎土、色調が類似していることから、同一個体片と考えられる。また、(40)とも胎土、色調が類似していることから、この蓋形埴輪の立ち飾りの可能性が高い。

不明形象埴輪(図30－29, 表27)

不明の形象埴輪は図示したもの以外に数十点ある。図示したような形態は1点だけである。図上の側面に貼り付けた平坦な板が、前面にも延びていた痕跡が残っているが、どのような形態であったのか不明である。

(註)

1．用語については下記の文献に従っている。なお、円筒埴輪の残存状況が悪いため、段数は口縁部から数えている。

川西宏幸(昭和53年)「円筒埴輪総論」,『考古学雑誌』, 第64巻, 第2号, 日本考古學會, 1～164頁.

一瀬和夫(1988),「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」,『大水川改修にともなう発掘調査概要・V』, 大阪府教育委員会, 65－98頁.

上田　睦(1992),「古市古墳群出土円筒埴輪の様相」,『古代文化』, vol.44, (財)古代學協會, 13－22頁.

2．上田　睦　前掲書

3－3．平安時代の出土遺物

1．土壙1出土土師器(図版30, 図32)

土壙1から土師器の皿2点、小皿41点が出土している。

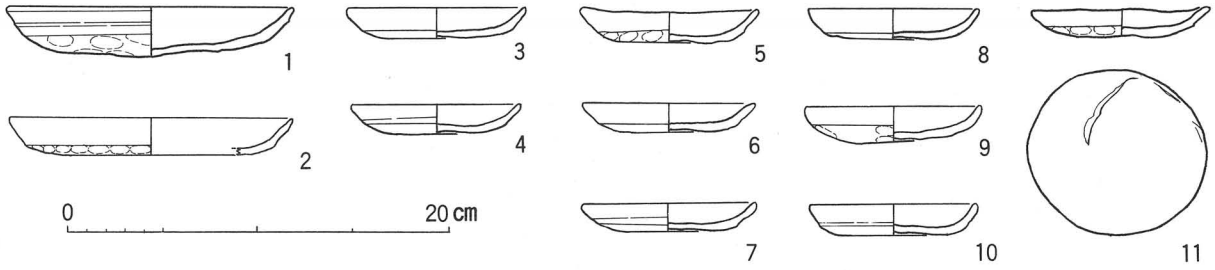


図32　土壙１出土の皿，小皿

皿は口径15cm前後、器高は2.7cm前後をはかる。２点とも同じ胎土で作られ、橙色を呈す。製作技術も同じで、口縁部に２回の横なで調整が施されているため、２条の凹帯が認められる。外底面に粘土の接合痕が残る。

小皿は口径9.0～10.3cm、器高1.3～2.2cmをはかる。形態からみると２つのタイプが認められる。口縁部が外反して、端部が丸くおさまり、口縁部と底部の境に段をもつものタイプと、口縁部がなだらかにたちあがって、端部が丸くおさまり、口縁部と底部の境が不明瞭なタイプがある。これらの製作技術をみると、両タイプとも成形後、底部内面に横なで調整を施した後、口縁部内外面にも横なで調整を施していることがわかる。このことからここでみられるタイプの差異は単に最終調整であるなで調整の時の力のいれ方によって口縁部の形状、すなわち外反具合と体部の境の明瞭さと不明瞭さに影響していると考えられる。なお、調整は粗雑で小皿の大半に成形時の粘土の接合痕が認められる。すべて同じ胎土で、黄橙色を呈す。

３－４．近世の出土遺物

１．銭貨(図版30，図33－1，2)

２点出土している。共に「寛永通寶」であるが、１は直径26.7mm、厚さ0.15mmである。２は直径21.2mm、厚さ0.13mmである。

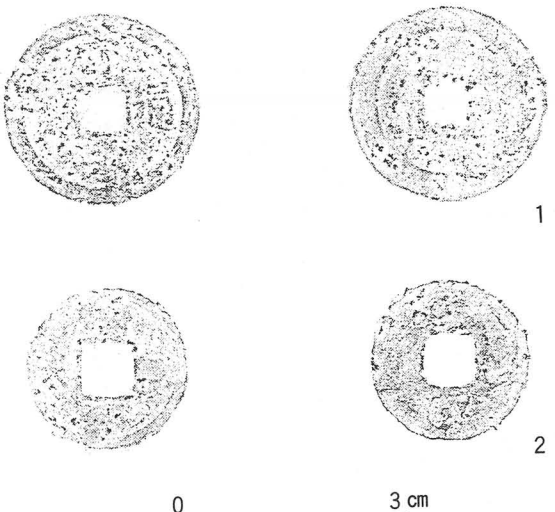


図33　銭貨

２．土人形(図版30，図34)

１点出土している。型合わせづくりの「狛犬」で、底部に直径２mmの孔があいている。類似品は大阪城旧三の丸地区から出土している(註1)。この大阪城出土の土人形から推測すると、本来は台座がついていたと考えられる。

（粟田　薫）

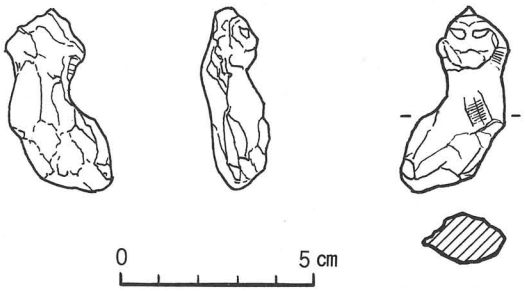


図34　土人形

(註)

1．中川信作(1986)「大阪城の土人形とミニチュア製品」，『葦火』，5
(財)大阪市文化財協会，6～7頁.

4．まとめ

今回の調査地は、喜志遺跡の弥生集落が立地する中位段丘面を切り込む開析谷にあたる。1987年に実施した調査では、遺跡の中央を走る東高野街道に接して西側に幅３m、深さ1.5mを測る断面がＶ字形を呈する溝が検出されている。東高野街道の路肩改良工事に伴う調査でもこの溝を境に、南には弥生時代の遺構は確認されていないことと、その規模からみて集落を画する環濠的な性格をもつと考えられることから、この延長に該当する調査地で検出した溝２は自然地形を利用した環濠の一部とも推測される。今後、西側延長を確認することで、溝のもつ性格がより明確になるだろう。

また、今回の調査では、予想もしなかった多量の埴輪が出土した。調査地周辺の字名が「高塚」と称することから、その姿をとどめていない古墳があったことがうかがえ、古墳時代の喜志遺跡の一端を知ることができた成果は大きいといえる。

以上のような調査成果があったが、以下、整理過程で気づいた点を１．弥生土器の所属時期とその特色、２．サヌカイト製剥片の属性分析、３．石川中流域、段丘上の埋没古墳と題してまとめてみる。

（中辻　亘）

4－1.弥生土器の所属時期とその特色

１．はじめに

今回の調査で出土した弥生土器の状況は（Ⅲ，３－1）に述べた通りである。中河内の弥生時代中期（第Ⅲ～第Ⅳ様式）の土器編年は生駒西麓産の胎土をもつ土器（以下、生駒西麓産土器）の変化を基本に、平野部の土器と組み合わることによってそれらから画期を見いだし、かなり精緻な編年ができつつある(註1)。喜志遺跡の所在する石川流域の弥生土器は従来から生駒西麓産土器と胎土は異なりながら形態的に類似することが指摘されていることから、前述の編年に対応させて所属時期を推測する事が可能である。

以下、喜志遺跡出土土器の中から生駒西麓産土器を抽出してその特徴を概観し、同時にそれ以外の土器、すなわち、在地の土器と生駒西麓産以外の搬入土器（以下、非生駒西麓産土器と呼称する）の状況を整理することによって、喜志遺跡出土土器（ＫＳ94）出土土器の所属時期とその特徴を確認しておきたい。

２．喜志遺跡（ＫＳ94地区）出土弥生土器の特徴

広口壷はＡタイプとＢタイプがあるがＡタイプが圧倒的におおい。

広口壷Ａは長頸のタイプが全く認められず、頸部の短いタイプで占められている。口縁部はほとんどが下外方に拡張するものである。喜志遺跡出土の生駒西麓産土器はすべてこのタイプで、口縁部は断面三角形を呈するもの、厚みをもたずに垂下するものがある。口縁部端面は簾状紋が施されたものが多いが、簾状紋と刻み目、波状紋と刻み目を組み合わせたりもののほか、少量ではあるが無紋のものも散見する。非生駒西麓産土器も同様に口縁部が下外方に拡張するものが多いが、上下に拡張するもの、ほとんど拡張しないものがある。下外方に拡張するものは簾状紋だけもしくは、簾状紋と刺突紋の組み合わせたものが多いが、波状紋、簾状紋と刻み目、波状紋と刻み目、刻み目

だけが施されたものの他、口縁部端面に簾状紋と刺突紋、口縁部上面に円形浮紋の施されたものがある。また、少量であるが無紋のものも散見する。紋様構成は生駒西麓産土器と非生駒西麓産土器の間にあまり大きな差異がないが、生駒西麓産土器に多く認められる刺突紋だけを施すものが生駒西麓産土器の中に認められなかった。口縁部が上下に拡張するものは外面に凹線紋だけ、または外面に凹線紋、上面に列点紋を施すもの、その組み合わせにさらに凹線紋の上から縦線紋を付加するもの、外面に簾状紋だけ、もしくは簾状紋と刻み目、簾状紋と円形浮紋の組み合わせに上面に列点紋が加わるものの他、無紋のものもある。口縁部がほとんど拡張しないが面をもつものは量的に少ないが、斜格子紋が施されているものと無紋のものがある。

広口壷Bは生駒西麓産土器と非生駒西麓産土器には1点を除いて、基本的には製作技術に相違はない。すなわち、広口壷Aの上方に粘土を貼りたすか、広口壷Aほどしっかりした口縁部ではないが、それに近い状態まで作り上げた口縁部に粘土帯を貼りたす方法で作り上げられている。紋様は生駒西麓産土器は列点紋を2段に施すものが最も多く、その他、列点紋と簾状紋、簾状紋を2段、波状紋を2段、扇形紋を2段に施すものがある。非生駒西麓産土器は縦位置に扇形紋に近い列点紋を7段に配置したものを巡らせるものの他、簾状紋、波状紋を施すものがある。この他、その他の土器の中には口縁部の製作技術の異なるものが1点出土している。すなわち前述の様な擬口縁に粘土を貼り足すのではなく、口縁部を折り曲げ、上方にのばすことによって受け口状の口縁部を作り出す方法である。この方法によると、口縁端部は上方にのみ拡張し、下方に突出することはない。なお、この土器は口縁部下端に刻み目を施しているだけである。

生駒西麓産土器の広口壷の紋様の中で時期的な変化を顕著にあらわす簾状紋を取りあげてみると、頸部や広口壷Bなど広い範囲に施紋する場合、工具の幅が3.0cm前後で、施紋のストロークの短いものが多くなる。

石川流域の非生駒西麓産土器も簾状紋が多く用いられる地域であることはすでに指摘されているが(註2)、しかし、生駒西麓産土器と異なる点も注目しなければいけない。つまり、その施紋原体の幅の違いである。確かに、生駒西麓産土器の施紋原体幅が広がる時期に非生駒西麓産に施された簾状紋の中にも幅広になったものが認められるが、幅の広い工具で描いたのではなく、2つの工具を合わせて1つの紋様帯を構成したかのように紋様帯内に断絶を感じさせる線がはいったり、その間線の上下で縦線のわずかなズレが認められる場合がある。さらにこの幅広の簾状紋と同時に依然と幅の狭い(1.5cm前後)簾状紋が盛用されていることから、間に合わせの施紋工具で生駒西麓産土器を模倣していると解釈しておきたい。この他、生駒西麓産土器では衰退しはじめている櫛描直線紋が非生駒西麓産土器では依然と施されていること、また、量は少ないが凹線紋の施された土器も認められる。

今回の調査で出土した生駒西麓産土器には確認できなかったが、無紋化現象の指標ともされている口縁部に刺突紋だけを施した広口壷Aが非生駒西麓産土器の中に認められた。

広口壷以外の器種では無頸壷や鉢にみられる段状口縁の盛行、それらの器種に多用される列点紋に似た斜線紋、そして棒状浮紋の出現。これらは生駒西麓産土器と非生駒西麓産土器に等しくみとめられる状況である。非生駒西麓産土器だけにみられるものとしては器台と蛸壷がある。また、高杯は生駒西麓産のものが少ない。

3．小結

以上のことから、今回の調査で出土した土器の所属時期は広口壷Bの減少と生駒西麓産土器に認められる施紋幅の広い簾状紋の盛行、および棒状浮紋の出現、さらに無紋化現象がまだ定着していないことから、濱田氏の編年(註3)の第Ⅲ様式新段階から第Ⅳ様式古段階に比定できると考えておきたい。

今回は胎土分析を行わず、肉眼による分類であったが、今後、科学的分析を行うことによって生駒西麓産と類似の非生駒西麓産の確実な弁別とともに、非生駒西麓産から在地産の抽出を行い、今回提示した生駒西麓産と非生駒西麓産の間に認められる類似点と差異の検証とともに、在地産の特色を明らかにしていきたい。

（粟田　薫）

(註)

1．以下の文献によって生駒西麓産土器の特徴をとらえた。
濱田延充(1993)「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」『大阪府弥生文化博物館研究報告第2集』，弥生文化博物館.111～126頁.
国分政子(1992)「河内地方弥生中期土器の検討—第Ⅲ様式広口壷形土器の地域性と変遷」，『長岡京古文化論叢Ⅱ』，353～364頁
三好孝一(1993)「河内における弥生中期土器様相—亀井遺跡を中心にして—」，『第11回　近畿地方埋蔵文化財研究会資料』，(財)大阪文化財センター.

2．佐原　真(1980)「河内の土器」，『東山遺跡』，大阪府教育委員会，65～74頁.
井藤暁子(1987)「畿内の櫛描紋土器」，『弥生文化の研究』，4，雄山閣，83～88頁.

3．濱田延充　前掲書.

4－2．整地層出土のサヌカイト製剥片の属性分析

1．はじめに

喜志遺跡(ＫＳ94地区)の石器資料は溝１、溝２、旧水田、床土の他、整地層から検出されているが、その中でもまとまって出土した調査区南東端の整地層のものに限って分析する(註1)。

洗浄フルイかけを行って得られた石器を除くサヌカイト製の石片は総数97,245点を数える。まず、単純最大長(第一長)30.0mmを境に２つに分類した。それらの内訳は30.1mm以上が6,331点、30.0mm以下のものが90,914点で、後者の小型品はすべて剥片である。次に30.0mm以下の剥片を10mmごとの階級に分類した。それらの大きさの内訳は10mm以下が39,432点(40.5％)、10.1mm以上20.0mm以下が43,284点(44.5％)、20.1mm以上30.0mm以下が8,198点(8.5％)である。なお、30.1mm以上のもの6,331点の内訳は細部調整剥片208点、剥片5,953点、石核170点である。

出土点数の多いことと、さらに10.0mm以下の微細剥片が40.5％を占めていることは、石器製作が確実に行われていたことを裏付けるが、出土地が整地層という極めて不利な検出状況であるため、その場所での製作状況を分析することはできない。しかし、共伴する土器の土器型式が第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式古段階と、きわめて限られた時期に限定できることから、製作技術に関するデータを提示することは意味があると思われる。そこで対象を30.1mm以上のものに限定して分析してみる。なお、30.1mm以上としたのは、石器の素材として用いられる剥片の可能性のあるものの剥離

最大長／最大幅	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59	60~64	65~69	70~74	75~79	80~84	85~89	90~94	95~99	100~104	105~109	合　計
5~9					4	3															7
10~14				5	19	11			2												37
15~19			2	26	47	18	8	4	1	1	1										108
20~24			19	88	85	49	19	6	4	2	2										274
25~29	4	26	90	148	128	56	25	18	5	6	2		2								510
30~34	21	96	145	137	106	52	31	19	9	10	5	1	1	2	1		1				637
35~39	5	39	67	104	68	36	32	22	16	7	2	5	1			1					405
40~44	4	10	35	52	46	32	25	23	16	4	6	4	3		1				1		262
45~49	1	4	17	15	31	25	27	15	9	4	5	2		1	1						157
50~54			3	15	14	18	8	10	8	10	6	5	1		2		1				101
55~59			1	8	11	15	15	11	5	4	2	3	1		2				1		79
60~64			2	1	7	7	3	6	1	3	1	1	1	2	1	2	1	1			40
65~69			1		4	4	4	5	3	1	5	2	1		2						32
70~74				1	3	4	2	1	4	2	1			2	2						22
75~79				1						2	1	1									5
80~84								2	1					1						1	5
85~89					1		1	1				1	1	2			1				8
90~94								1					1			1					3
95~99							1		1										2		4
100~104				1	1													1			3
105~109					1								1								2
140~144									1												1
合　計	35	175	382	602	576	330	201	144	86	56	39	25	14	10	12	4	4	2	4	1	2702

表６　最大長と最大幅の相関(実数)

状況を分析することに主眼をおいたからである。しかし、実際には単純最大長30.1mm以上と限定しただけで、その幅を問わなかったため抽出した剥片の中には石器の素材として不十分なものも含まれている。また、それぞれの大きさでのデータを明確にするため、それらの中でも完形品か、ほぼ完形品に資料を限定した。ただし、細部調整剥片は単純最大長30.1mm以上のものすべてを対象に含めた。

２．属性分析

前述の資料操作を行った剥片2,706点と細部調整剥片208点の合計2,914点分の分析結果をまとめる。なお、分析内容によって資料総数が異なるのは、前述の資料の中からそれぞれの分析に耐えるものだけさらに抽出したためである。

剥片の大きさ

総数2,702点の剥片の最大長と最大幅を５mmごとの階級に分け、その相関関係をあらわしたのが表６である。それによると最大長が20mm～34mm、最大幅が25mm～39mmの大きさの剥片が多く出土している。そしてそれら分布は最大長25mm～34mm、最大幅25mm～34mmのほぼ正方形状の剥片を中心にして、長さが長くなればなるほど縦に長い剥片が取れ、長さが短くなればなるほど横に長い横形剥片になっている。そのことは最大長が19mm以下の剥片210点すべてが横形剥片であること、また、長さが80mmを越える大きな剥片27点の内25点が形態分類的にいう「剥片」で占められていることからも見て取れる。

表７は前述の剥片の長幅示数(長／幅)と厚幅示数(厚／幅)の相関関係を示したものである。それによると横長で厚みの薄いものが圧倒的に多いことが分かる。また、厚さが厚くなればなるほど、縦に長い剥片が取れていることが分かる。長幅示数は0.6～1.09に、厚幅示数は0.1～0.29に分布の集中がみられる。また、長幅示数は0.6～1.09の集中範囲からバランスよく分布の広がりが読み取れるのに対して、厚幅示数は0.1～0.3のものが全体の約90％を占め、0.4以上になると剥片の数は激減する。このことから、ほぼ均質な厚みの剥片を取ることを目的にして剥離作業を行っていたと解釈で

長幅示数＼厚幅示数	0.1未満	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	2.0	2.1	合計
0.3		4	8	1	1										14
0.4		31	12	6	2										51
0.5	2	92	61	16		1	1				1				174
0.6	3	133	89	20			1								246
0.7	1	134	144	32	4	3									318
0.8	3	110	149	36	9	1		2							310
0.9	2	105	132	47	17	1			1						305
1.0		72	113	43	10	1					1				240
1.1	4	64	86	41	9	9							1		214
1.2	1	46	61	47	11	1								1	168
1.3	4	22	72	36	17	3			1						155
1.4	1	21	41	25	11	4	1	1	1						106
1.5	1	14	29	21	6	6	1		1						79
1.6	1	8	23	22	11	3	1			2					71
1.7		4	16	11	5	6	1				1				44
1.8		6	10	18	8	2	1	1							46
1.9		2	8	9	3	4				1					27
2.0		1	9	7	4	3	1			1					26
2.1		1	8	6	5	1									21
2.2		1	1	3	4	2	2								13
2.3				5	2	2									9
2.4			3	4	4	2									13
2.5		1		1	3	1									6
2.6			2	3	1	2	1	1							10
2.7			1	3	1	1	1								7
2.8				1		1	2								4
2.9			1		2	1					1				5
3.0				1			1								2
3.1				1	1				1			1			4
3.2			1							1					2
3.3					1										1
3.4							1								1
3.5					1		1		1						3
4.0				2											2
4.3					1										1
4.6						1				1					2
4.9								1							1
6.1									1						1
合　計	23	872	1080	468	154	62	17	6	7	6	4	1	1	1	2702

表７　長幅示数と厚幅示数の相関(実数)

きる。

形態

総数2,839点の剥片(以下、細部調整剥片も含む)を形態別に分類した。それらの内訳は横形剥片1,676点(59.0%)、石刃状剥片109点(4.0%)、剥片1,054点(37.0%)である。次にそれぞれの形態を平面形、中央断面形、縦断面形の属性別に以下のカテゴリーで分類した。

平面形－円形・部分円形、三角形、四角形、多角形、楕円形.

中央断面形－レンズ形、弓形、四角形、多角形、等脚台形、二等辺三角形、不等辺、部分円形。

縦断面形－三角形、四角形、多角形、直角三角形. それぞれのカテゴリーごとの点数は表８、９、10で、それらの数比をグラフに示したのが図35､36､37である。

形態分類＼平面形	円形・部分円形	三角形	四角形	多角形	楕円形	合計
横形剥片	31	130	570	887	58	1676
剥片	16	75	369	557	37	1054
石刃状剥片	2	11	52	39	5	109
合計	49	216	991	1483	100	2839

表８　平面形と形態分類(実数)

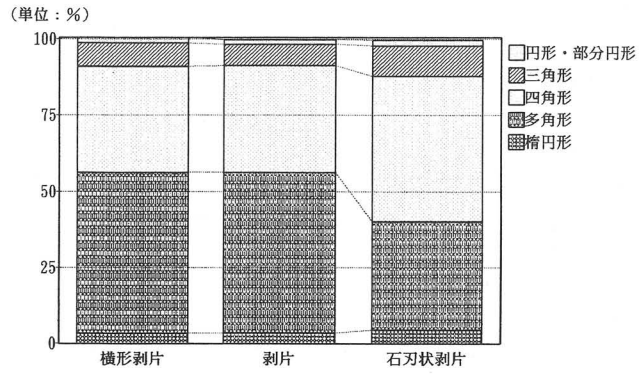


図35　平面形と形態分類(百分比)

まず、平面形をみてみる(表８. 図35)。それぞれの剥片の形態に関係なく平面形の85%前後を多角形と四角形で占める。多角形と四角形の間にある差異は角が４つか５つ以上かというだけで剥片剥離を行う中で大きな意識的な差異はない。そのことを考慮にいれると自由な剥片剥離の生産物であることが指摘できる。円形・部分円形としたのは先行剥離面がほとんど原面でおおわれているもので、礫面から初期の段階にとられたものと考えられる。

中央断面形(表９. 図36)も剥片の形態に関係なく、不等辺三角形と四角形で70～80%近くを占める。この断面形態は先行剥離面に１～２本の稜が通ると一般的に考えられるが、平面形にこの稜が反映されていないことをみると、平面形が示して

いたように自由な剥片剥離の生産物であることをより確実に裏付けている。なお石刃状剥片の中央断面形に二等辺三角形が20%認められ、また、平面形に三角形を呈するものが10%を占めているのは、剥片の長さと背稜の関係を示すものとして従来から指摘されているとおりである。

形態分類＼中央断面形	レンズ形	弓　形	四角形	多角形	等脚台形	二等辺三角形	不等辺三角形	部分円形	合　計
横形剥片	215	20	516	125	12	56	655	76	1675
剥　片	74	15	320	38	2	61	500	40	1050
石刃状剥片	4	0	27	2	1	22	50	3	109
合　計	293	35	863	165	15	139	1205	119	2834

表9　中央断面形と形態分類(実数)

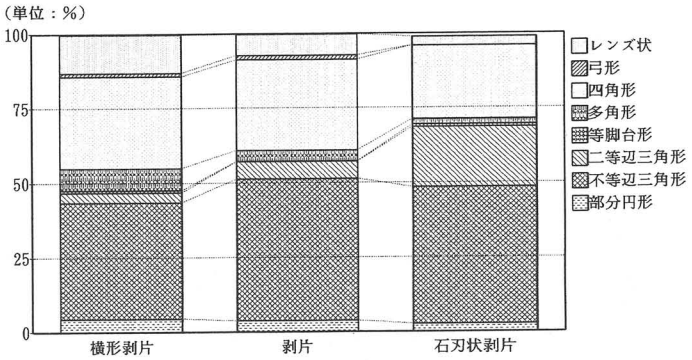


図36　中央断面形と形態分類(百分比)

縦断面形(表10．図37)の約半数が四角形を呈することは、剥片の約半数が先端部がいわゆるフェザーを呈するものでないことを示している。このことは通常、板状の剥片の存在を推測させるが、しかし分析対象の剥片の中に大きな板状の剥片がそれほど多く認められないことから、剥離時の事故として折れ面、段、ヒンジ・フラクチュア、ウットラ・パセが頻繁に生じた可能性を考えなければいけない。

形態分類＼縦断面形	三角形	四角形	多角形	直角三角形	合　計
横形剥片	585	843	205	43	1676
剥　片	333	582	119	20	1054
石刃状剥片	31	52	20	6	109
合　計	949	1477	344	69	2839

表10　縦断面形と形態分類(実数)

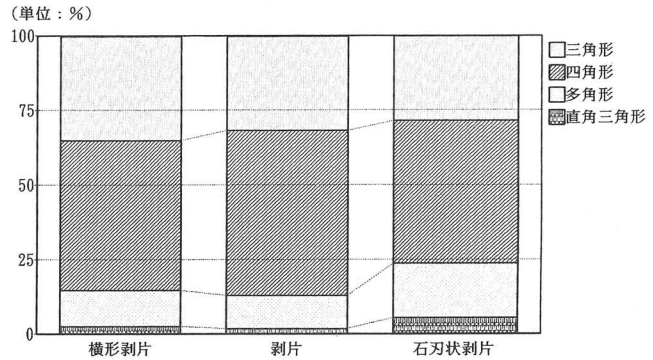


図37　縦断面形と形態分類(百分比)

打撃角

打撃角は5°単位で計測した。総数2,225点の剥片の形態分類別打撃角の点数は表11で、それらの度数分布を図38に示した。それによると打撃角と剥片形態との間にそれほど密接なつながりはなく、どの形態の剥片でも105度から120度あたりに大きな山がみられ、その中でも110度に大きな集中がみられる。また90度に小さな集中がみられることも剥片形態に関わりなく認められる。これは求める形が打撃角に支配されているのではなく、サヌカイトという石質に左右されている結果と判断することができる。あるいは従来から「打撃角」と呼ばれてきた打面と主剥離面がなす角度は、その剥片がとれるときに割れていった石の割れに支配された結果ということになろうか。

次に打撃角と打面形態の相関関係をみてみる。打面形態は原面上打面、剥離面打面、調整打面、口唇状打面の4つのカテゴリーで分類した。総数2,242点分の打面形態別打撃角の相関関係を集計したものが表12で、それらの度数分布をグラフにしたものが図39である。それによると口唇状打面を除く、他の打面形態をもつ剥片には90度にまず小さな山がみられる。また、原面上打面をもつも

形態分類 / 打撃角(度)	横形剥片	剥片	石刃状剥片	合計
50~54	2	0	0	2
55~59	4	0	0	4
60~64	3	4	0	7
65~69	8	10	0	18
70~74	8	9	1	18
75~79	9	6	1	16
80~84	9	6	0	15
85~89	6	3	1	10
90~94	79	51	9	139
95~99	46	15	1	62
100~104	107	54	10	171
105~109	165	110	14	289
110~114	223	144	13	380
115~119	186	116	7	309
120~124	208	109	9	326
125~129	130	76	2	208
130~134	103	41	3	147
135~139	33	27	1	61
140~144	22	4	0	26
145~149	3	4	0	7
150~154	6	2	0	8
155~159	1	1	0	2
合計	1361	792	72	2225

表11　打撃角と形態分類

図38　打撃角と形態分類

打面形態 / 打撃角(度)	原面上	口唇状	調整	剥離面	合計
50~54	2	0	0	0	2
55~59	3	0	0	1	4
60~64	4	0	1	2	7
65~69	14	0	1	3	18
70~74	7	0	1	10	18
75~79	11	0	2	1	14
80~84	10	0	0	5	15
85~89	7	0	0	3	10
90~94	91	0	11	37	139
95~99	46	0	5	11	62
100~104	92	2	28	50	172
105~109	165	0	52	73	290
110~114	163	1	89	131	384
115~119	106	6	61	144	317
120~124	93	8	81	145	327
125~129	50	11	61	91	213
130~134	28	7	30	82	147
135~139	16	3	7	34	60
140~144	4	5	5	12	26
145~149	0	1	4	2	7
150~154	4	0	0	4	8
155~159	2	0	0	0	2
合計	918	44	439	841	2242

表12　打撃角と打面形態

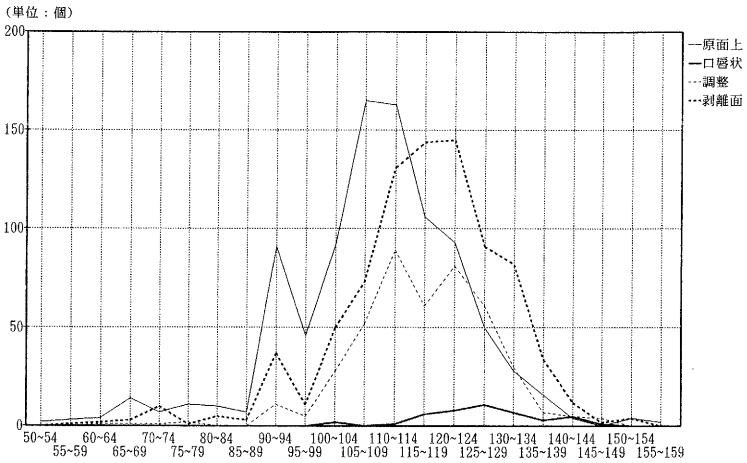


図39　打撃角と打面形態

のは100度から120度に大きな山が認められ、前述の剥片の打撃角の一般的な分布の山と一致する。それに比べて剥離面打面のものには110度から125度に、調整打面をもつものには105度から115度と115度から125度に2つの山がみられ、原面上打面のものの山より大きい打撃角に集中していることがわかる。また口唇上打面を呈する剥片は120度から130度というさらに大きい打撃角に分布の山をもつ。これらのことは表面形態が不安定な原面を打面とするときの打撃角は変異幅が大きいといえるが、打面調整のみられる剥離面打面、調整打面のものがより大きい打撃角、そしてさらに意図的な剥離と考えさせる口唇状打面をもつ剥片が最も大きな打撃角を示すことから、石を割り取る時の意識が打撃角に反映しているとみることも可能である。しかし、一方、安山岩の打撃角は110度から130度に分布の山があるという指摘がなされていることから考えると、製作者の意識だけでなくサヌカイトの石割れの性質を反映していることも考慮にいれ、剥片の大きさと平面形態なども含めて判断しなければならないだろう。

次に打撃角と打面の平面形の相関関係をみてみる。打面の平面形を三角形、四角形、部分円形の

打撃角(度) ＼ 打面平面形	三角形	四角形	部分円形	合計
50~ 54	0	1	1	2
55~ 59	0	4	0	4
60~ 64	1	4	2	7
65~ 69	5	11	2	18
70~ 74	0	12	6	18
75~ 79	6	8	2	16
80~ 84	4	11	1	16
85~ 89	4	5	1	10
90~ 94	29	94	18	141
95~ 99	15	39	7	61
100~104	45	125	3	173
105~109	73	205	12	290
110~114	101	268	16	385
115~119	62	243	11	316
120~124	81	234	13	328
125~129	57	144	12	213
130~134	44	98	7	149
135~139	10	44	7	61
140~144	5	20	1	26
145~149	1	6	0	7
150~154	2	5	1	8
155~159	0	1	1	2
合計	545	1582	124	2251

表13　打撃角と打面平面形

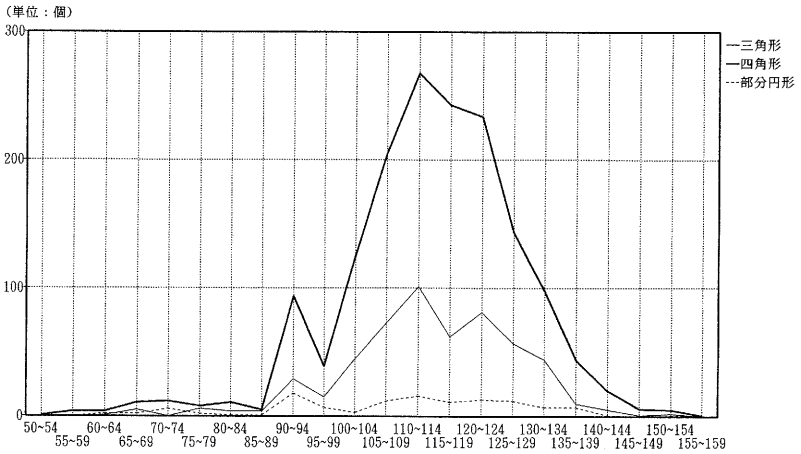


図40　打撃角と打面平面形

3つのカテゴリーに分類し、総数2,251点の打面平面形別打撃角の相関関係を集計したものが表13で、それらの度数分布をグラフにしたものが図40である。どの打面平面形も打撃角の山は100度から125度にあり、打撃角と打面平面形の間に特定の結びつきはない。

次に打撃角と打面の縁部形の相関関係をみてみる。打面縁部形は凹形、水平形、凸形の3つのカテゴリーに分類し、総数2,255点の打面縁部形別打撃角の相関関係を集計したものが表14で、それらの度数分布をグラフにしたものが図41である。どの打面縁部形も打撃角の山は100度から125度にあり、打撃角と打面縁部形の間に特定の結びつきはない。ただし、凸形の分布状況が先にみた調整打面と打撃角の相関関係でみた分布状況と類似する。調整打面が凸形をなす打面形態になることが影響を与えている可能性がある。

次に打撃角と打面の傾きの相関関係をみてみる。打面の傾きは水平、表側に傾斜、裏側に傾斜の3つのカテゴリーに分類し、総数2,255点の打面傾き別打撃角の相関関係を集計したものが表15で、それらの度数分布をグラフにしたものが図42である。約85%の打面は裏側に傾斜し、打撃角も100度から125度に分布の山をもち、110度で最高に集中する。打面が水平形のものは分布の山が90度に

打撃角(度) ＼ 打面縁部形	凹形	水平形	凸形	合計
50~ 54	0	2	0	2
55~ 59	1	3	0	4
60~ 64	1	4	2	7
65~ 69	4	9	5	18
70~ 74	2	11	5	18
75~ 79	3	11	2	16
80~ 84	0	15	1	16
85~ 89	2	6	2	10
90~ 94	6	114	21	141
95~ 99	1	44	17	62
100~104	17	115	41	173
105~109	40	186	66	292
110~114	43	234	108	385
115~119	53	194	70	317
120~124	52	194	82	328
125~129	40	117	56	213
130~134	31	82	36	149
135~139	19	32	10	61
140~144	3	16	7	26
145~149	1	5	1	7
150~154	3	3	2	8
155~159	1	1	0	2
合計	323	1398	534	2255

表14　打撃角と打面縁部形

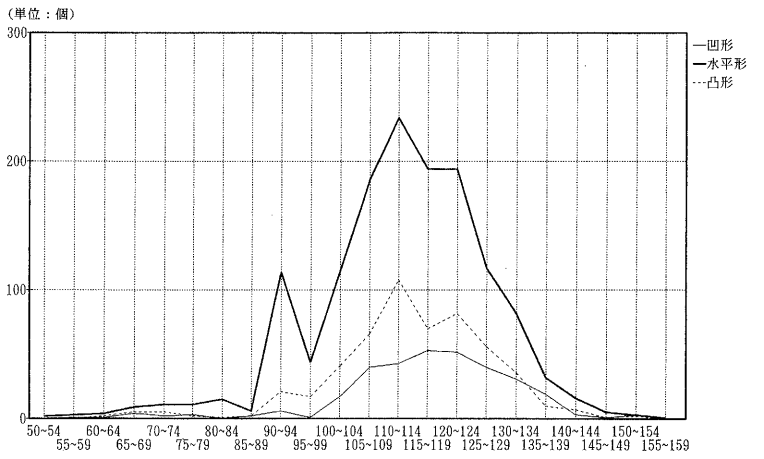


図41　打撃角と打面縁部形

打撃角(度) ＼ 打面の傾き	水 平	表 側	裏 側	合 計
50~ 54	0	2	0	2
55~ 59	1	3	0	4
60~ 64	1	5	1	7
65~ 69	0	16	2	18
70~ 74	0	18	0	18
75~ 79	0	16	0	16
80~ 84	2	13	1	16
85~ 89	1	8	1	10
90~ 94	132	2	7	141
95~ 99	29	1	32	62
100~104	23	1	149	173
105~109	25	2	265	292
110~114	24	3	358	385
115~119	14	2	301	317
120~124	10	1	317	328
125~129	3	0	210	213
130~134	1	0	148	149
135~139	0	0	61	61
140~144	0	0	26	26
145~149	0	0	7	7
150~154	1	0	7	8
155~159	0	0	2	2
合 計	267	93	1895	2255

表15　打撃角と打面の傾き

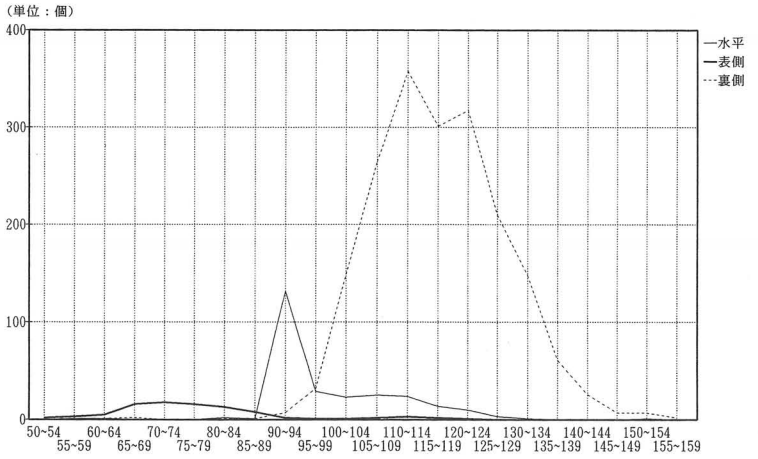


図42　打撃角と打面の傾き

集中する。打面が表側に傾斜するものは分布の山が65度から75度にある。このことは打撃角が打面と主剥離面の成す角度を計測していることからすれば自明のことであるが、裏側に傾斜するものが85%を占めていることから、この傾きがサヌカイトを割り取りやすい、あるいはサヌカイトが一般に割れていくときの角度であることを示しているとも考えられる。

以上の結果、打撃角が剥片に特別な結びつきをみせたのは打面形態と打面の傾きで、打面の平面形も縁部形も打撃角に影響を及ぼしていないことがうかがわれた。すなわち、剥離に際して打面形態を整えることは目的的な剥片剥離を行う上で、重要な要素になるかもしれないが、打面を裏側に傾斜させた角度でなければ剥片剥離が行えない、つまり110度という打撃角がサヌカイトの最も割り取りやすい角度を示しているといえる。

最大長(mm) ＼ 打面形態	ハジケ	原面上	口唇状	線 状	調 整	点 状	剥離面	合 計
10~ 14	4	8	1	1	9	0	12	35
15~ 19	17	37	3	14	45	6	56	178
20~ 24	35	80	6	25	78	14	142	380
25~ 29	70	148	12	64	127	16	175	616
30~ 34	70	168	14	49	87	21	186	595
35~ 39	36	135	2	32	37	19	84	345
40~ 44	18	89	3	14	21	4	69	218
45~ 49	6	87	2	8	14	3	41	161
50~ 54	4	46	0	5	11	1	34	101
55~ 59	3	46	0	1	5	2	12	69
60~ 64	2	24	0	1	1	3	11	42
65~ 69	1	17	1	1	1	1	8	30
70~ 74	3	12	0	0	0	0	2	17
75~ 79	1	4	0	0	2	0	5	12
80~ 84	0	9	0	0	1	0	2	12
85~ 89	0	5	0	0	0	0	0	5
90~ 94	0	1	0	0	0	0	2	3
95~ 99	0	2	0	0	0	0	0	2
100~104	0	3	0	0	0	0	1	4
105~109	0	1	0	0	0	0	0	1
合 計	270	922	44	215	439	90	842	2822

表16　打面形態と最大長(実数)

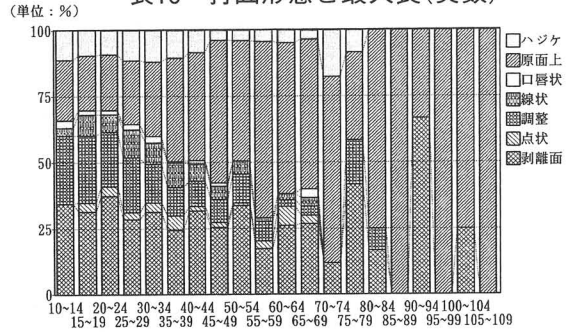


図43　打面形態と最大長(百分比)

打面

打面形態が判断できるものをハジケ、原面上打面、口唇状打面、線状打面、調整打面、点状打面、剥離面打面の７つのカテゴリーに分類した。総数2,832点の打面形態をみてみると原面上打面が最も多く、33.1%を占める。次に剥離面打面が29.8%、調整打面が15.6%と続く。口唇状打面は意図的な剥離行為に対応する打面なので除外するとして、残りのハジケ、点状打面、線状打面はあわせて20%程度である。これらは剥片が石核に用意された打面をもっていなかったものであるが、剥離行為の意図に結びつく結果かもしれない。原面上打面が多い

ことは、原礫の皮表面を剥いだ時に生じる剥片が多いことを語っていよう。また先に除外した口唇状打面は両面調整の石器の細部調整時に生み出されることが多く、いわゆるポイント・フレイクと呼ばれる剥片の打面に多くみられる形態である。それらが1.5%であることもこの資料の性格を示している。

そこで打面形態と最大長の相関関係をみてみる。最大長を５mmごとの階級に分類し、打面形態をハジケ、原面上打面、口唇状打面、線状打面、調整打面、点状打面、剥離面打面もの７つのカテゴリーに分類して、総数2,822点の最大長と打面形態の相関関係を集計したものが表16で、それらの数比をグラフにしたものが図43である。それによると最大長20mm～39.9mmの剥片が全体の69%を占めるが、それらの剥片についてはどの打面形態も同じような比率を示し、特定の打面との結びつきはない。しかし、打面形態を主体に剥片の最大長をみた場合、点状打面、線状打面、調整打面、ハジケに分類される打面形態の剥片の80%は39.9mm以下である。それに対して50mmを越える剥片の比率が20%を越えるのは原面上打面の剥片だけである。次に10%を越えるものに剥離面打面の剥片があげられるが、他はほとんどが５%前後である。このことは大きさのある原礫などから割り取りを始めれば、大きな剥片が取れるのは自明のことで、打面調整をおこなえばおこなうほど石核は小さくなり、割り取れる剥片も小さくなることと、ハジケのような事故的な剥離はいうまでもなく、石核の端をかすめるようにしてたたいて薄い剥片を取ろうとした結果できる点状打面や線状打面のような打面形態には長さの長い剥片が取れないことを考えさせてくれる。なお、点状打面が生じることに間接打撃の可能性をみるのは、分析対象にした剥片の大きさからみて無理があると思われる。

打面形態＼形態分類	横形剥片	剥片	石刃状剥片	合計
ハジケ	134	117	17	268
原面上	490	371	41	902
口唇状	30	13	1	44
線状	118	88	9	215
調整	323	109	6	438
点状	44	36	8	88
剥離面	513	294	24	831
合計	1652	1028	106	2786

表17　打面形態別の剥片の形態分類(実数)

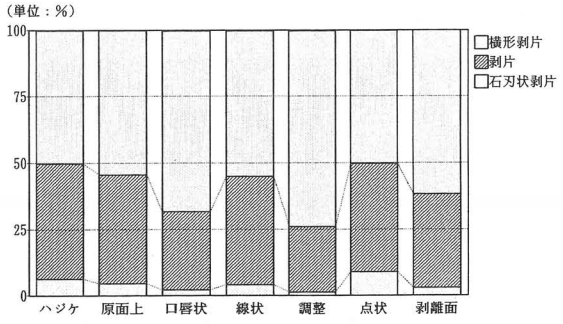


図44　打面形態別の剥片の形態分類(百分比)

次に打面形態と剥片の形態分類の相関関係をみてみる。形態分類は横形剥片、剥片、石刃状剥片の３つのカテゴリーに、打面形態はハジケ、原面上打面、口唇状打面、線状打面、調整打面、点状打面、剥離面打面の７つのカテゴリーで分類した。総数2,786点の形態分類と打面形態の相関関係を集計したものが表17で、それらの数比をグラフにしたものが図44である。どの打面形態をとっても横形剥片の比率が高いが、細かくみると２つの傾向があらわれている。すなわち、横形剥片の比率の基準線を60%においた場合、点状打面、線状打面、原面上打面、ハジケのものは下に、剥離面打面、調整打面、口唇状打面のものは上になるという傾向である。また、60%を越える後者の打面形態のものもさらに細かくみてみると、横形剥片の比率が最も多いものが調整打面で、次に口唇状打面、そして剥離面打面をもつものが続く。以上のことから判断すると、サヌカイトの石質から横形剥片が取れやすいことはすでに指摘されているし、また、この分析結果にもあらわれているが、製作者の意識が最も反映していて、かつ素材剥片として使用できる厚さの薄い大きな剥片が取れる可能性のある打面形態であると考えられる調整打面および剥離面打面に、横形剥片がより多くみられるといえよう。製作者の意識の中にも石器の素材に使える剥片としての横形剥片を目的として剥

離がなされていたことは否定できないであろう。

次に打面形態と打点位置の相関関係をみてみる。打点位置は右、右端、左、左端、中央の５つのカテゴリーに、打面形態は原面上打面、口唇状打面、調整打面、剥離面打面の４つのカテゴリーで分類した。総数2,242点の打点位置と打面形態の相関関係を集計したものが表18で、それらの数比をグラフにしたのが図45である。それによると打面形態と打点位置の間に特定の結びつきはなく、それぞれの比率で似かよった傾向を示している。また、打点位置に打撃者の意識が反映していると考えられるのは右端と左端にくるものが考えられるが、それらの比率を合計しても12.0％しかない。また、これらの点数から垂直割れのものを差し引くとその実数はさらに少なくなる。これらのことから製作者の意識としては中央で打撃を行おうとしているが、実際には左右へのずれが認められると解釈するのがよいであろう。

打面形態＼打点位置	右	右端	左	左端	中央	合計
原面上	203	54	195	64	404	920
口唇状	10	0	5	2	27	44
調整	105	12	107	11	203	438
剥離面	206	60	193	66	315	840
合計	524	126	500	143	949	2242

表18　打面形態別の打点位置の分布(実数)

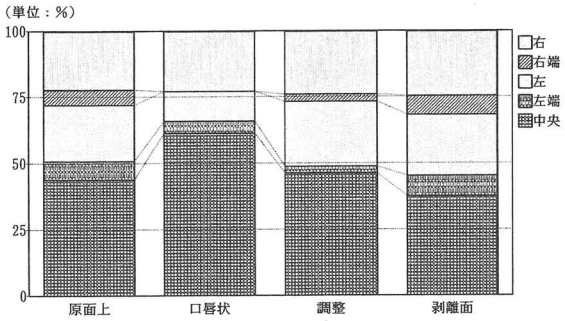


図45　打面形態別の打点位置の分布(百分比)

打面の傾き

打面の傾きと剥片の形態との相関関係をみてみる。形態分類は横形剥片、剥片、石刃状剥片の３つのカテゴリーに、打面の傾きは水平、表側、裏側の３つのカテゴリーで分類した。総数2,229点の剥片形態と打面の傾きの相関関係を集計したものが表19で、それらの数比をグラフにしたものが図46である。それによるとどの剥片形態であっても最も多いの打面が裏側に傾くもので、次に水平なもの、そして表側に傾くものの順になるが、打面の傾きを主体にみた場合、横形剥片では裏側に傾くものと水平なものに、剥片では表側に傾くものとの結びつきが強く、石刃状剥片は裏側に傾くものとの結びつきが少ないという傾向がでている。このことは打面の傾きが表側に傾くほど、縦に長い剥片がとれやすいようにも考えられるが、全体の個数との比率からみると必ずしもそうとはなっていないので縦に長い剥片類の分析例の増加を待って判断しなければならない。

打面の傾き＼形態分類	横形剥片	剥片	石刃状剥片	合計
水平	161	91	14	266
表側	48	39	5	92
裏側	1154	664	53	1871
合計	1363	794	72	2229

表19　打面の傾きと形態分類(実数)

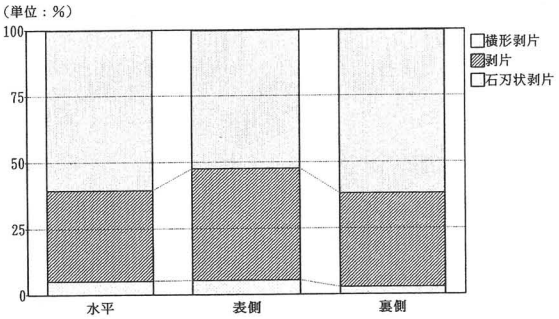


図46　打面の傾きと形態分類(百分比)

打面の傾きと平面形の相関関係をみてみる。平面形はすでにみたように円形・部分円形、三角形、四角形、多角形、楕円形の５つのカテゴリーで、打面の傾きは前述と同じく３つのカテゴリーで分類した。総数2,259点の平面形と打面の傾きの相関関係を集計したものが表20で、それらの数比をグラフにしたものが図47である。それによるとどの平面形態であっても、最も

多いのが、打面が裏側に傾くもの、次に水平なもの、そして表側に傾くものの順をとる。しかし、打面の傾きを主体にみた場合、最も多く出土している多角形のものが裏側に傾くものと水平なものに、次に多い四角形のものでは表側に傾くものとの結びつきが強く、円形・部分円形と楕円形のものは表側に傾くものと、三角形のものは裏側に傾くものと結びつく傾向が認められる。これらの中で、三角形の平面形態に注目しながら、すでにみてきた平面形と剥片の形態分類の相関関係と、先にみた打面の傾きと剥片の形態分類の相関関係の結果を合わせみると、食い違う結果が生じている。すなわち、平面形と剥片形態の相関関係では三角形を呈するものと石刃状剥片、打面の傾きと剥片形態との相関関係では縦に長い剥片と表側に傾く打面という結びつきを見せていたのに、ここでは三角形をとるものと裏側に打面が傾くものとの結びつきを見せている。これらのことを総合して判断すると、打面の傾きが、剥片の形態や、平面形に影響することはなく、打撃角のところでみたように、単にサヌカイトの石割れの性質がその傾きを求めていると解釈すべきかも知れない。

平面形 / 打面の傾き	円形・部分円形	三角形	四角形	多角形	楕円形	合計
水平	5	20	93	143	8	269
表側	6	3	40	37	7	93
裏側	31	147	666	991	62	1897
合計	42	170	799	1171	77	2259

表20　打面の傾きと平面形(実数)

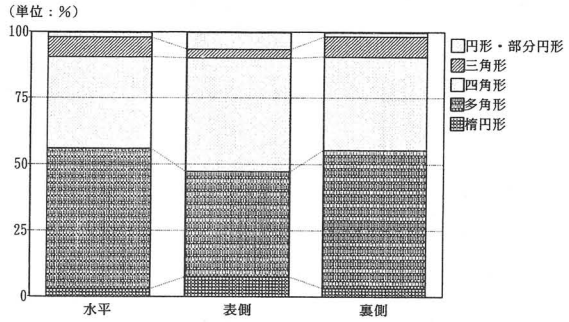


図47　打面の傾きと平面形(百分比)

バルブの発達

バルブの発達は全体的にみて発達をみないものが多い。発達度を極大発達、発達、やや発達発達なし、の４つのカテゴリーに分類すると極大発達と発達を合わせても全体の20％しかない。

そこでバルブの発達度と最大長の相関関係をみてみる。最大長を５mmごとの階級に分類し、バルブの発達度は前述と同じく４つのカテゴリーに分類した。総数2,841点の最大長別バルブの発達度の点数を集計したものが表21で、それらの数比を示したものが図48である。それによるとどのカテゴリーであっても、長さが20.0mm～35.0mmの剥片が多く、20.0mm以下の剥片についてはバルブの発達しないものが圧倒的に多い。これらのことから、小さな剥片については剥片の大きさがバルブの発達に影響して

最大長(mm) / バルブの発達度	極大発達	発達	やや発達	発達なし	合計
10~ 14	1	6	17	11	35
15~ 19	6	21	92	59	178
20~ 24	12	47	172	157	388
25~ 29	20	76	290	225	611
30~ 34	29	75	270	226	600
35~ 39	20	57	142	131	350
40~ 44	16	43	70	89	218
45~ 49	15	36	52	58	161
50~ 54	8	29	34	31	102
55~ 59	3	16	21	28	68
60~ 64	6	7	19	12	44
65~ 69	4	5	9	12	30
70~ 74	1	5	9	3	18
75~ 79	1	5	3	3	12
80~ 84	3	1	5	3	12
85~ 89	0	2	0	3	5
90~ 94	1	1	0	0	2
95~ 99	1	0	1	0	2
100~104	1	0	1	2	4
105~109	0	0	1	0	1
合計	148	432	1208	1053	2841

表21　バルブの発達度と最大長(実数)

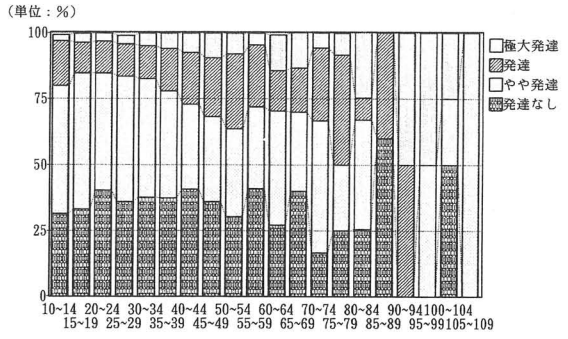


図48　バルブの発達度と最大長(百分比)

打面形態＼バルブの発達度	極大発達	発　達	やや発達	発達なし	合　計
ハジケ	6	8	83	165	262
原面上	75	185	389	272	921
口唇状	0	1	18	25	44
線　状	5	18	72	120	215
調　整	16	71	212	140	439
点　状	2	2	37	48	89
剥離面	44	147	382	267	840
合　計	148	432	1193	1037	2810

表22　打面形態とバルブの発達度(実数)

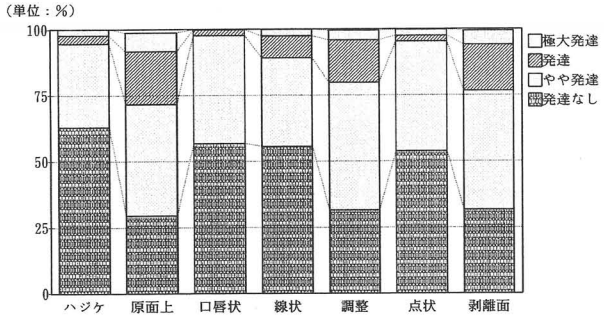


図49　打面形態とバルブの発達度(百分比)

いるとも考えられるが、ある程度以上の大きさの剥片を取る場合、剥片の大きさだけでなく、打撃の状態によってはどんなバルブの発達度も生じさせ得るということを示唆している。また、同時に最も大きな剥片のバルブが「発達なし」であることは剥片の大きさと打撃の状態だけでなく、サヌカイトの石の目ともあわせて考えないといけないことを示している。

次にバルブの発達度と打面形態の相関関係をみてみる。バルブの発達度は前述と同じく4つのカテゴリーに、打面形態はハジケ、原面上打面、口唇状打面、線状打面、調整打面、点状打面、剥離面打面の7つのカテゴリーに分類した。総数2,810点分の打面形態とバルブの発達度の相関関係を集計したものが表22で、それらの数比をグラフに示したのが図49である。それによると点状打面、線状打面、口唇状打面、ハジケと分類される打面をもつものの90%、もしくは95%以上が「発達なし」と「やや発達」とされるバルブ発達度を呈する。また、原面上打面、剥離面打面、調整打面もその70%以上が同じカテゴリーのバルブの発達度を示すが、「極大発達」と「発達」とされるものの合計が20%～30%あり、原面上打面、剥離面打面、調整打面をもつものの順にその数が減ることがわかる。これらのことから、通常大きな剥片が取れていない前者のような打面形態をもつものにバルブの発達がみられず、調整打面をもつものを別にして、ある程度の大きさの剥片も取れている後者のような打面形態をもつものにバルブの発達がみられるものが多いことは、打面形態がバルブの発達に影響するのではなく、先にみたように剥片の大きさと打撃のされ方、そして石の目に影響されていることを裏付けていよう。

原面

最大長(mm)＼原面残存率(%)	0	20	40	60	80	100	合　計
10~ 14	31	2	0	0	1	1	35
15~ 19	148	10	6	3	5	8	180
20~ 24	332	19	11	9	12	17	400
25~ 29	525	50	15	7	12	15	624
30~ 34	491	55	22	7	10	19	604
35~ 39	262	43	21	7	12	15	360
40~ 44	158	17	17	7	6	19	224
45~ 49	98	21	15	8	9	11	162
50~ 54	72	13	7	6	5	2	105
55~ 59	38	12	9	5	1	5	70
60~ 64	24	4	4	3	7	4	46
65~ 69	13	5	2	3	1	6	30
70~ 74	9	0	3	2	2	2	18
75~ 79	2	1	3	2	2	2	12
80~ 84	4	1	0	2	0	5	12
85~ 89	2	1	1	1	0	1	6
90~ 94	2	1	0	0	1	0	4
95~ 99	0	1	0	1	0	0	2
100~104	1	0	1	1	0	1	4
105~109	0	1	0	0	0	0	1
合　計	2212	257	137	74	86	133	2899

表23　原面残存率と最大長(実数)

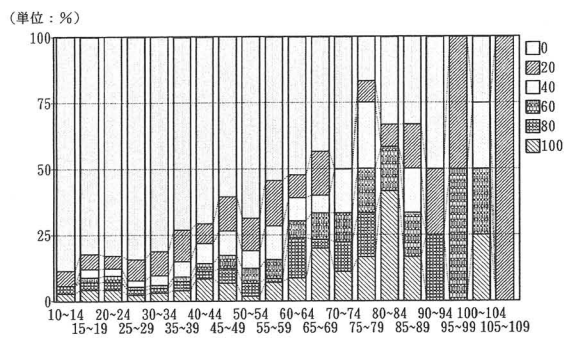


図50　原面残存率と最大長(百分比)

垂直割れ ＼ 最大長(mm)	10未満	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59	60~64	65~69	70~74	75~79	80~84	85~89	90~94	95~99	100~104	105~109	合 計
あ り	1	0	0	5	6	32	26	5	6	9	9	0	2	1	0	1	2	0	0	1	0	106
な し	1	35	179	395	620	575	336	221	156	96	62	46	28	17	12	11	4	3	2	3	1	2803
合 計	2	35	179	400	626	607	362	226	162	105	71	46	30	18	12	12	6	3	2	4	1	2909

表24　垂直割れと最大長(実数)

総数2,899点のうち表面に原面の残るものは24%(687点)あるが、残りの76%(2,212点)には全く認められない。また、表面以外に先端面や側面に原面が残る場合もある。これらは530点あり、全体の18%にあたる。それらの残り方は、右側面211点(40%)、左側面235点(44%)、両側面36点(7%)、右側面・先端面9点(1.9%)、左側面・先端面9点(1.9%)、先端面25点(5%)、両側面・先端面1点(0.2%)である。これらの他に2点だけであるが、主剥離面に接して裏面側に原面を取り込んでいる例がある。

表面に認められる原面の残存率と最大長の相関関係をみてみる。原面の残存率を20%ごとの階級に、最大長は5.0mmごとの階級に分類して、総数2,899点分の最大長別原面残存率の点数を集計したものが表23で、それらの数比をグラフに示したのが図50である。それによると原面の残るものの比率は小さい剥片ほど低く、大きいものほど高いことが分かる。このことは原礫から剥離が行われたときほど大きな剥片が取られていることを示している。

垂直割れ

剥離時の事故のひとつとして垂直割れがある。垂直割れをおこした剥片は106点あり、全体の4%である。

垂直割れと最大長の相関関係をみてみる。最大長は5.0mmごとの階級に分類して、総数2,909点分の最大長別垂直割れの点数を集計したものが表24である。それによると10mm未満の剥片は数が少ないので除くとして、30mm以上の剥片からほぼ一定量、生じたようになっている。これはすでに指摘されているように打撃の力に比例しておこることを示していよう。

その他の属性

今回分析対象にした剥片の中には、両極技法を示すようなものはなかった。また、打撃による剥離ではなく、自然現象(例えば、温度変化など)によってひきおこされたと考えていい、割れの痕跡を残すものが3点認められた。

3．剥片の属性分析からみた喜志遺跡(ＫＳ94)の石器製作状況

以上、剥片を対象にして属性分析を行った結果と石核の観察結果をまとめてみる。

剥片剥離に際して、厚みに対する意識がいかに強いか、すなわち、薄くて大きな剥片を取るために打撃力と打撃の角度をコントロールしていることがうかがえた。しかし実際には、従来から指摘されているとおり、サヌカイト特有の石の目が剥片剥離に際して製作者の意志以上にいかに大きく影響するかが再認識させられた。このことは検出された剥片がごく一般的な割れ方しか残していないことを示していて、そこには何等、目的的な剥片を取るための特殊な技法を窺うことができなかったともいえる。このことが弥生時代の剥片剥離技術全般を通じていえることなのか、この時期

(第Ⅲ様式期新段階～第Ⅳ様式期古段階) だけの現象なのか、またここに捨てられた剥片だけに認められる現象なのか、データの蓄積を待って結論を下したい。

さて、今回の調査で出土したサヌカイト製の石器はすべて喜志遺跡内で製作したと考えられるが、分析対象にした整地層出土の剥片では最も大きな剥片でも最大長105mm、最大幅140mm、また、石核の最も長いものでも135mmしかなく、打製石剣を作れる大きさのものは見つからなかった。しかし、製作途中の事故品の存在から打製石剣を遺跡内で製作していることは確実である。それではその素材をどのような形で獲得したのか？問題として残したままである。

以上のような問題を残したままではあるが、今回出土した整地層の石器資料がどのような意味をもつのかを考えてみたい。少なくとも剥片類については、一般的な割れ方しか示しておらず、石器製作中の石屑的な、すなわち廃棄処分のものとしてしか評価を与えることができないが、石器類については製品としてまだまだ使えるものが出土していることから単に捨てたとは考えがたい。つまり、これらの整地層から出土したものは石器製作址からだけではなく、それ以外の場所からのものも含まれている可能性があるということである。ただ供伴土器の時期が第Ⅲ様式期新段階から第Ⅳ様式期古段階と限定されることも考え合わせると、石器製作址に近接した集落址、もしくは集落址内の石器製作址から整地層の土がもってこられたと推測できるであろう。

(栗田　薫)

(註)

1．属性分析の方法は次の文献によっている。

山中一郎(1994)『石器研究のダイナミズム』, 大阪文化研究会.

4－3．石川中流域、段丘上の埋没古墳

1．はじめに

石川中流域の段丘上の埋没古墳の存在に関心がもたれたのは、大阪府教育委員会の調査で検出された「新堂古墳」が最初であろう。それ以前に消滅時期の分かる段丘上の古墳として川西古墳の記録が残されていたが(文献1)、現存する新家古墳を除いて、段丘上に古墳が点在する景色は想像されていなかったといっても過言ではない。

新堂古墳の調査による周濠らしきものの発見は段丘上に埋没古墳が存在する事を暗示させた。しかしながら、この調査と前後して数度の調査で埴輪片がパラパラと出土しているものの、その出土量の少なさと確実な遺構の未検出から、埋没古墳への関心はもたれたものの、議論されることはなかった。そんな中、今回、喜志遺跡の調査で、多量の埴輪が出土したことにより、改めて埋没古墳の存在を考えてみる必要が生じた。そこで既往の調査における埴輪の出土例を紹介することで、石川中流域における埋没古墳の状況を改めて考えてみたい。

2．既往の調査における埴輪出土例

出土例1．(文献2)

1979年、大阪府教育委員会によって、羽曳野市東阪田に所在する石川の形成した下位段丘面の南端部が分譲住宅開発にともなって調査された。遺跡名は「東阪田遺跡」である。埴輪は調査区の南西部で検出された土壙(SK－01)と調査区南部中央隅で検出された土壙(SK－04)で出土した。

土壙(SK－01)からは人物埴輪を含む多量の埴輪と1点の須恵器が出土している。これらの所属時期は須恵器の杯身から5世紀末と比定されている。

土壙(SK－04)からは多量の埴輪と少量の土器片が出土している。埴輪は小片であるというものの、円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪、楯形埴輪が確認されている。円筒埴輪はやや斜行する縦ハケで調整されていること、円筒埴輪の中に須恵質のものが存在すること、及び出土土器の時期から合わせみて6世紀前半に属すると結論づけられている。

なお、この調査区では古墳時代前期に比定されている土器棺墓も3基、検出されている。

出土例2. (文献3)

1980年、羽曳野市教育委員会が出土例1のすぐ南側を調査した。遺跡名は「東阪田遺跡」である。埴輪は調査区の中央部西辺にある方形の土壙(SX1)から出土している。埴輪の詳細は不明である。

出土例3. (文献4)

1978年、大阪府教育委員会が喜志小学校の北方200m、東高野街道から東に100m下った地点で、「喜志遺跡」の東縁にあたる斜面地を調査した時に盛土から埴輪が検出されている。埴輪は須恵質の円筒埴輪で、断面M字形のタガがめぐる。外面調整は斜めハケの後、横ハケが施されている。

出土例4. (文献4)

1978年、大阪府教育委員会が下水管埋設工事に伴う調査(Bトレンチ)を行ったときに埴輪が検出されている。遺跡名は「喜志遺跡」である。埴輪は円筒埴輪で、Bトレンチと設定された調査区の盛土から検出されているが、6世紀前半に比定されている。

出土例5. (図版27, 図－51)

1986年、富田林教育委員会が下水道管埋設工事に伴い、今回の調査区の南西隣、中位段丘上を調査した。遺跡名は「喜志遺跡」である。調査区は東西方向にのびる開析谷の真ん中にあたり、埴輪はこの谷の中から検出された。

今回の調査区はこの時の調査区で検出した開析谷の続きにあたり、また、埴輪の出土状況も今回の出土状況と類似する。出土した埴輪は円筒埴輪と蓋形埴輪があるが、出土量は少ない。

円筒埴輪(1, 3～7)は口径28.8cm、底径12.5～15.7cmを測る小型品ばかりである。タガの断面は低い四角形、台形の他、三角形も認められる。外面調整は粗い縦ハケ一次調整だけで、二次調整の横ハケの施されたものはなかった。基底部の調整は施されているものと施されていないものがある。

蓋形埴輪(2)は1点だけ出土している。軸受け部の破片であるが、口縁部に凸帯が貼り付けられている。口頸部の調整は横ハケ調整である。

この調査区で出土した埴輪は、今回の調査区であるＫＳ94出土の埴輪と類似している。埴輪の所属時期は5世紀後半から6世紀初頭に比定できる。

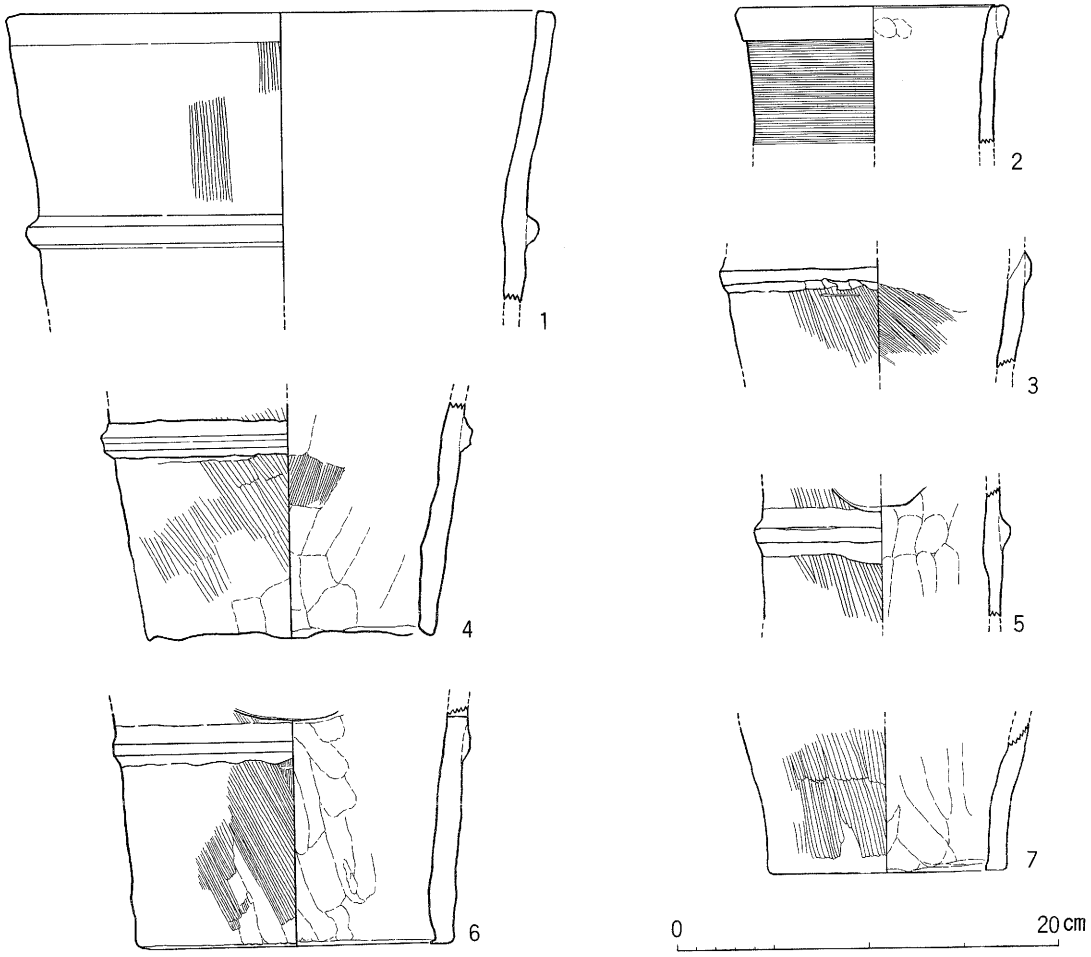


図51　喜志遺跡(KS86地区)出土の埴輪

出土例6.

1985年、富田林市教育委員会が喜志町２丁目を調査した時に埴輪が検出されている。遺跡名は「喜志西遺跡」である。調査区の小字名が「高塚」で、今回の調査区と同じである。埴輪は円筒埴輪で中世の東西溝から出土している。

出土例7. (文献5)

1991年、富田林市教育委員会が喜志駅東口新設工事及び喜志バイパス道路事業に伴う調査で包含層から埴輪が出土している。遺跡名は「喜志西遺跡」である。埴輪は円筒埴輪で５世紀後半～６世紀初頭に比定できる。

出土例8.

1990年、富田林市教育委員会が住宅建設に伴う調査で埴輪が検出されている。遺跡名は「喜志西遺跡」である。埴輪は円筒埴輪で、包含層から出土している。

出土例9.

1990年、富田林市教育委員会が桜井町２丁目に所在する店舗建設に伴う調査で古墳時代の溝から

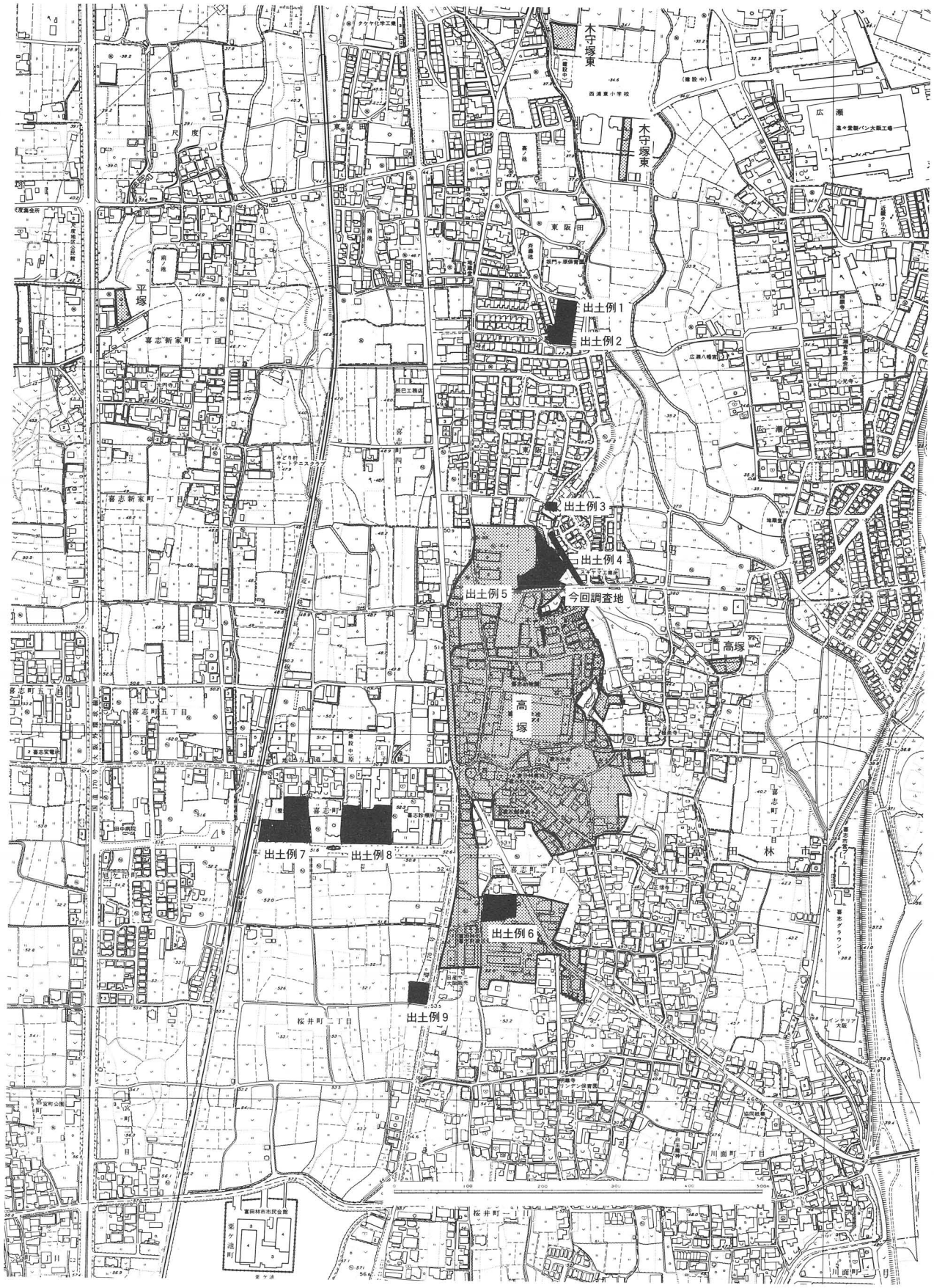


図52　喜志遺跡周辺の埴輪出土地点と小字名の分布図状況

1点だけであるが出土している。遺跡名は「桜井北遺跡」で、前述の出土例4の地点から南西部に約150m離れた地点にあたる。

出土した埴輪は円筒埴輪で外面調整にB種横ハケの施されてたもので、所属時期は5世紀後半に比定できる。

出土例10. (文献6)

1981年、大阪府教育委員会が国道170号線の歩道設置に伴う調査を行った時にCトレンチから古墳が検出されている(註1)。遺跡名は「中野遺跡」である。「新堂古墳」と名づけられているが、墳丘と考えられる高まりと周溝と考えられる落ち込みが検出され、落ち込みからは埴輪と須恵器などが出土している。これらの所属時期から6世紀前半の時期が与えられている。

出土例11. (文献7)

1979年、富田林市教育委員会が大谷女子大学資料館の協力で行った調査で埴輪が出土している。遺跡名は「中野遺跡」である。埴輪は2点あるが、1点は石列暗渠(SD－004)から、あと1点は表採資料である。前者は形象埴輪で、後者は円筒埴輪である。形象埴輪は磨滅が著しく、器種も不明である。円筒埴輪はタガがかなり崩れていて、残存部の復元径から推測する限り小型品と考えられる。外面調整は縦ハケが施されている。これらのことから所属時期は6世紀前半と考えられる。

なお、この時の調査で6世紀に比定されている土壙墓が2基、検出されている。一つは土壙1(SK－001)で、楕円形のプランをもつ。内部から須恵器の甕と土師器の鍋片が出土している。あと一つは土壙(SK－003)で不整形なプランをもつ。内部から2個体分の口頸部を欠く須恵器の甕の破片が出土している。報告者は遺存状況に問題を残すとしながらも、甕棺としての機能を考えている。

出土例12. (文献8)

1981年、富田林市教育委員会が国道170号線と東高野街道に挟まれた地域を調査した時に、古墳時代の溝と包含層から埴輪が検出されている。遺跡名は「中野遺跡」である。埴輪は合計14点出土しているが、すべて円筒埴輪で外面調整に斜方向の縦ハケ一次調整が施されているだけで、二次調整は認められない。タガの突出度も低く、黒班の認められるものもない。須恵質のものが混じる。これらのことから埴輪の所属時期は6世紀前半に比定できる。

出土例13. (文献9)

1992年、富田林市教育委員会が「寺内町遺跡」(ＧＣ91－4)を発掘調査を行った時に近世のピットから埴輪が1点出土している。埴輪は円筒埴輪の口縁部の破片で外面調整に横ハケが施されている。小片であるから断定できないものの、埴輪の所属時期は5世紀後半と考えられる。

出土例14. (文献9)

1992年、富田林市教育委員会が「寺内町遺跡」(ＧＣ91－2)を発掘調査をおこなった時に包含層から埴輪が1点出土している。埴輪は円筒埴輪で、タガは断面が偏平な台形で、外面調整はBd種横ハケが施されている。これらのことから埴輪の所属時期は5世紀後半に比定できる。

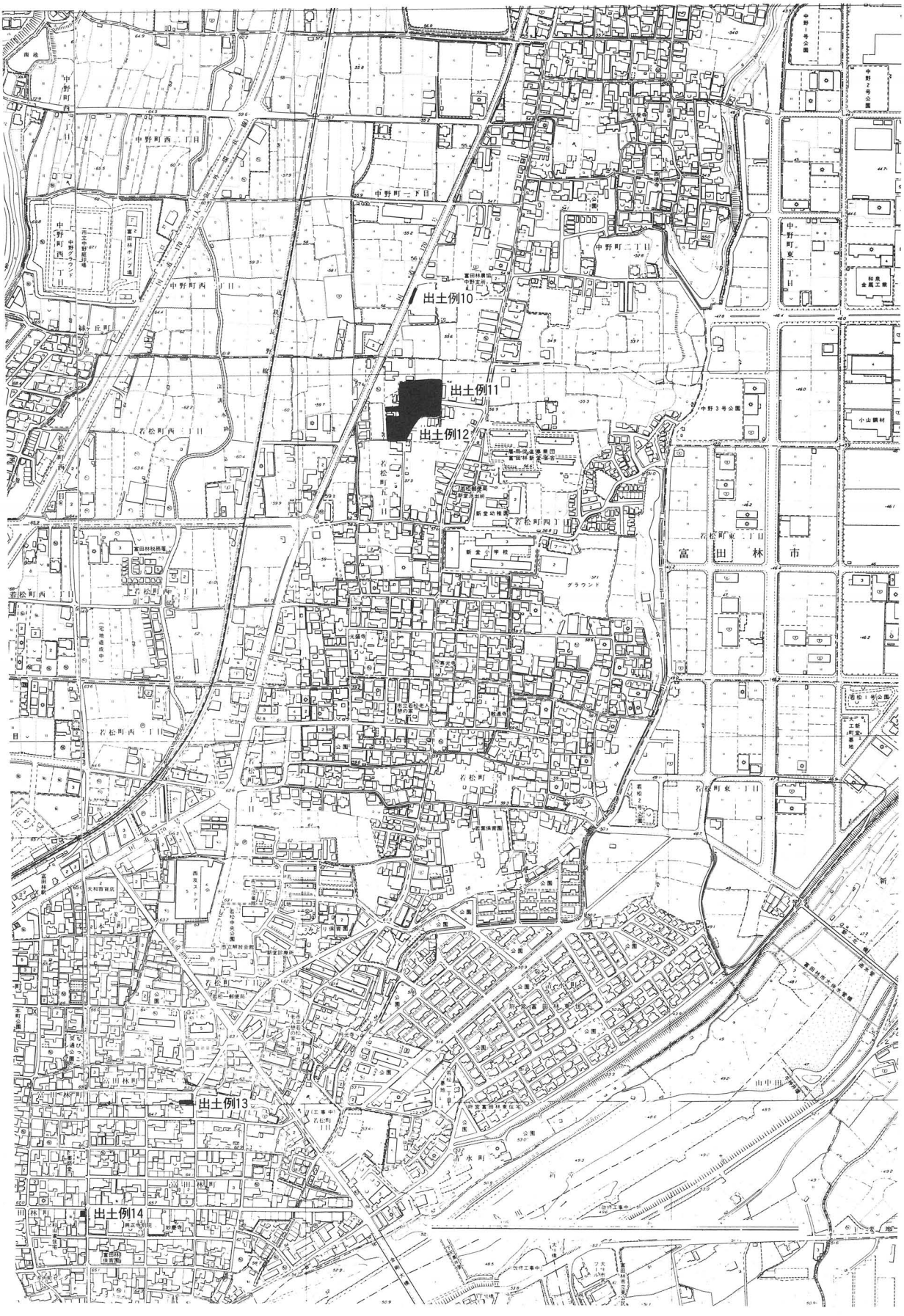


図53　中野遺跡周辺の埴輪出土地点と小字名の分布状況

出土例15.

1990年、富田林市教育委員会が行った調査で包含層から埴輪が１点出土している。遺跡名は「新家遺跡」である。現存する「新家古墳」の北西70mの所である。円筒埴輪の外面調整は縦ハケ一次調整だけが施されている。

なお、新家古墳からは円筒埴輪の他、朝顔形埴輪、甲冑形埴輪などが採集されている。円筒埴輪は実測図から判断すると、かなりしっかりとした断面四角形のタガがめぐり、外面調整に斜め方向のハケが施されている。底部を１段目とすると２段目の半ばまでしか残っていないので、断定できないが底径が18cmということから、中型品に近い小型品ということができる。また、黒班も認められることから(文献1)、前述の新家遺跡から出土した埴輪はこの新家古墳よりも後で造られた古墳のものと考えられる。

また、前述の埴輪出土地点から南約150mの地点で国道309号線建設に伴う調査を大阪府教育委員会が行っているが、その時に古墳時代から鎌倉時代にかけての土壙墓が総数433基検出されていている(文献10)。

出土例16～18.

1928年に消滅したと記録されている「川西古墳」と、その周辺の埋葬施設を含めてここで紹介する。「川西古墳」は明治維新前に一度発掘され、1928年、敷地整備で墳丘が破壊されたが、その直前に、末永雅雄氏によって、遺物の採集と墳丘見取り図作製が行われている。この時の記録によると川西古墳は直径20m、高さ３mの円墳で、墳頂から約１m下方のところに小竪穴式石室状の内部構造が設けられていたこと、石室内部から鉄製の眉庇付冑、短甲、鉄刀、鉄剣、鏃、金銅金具などが出土したと記されているが、ここにある記録の様子は二次埋葬の結果らしく、古墳築造当初の埋葬状況を示すものではない(註2)。しかし、副葬品自体は川西古墳のものと考えられることから、古墳の所属時期を５世紀中葉から後半に比定されている(文献1)。その後、1989年府営住宅の建て替えに伴う大阪府教育委員会の調査(出土例16)で、川西古墳の周濠と考えられる溝が(文献11)、1991年、1992年には市営住宅建て替えに伴う富田林教育委員会の調査(出土例17)で、1989年の大阪府教育委員会調査時の溝に続くと考えられる溝が検出され、その結果、この古墳が外周溝をもち、墳丘が帆立貝式もしくは造り出し付き円墳であったことが確認されている(文献12)。

出土した埴輪は円筒埴輪と形象埴輪があるが、形象埴輪は家形埴輪、草摺部分が出土しているが、種類も数も少ない。円筒埴輪は大型品、中型品、小型品と様々なサイズが混在するが、小型品が圧倒的に多い。外面調整はＢ種横ハケの施されたものと、縦ハケ一次調整だけの両方が認められるが、大型品についてはすべて二次調整が認められる。半須恵質のものもあり、所属時期は５世紀後半に比定されている。

「川西古墳」の外周溝の外側からは円筒埴輪棺が３基、検出されている。それらのうちの１基は外周溝の肩部から(文献11)、他の２基は南部で(出土例18)で検出されている。なお、後者の２基の埴輪棺が出土した地域の遺跡名は「錦織遺跡」である。この２基の円筒埴輪棺のうち、１基(円筒棺１)は棺の周囲を河原石で取り囲む構造を呈している。あと１基(円筒棺２)には須恵器の蓋杯が副葬されていて、その時期から６世紀中頃と比定されている(文献12)。

また、1989年に大阪府教育委員会が行った調査区では、これら周濠と外周溝の他に溝が２本(溝

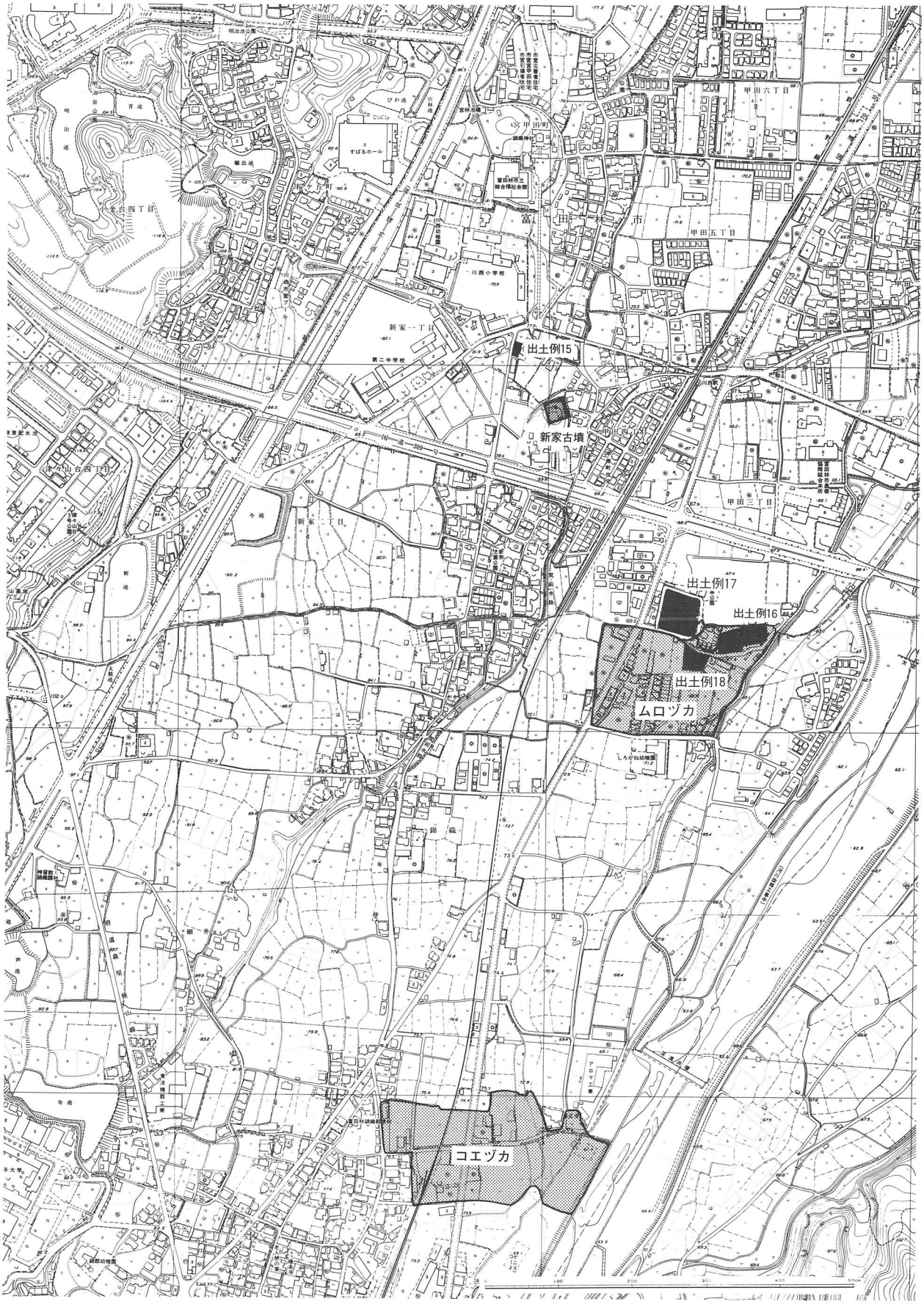


図54　甲田南遺跡周辺の埴輪出土地点と小字名の分布状況

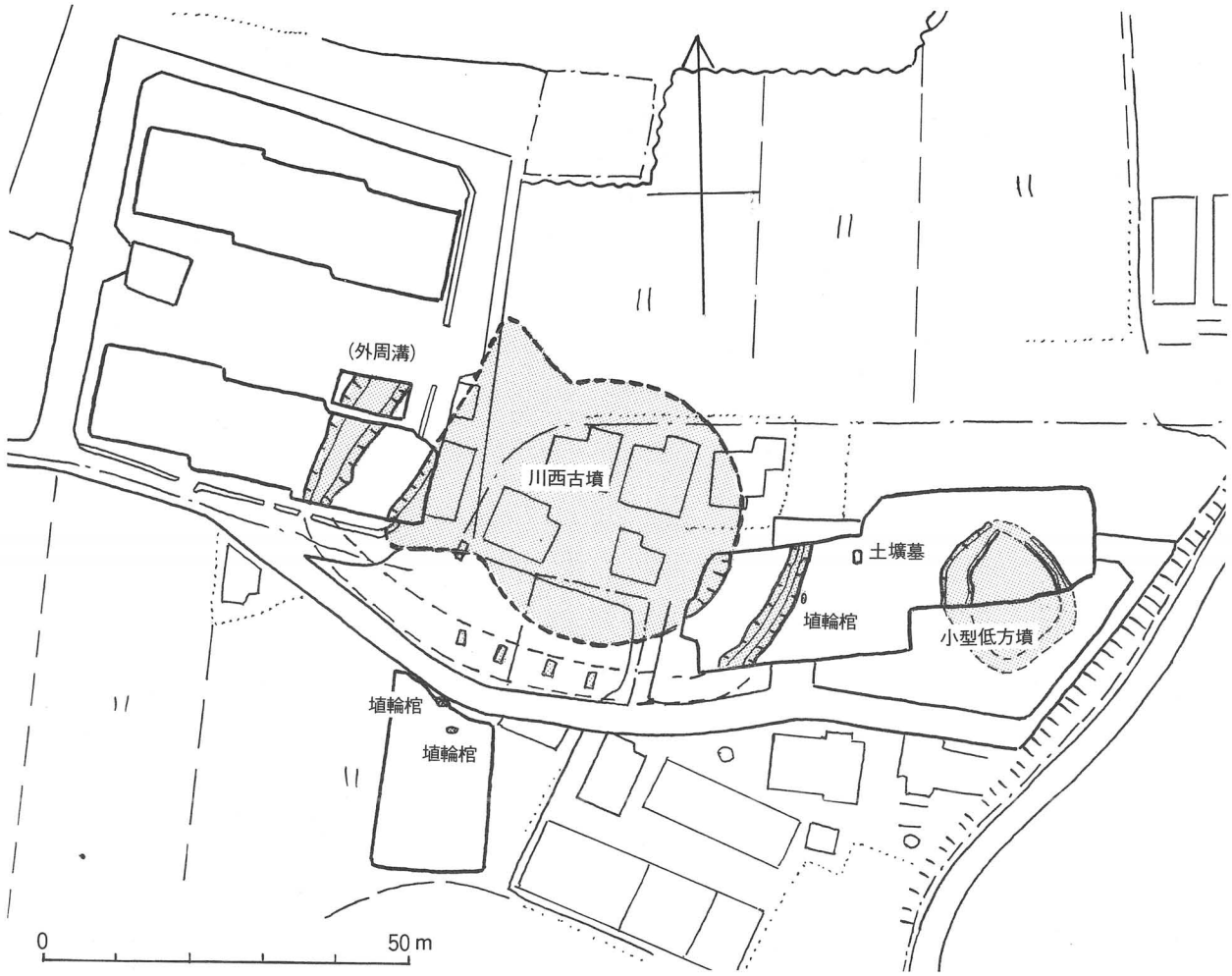


図55「川西古墳群」の墓域構成(文献12　挿図15に一部修正、加筆)

3、溝4)検出されているが、これらは周溝を構成する可能性が指摘されている。もし、これが周溝として成り立つなら、この溝は方形区画墓を構成するものと考えられ、墳丘の状態がわからないものの小型低方墳を取り囲む溝の機能が想定される。なお、溝4からは韓式系土器や土師器、須恵器が出土しているが、それらからみて、この小型低方墳の所属時期は5世紀後半から6世紀に比定できると考えられる。この他、この時の調査区では土壙が1基、確認されている。骨、副葬品の出土はみないものの墓壙の可能性も示唆されている(文献11)。

これらを総合して考えると、「川西古墳」を主長墳としてその下に小型低方墳、埴輪棺墓、そして土壙墓で構成される古墳群としてとらえることが可能である(図55)。そして主長墳に埋納された豊富な副葬品、特に眉庇付冑、短甲などの甲冑一式の他、武器類などの副葬から考えると、この古墳の被葬者は生前、ヤマト政権から軍事的職掌を与えられた在地の小豪族の地位を想定することも可能であろう。また、小型低方墳については溝から出土した韓式土器から考えると朝鮮半島から甲田地域に移住してきた渡来人の存在を、そして円筒埴輪棺については墳丘をもつことが許されなかった人々の墓を、さらに埴輪棺、土器棺すらもつことの許されなかった階層、すなわち、共同体の一般構成員の土壙墓で構成された「川西古墳群」ともいうべき墓域を形成していたと考えられる。

以上が既往の調査における埴輪の検出例であるが、次にこれらの埴輪の状況からみた石川中流域の埋没古墳の存在意義について考えてみたい。

2．埋没古墳の存在意義

石川中流域に埴輪が検出された地点は、喜志遺跡から錦織遺跡まで点々とではあるが、かなりの数になっている。しかし、「川西古墳群」を除いて、その実態はほとんど解明できていない。

そこで一つの試みとして埴輪の出土地点に古墳の存在を推測させる「塚」のつく小字名を付加した地図(図52，53，54)を作成してみた(註3)。地図で網がけした範囲がそれにあたる。それによると羽曳野市域に「木守塚東」、富田林市の喜志新家町に「平塚」、喜志小学校を中心にして南北560m、東西260mの範囲に「高塚」、川西古墳周辺に南北150m、東西230mの範囲に「ムロヅカ」、錦織遺跡を中心に南北150m、東西290mの範囲に「コエヅカ」という名が残っている。このうち、「高塚」、「ムロヅカ」については、それらが名付けられた範囲から埴輪の出土が認められている。他の地域については、今のところ、埴輪の検出が認められないことから、墓域との関係は分かっていない。また、中野遺跡周辺に「塚」のつく小字名がまったく認められないにもかかわらず埴輪が検出されたり、古墳が存在する場合もある。この他、現存する「新家古墳」に「塚」の名が認められないことは(註4)、小字名の付けられた当時の周辺の様子、伝承の問題と絡めて考えなくてはならないことを示していて、短絡的に古墳の存在と結び付けられないかもしれない。しかし、古墳が存在した可能性もまったく捨てきることはできない。今後の調査を待って結論を下ださなければならない問題の一つである。

さて、従来から、石川中流域には古墳時代中期の古墳が少ないことが指摘されている(文献1)。やはり今回の埴輪の出土状況をみてみても、中期でも後半に比定されるものしかなく、中期前半についてはその状況は大きく変わらないことが示されている。しかし、後半期については石川の段丘上に古墳が点在した可能性が指摘できる資料が集まった。そしてそれらの立地を考える時、古墳群は弥生時代以降の農村集落を単位にした勢力基盤をもつ地域ごとにそれぞれグルーピングできることが確認された。すなわち、喜志遺跡の地域に出土例１～９、中野遺跡の地域に出土例10～13(註5)、そして甲田南遺跡の地域に出土例14～18がそれぞれがあてはまる。これらのうち、喜志遺跡の地域と甲田南遺跡の地域については古墳時代前期からこれらの地域を勢力基盤にしていたと考えられる首長の古墳が、羽曳野丘陵上に築造されていることが指摘されている(文献1)。このことが、中期後半から後期前半の時期に比定される埋没古墳とどう関係してくるのかは明らかではないが、石川中流域の中期後半の古墳と前期古墳の間には立地に差異が認められるものの、同じ勢力基盤のもとに古墳が形成されているという事実は興味深い。また、その古墳群の構成形態は「川西古墳群」の場合、帆立貝式古墳もしくは円墳の形態をとる首長墳のもとに、それらの形態の古墳を造ることが許されなかった人々の小型低方墳、そして墳丘をもつことが認められないさらに下層の人々の円筒埴輪棺墓、土壙墓という複数の階層の人々で構成されている。おそらく、他の地域についても同様の墓制形態をもつと考えられるが、具体的な状況は分かっていない。しかし、喜志遺跡地域については埴輪の出土量の多さ、そしてそれらの構成から考えて、直径30m前後の円墳が数基、存在していたと想定できるし、おそらく古墳時代前期に所属時期が比定されているような土器棺墓のような土壙墓がこの時期にも認められたことは想像に難くない。中野遺跡地域についても同様で、今のところ、やはり新堂古墳と同時期の土器棺墓が検出されている。

以上のことから総合して考えてみると、５世紀後半から６世紀前半のごく限られた時期に、弥生時代以来の農村集落を勢力基盤にもつ有力家父長を頂点にした共同体構成員の墓域が、集落に近接

して階級を如実に示す複雑な墓制形態をとりながら存在したことが指摘できる。そして埴輪をもつような墳墓が、5世紀前半にはほとんど認められず、5世紀後半に急増する背景として、この時期に社会に大きな変化がおこり、有力家父長クラスまで造墓活動が許されたことが推測できる。

さらに石川中流域、段丘上の古墳が築造される背景として、下流域の古市古墳群の存在を考える時、当然、古市古墳群の造営にこの石川中流域の農村集落の構成員が関わりのあったことは推測できる。しかもこれらの中には造墓活動時の労役だけでなく、「川西古墳」の被葬者のようにヤマト政権の軍事的職掌を担う小豪族の出現も認められるのである。

以上のように古墳築造の背景をみてきたが、古市古墳群造営が石川流域の段丘上の集落にどのような影響をおよぼしたのかは具体的に示すことができなかった。さらに6世紀の後半に石川中流域の段丘上に古墳が築造されなくなり、このあと新たな場所に墓域を移していったことを指摘することはできるが、この変化をどのように解釈するかは問題として残したままである。今後の課題としたい。

（粟田　薫）

（註）

1．図53の分布図の範囲は新堂古墳の検出された位置だけである。この時の調査は実際には南北にもっと長く設定されている。

2．北野耕平氏の御教示による。

3．図53の中の清水町に「石塚」という小字名が残っているが、ここは石川の氾濫源にあたり、河原石が多量に積まれてあったという伝承があり、古墳との関係は認められないので図中から省いた。

4．新家古墳が存在する場所の小字名は「宮口」である。これはすぐ近くにある錦織神社との関連が推測される。

5．甲田南遺跡については甲田・錦織地区とする方が適切かもしれない。また、出土例13，14は中野遺跡に含めたが、1994年の大阪府教育委員会が行った大阪府立富田林高等学校の改築に伴う調査で「谷川遺跡」から弥生時代後期から古墳時代の集落跡が確認されている。そのことから考えると中野遺跡と甲田南遺跡の間に谷川遺跡地区をもうけ、そこにこの出土例が属する基盤集落を求めるべきかも知れないが、結論は谷川遺跡の正式報告を待って下したい。

（文献）

1．北野耕平(1985)，『富田林市史』，富田林市史編集委員会．

2．尾上実(1981)，『東阪田遺跡—1979年度第4区の調査—』，大阪府教育委員会．

3．笠井敏光(1980)，『東阪田遺跡—1980—』，羽曳野市埋蔵文化財調査報告書6，羽曳野市教育委員会．

4．芝野圭之助・渡邊昌宏((1978)，『喜志遺跡発掘調査概要』，大阪府教育委員会．

5．中辻亘・松本徹・粟田薫(1993)，『喜志西遺跡発掘調査概要』，富田林市埋蔵文化財調査報告23，富田林市．

6．玉井功(1982)，『中野遺跡発掘調査概要—国道170号線歩道設置に伴う調査—』，大阪府教育委員会．

7．中村浩(1979)，『中野遺跡発掘調査報告書』，富田林市教育委員会．

8．中辻亘・忍薫(1982)，『中野遺跡発掘調査概要Ⅲ』，富田林市埋蔵文化財調査報告7，富田林市教育委員会．

9．松本徹・田川友美(1992)，『平成3年度　富田林市内遺跡群発掘調査概要』，富田林市埋蔵文化財調査報告21，富田林教育委員会．

10．今村道夫(1981)，『新家遺跡発掘調査概要・Ⅲ』，大阪府教育委員会．

11．阿部幸一(1989)，『—府営双葉住宅建替に伴う—甲田南遺跡発掘調査概要』，大阪府教育委員会．

12．中辻亘・田川友美(1994)，『甲田南遺跡』，富田林市埋蔵文化財調査報告25，富田林市．

番号	出土地点	器　種	口径(cm)	器高(cm)	裾部径(cm)	技法（内面）	技法（外面）	紋様	色調	備考
1	整地層	広口壷A	15.6	2.0		口縁部：横なで	口縁部：横なで，頸部：縦方向の刷毛目	口縁部上面．外面：波状紋（原体８本）	にぶい褐色	
2	整地層	広口壷A	18.0	4.5		口縁部：横なで，頸部：なで	調整不明	口縁部：刺突紋，頸部：簾状紋（原体８本／１cm）	にぶい橙色	
3	整地層	広口壷A	19.4	4.6		調整不明	調整不明	口縁部：刺突紋	橙　色	
4	整地層	広口壷A	23.1	3.6		調整不明	調整不明	口縁部.頸部：簾状紋（原体13本／1.6cm）	橙　色	
5	整地層	広口壷A	24.7	5.3		調整不明	頸部：指頭圧痕，他は調整不明	口縁部：刺突紋	にぶい橙色	
6	整地層	広口壷A	22.8	1.9		口縁部：横なで	口縁部：横なで	口縁部外面：波状紋（原体５本），口縁部下端：刻み目	灰　褐　色	生駒西麓産
7	整地層	広口壷B	26.8	7.1		口縁部：横なで 頸部：指頭圧痕	調整不明	口縁部：簾状紋（原体19本／3.6cm），頸部：直線紋	にぶい橙色	
8	整地層	広口壷B	26.7	6.3		口縁部：横なで，頸部：横方向の刷毛目	口縁部：横なで 頸部：指頭圧痕，なで	口縁部・波状紋２条（原８本／1.1cm），頸部：直線紋	明赤褐色	生駒西麓産
9	整地層	広口壷B	24.4	2.4		調整不明	調整不明	口縁部・斜線紋	明赤褐色	生駒西麓産
10	整地層	無頸壷	21.8	7.6		口縁部：横なで 体部：なで	口縁部：横なで，体部：縦方向のへら磨き	体部：列点紋３条，直線紋（原体12本／14.5cm），波紋状	にぶい黄橙色	
11	溝　2	高杯A	19.4	4.5		口縁部：横なで 体部：横方向のへら磨き	口縁部：横なで，体部：なで		にぶい橙色	
12	整地層	高杯A	21.9	4.7		口縁部：横なで 体部：横方向のへら磨き	口縁部：横なで，体部：横方向のへら磨き		灰　褐　色	
13	溝　2	高杯B	21.0	2.4		調整不明	調整不明		暗　褐　色	生駒西麓産
14	整地層	鉢　B	16.7	5.3		口縁部：横なで 体部：なで，指頭圧痕	口縁部：横なで，他は調整不明		橙　色	
15	整地層	鉢　B	25.1	6.6		体部：指頭圧痕 他は調整不明	調整不明	体部・棒状浮紋（１単位３本棒状浮紋の上に刻み目）	にぶい黄色	
16	整地層	鉢　B	23.8	4.2		体部：なで	調整不明	口縁部：列点紋，体部：簾状紋（原体18本／2.5cm），列点紋	橙　色	
17	整地層	鉢　B	28.8	5.2		体部：なで	調整不明	体部：簾状紋２条（原体９本／1.3cm），波紋状	橙　色	
18	整地層	鉢　B	38.5	5.7		口縁部：横なで 体部：なで	口縁部：横なで 他は調整不明	口縁部：波状紋の上に円形浮紋，体部：簾状紋，直線紋	橙　色	
19	整地層	器　台		20.8		調整不明	体部上半：横なで，下半：縦方向のへら磨き	凹線紋：8方向に円孔	橙　色	裾部に黒斑
20	整地層	蓋　壷		8.8		指頭圧痕	なで		浅黄橙色	
21	整地層	台　部		6.1	16.8	調整不明	調整不明		明赤褐色	
22	整地層	脚　部		8.9		調整不明	上半：なで，下半：縦方向のへら磨き		にぶい橙色	
23	整地層	台　部		2.4	10.0	なで	なで		にぶい黄橙色	
24	整地層	裾　部		2.7	13.8	へら削り，裾端部に沈線	横なで	刺突紋	にぶい橙色	
25	整地層	裾　部		3.2	15.6	なで	縦方向のへら磨き，なで		褐　色	
26	整地層	甕	18.8	5.8		口縁部：横なで 体部：調整不明	口縁部：横なで，体部：調整不明		灰　褐　色	
27	整地層	甕	13.3	8.4		口縁部：横なで 体部：指頭圧痕	口縁部：横なで，体部：調整不明		にぶい橙色	
28	整地層	甕	13.2	4.4		口縁部：横なで 体部：指頭圧痕	口縁部：横なで，体部 体部：縦方向のへら磨き		明赤褐色	体部内面に粘土紐の継ぎ目あり
29	整地層	甕	13.3	8.4		口縁部：横なで 体部：指頭圧痕	口縁部：横なで，体部：調整不明		にぶい橙色	体部外面に煤付着
30	整地層	甕	10.9	2.5		体部：指頭圧痕 他は調整不明	体部：へら削り		赤　褐　色	
31	整地層	甕	32.1	5.6		調整不明	調整不明		褐　色	生駒西麓産
32	整地層	甕	35.2	6.0		口縁部：横なで，体部：横方向の刷毛目指頭圧痕	口縁部：横なで．体部：斜方向の刷毛目		橙　色	
33	整地層	甕	38.6	4.0		口縁部：横なで，体部：斜方向の刷毛目	口縁部：横なで	口縁下端部：刻み目	にぶい橙色	
34	整地層	甕	39.0	5.5		口縁部・体部：横なで	口縁部：横なで 体部：縦方向のへら磨き	口縁部：刺突紋	褐　色	生駒西麓産
35	整地層	甕	41.8	6.1		体部：横方向のへら磨き	調整不明		灰　褐　色	生駒西麓産

表25　喜志遺跡出土弥生土器観察表

番号	出土地点	型式名	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	素材	中央断面形	原面	調整	整形	折損	備考
1	整地層	石鏃	21.4	22.1	3.9	1.6		両凸形	×	両面	非極	尖端・両脚部	凹基式
2	整地層	石鏃	24.4	14.4	3.1	1.1	剥	平凸形	×	×	非極	×	円基式
3	整地層	石鏃	24.8	10.5	3.2	1.0	剥	平凸形	×	×	非極	×	円基式
4	整地層	石鏃	27.5	16.0	4.3	1.9	剥	平凸形	×	×	非極	尖端	円基式
5	整地層	石鏃	30.5	13.3	3.9	1.5		両凸形	×	両面	非極	×	平基式
6	整地層	石鏃	31.5	12.6	4.5	1.8		両凸形	×	両面	非極	×	円基式
7	整地層	石鏃	21.8	14.5	4.5	1.9	横形	平凸形	×	片面	非極	×	平基式
8	整地層	石鏃	29.0	18.2	4.0	2.2	剥	平凸形	×	片面	非極	×	平基式
9	整地層	石鏃	33.6	19.7	5.0	3.2		両凸形	基端部	両面	非極	尖端	平基式
10	整地層	石鏃	25.9	12.4	3.8	1.2		両凸形	×	両面	非極	先端	凸基式
11	整地層	石鏃	31.7	13.4	4.7	2.0	横形	平凸形	×	×	非極	×	凸基式
12	整地層	石鏃	25.7	10.6	3.5	1.0		両凸形	×	両面	非極	尖端	凸基式
13	整地層	石鏃	38.3	12.5	4.7	2.0	横形	平凸形	×	片面	非極	×	凸基式
14	整地層	石鏃	33.5	16.7	4.6	2.8	横形	平凸形	×	×	非極	尖端	凸基式
15	整地層	石鏃	36.2	14.0	4.8	2.2		両凸形	×	両面	非極	尖端	凸基式
16	整地層	石鏃	37.4	13.0	5.0	2.2		両凸形	×	両面	非極	尖端・基部	凸基式
17	整地層	石鏃	45.7	13.7	5.0	2.9	横形	平凸形	×	×	非極	×	凸基式
18	整地層	石鏃	39.1	13.7	6.3	2.7		両凸形	×	両面	非極	×	凸基式
19	整地層	石鏃	38.5	13.8	7.0	3.3		両凸形	×	両面	非極	尖端	凸基式
20	整地層	石鏃	36.9	15.0	5.0	2.8	横形	両凸形	×	片面	非極	尖端	凸基式
21	溝2	石鏃	36.8	14.7	4.8	2.3	横形	両凸形	×	片面	非極	尖端	有茎式・鋸歯縁
22	溝2	石鏃	36.1	12.5	6.6	2.8		両凸形	×	両面	非極	尖端	有茎式？
23	整地層	石鏃	30.2	13.0	2.8	1.1		両凸形	×	両面	非極	基部	有茎式
24	溝2	石鏃	33.2	15.4	3.9	2.5	横形	平凸形	×	×	非極	尖端	有茎式
25	溝2	石鏃	38.6	21.8	9.6	7.4		平凸形	×	両面	非極	×	有茎式
26	整地層	石鏃	41.2	17.9	4.7	3.1		両凸形	×	両面	非極	基部	有茎式
27	整地層	石鏃	36.1	30.3	5.0	4.0	横形	両凸形	×	片面	非極	尖端	有茎式
28	整地層	石鏃	39.5	20.2	5.1	4.0		両凸形	×	両面	非極	尖端・左縁	有茎式
29	整地層	石鏃	33.9	21.4	5.7	3.8		両凸形	×	両面	非極	尖端・基部	有茎式 鋸歯縁
30	整地層	石鏃	56.3	26.5	5.9	6.1		両凸形	×	両面	非極	×	有茎式
31	整地層	石鏃	51.1	20.2	8.3	8.3	横形	両凸形	×	×	非極	×	凸基式
32	整地層	石鏃	54.8	18.9	11.4	8.9		両凸形	×	両面	非極	×	凸基式
33	整地層	石鏃	25.4	22.6	4.3	1.9	横形	平凸形	×	×	非極	基部	有茎式・十字形
34	整地層	石槍	35.4	27.1	3.4	3.5	横形	平凸形	×	×	非極	基部	
35	整地層	石槍	1.4	26.1	7.9	8.7	横形	両凸形	×	×	非極	×	
36	整地層	石槍	48.0	27.8	6.3	7.7	剥	両凸形	基端部	×	非極	×	
37	整地層	石槍	47.3	31.2	9.5	12.4		両凸形	×	両面	非極	尖端	
38	整地層	石槍	41.2	25.0	11.4	11.1	剥	両凸形	基部	×	非極	尖端	
39	整地層	石槍	53.8	29.2	8.6	15.0	横形	平凸形	基端部	×	非極	尖端	
40	溝2	石槍	44.6	35.5	8.2	13.8		両凸形	基端部	片面	非極	尖端	
41	整地層	石槍	70.8	33.0	13.7	31.5		両凸形	×	両面	非極	×	
42	整地層	石槍	58.5	34.0	13.1	21.2	横形？	両凸形	×	両面	非極	×	
43	整地層	打製石剣	33.2	23.3	6.3	4.5		両凸形	×	両面	非極	先端	使用による欠損
44	整地層	打製石剣	44.2	21.9	12.0	12.9		両凸形	×	両面	非極	中央部	欠損は新しい
45	整地層	打製石剣	67.2	24.8	14.4	23.5		両凸形	×	両面	非極	茎部	折面にリタッチ
46	整地層	打製石剣	51.4	32.3	10.0	17.6		両凸形	×	両面	非極	基部	製作中の事故品
47	整地層	打製石剣	65.4	32.9	11.6	20.3		両凸形	×	両面	非極	尖端	使用による欠損
48	西側溝	打製石剣	53.3	24.0	14.2	19.2		両凸形	×	両面	非極	尖端 中央部	製作中の事故品，磨滅著しい

表26　喜志遺跡出土石器観察表

番号	出土地点	型式名	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	素材	中央断面形	原面	調整	整形	折損	備考
49	整地層	打製石剣	47.6	34.7	11.6	18.3		両凸形	基端部	片面	非極	尖端・中央部	欠損は新しい
50	整地層	打製石剣	4.6	36.3	9.3	15.6	横形	両凸形	基端部	片面	非極	尖端・中央部	製作中の事故品
51	整地層	打製石剣	90.4	49.4	17.3	92.5		両凸形	×	両面	非極	尖端・中央部	製作中の事故品
52	整地層	打製石剣	140.4	49.6	20.0	162.5		両凸形	基部	両面	非極	尖端	製作中の事故品
53	整地層	打製石剣	85.1	44.8	20.4	75.3		両凸形	×	両面	非極	尖端・基部	製作中の事故品
54	整地層	打製石剣	142.6	45.3	20.3	127.0		両凸形	基端部	両面	非極	尖端	製作中の事故品
55	整地層	石錐	21.8	5.6	3.6	0.5		両凸形	×	両面	非極	頭部	棒状錐
56	整地層	石錐	39.5	14.1	6.6	3.4	横形	両凸形	×	片面	非極	頭部	連続度・1/4，回転痕有り
57	溝2	石錐	50.1	19.6	8.5	7.7	横形？	平凸形	頭端部	×	非極	×	連続度・1/5，回転痕有り
58	整地層	石錐	36.5	36.9	7.9	9.0	横形	平凸形	左側縁	×	非極	尖端	連続度・1/3？
59	整地層	石錐	57.5	34.5	8.2	13.1		平凸形	頭端部	片面	錐部：極厚・表裏両縁，他は非極	尖端	連続度・1/3
60	整地層	石錐	43.0	23.0	9.2	7.1	横形	台形	頭部	×	錐部：右縁－極厚表，左縁－両厚，他は非極	尖端	連続度・1/3？
61	整地層	ベック	90.7	28.5	23.0	64.3	横形	台形	右半分	×	非極	×	連続度・1/7
62	整地層	ノッチ削器	24.5	65.0	17.9	26.7	剥	四角形	左縁部	×	極厚表・薄両	×	ノッチは2ケ所
63	整地層	石小刀	16.6	56.6	6.1	6.0	横形	四角形	中央	×	非極	×	
64	整地層	石小刀	26.0	53.8	16.1	14.5		四角形	左縁端部	両面	非極	右半分	
65	整地層	横形削器	50.4	68.2	16.3	51.9	横形	不等辺三角形	基部中央	×	薄・深・凸・裏	×	
66	整地層	複刃削器	52.4	72.9	17.3	73.5		両凸形	中央	片面	1－薄・深・直・両，2－薄・侵（深）・直・裏	×	
67	整地層	複刃削器	64.7	70.0	13.3	50.8	剥	菱形	基部尖端	×	1－薄・深・直・両，2－薄・深・S・裏	×	
68	整地層	複刃削器	50.2	93.7	17.0	56.1	横形	不等辺三角形	右側縁	×	1－薄・深・凹・裏，2－薄・深・直・裏	×	
69	整地層	凸刃削器	47.6	41.8	9.5	16.0	剥？	不等辺三角形	左側縁	×	薄・深・凸・両	×	
70	整地層	複刃削器	60.5	46.6	12.3	34.2	剥？	三角形	×	片面	薄・深・凸・両	先端	
71	整地層	複刃削器	72.1	53.0	17.5	73.9	剥？	台形	表面	片面	薄・深・凸・裏	×	
72	整地層	楔	49.4	60.6	14.7	46.1	横形？	両凸形	基部	×		×	使用によって両縁が潰れている
73	整地層	石包丁	41.0	50.3	5.5	14.4		台形				右半分刃部	緑泥変岩製
74	整地層	石包丁	62.1	40.5	7.9	30.1						両側縁	緑泥変岩製，紐穴外径9.4mm，内径4.4mm
75	溝2	石包丁	42.8	26.6	6.4	12.8						両側縁刃部	結晶変岩製，紐穴外径7.2mm，内径6.3mm
76	整地層	砥石？	73.7	21.6	10.7	22.3						両端	粘板岩製

表26　喜志遺跡出土石器観察表

番号	出土地点	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面調整	外面調整	タガの形状	胎　土	焼成	色調	備考
1	溝　1(第1層)	円筒埴輪	24.4	46.7	20.9	口縁部は斜方向（左→右）のハケ（8～9本／cm），なで	1次調整は縦方向のハケ，2次は横方向のハケ（B種横ハケ）	台　形	砂礫割合5％	良　好	橙　色	
2	溝　1(第1層)	円筒埴輪	21.7	13.2		口縁部は斜方向（右→左）のハケ（7本／cm），なで	1次調整は縦方向のハケ，2次は横方向のハケ（B種横ハケ）	台　形	砂礫割合5％	良　好	黄橙色	口縁部にヘラ記号
3	溝　2(第1層)	円筒埴輪	24.2	16.1		口縁部は斜方向（左→右）のハケ（8～9本／cm），なで	斜方向（左→右）のハケ，横方向のなで	台　形	砂礫割合5％	良　好	橙　色	
4	溝　2(第1層)	円筒埴輪	22.2	13.5		口縁端部は横なで，口縁部は斜方向（左→右）のハケ（7～18本／cm），なで	口縁端部は横なで，斜方向（左→右）のハケ（7～18本／cm）	M字形	砂礫割合10％	良　好	橙色	
5	溝　1(第1層)	円筒埴輪	24.7	14.8		口縁端部は横なで，口縁部は斜方向（左→右）のハケ（10本／cm），なで	口縁端部は横なで，斜方向（左→右）のハケ（10本／cm）	台　形	砂礫割合5％	良　好	橙　色	
6	溝　2(第1層)	円筒埴輪	20.5	10.7		口縁端部は横なで，口縁部は斜方向（左→右）のハケ（7～17本／cm），なで	口縁端部は横なで，斜方向（左→右）のハケ（7～17本／cm）	M字形	砂礫割合10％	良　好	橙　色	
7	溝　2(第1層)	円筒埴輪	23.3	20.8		口縁端部は横なで，口縁部は斜方向（左→右）のハケ（6本／cm），なで	口縁端部は横なで，斜方向（左→右）のハケ（6本／cm）	台　形	砂礫割合10％	良　好	橙　色	
8	溝　1(第1層)	円筒埴輪	21.4	26.5		口縁端部は横なで，口縁部は斜方向（左→右）のハケ（5本／cm），なで	口縁端部は横なで，斜方向（左→右）のハケ（5本／cm）	台　形	砂礫割合5％	良　好	橙　色	口縁部にヘラ記号
9	溝　1(第1層)	円筒埴輪	24.4	24.5		口縁端部は横なで，口縁部は斜方向（左→右）のハケ（5本／cm），なで	口縁部端部は横なで，斜方向（左→右）のハケ（5本／cm）	台　形	砂礫割合20％	良　好	橙　色	
10	溝　2(第1層)	円筒埴輪	25.0	27.4		口縁部は斜方向（右→左）のハケ（5本／cm），なで	口縁端部は横なで，斜方向（左→右）のハケ（5本／cm）	M字形	砂礫割合5％	良　好	橙　色	口縁部にヘラ記号
11	溝　1(第1層)	円筒埴輪	23.0	23.3		口縁端部は横なで，口縁部は板状の工具でなで，なで	口縁端部は横なで，斜方向（左→右）のハケ（6本／cm）	三角形	砂礫割合5％	良　好	橙　色	口縁部にヘラ記号
12	溝　2(第1層)	円筒埴輪	24.5	28.2		口縁端部は横なで，口縁部は板状の工具でなで，なで	口縁端部は横なで，斜方向（左→右）のハケ（5～6本／cm）	三角形	砂礫割合10％	良　好	橙　色	口縁部にヘラ記号
13	溝　1(第1層)	円筒埴輪		8.3	14.6	なで，底端面なで	斜方向（左→右）のハケ（6本／cm）		砂礫割合5％	良　好	明赤褐色	
14	溝　1(第1層)	円筒埴輪		6.6	14.7	なで，底端面未調整	縦方向のハケ（20本／cm）		砂礫割合10％	良　好	橙　色	
15	溝　1(第1層)	円筒埴輪		5.3	14.2	なで，底端面未調整	斜方向（左→右）のハケ（7本／cm）		砂礫割合20％	良　好	橙　色	
16	第2層	円筒埴輪		11.0	17.8	なで，底端面なで	縦方向のハケ（9本／cm）	台　形	砂礫割合10％	良　好	にぶい橙色	
17	溝　1(第1層)	円筒埴輪		5.9	13.3	なで，底端面未調整	縦方向のハケ（5本／cm）		砂礫割合10％	良　好	橙　色	
18	溝　1(第1層)	円筒埴輪		7.3	20.6	なで，底端面未調整	縦方向のハケ（9本／cm）		砂礫割合20％	良　好	橙　色	
19	第2層	円筒埴輪(朝顔)	46.9			口縁部は不定方向のハケ（7～8本／cm），他はなで	口縁部は斜方向（左→右）のハケ（7～8本／cm），他は不定方向のハケ	台　形	砂礫割合10％	良　好	橙　色	
20	溝　2(第1層)	形象埴輪(人物)				まげ部はハケ（8本／cm），頭部はなで，首部はなで	まげ部はハケ（8本／cm）とヘラ状工具で刻み目，頭部はハケの後なで，首部はハケ		砂礫割合5％	良　好	明赤褐色	巫の頭部と肩部
21	溝　1(第1層)	形象埴輪(人物)				なで	なで，ハケ（7～12本／cm）		砂礫割合10％	良　好	橙　色	手
22	溝　1(第1層)	形象埴輪(人物)				なで	なで，ハケ（7～12本／cm）		砂礫割合10％	良　好	橙　色	20の人物の衣装の背中側？
23	溝　1(第1層第2層)	形象埴輪				なで	なで，ハケ（6本／cm）		砂礫割合10％	良　好	橙　色	衣裳？
24	第2層	形象埴輪					なで，ハケ（8本／cm）		砂礫割合10％	良　好	橙　色	みずら？
25	整地層	形象埴輪(武具)				なで	なで		砂礫割合5％	良　好	橙　色	眉庇付冑
26	溝　2(第1層)	不明形象埴輪				なで	なで		砂礫割合10％	良　好	橙　色	
27		形象埴輪(武具)				なで	なで		砂礫割合10％	良　好	橙　色	短甲
28	溝　1(第1層)	形象埴輪(武具)				なで	なで		砂礫割合5％	良　好	橙　色	短甲
29	溝　1(第1層)	形象埴輪(武具)				なで	なで？		砂礫割合10％	良　好	橙　色	草摺
30	第2層	形象埴輪(武具)				なで	なで，ハケ（10本／cm）		砂礫割合10％	良　好	橙　色	盾
31	溝　1(第1層)	形象埴輪(動物)		20.5	12.3	なで	ハケ（10本／cm）		砂礫割合5％	良　好	橙　色	鶏？
32	溝　1(第1層)	形象埴輪(動物？)				なで	なで		砂礫割合10％	良　好	明赤褐色	馬の尾？
33	溝　2(第1層)	形象埴輪(動物)		7.2	8.7	なで	なで		砂礫割合10％	良　好	橙　色	馬の足
34		形象埴輪(器財)				なで	なで		砂礫割合10％	良　好	橙　色	蓋
35		形象埴輪(器財)				なで	なで		砂礫割合10％	良　好	橙　色	蓋
36		形象埴輪(器財)				なで	なで		砂礫割合15％	良　好	黄橙色	蓋
37		形象埴輪(器財)				なで	なで		砂礫割合10％	良　好	橙　色	蓋
38	溝　2(第1層)	形象埴(器財)	13.5			なで	口頸部は横方向のハケ（9本／cm）		砂礫割合10％	良　好	橙　色	蓋
39	溝　2(第1層)	形象埴(器財)	13.2			なで	口頸部は縦方向と横方向のハケ（9本／cm）		砂礫割合10％	良　好	橙　色	蓋
40	溝　2(第2層)	形象埴(器財)	17.9	36.3	16.6	なで	口頸部は縦方向と横方向のハケ（6本／cm）傘部はハケ（6本／cm）体部はなで	三角形	砂礫割合10％	良　好	橙　色	蓋

表27　喜志遺跡出土埴輪観察表

Ⅳ. 中野遺跡

中野遺跡は、市域の中央部に位置し、市内を南北に抜ける東高野街道の東西、中野町から若松町にかけて広がっている。その範囲は、東西約1.1km、南北約0.9kmと広範囲にわたり、石川西岸の中位段丘上に立地している。

本遺跡では1970年代後半から宅地開発が急増し、今回調査地の周辺北西側では、1979年から1982年に行われた分譲住宅建設に伴う調査で弥生時代中期の竪穴住居址群や甕棺墓、6世紀中頃から7世紀中頃の掘立柱建物群などの遺構が検出されている(註1)。また、北側では、1987年から1989年に行われた都市計画道路建設に先立つ調査で弥生時代の井戸や古墳時代の溝とともに、奈良時代から中世にかけて寺院があたったと推測できる塔心礎や礎石と多量の瓦が検出されている。

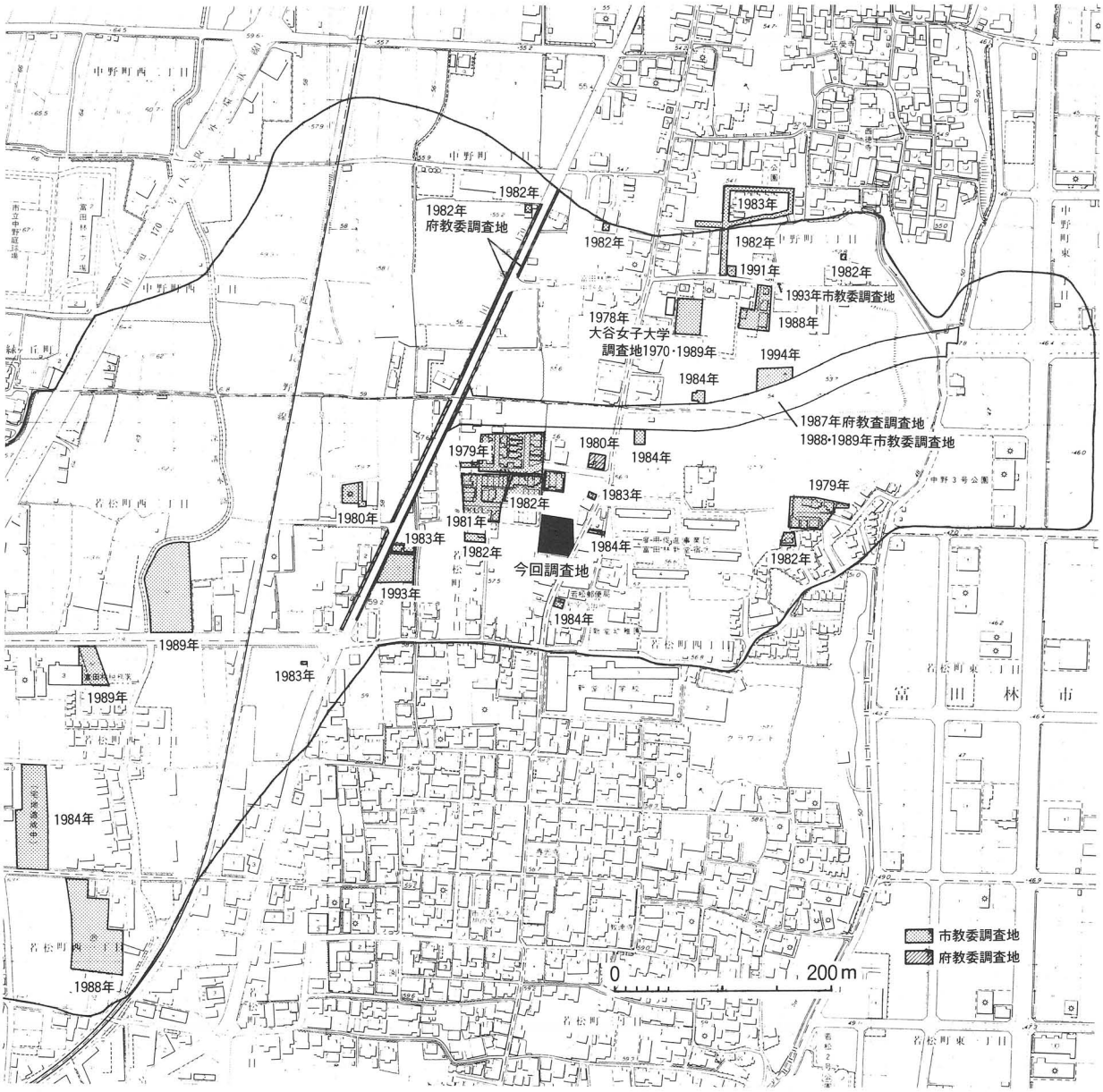


図56　中野遺跡発掘調査地位置図

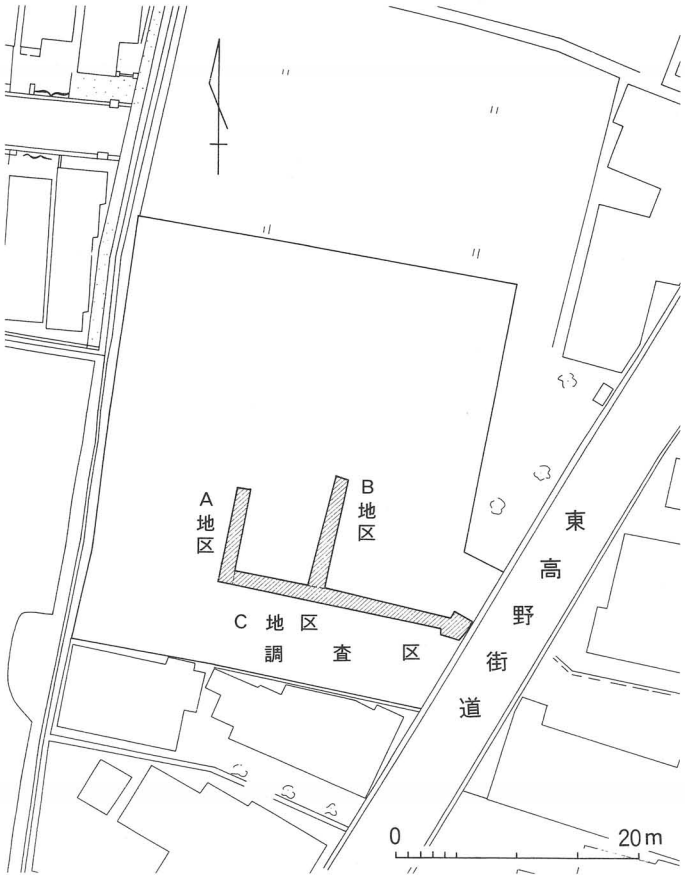


図57　中野遺跡発掘調査区位置図

ＮＮ94－１
調査地：富田林市若松町５丁目629－１他
調査面積：47.1㎡／1160㎡

調査地は、遺跡の中央部にあって、東高野街道の西側に隣接している。現況は、水田である。今回は、共同住宅建設に先立ち地下埋設管の敷設部分の発掘調査を実施した。なお、調査区は、Ｆ字状の地下埋設管部分をＡ～Ｃの地区に分割し調査を行った。

１．層序

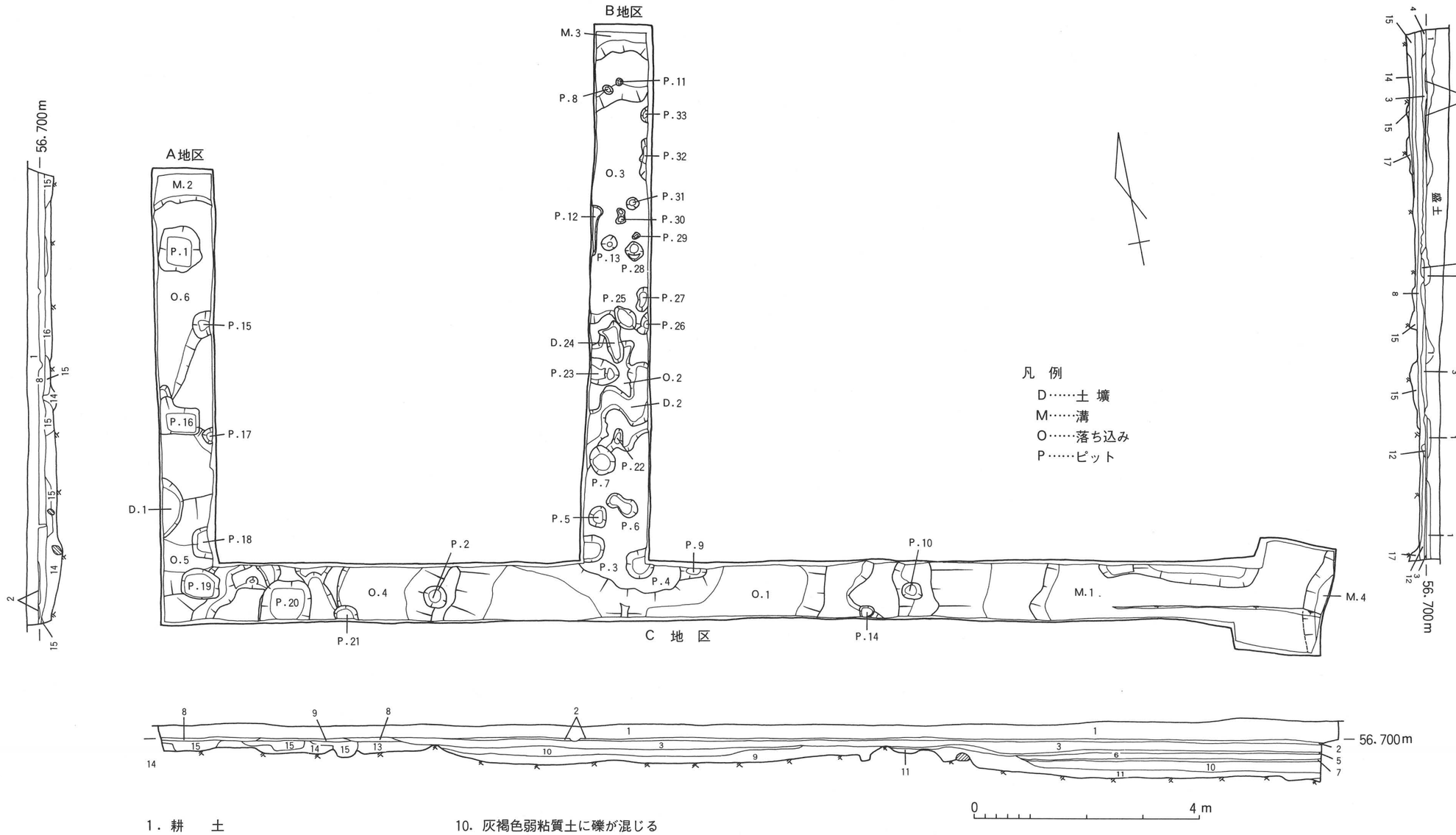
調査区の地形は、東側を北流する石川に向かって緩やかに傾斜しているため、調査区の東側（Ｃ地区）では６層、西側（Ａ地区）では２層の堆積が確認できる。全域に、第１層（耕土・約４～36cm）、所々に第２層（床土・約４cm）が堆積している。東側（Ｃ地区）では、第３層（濁灰褐色土・約２～16cm）、第４層（濁灰黄　色土・約４cm）、第５層（灰褐色土・約14cm）第６層（灰黄色土・約４cm）が堆積している。Ｃ地区西側では第３層の直下に第６層よりも古いと考えられる堆積、第７層（暗褐灰色粘質土・約６cm、あるいは黄灰色粘質土が混じる灰褐色粘質土・約16cm）が堆積している。調査区北側（Ｂ地区）では、第３層（濁灰褐色土が約２～８cm、北側では暗褐色粘質土が混じる濁灰褐色土・約８cm）下に、第７層（暗褐灰色粘質土・約２～12cm）が南に薄く北に厚く堆積している。さらに調査区の北西側（Ａ地区）では第１層（耕土）直下に第７層（暗褐灰色粘質土・約12～18cm）が堆積している。第７層からは弥生時代から奈良時代の遺物が、第５・６層からは弥生時代から中世の遺物が、第３・４層からは弥生時代から近世の遺物が出土している。

２．遺構

溝４条、落ち込み６カ所、土壙２カ所、ピット33カ所検出した。以下、各遺構毎に記述し、ピットについては表28にまとめた。

溝１

Ｃ地区東半部で検出した南北方向の溝である。西側の肩部長さ約0.96m、幅約7.83m分を検出した。深さは約0.49～0.72mを測り、比高差は約0.25mあり北流する。埋土は第１層が灰褐色弱粘質土、第２層が灰色砂礫が混じる暗灰色粘質土、第３層が暗灰色粘質土である。各層に大きな時期差はなく、遺物は弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・土師質土器・瓦質土器・陶器・石器・瓦などが出土している。



1．耕　　土
2．床　　土
3．濁灰褐色土
4．濁灰褐色土に暗褐灰色粘質土が混じる
5．濁灰黄色土
6．灰褐色土
7．灰黄色土
8．暗褐灰色粘質土
9．灰褐色粘質土に黄灰色粘質土が混じる
10．灰褐色弱粘質土に礫が混じる
11．暗灰色粘質土に灰色砂礫が混じる
12．暗灰褐色弱粘質土に礫が混じる
13．黄褐色粘質土に暗褐色粘質土が混じる
14．暗褐色粘質土に黄褐色粘質土が混じる
15．暗褐色粘質土
16．黄褐色粘質土に暗褐色粘質土と礫が混じる
17．暗褐色粘質土に褐色土が混じる

図58　遺構平面図・断面図

溝2

A地区北端で検出した東西方向の溝である。南側の肩部長さ約1.4m、幅約0.62m分を検出した。深さは約0.11mを測り、比高差は約0.04mあり東流する。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は土師器が出土している。

溝3

B地区北端で検出した東西方向の溝である。南側の肩部長さ約0.9m、幅約0.5m分を検出した。深さは約0.1mを測り、比高差は約0.09mあり東流する。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は検出されなかった。

溝4

溝1の底東端部で検出した南北方向の溝である。西側の肩部長さ約1.86m、幅約0.42m分を検出した。深さは約0.18mを測り、比高差は約0.09mあり北流する。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は弥生土器が出土している。

落ち込み1

C地区中央部で検出した。南北方向は調査区外に広がるため正確な規模は不明である。南北方向は幅約1m分を検出し、東西方向は約7.8mを測る不整形な形状を呈し、深さは約0.13m～0.22mを測る。北側肩部をピット9に切られている。また、東側の底でピット14を検出した。埋土は第1層が灰褐色弱粘質土、第2層は礫が混じる暗灰褐色弱粘質土である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・瓦・サヌカイトなどが出土している。

落ち込み2

B地区中央部で検出した。東西方向は調査区外に広がるため正確な規模は不明である。南北方向は幅約2.32mを測り不整形な形状を呈する。深さは約0.05mを測る。遺構の底でさらに土壙2・ピット22～24を検出した。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は土師器・サヌカイトが出土している。

落ち込み3

B地区北半部出検出した。東西方向は調査区外に広がり、北側は溝3に切られているため正確な規模は不明である。南側の肩部長さ約1.2m、幅約5.4m分を検出した。深さは約0.24mを測る。遺構の上層からピット8・11～13が切り込んでいる。また、底でピット25～33を検出した。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・円筒埴輪・砥石・サヌカイトなどが出土している。

落ち込み4

C地区西側で検出した。南北方向は調査区外に広がり、西側はピット21に切られているため正確な規模は不明である。東西方向は幅約0.94m、南北方向は幅約1.9mを検出した。深さは約0.12mを測る。埋土は褐色土が混じる黄褐色粘質土である。遺物は検出されなかった。

落ち込み5

A地区南半部からC地区西端で検出した。四方が調査区外に広がるため正確な規模は不明である。東西方向は幅約3.1m、南北方向には約4.2m分検出した。深さは約0.08～0.3mを測る。遺構の上層から土壙1・ピット16～21が切り込んでいる。埋土は黄褐色粘質土が混じる暗褐色粘質土である。遺物は弥生土器・サヌカイトが出土している。

落ち込み6

A地区北半部で検出した。東西方向は調査区外に広がり、北側は溝2に切られている。南東側で肩を検出しているが、落ち込み5・ピット15に切られていて正確な規模は不明である。南東肩は長さ1.4m、幅は約3.4m分を検出した。深さは約0.13mを測る。遺構の上層からピット1にも切り込まれている。埋土は暗褐色粘質土と礫が混じる黄褐色粘質土である。遺物は石器が出土している。

土壙1

A地区南側で検出し、落ち込み5を切り込んでいる。西側は調査区外に広がるため正確な規模は不明である。南北方向は約1m、東西方向は約0.38mを測る不整形な形状を呈している。深さは約0.09mを測る。埋土は暗褐色粘質土出ある。遺物は検出されなかった。

ピット番号	平面形	規模(m)	深さ(m)	土色・土質	出土遺物
ピット1	不整形	0.82×0.78	0.22	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
2	隅丸方形	0.38×0.4	0.21	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	弥生土器・サヌカイト
3	不整形	0.48×(0.36)	0.09	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
4	不整形	(0.51)×(0.5)	0.14	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
5	不整形	0.39×0.33	0.49	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
6	不整形	0.32×0.58	0.1	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
7	不整形	0.5×0.42	0.28	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	弥生土器・土師器
8	楕円形	0.16×0.2	0.1	暗灰褐色粘質土に褐色土と炭片が混じる	
9	不整形	(0.24)×(0.46)	0.07	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
10	不整形	0.3×0.34	0.08	暗灰褐色粘質土に褐色土が混じる	
11	円形	0.14×0.12	0.09	灰褐色土	
12	不整形	(0.9)×(0.18))	0.03	灰褐色弱粘質土	弥生土器・土師器
13	円形	0.28×0.26	0.14	灰褐色弱粘質土	弥生土器・土師器・須恵器・サヌカイト
14	不整形	(0.2)×0.24	0.2	灰褐色弱粘質土	弥生土器
15	不整形	0.48×(0.28)	0.22	暗褐色粘質土	弥生土器・土師器・サヌカイト
16	不整形	0.66×0.7	0.15	暗褐色粘質土	弥生土器・土師器・須恵器
17	不整形	(0.3)×(0.18)	0.14	暗褐色粘質土	弥生土器
18	不整形	(0.54)×(0.36)	0.14	暗褐色粘質土	須恵器
19	隅丸方形	0.5×0.66	0.14	暗褐色粘質土	弥生土器・土師器
20	不整形	(0.68)×0.88	0.14	炭片を多く含む暗褐色粘質土	弥生土器・サヌカイト・焼土塊
21	不整形	(0.23)×(0.4)	0.15	炭片を含む暗褐色粘質土	弥生土器
22	不整形	0.32×0.2	0.07	暗褐色粘質土に礫が混じる	
23	不整形	0.46×(0.5)	0.15	暗褐色粘質土に礫が混じる	
24	不整形	0.74×0.4	0.09	暗褐色粘質土に礫が混じる	
25	不整形	0.5×0.33	0.16	黒褐色粘質土	
26	不整形	(0.37)×(0.16)	0.11	暗褐色粘質土	
27	不整形	0.44×(0.2)	0.11	暗褐色粘質土	
28	不整形	0.32×0.32	0.1	黒褐色粘質土	
29	不整形	0.1×0.14	0.05	暗褐色粘質土	
30	不整形	0.28×0.16	0.12	暗褐色粘質土	
31	円形	0.22×0.24	0.2	暗褐色粘質土	
32	不整形	(0.74)×(0.12)	0.08	暗褐色粘質土に褐色土が混じる	
33	不整形	(0.3)×(0.14)	0.06	暗褐色粘質土	

表28　中野遺跡ピット一覧表

土壙2

B地区中央落ち込み2の底で検出した。東西方向は調査区外に広がるため正確な規模は不明でる。南北方向は1mを測り、東西方向は約1.2m分を検出した。深さは約0.12mを測る。埋土は礫が混じる暗褐色粘質土である。遺物は検出されなかった。

ピット

ピットは全体で33カ所検出し、そのうち遺構の底から見つかったものは13カ所あった。今回の調査は幅約1m足らずのトレンチ調査であったため建物の復元等はできなかった。各々ピットの状況については表28を参照されたい。

3．出土遺物

今回は地下埋設管の敷設部分の調査ということで出土遺物は、コンテナパット3箱と少ない。出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・統一新羅系土器・土師質土器・瓦質土器・陶器・石器・瓦・サヌカイトなどがある。以下、遺構・包含層・側溝の順に出土遺物を概観する。なお、図化した遺物については、観察表(表29・30)にて記述るする。

溝1出土遺物(図59・60)

弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・土師質土器・瓦質土器・陶器・瓦・サヌカイトが出土している。

弥生土器は、細片で器種の分かるものはない。細片の中には外面に斜線文が施されるものがある。

土師器には、奈良時代の土釜で生駒西麓産のものが1点、中世の小皿(10)が1点ある。

須恵器は、細片で器種の分かるものはない。

韓式系土器は、縄蓆文のあるもの(23)が1点ある。

土師質土器には、摺鉢2点、羽釜3点、甕2点ある。摺鉢はどちらも焼成不良のため土師質を呈しているが、瓦質の河内・和泉型摺鉢と同形態である(註2)。口縁部が直線的に開くタイプA(13)とわずかに内灣して直立するタイプBがある。羽釜は焼成不良のため土師質としているが瓦質の河内D_1タイプと同形態の(17)が1点ある。他は鍔部のみで形態は不明である。甕は口縁部が玉縁状を呈するタイプAと巻き込むタイプBがある。体部外面は平行たたき調整が施されている。

瓦質土器には、火鉢1点、摺鉢3点、羽釜10点、甕1点ある。火鉢は(22)1点ある。摺鉢は河内・和泉型の15世紀代ものである。口縁部の形態は土師質の摺鉢と同様にタイプA(14)2点とタイプBが1点ある。羽釜は河内D_1タイプ3点(18～20)と河内D_2タイプ2点ある。河内D_2の口縁部は段のあるものとないものがある。甕はAタイプのものがある。

陶器は常滑焼の底部が2点ある。上げ底で外底面に離れ砂の付着するタイプ(15)と突出するタイプがある。

瓦は、丸瓦片と平瓦片がある。丸瓦は瓦質のものが2点、平瓦は須恵質のもの1点、瓦質のもの2点ある。平瓦は凸面に離れ砂が付着している。

サヌカイトは、凸刃削器(29)1点、石刃状剥片1点、剥片2点、細部調整剥片2点がある(註3)。

溝２出土遺物

土師器が出土している。細片のため器種が分かるものはない。

溝４出土遺物

弥生土器が出土している。細片のため器種は不明で、いずれも生駒西麓産の胎土である。

落ち込み１出土遺物(図56)

弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・瓦・サヌカイトが出土している。

弥生土器は、器種の分かるものが底部２点、脚部１点ある。底部は平底である。脚部外面には凹線文が２条巡る。細片には生駒西麓産の胎土のものが１点ある。

土師器は、杯が１点、舌状の把手が１点ある。

須恵器は、細片のため器種が分かるものはない。

土師質土器は、Ａタイプの甕(11・12)が１点ある。

瓦質土器には、摺鉢が１点、羽釜が３点ある。摺鉢はＡタイプである。羽釜は口縁片と鍔部があるが、形態は不明である。

陶器は細片が１点ある。

瓦は、巴文軒丸瓦が１点、丸瓦が１点、平瓦が６点ある。巴文軒丸瓦は、煤がべっとりと付着している。丸瓦は土師質で玉縁部分が出土している。平瓦は土師質が２点、須恵質が２点、瓦質が２点ある。いずれのタイプも凸面なで調整と縄目たたき調整があり、離れ砂が付着している。

サヌカイトは、石核が２点、剥片が４点、細部調整剥片が１点ある。

落ち込み２出土遺物

土師器・サヌカイトが出土している。土師器は細片が１点ある。サヌカイトは、横形剥片が１点ある。

落ち込み３出土遺物(図56・57)

弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・サヌカイト・砥石が出土している。

弥生土器は、広口壷が３点、高杯が２点、鉢１点、甕１点、脚部１点、底部１点がある。広口壷は、口縁部が下外方に拡張するタイプＡが１点、上下に大きく拡張するタイプＢが１点、上下にわずかに拡張し、口縁部外面が無紋のタイプＣが１点ある。タイプＢは、生駒西麓産の胎土のものである。高杯は、口縁部が直口のタイプＡが１点、水平口縁をもち口縁部内面に一条の凸帯を巡らすタイプＢが１点ある。タイプＡは、生駒西麓産の胎土のものである。鉢は、生駒西麓産の胎土で口縁部が段状を呈するタイプＢがある。甕は、口縁部が上方にわずかにつまみ上げるように拡張するタイプＡがある。脚部は外面に凹線文を２条巡らすものがある。底部は平底の(３)がある。

土師器は、皿が３点、甑１点ある。皿は口縁端部が巻き込むタイプＡが２点と丸くおさまるタイプＢが１点ある。

須恵器は、杯蓋が１点、脚台１点ある。杯蓋は、口縁端部はわずかに段をなし、天井部と口縁部の境の稜は消滅している。陶邑編年のⅡ型式４段階に比定することができる(註4)。脚台は(９)がある。

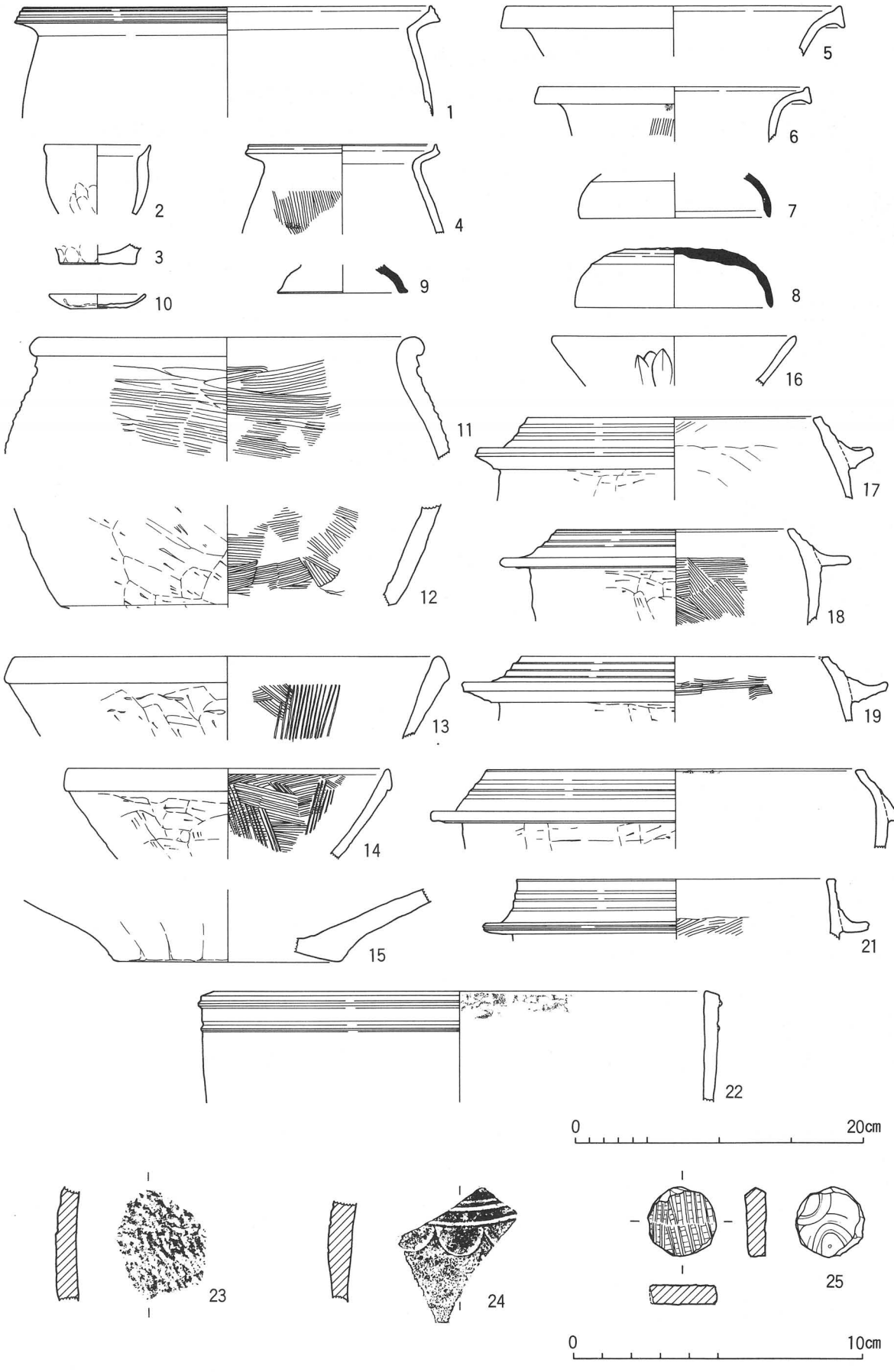

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
0
20cm
23
24
25
0
10cm

図59　出土土器

埴輪は、タテハケ一次調整のみの円筒埴輪が１点ある。
サヌカイトは、横形剥片が２点、剥片が１点、細部調整剥片が１点ある。
砥石(30)が１点ある。両端面を除く４面全面を使用し、材質は凝灰質砂岩の可能性が高い(註5)。

落ち込み５出土遺物(図56)
弥生土器・サヌカイトが出土している。
弥生土器には、口縁部が上下に拡張するタイプＢの甕(１)が１点ある。細片には煤の付着するものや生駒西麓産の胎土のものがある。
サヌカイトは、石核が１点、剥片が１点ある。

落ち込み６出土遺物(図57)
サヌカイトが出土している。サヌカイトは直刃削器(28)が１点ある。

ピット２出土遺物
弥生土器・サヌカイトが出土している。弥生土器は細片のため器種が分かるものはない。サヌカイトは横形剥片が２点ある。

ピット７出土遺物
弥生土器・土師器が出土している。いずれも細片のため器種が分かるものはない。

ピット12出土遺物
弥生土器・土師器が出土している。いずれも細片のため器種が分かるものはない。

ピット13出土遺物
弥生土器・土師器・須恵器・サヌカイトが出土している。弥生土器・土師器・須恵器は細片のため器種が分かるものはない。サヌカイトは横形剥片が１点ある。

ピット14出土遺物
弥生土器の甕が出土している。甕は口縁部が拡張しないタイプＣが１点ある。

ピット15出土遺物
弥生土器・土師器・サヌカイトが出土している。
弥生土器には甕が１点ある。甕は口縁部が欠損し、体部外面を平行たたき調整をなで消している。外面には煤が付着している。
土師器は細片のため器種が分かるものはない。
サヌカイトは剥片が１点ある。

ピット16出土遺物

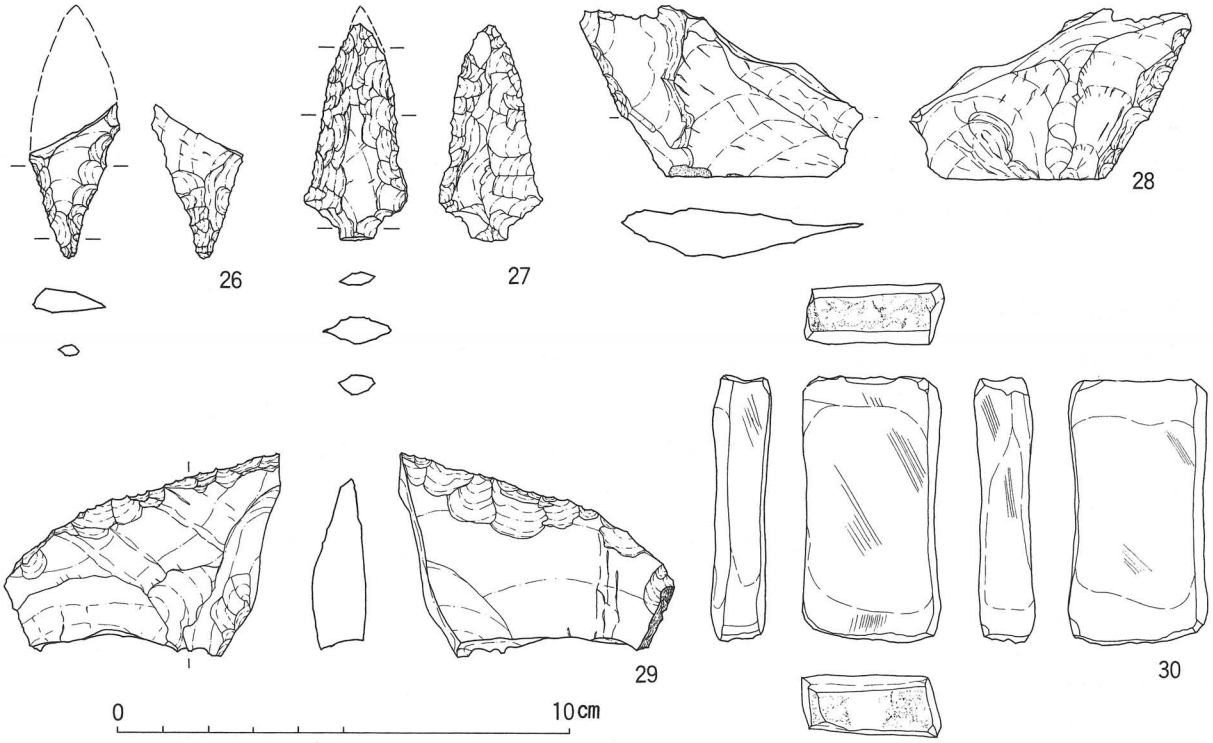


図60　出土石器

弥生土器・土師器・須恵器が出土している。

弥生土器には、広口壷がある。広口壷はタイプAが2点ある。1点はよこなで調整の後、口縁部外面と頸部外面に簾状文を施している。他の1点はよこなで調整の後、口縁部外面に簾状文、内面に円形浮文を2段、頸部外面に縦線文を施し、胎土は生駒西麓産のものである。

土師器は細片のため器種が分かるものはない。

須恵器には、杯蓋が1点あり、口縁端部は内傾する面をもち、天井部と口縁部の境の稜は消滅している。陶邑編年のⅡ型式4段階に比定することができる。

ピット17出土遺物(図56)

弥生土器の鉢が1点と細片が出土している。鉢は口縁部が直口のタイプA(2)である。細片は生駒西麓産の胎土のものが1点ある。

ピット18出土遺物

須恵器が出土しているが、細片であるため器種の分かるものはない。

ピット19出土遺物

弥生土器・土師器が出土している。いずれも細片であるため器種の分かるものはない。

ピット20出土遺物(図56)

弥生土器・サヌカイト・焼土塊が出土している。

弥生土器は、鉢が1点、甕が1点ある。鉢はタイプA、甕はタイプA(4)がある。細片には生駒西麓産の胎土のものが9点ある。また、細片には直線文・簾状文などが施されている。

サヌカイトは、横形剥片が3点、細部調整剥片が1点ある。

ピット21出土遺物

弥生土器の鉢と細片がある。鉢はタイプBが1点ある。口縁部内外面よこなで、体部内面横方向のへらみがき調整が施され、口縁部外面・体部外面に列点文が施文されている。

第7層出土遺物(図56・57)

弥生土器・土師器・須恵器・統一新羅系土器・埴輪・サヌカイトが出土している。

弥生土器は、広口壷・高杯・鉢・蓋・器台・甕・底部がある。広口壷はタイプC(5・6)が3点、口縁部が拡張しないタイプDが1点、口縁部が上方にわずかに下方に大きく拡張するタイプEが1点ある。タイプEの口縁部外面には波状文が施されている。高杯は、タイプAが1点、タイプBが2点ある。タイプAは、口縁部外面に沈線が1条巡る。タイプBは、いずれも口縁部内面の凸帯部分が出土し、生駒西麓産の胎土のものが1点ある。鉢は、体部片が1点あり、外面に棒状浮文が貼り付けられている。蓋は、天井部分1点と口縁部分1点ある。口縁部は上方にわずかに拡張し、円孔が穿たれている。器台は脚部が1点ある。脚部外面には凹線文が5条巡り、円孔が穿たれている。甕は、タイプAが1点、タイプBが2点、タイプCが2点ある。生駒西麓産の胎土のものがタイプB・Cに各々1点ずつある。底部は平底のものが2点、上げ底のものが1点、不明が1点ある。細片には生駒西麓産の胎土のものが28点ある。文様構成は直線文・簾状文のみのもの、直線文と波状文・簾状文と列点文の組合わさったものがある。

土師器は皿・高杯・鉢・土釜・甕・把手が出土している。皿はタイプBが2点ある。高杯は脚柱部が3点ある。鉢は、口縁端部が内傾する凹面をもつタイプのものが1点ある。土釜は生駒西麓産の胎土のもので、口縁部が1点、鍔部が1点ある。甕が5点ある。把手は舌状の把手が1点ある。

須恵器は蓋杯・壷・脚がある。蓋杯には、杯蓋が古墳時代のもの(7・8)が2点、奈良時代の平らな天井部に屈曲して垂下するタイプが1点、古墳時代の杯身が3点ある。壷は短頸壷の口縁部が2点ある。細片にはへら記号のあるものが2点ある。

統一新羅系土器は壷の体部片(24)が1点ある。

埴輪は円筒埴輪が1点ある。凸帯が偏平な台形を呈し、タテハケ一次調整のみのものである。

サヌカイトは、石鏃(26・27)が2点、石核が1点、横形剥片が10点、剥片が9点、細部調整剥片が1点ある。

第5・6層出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・陶器・瓦・サヌカイトが出土している。

弥生土器・土師器は細片のため器種は不明である。

須恵器は蓋杯・底部がある。古墳時代の杯蓋が1点、杯身が1点ある。底部は貼り付け高台の着くものが1点ある。

土師質土器は羽釜・摺鉢・甕がある。羽釜は河内D_2タイプが1点、鍔部片が2点ある。摺鉢はタイプAが1点ある。甕はタイプAが1点、底部が4点ある。

須恵質土器は細片のため器種の分かるものはない。

瓦質土器は羽釜・摺鉢・甕がある。羽釜は河内D_1タイプが2点ある。摺鉢は河内・和泉型のタ

イプAが1点ある。甕はタイプAが1点ある。

陶器は備前焼の壷の口縁部が1点ある。

瓦は平瓦がある。平瓦は土師質が5点、須恵質が1点、瓦質が1点ある。土師質と須恵質のものには凸面を縄目たたき調整するものが各々1点ある。

サヌカイトは、横形剥片が2点、剥片が2点、細部調整剥片が3点ある。

第3・4層出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・製塩土器・瓦・サヌカイト・砥石がある。

弥生土器は広口壷が1点、甕が1点ある。広口壷はタイプC、甕はタイプAがある。細片には生駒西麓産の胎土のものが2点ある。

土師器は皿・高杯・甕がある。皿はタイプAが1点、タイプBが4点ある。高杯の脚が1点、甕が1点ある。

須恵器は杯身・壷・脚がある。杯身は底部に高台のつくタイプ、短頸壷、脚がそれぞれ1点ある。

瓦器・瓦質土器・陶器はいずれも細片で器種の分かるものはない。

磁器は伊万里焼の碗が1点がる。外面に呉須で施文されている。

製塩土器は紀淡海峡産の口縁部片が1点ある。

瓦は軒丸瓦・平瓦がある。軒丸瓦は巴文軒丸瓦が1点ある。平瓦は土師質のものが2点、瓦質のものが2点ある。土師質には凸面縄目たたきのものが1点ある。

サヌカイトは、石核が1点、横形剥片が5点、剥片が3点、細部調整剥片が1点ある。

砥石は1点ある。両端を欠失し、4面全面を使用している。材質は凝灰質砂岩の可能性が高い。

第1層出土遺物

弥生土器・須恵器・土師質土器・瓦・サヌカイト・焼土塊がある。

弥生土器は広口壷・甕・脚部・底部がある。広口壷はタイプEが1点ある。口縁部内面に列点文、頸部外面に直線文が3条施されている。甕はタイプCが1点、口縁部が「く」の字に屈曲し下方に大きく拡張するタイプEが1点ある。タイプEは生駒西麓産の胎土のものである。脚部が生駒西麓産のものが1点ある。底部は平底が1点、上げ底が2点ある。

須恵器は古墳時代の杯身が1点、奈良時代のものが1点ある。

土師質土器は細片で器種は不明である。

瓦は銀化している平瓦が2点ある。

サヌカイトは、横形剥片が2点、細部調整剥片が1点ある。

側溝出土遺物(図56)

弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・陶器・青磁・瓦・サヌカイト・石皿・焼土塊が出土している。

弥生土器は広口壷・甕がある。広口壷はタイプAが1点、タイプCが2点ある。タイプAは口縁部外面に刺突文が施されている。タイプCは紐孔のあるものが1点ある。甕はタイプAが1点ある。

土師器は杯・鉢・土釜・甕がある。杯はタイプAが1点ある。鉢は口縁端部が内傾する面をもつタイプが1点ある。土釜は生駒西麓産の胎土の鍔部片が1点ある。甕は4点ある。

須恵器は蓋杯・甕・土製円盤・脚部がある。蓋杯は古墳時代の杯蓋が1点、奈良時代が1点、杯身は古墳時代のものが1点ある。甕は1点ある。土製円盤(25)は甕の体部片を転用したもので1点ある。脚部は1点ある。

土師質土器は摺鉢・羽釜が出土している。摺鉢は片口部分が1点、羽釜は河内D_2タイプが1点ある。

須恵質土器は東播系のこね鉢が1点ある。

瓦質土器は羽釜・摺鉢が出土している。羽釜は河内D_2(21)が2点、摺鉢は河内・和泉型のタイプAが1点ある。

陶器は細片のため器種の分かるものはない。

青磁は、龍泉窯系の碗(16)が1点ある。

瓦は、平瓦が2点ある。1点は須恵質で凸面に縄目たたきが施され、他の1点は瓦質で凸面に離れ砂が付着している。

サヌカイトは、石核が1点、横形剥片が6点、剥片が2点、細部調整剥片が2点ある。

石皿は1点ある。和泉砂岩製で、163×(142.5)×42.7mmを測り、周縁部には煤が付着している。

4．まとめ

今回は、共同住宅建設に伴う地下埋設管の敷設部分の調査で、幅約1mのトレンチ調査であったため、遺構の性格等は検討できなかった。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・統一新羅系土器・土師質土器・瓦質土器・陶器・石器・瓦などがある。弥生土器は、既往の調査で出土しているものと変わらず、弥生時代中期(第Ⅲ様式～第Ⅳ様式)に比定できるものである。中世の遺物には、15世紀代の羽釜・摺鉢・青磁・瓦などがあるが、これらの遺物の中には、調査地の北側の調査で出土したものと同様に煤の付着する瓦が含まれている。この他、統一新羅系土器が1点、包含層(第7層)から出土しているが、このことは調査地の周辺で検出された飛鳥時代以降の掘立柱建物群・奈良時代から中世に至る寺院跡などの遺構との関連を示唆させる。

(田川友美)

(註)

1．中辻亘・忍薫(1982)「Ⅴ　まとめ」『中野遺跡発掘調査概要Ⅲ』富田林市教育委員会

2．中世土器の器種分類・名称については次の菅原正明氏の論文によった。
菅原正明(1989)「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民族博物館研究報告』第19集

3．剥片分類については山中一郎氏の定義に従った。
山中一郎(1978)「4森の宮遺跡出土の石器について」『森の宮遺跡　第3・4次発掘調査報告書』難波宮址顕彰会　124～147頁

4．中村浩(1978)『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会第30輯　大阪府教育委員会

5．石材の種類は大阪府立富田林高等学校の森山義博氏に鑑定していただいた。

番号	器種	遺構・層位	法量(cm) 口径	器高	底径	裾径	鍔部径	技法	紋様	色調	胎土	備考
1	甕B	落ち込み5	28.3	7.7	−	−	−	−	口縁部外面：凹線文	内：浅黄橙色 外：灰白色	粗	弥生土器
2	鉢A	ピット7	7.3	4.9	−	−	−	口縁部外面：よこなで 体部外面：なで下に一部指頭圧痕	− −	内：橙色 外：橙色	やや良	弥生土器
3	底部	落ち込み3	−	5.1	1.5	−	−	−	−	内：灰白色 外：橙色	良	弥生土器
4	甕A	ピット20	13.0	6.3	−	−	−	口縁部：よこなで 体部外面：刷毛目（斜方向）	−	内：黄灰色 外：灰黄褐色	やや粗	体部外面：煤付着 弥生土器
5	広口壺C	第7層	23.1	3.5	−	−	−	−	−	内：明黄褐色 外：にぶい橙色	やや良	弥生土器
6	広口壺C	第7層	18.8	3.8	−	−	−	口縁部外面：よこなで　頸部外面：刷毛目をよこなで調整でなで消し	−	内：灰白色 外：橙色	粗	頸部外面：煤付着 弥生土器
7	杯蓋	第7層	13.2	3.1	−	−	−	口縁部天井部内面：回転なで　天井部外面：回転へら削り（左回り）	−	内：灰白色 外：灰色	密	Ⅱ型式4段階 須恵器
8	杯蓋	第7層	13.6	4.1	−	−	−	口縁部：回転なで　天井部外面：回転へら削り（左回り）　天井部内面：回転なでの後一定方向のなで	−	内：明青灰色 外：青灰色	密	Ⅱ型式4段階 須恵器
9	脚部	落ち込み3	−	2.0	−	8.9	−	内外面：回転なで	−	内：青灰色 外：青灰色	密	須恵器
10	小皿	溝1	6.7	1.0	−	−	−	口縁部面：よこなで　体部内面：刷毛目の後なで　体部外面：なで下に指頭圧痕	−	内：浅黄橙色 外：浅黄橙色	良	土師器
11	甕	落ち込み1	26.2	8.6	−	−	−	口縁部：よこなで　体部外面：平行たたき　体部内面：刷毛目	−	内：赤灰色 外：灰白色	やや粗	12と同一個体 土師質土器
12	甕	落ち込み1	−	7.1	−	−	−	外面：へら削り（斜方向）　内面：刷毛目を一部なで消し	−	内：褐灰色 外：灰白色	やや粗	11と同一個体 土師質土器
13	摺鉢	溝1	29.4	5.8	−	−	−	体部外面：へら削り（斜方向）　体部内面：刷毛目	−	内：黒褐色 外：灰白色	やや良	摺目4本/cm河内・和泉型　土師質土器
14	摺鉢	溝1	22.2	6.3	−	−	−	口縁部：よこなで　体部外面：へら削り（不定方向）体部内面：刷毛目	−	内：黒色 外：黒色	やや良	摺目6本/cm河内・和泉型　瓦質土器
15	底部	溝1	−	5.1	15.3	−	−	底部外面：なで	−	内：灰赤色 外：暗赤褐色	密	外底面ハナレ砂付着 常滑焼
16	碗	側溝	16.8	3.5	−	−	−	−	片切彫りによる連弁	内：明緑灰色 外：明緑灰色	密	龍泉窯系の青磁
17	羽釜	溝1	20.3	5.8	−	−	27.7	口縁部外面鍔部：よこなで　口縁部内面：刷毛目の後よこなで　体部外面：へら削り（横方向）体部内面：なで	−	内：灰褐色 外：黒褐色	粗	河内D1 土師質土器
18	羽釜	溝1	16.3	6.7	−	−	24.3	口縁部鍔部：よこなで　体部外面：へら削り(不定方向)　体部内面：刷毛目	−	内：緑灰色 外：暗緑灰色	良	河内D1 瓦質土器
19	羽釜	溝1	21.3	4.5	−	−	29.5	口縁部外面鍔部：よこなで　口縁部内面：刷毛目をよこなで調整でなで消し　体部外面：へら削り（横方向）　体部内面：なで	−	内：灰白色 外：灰白色	やや良	河内D1 瓦質土器
20	羽釜	溝1	26.1	5.5	−	−	34.0	口縁部鍔部：よこなで　体部外面：へら削り（横方向）	−	内：灰白色 外：灰色	やや粗	河内D1 瓦質土器
21	羽釜	側溝	22.2	4.2	−	−	26.9	口縁部鍔部：よこなで　体部外面：へら削り 体部内面：刷毛目	−	内：黒褐色 外：黒褐色	やや粗	河内D2 瓦質土器
22	火鉢	溝1	34.3	7.7	−	−	−	口縁部外面：よこなで	口縁部外面：貼付け凸帯（2条）	内：黒褐色 外：黒褐色	粗	瓦質土器
23	−	溝1	−	4.3	−	−	−	内面：なで	外面：沈線（一条） 縄席文	内：淡橙色 外：浅黄橙色	やや良	韓式系土器
24	−	第7層	−	4.6	−	−	−	回転なで	外面：凹線（2条） 二重半円形スタンプ文	内：青灰色 外：灰色	密	統一新羅系土器
25	土製円盤	側溝		2.4	−	−	−	外面：格子風平行たたき　内面：同心円たたき	−	内：灰白色 外：明青灰色	密	須恵器

表29　中野遺跡出土土器観察表

番号	器種	遺構・層位	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	材質	素材の形態	中央断面形	先行剥離面	主剥離面	原面	調整	整形	備考
26	石鏃	第7層	34.1	19.2	5.4	サヌカイト	横形剥片	五角形	○	○		両面	非極厚両	凸基式　先端欠損
27	石鏃	第7層	47.4	22.5	6.1	サヌカイト	横形剥片	五角形	○	○		両面	非極厚両	有茎式　先端欠損
28	直刃削器	落ち込み6	37.5	62.4	11.5	サヌカイト	原面打面の剥片	三角形	○	○	基端部	両面	平深直両	ツインバルブ
29	凸刃削器	溝1	42.0	60.7	12.3	サヌカイト	−	三角形	○	○	左側面	両面	薄深凸両	
30	砥石	落ち込み3	57.9	31.0	13.6	凝灰質砂岩？	−	−	−	−	−	−	−	両端を除く4面を使用

表30　中野遺跡出土石器観察表

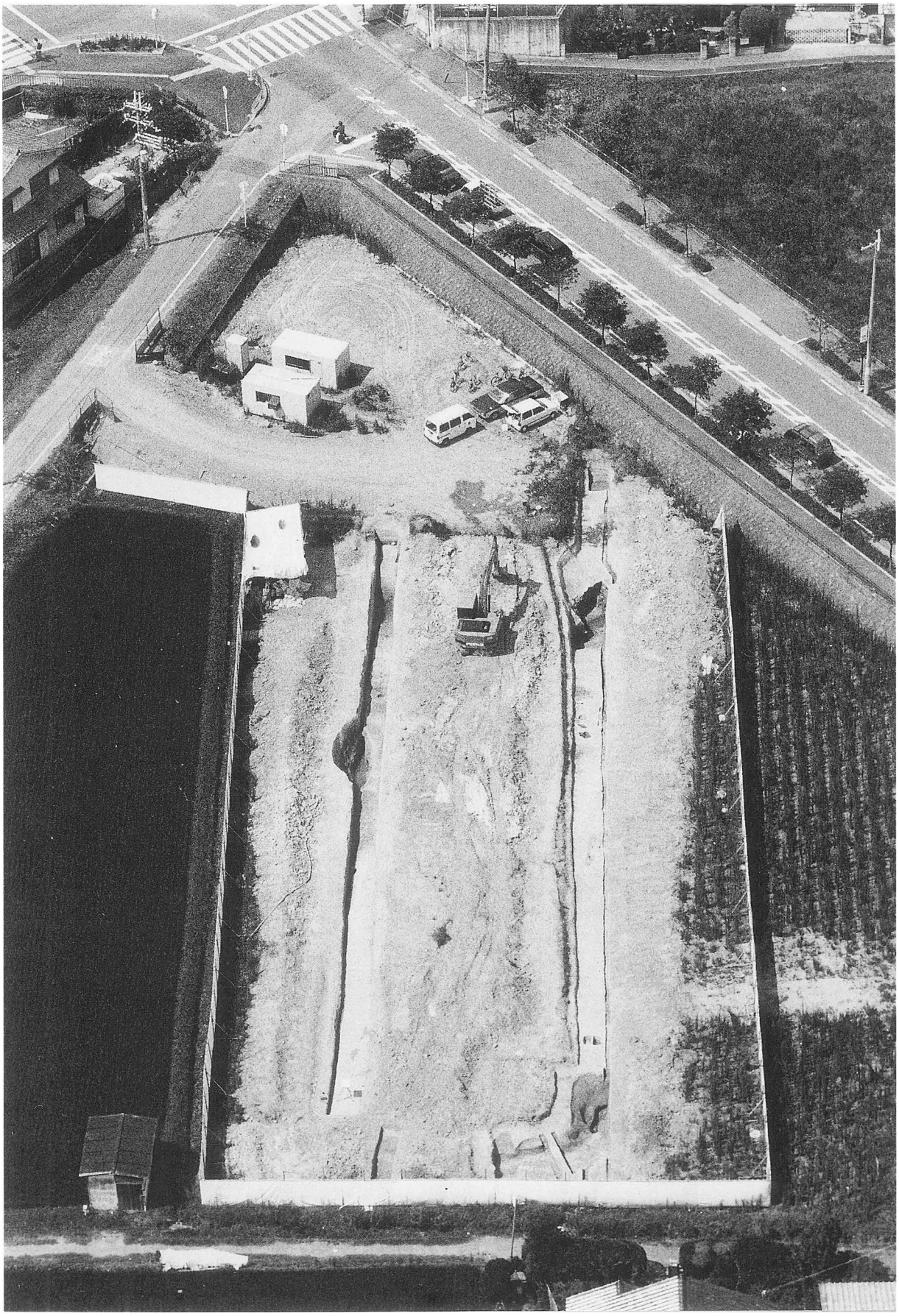
報告書抄録

ふりがな	へいせい6ねんど　とんだばやししないいせきぐんはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成6年度　富田林市内遺跡群発掘調査報告書
副書名	富田林市埋蔵文化財調査報告26
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著書名	中辻　亘・栗田　薫・田川友美
編集機関	富田林市教育委員会
所在地	大阪府富田林市常盤町1番1号　☎0721－24－1451
発行年月日	西暦　1995年3月

ふりがな 所収遺跡名		コード 市町村	 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
えびたにいせき 毛人谷遺跡	おおさかふとんだばやしし 大阪府富田林市 ことぶきちょうにちょうめ 寿町2丁目	27214		34° 30′ 53″	135° 35′ 53″	1994.7.11 ～ 1994.8.5	252.32	共同住宅建設
きしいせき 喜志遺跡	おおさかふとんだばやしし 大阪府富田林市 きどやまちょう 木戸山町	27214		34° 31′ 22″	135° 36′ 54″	1994.9.5 ～ 1994.10.8	233.35	分譲住宅建設
なかのいせき 中野遺跡	おおさかふとんだばやしし 大阪府富田林市 わかまつちょうごちょうめ 若松町5丁目	27214		34° 30′ 24″	135° 36′ 48″	1994.12.15 ～ 1994.12.28	47.1	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
毛人谷遺跡	その他	縄文時代 古墳時代	河道	石器・土師器・須恵器	
喜志遺跡	その他	弥生時代 古墳時代 平安時代	溝 土壙	弥生土器・石器・埴輪 土師器	開析谷
中野遺跡	集落遺跡	弥生時代～ 古墳時代	溝・落ち込み 土壙	弥生土器・サヌカイト 土師器・須恵器・石器	
	〃	室町時代	溝・落ち込み ピット	土師質土器・瓦質土器	

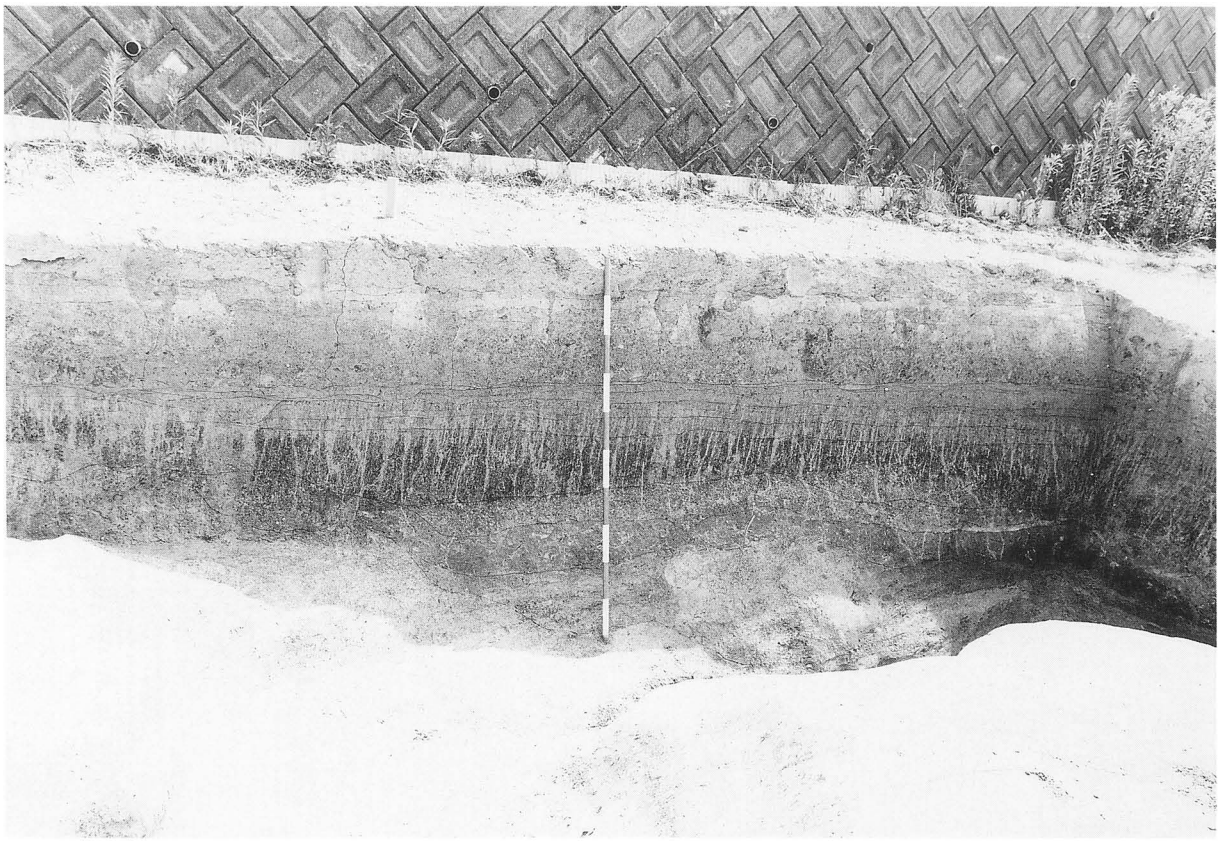
図　　版



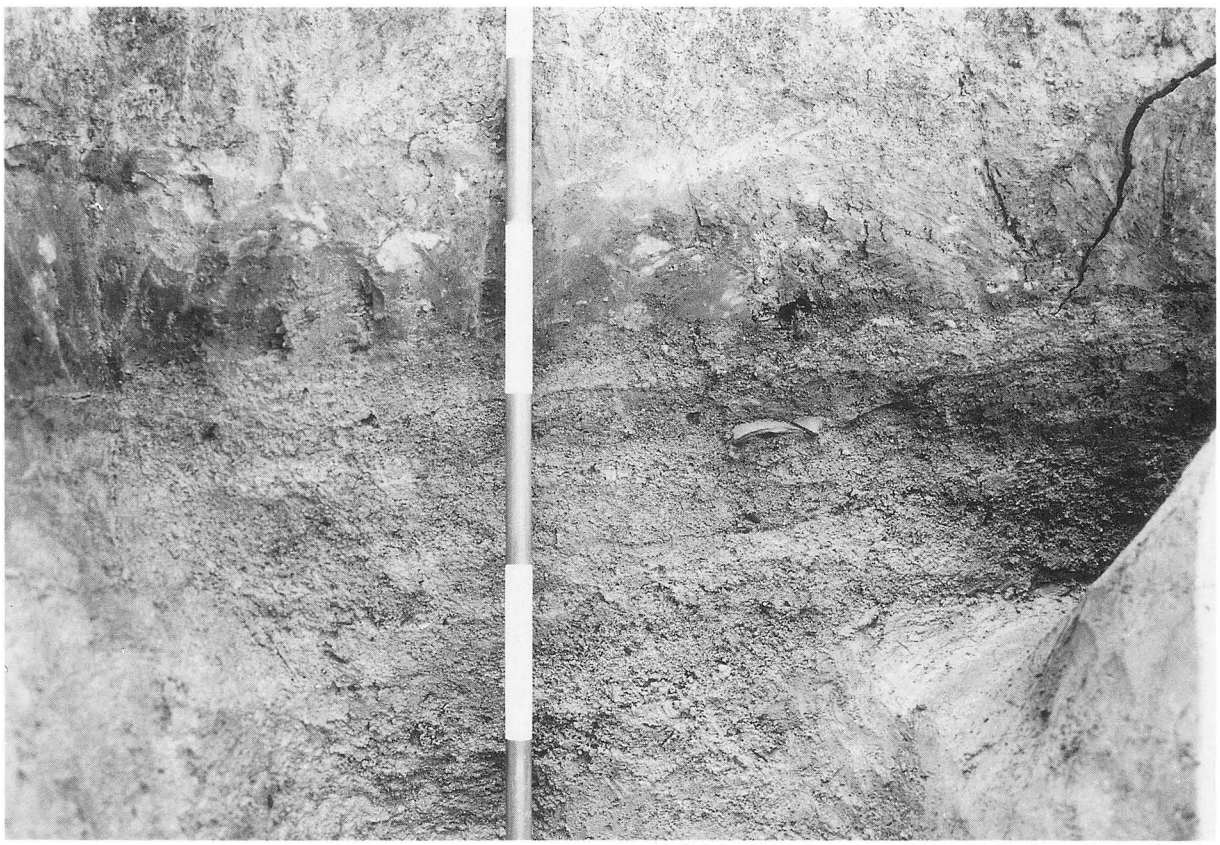
毛人谷遺跡（ＥＴ94）調査地全景航空写真　南から

ＥＴ94　第１トレンチ全景　北東から

ＥＴ94　同　上　東から

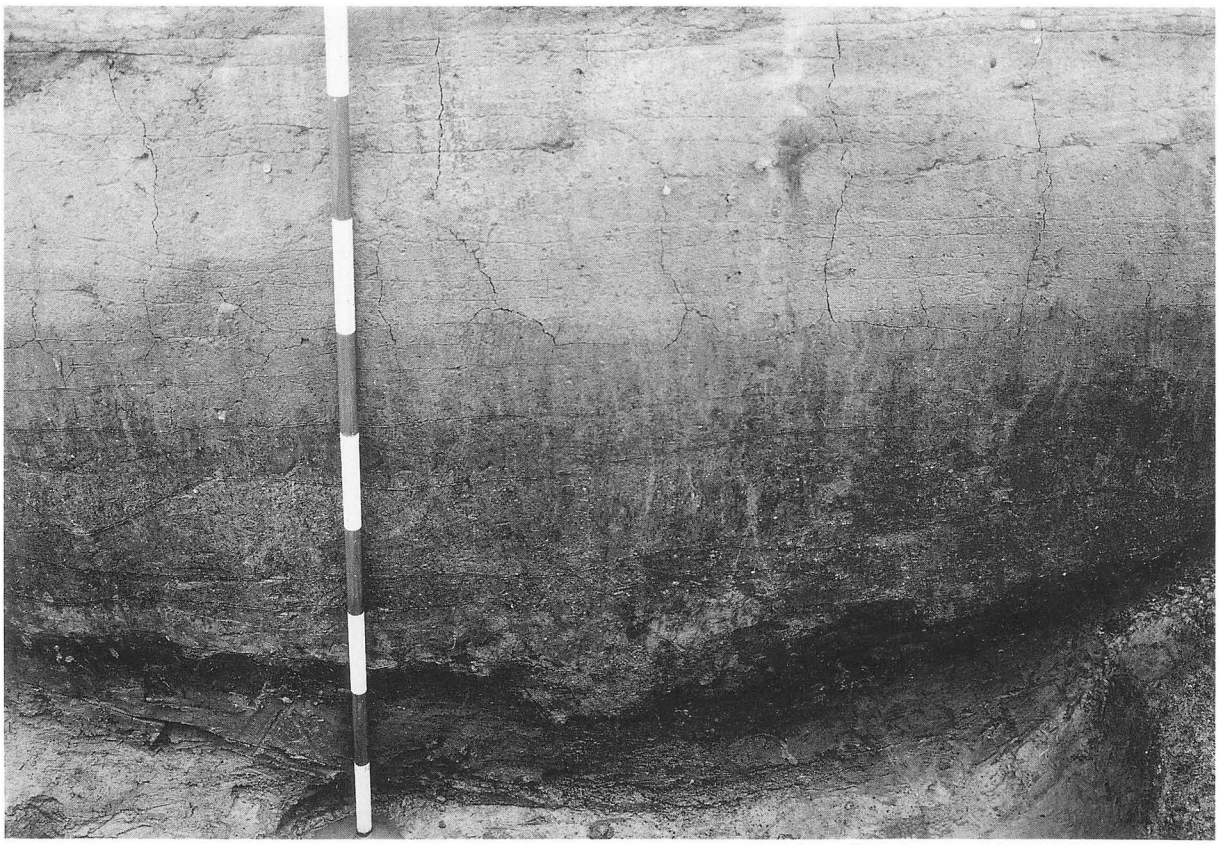


ＥＴ94　第１トレンチ北断面　南西から

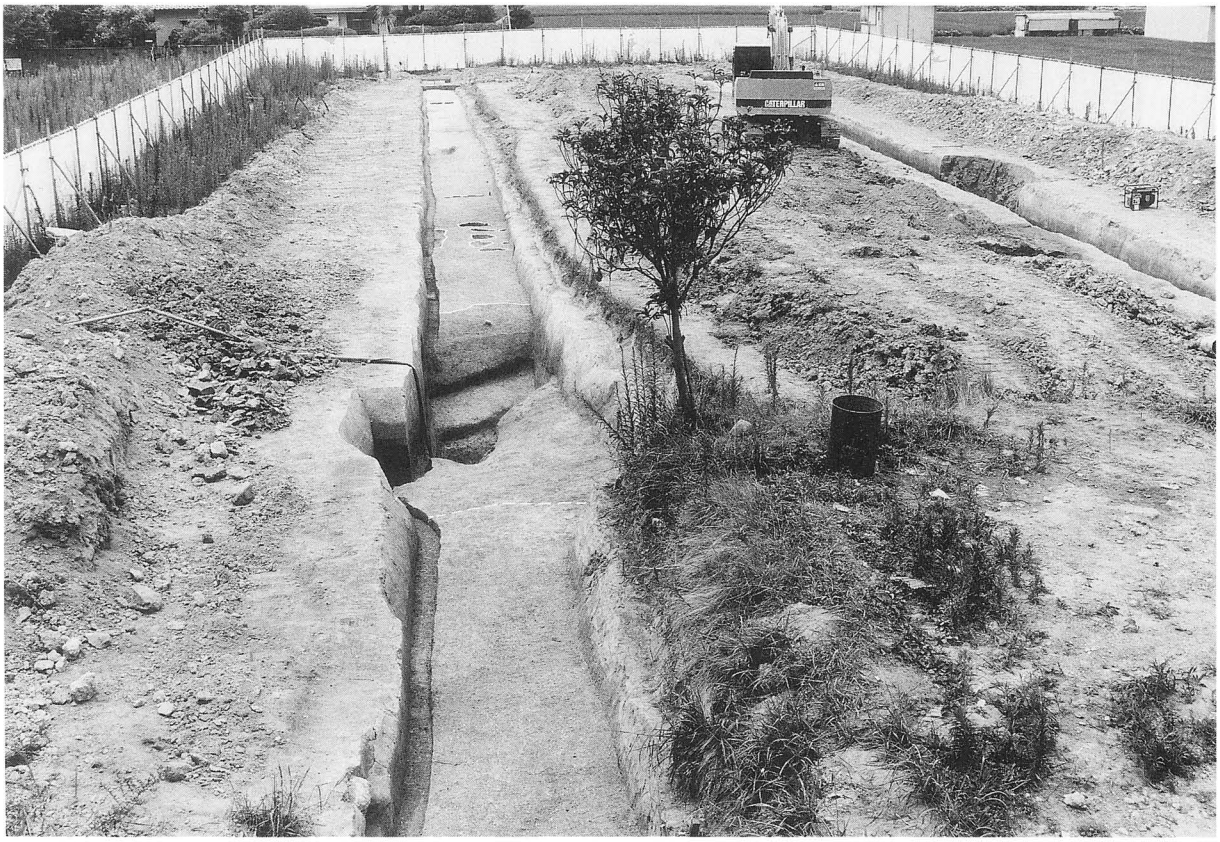


ＥＴ94　第１トレンチ北断面遺物出土状況　南から

ＥＴ94　第２トレンチ全景　北から

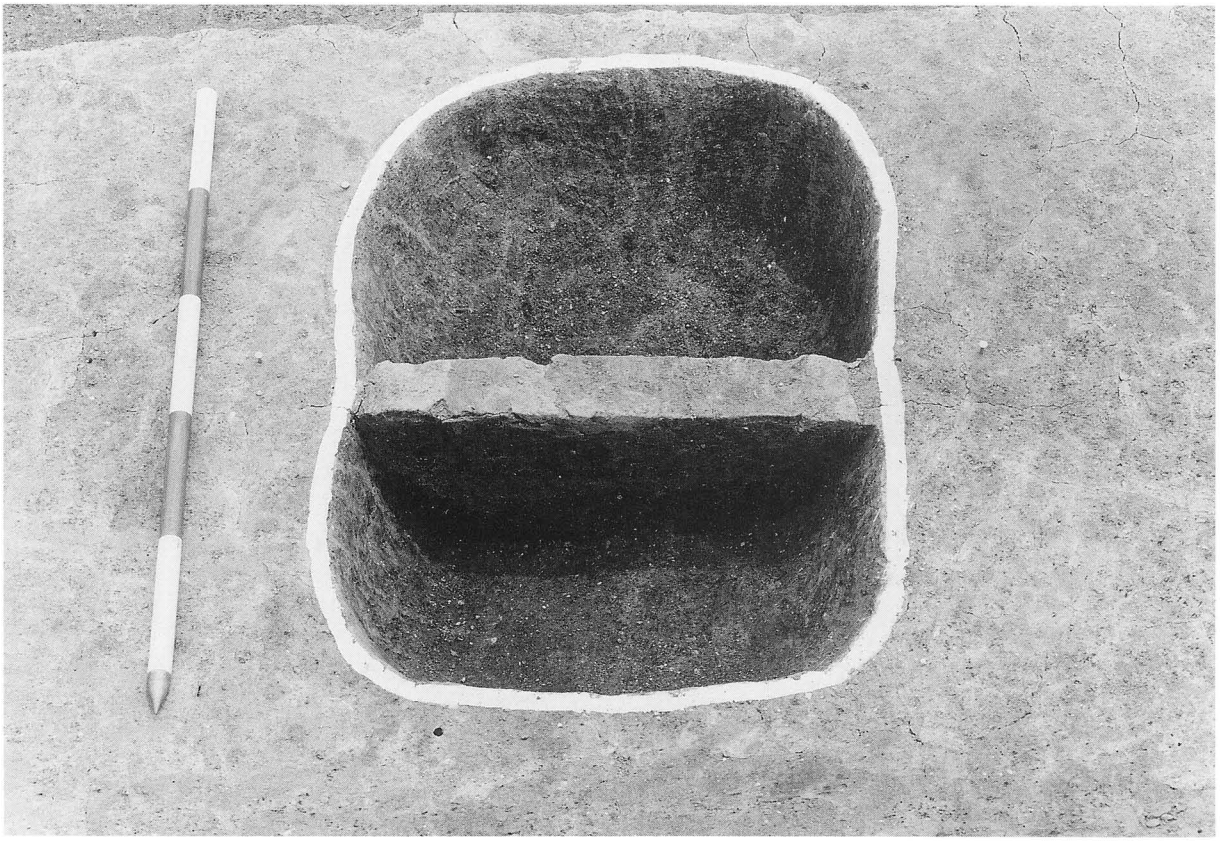


ＥＴ94　第２トレンチ河道２断面　東から



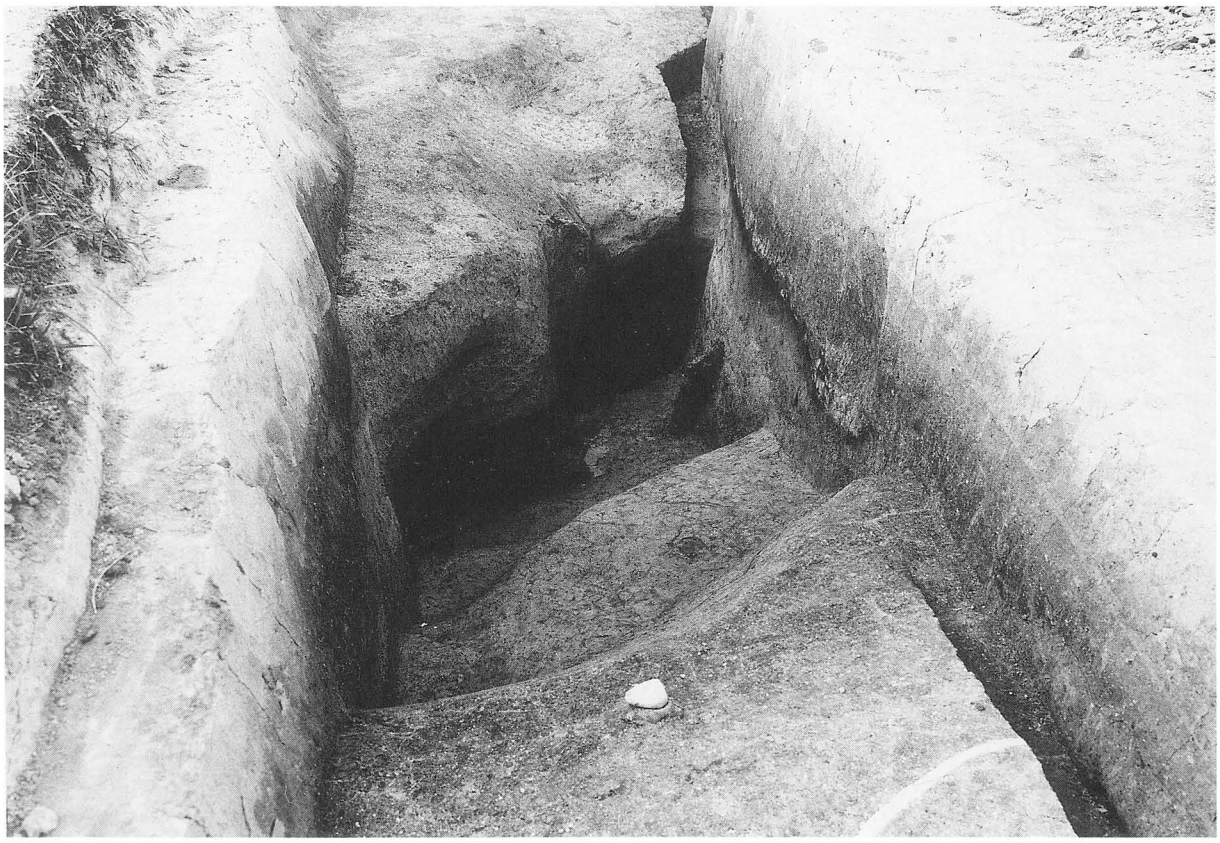
ＥＴ94　第３トレンチ全景　北から

ＥＴ94　同　上　南から

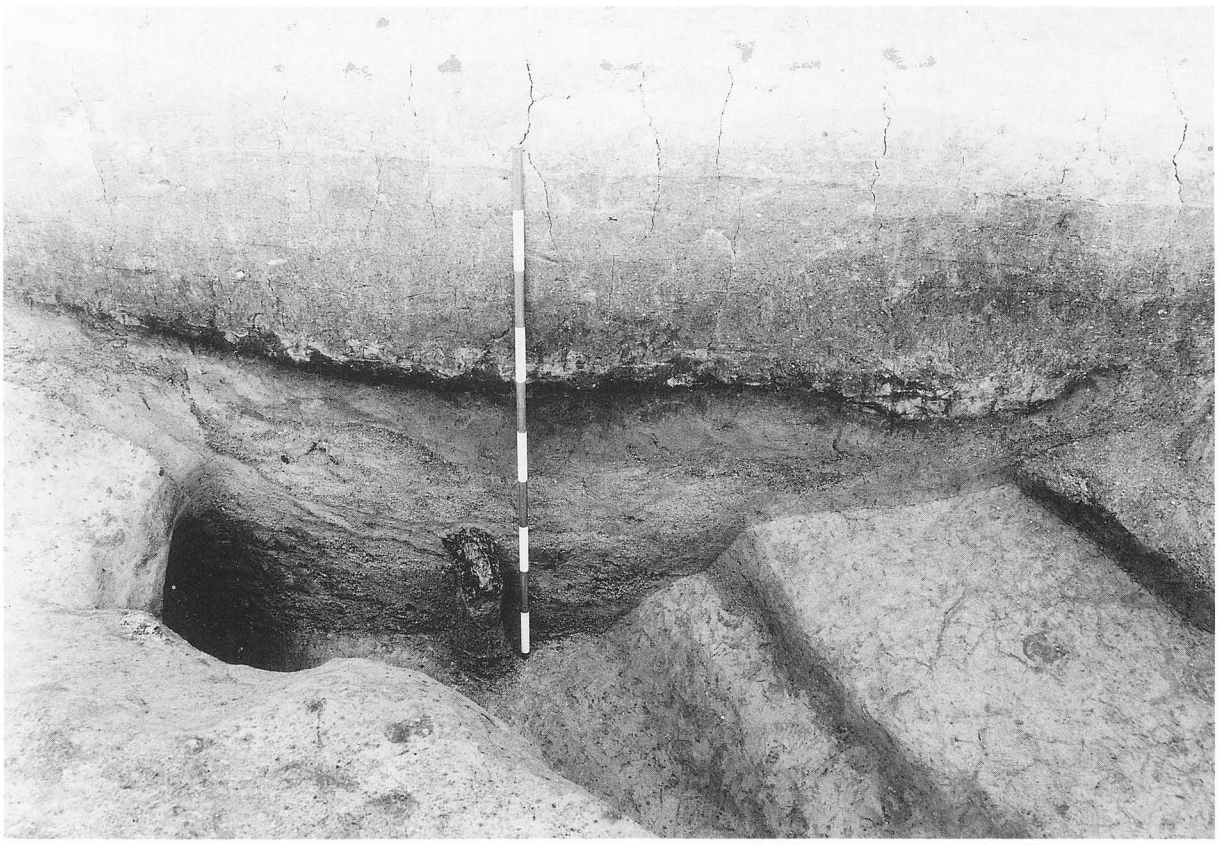


ＥＴ94　第３トレンチ土壙２全景　西から

ＥＴ94　第３トレンチピット群　南から

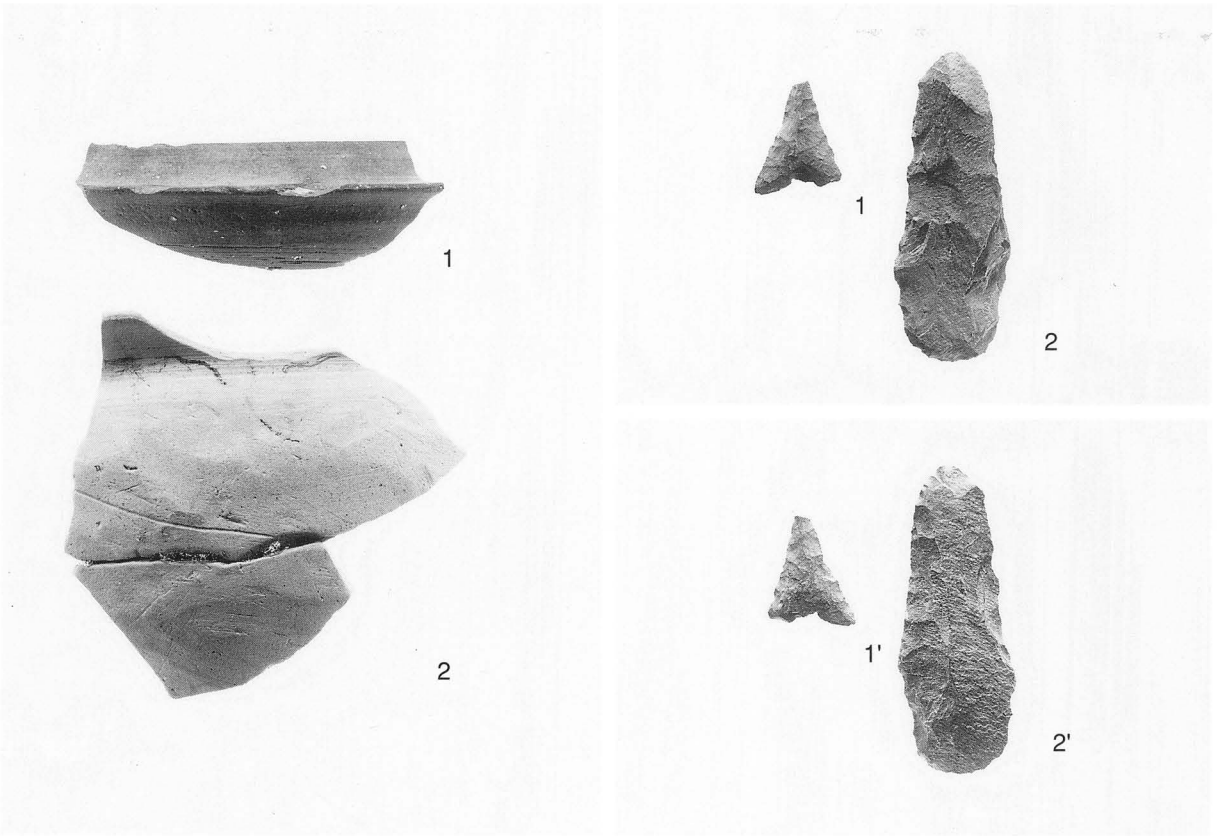


ＥＴ94　第３トレンチ河道２全景　南から



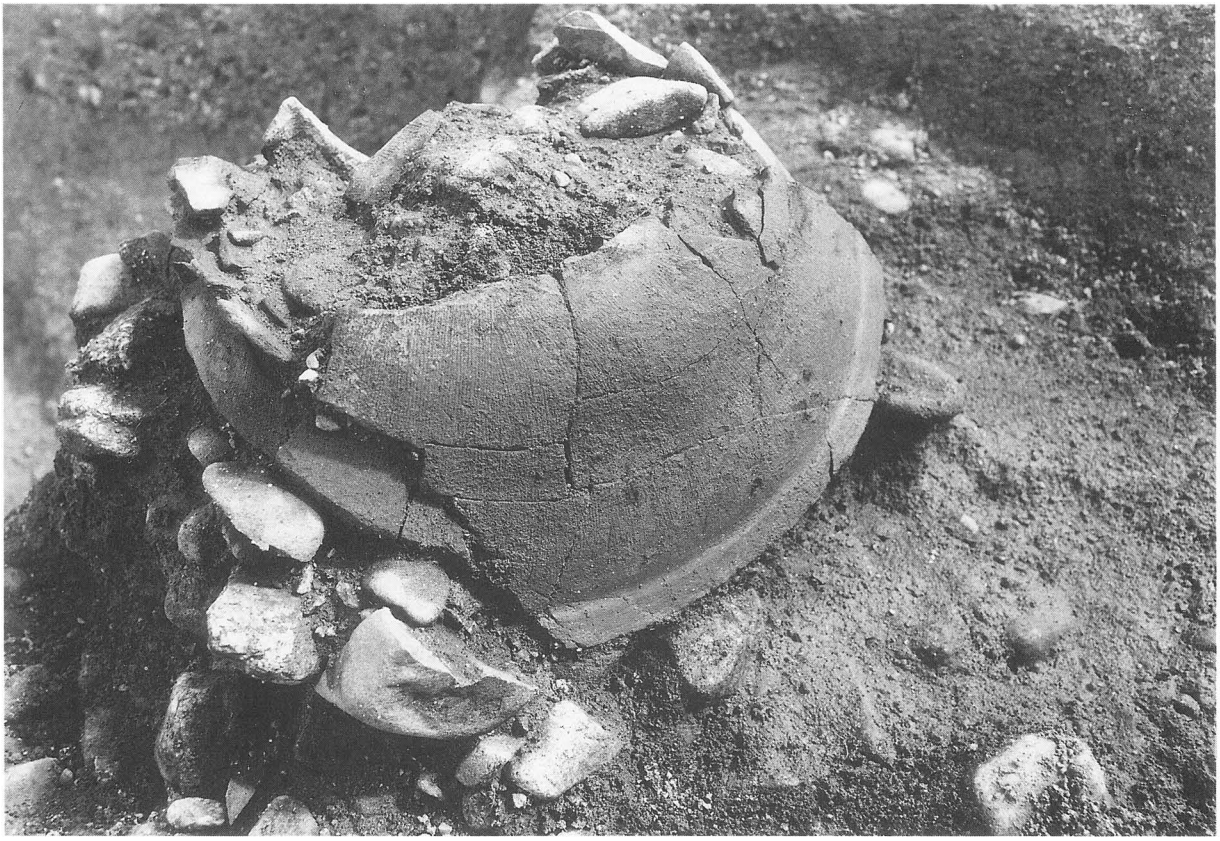
ＥＴ94　第３トレンチ河道２断面　西から

ＥＴ94　第３トレンチ下層流路断面　南西から

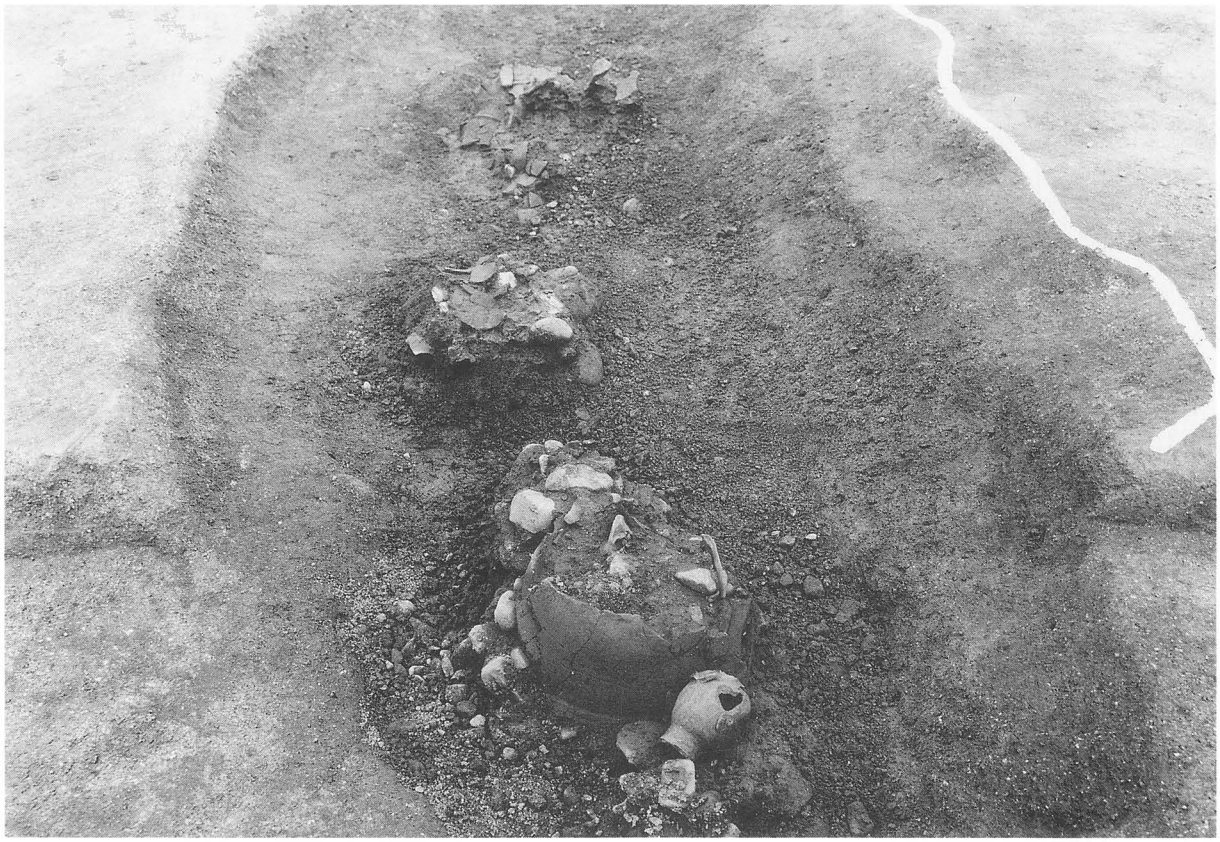


ＥＴ94　出土遺物

喜志遺跡（ＫＳ94）調査地周辺航空写真　東から

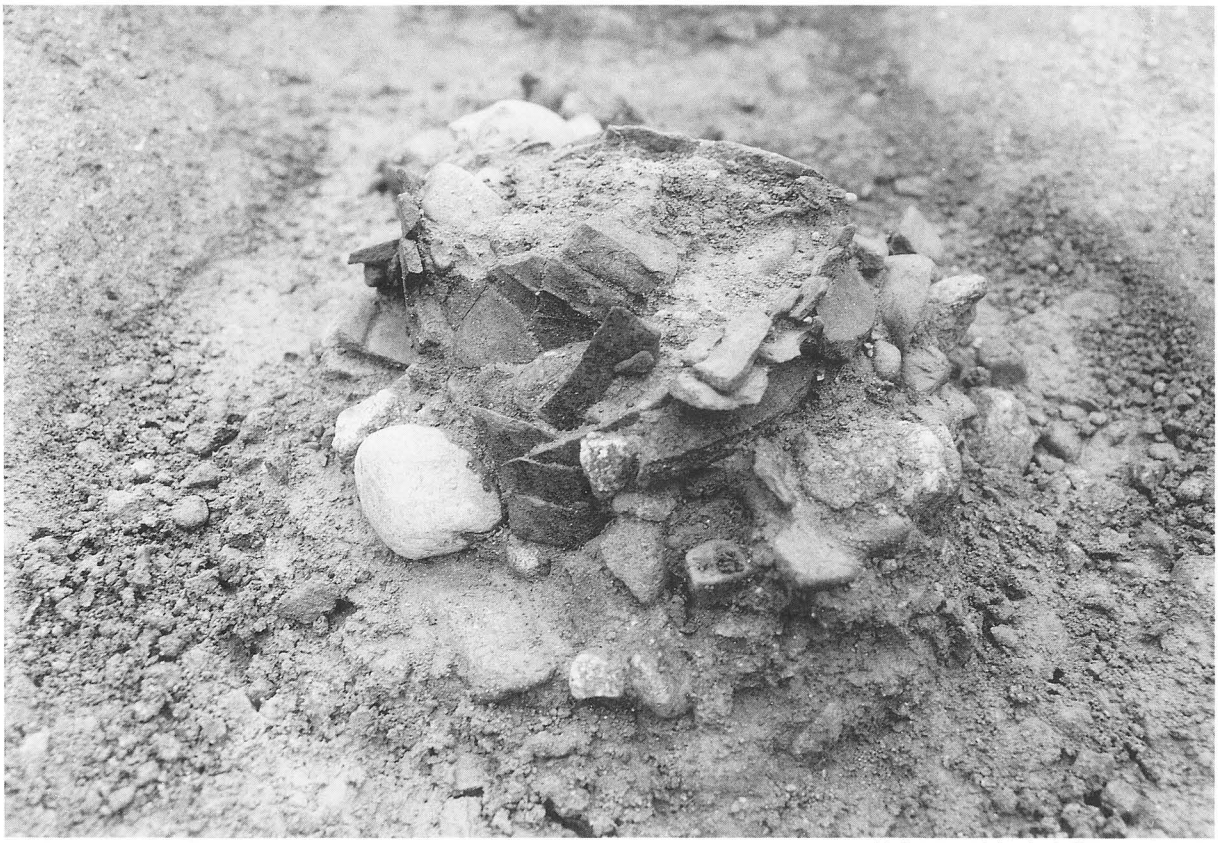


ＫＳ94　溝１　蓋形埴輪出土状況　北から



ＫＳ94　溝１　埴輪出土状況　西から

ＫＳ94　溝１　遺物出土状況　西から



ＫＳ94　埴輪出土状況　東から

ＫＳ94　溝１　人物埴輪出土状況　南から

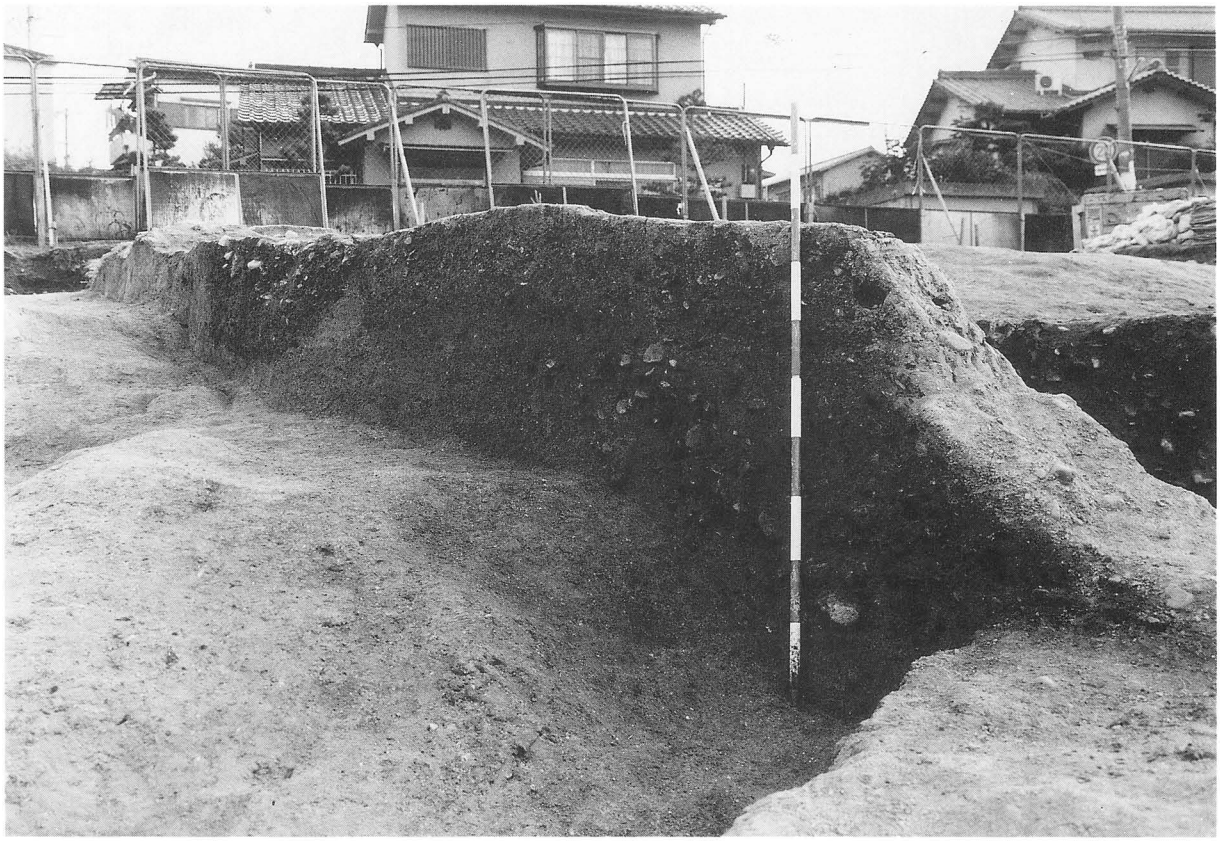
ＫＳ94　同　上　北から

KS94　溝1断面　東から

KS94　溝1全景　東から

ＫＳ94　土壙１　土師器小皿出土状況　北から

ＫＳ94　土壙１断面　北から



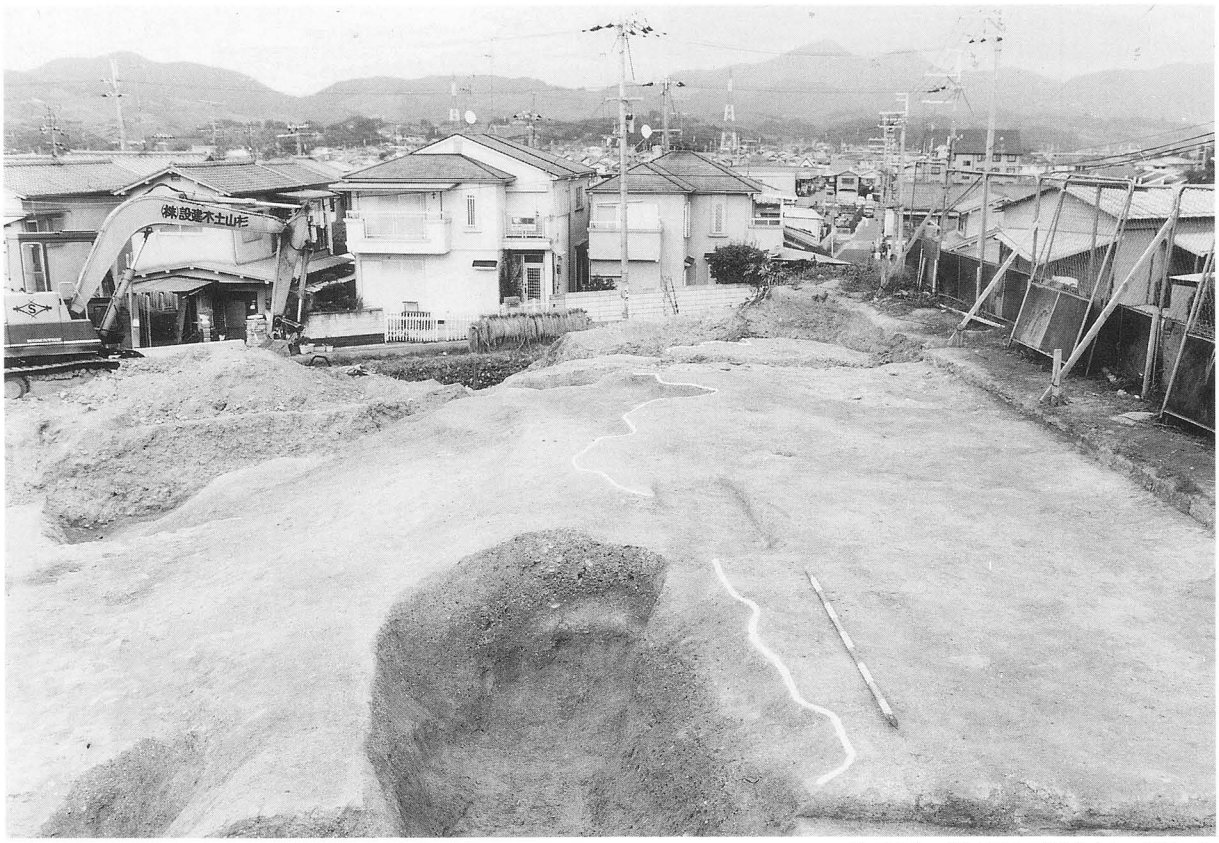
ＫＳ94　溝２南北断面　北東から

ＫＳ94　溝２東西断面　北から

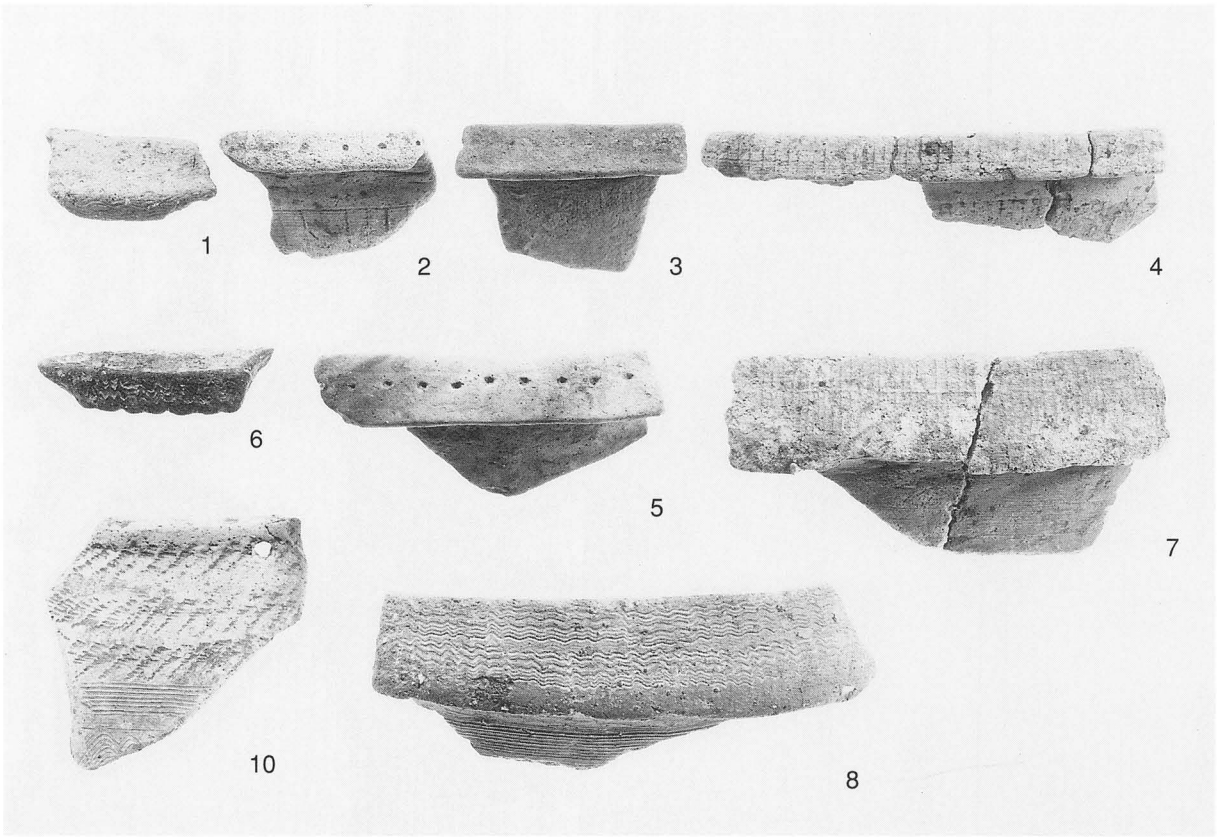
ＫＳ94　溝２南北トレンチ全景　南から

ＫＳ94　溝２東西トレンチ全景　西から

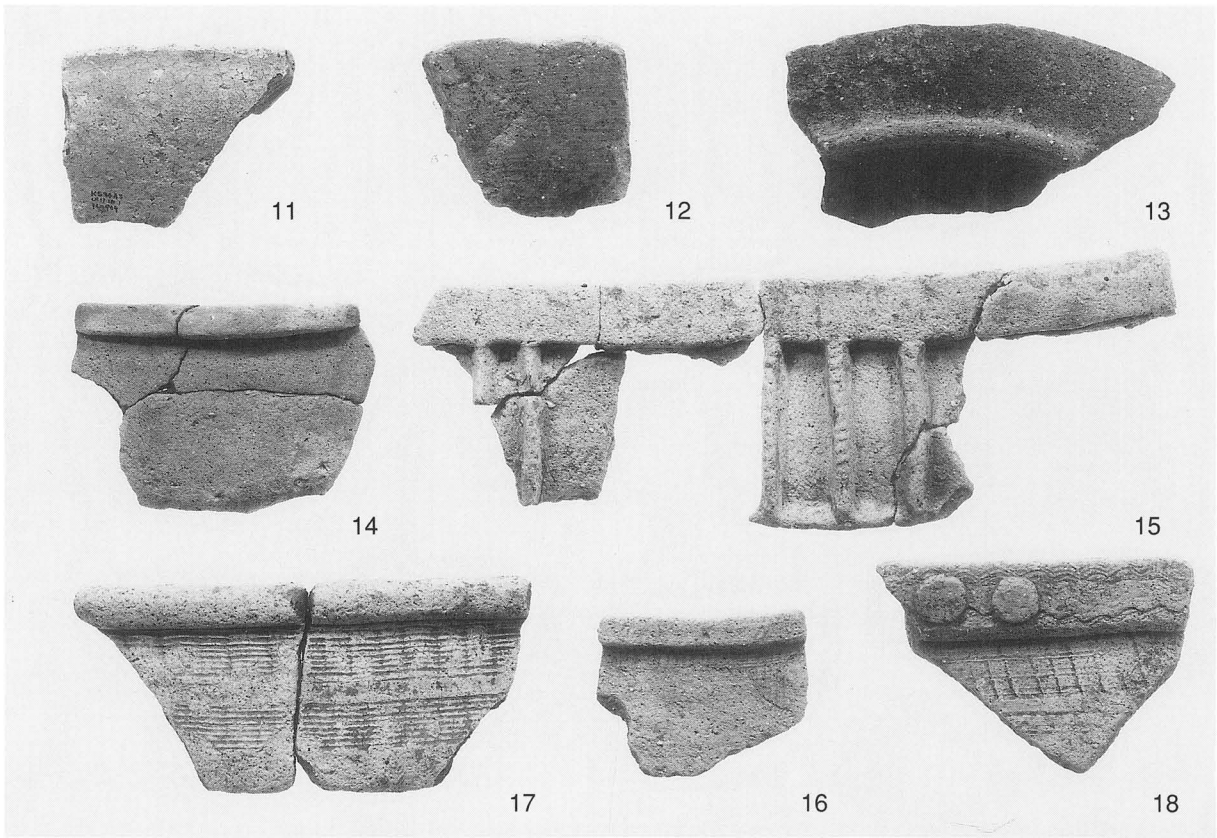
ＫＳ94　調査区全景　北から



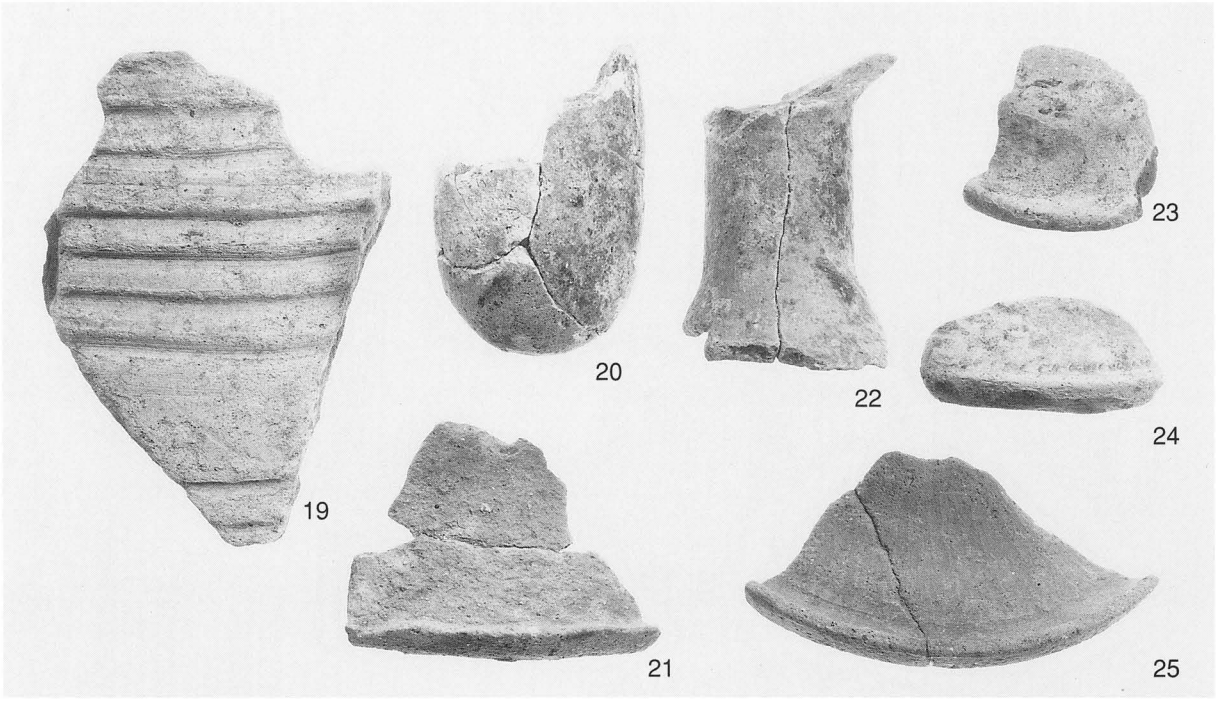
ＫＳ94　調査区南部全景　西から



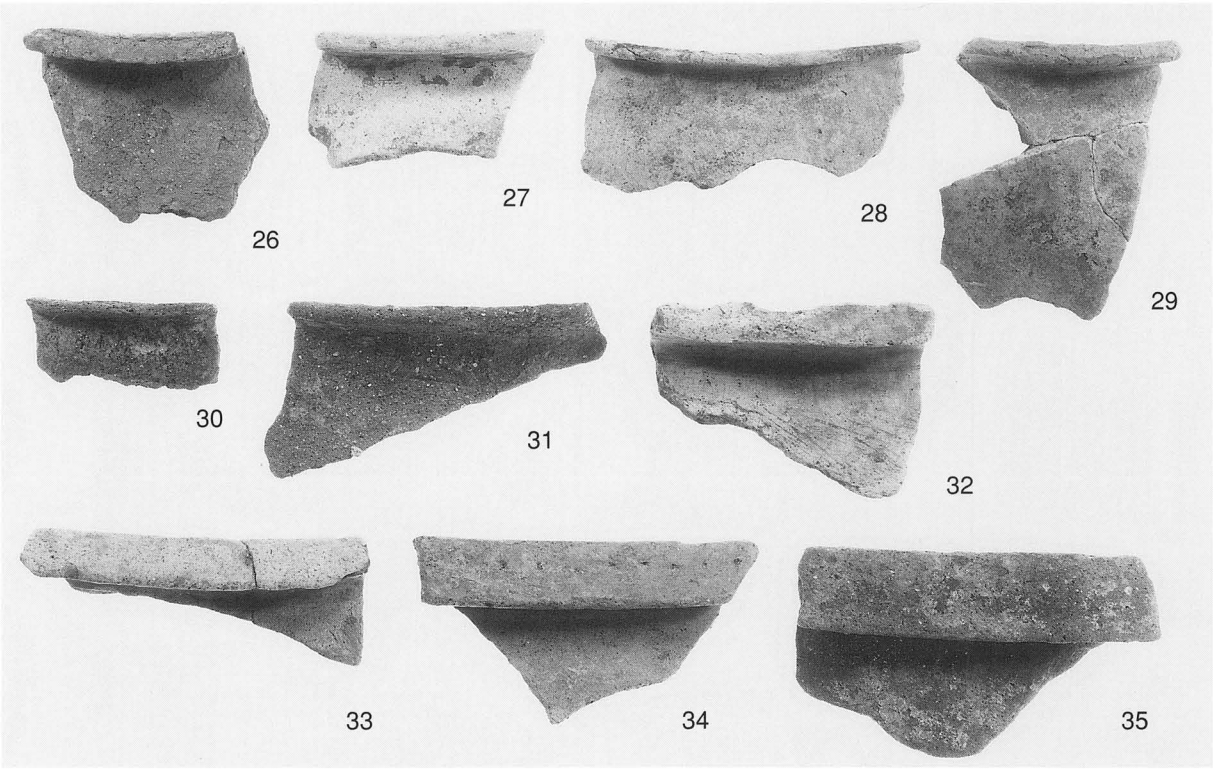
K S94　弥生土器（広口壷，無頸壷）



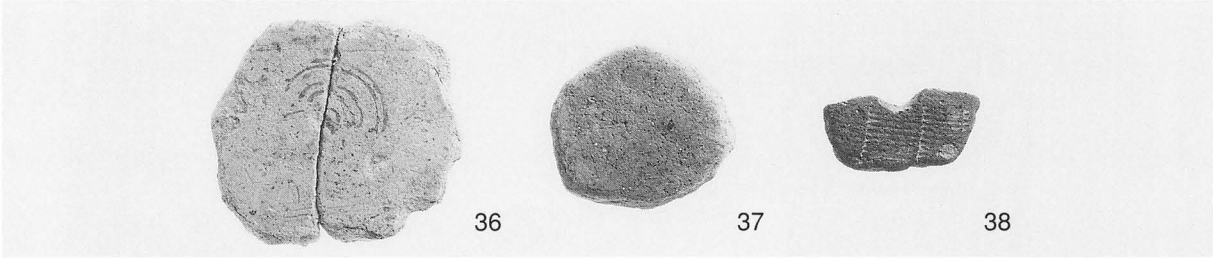
K S94　弥生土器（高杯，鉢）



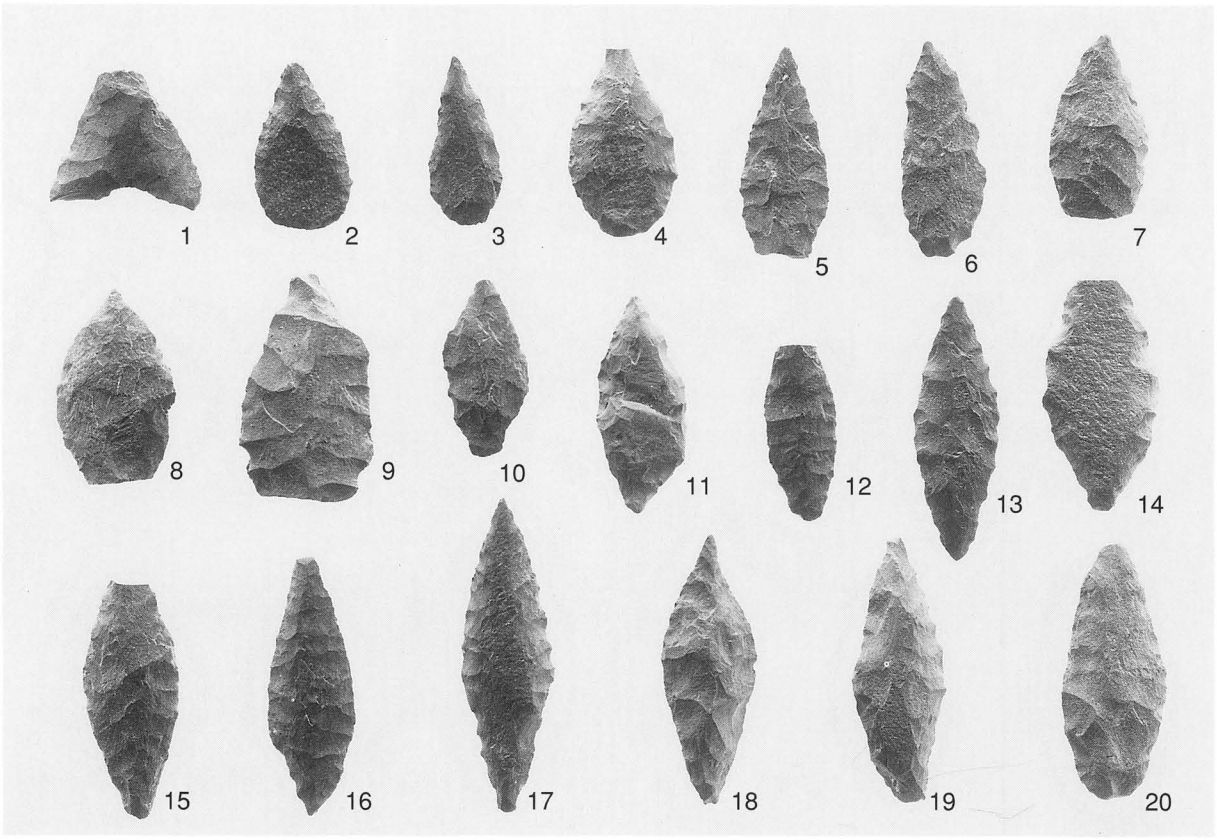
KS94　弥生土器（器台，蛸壺，台部）



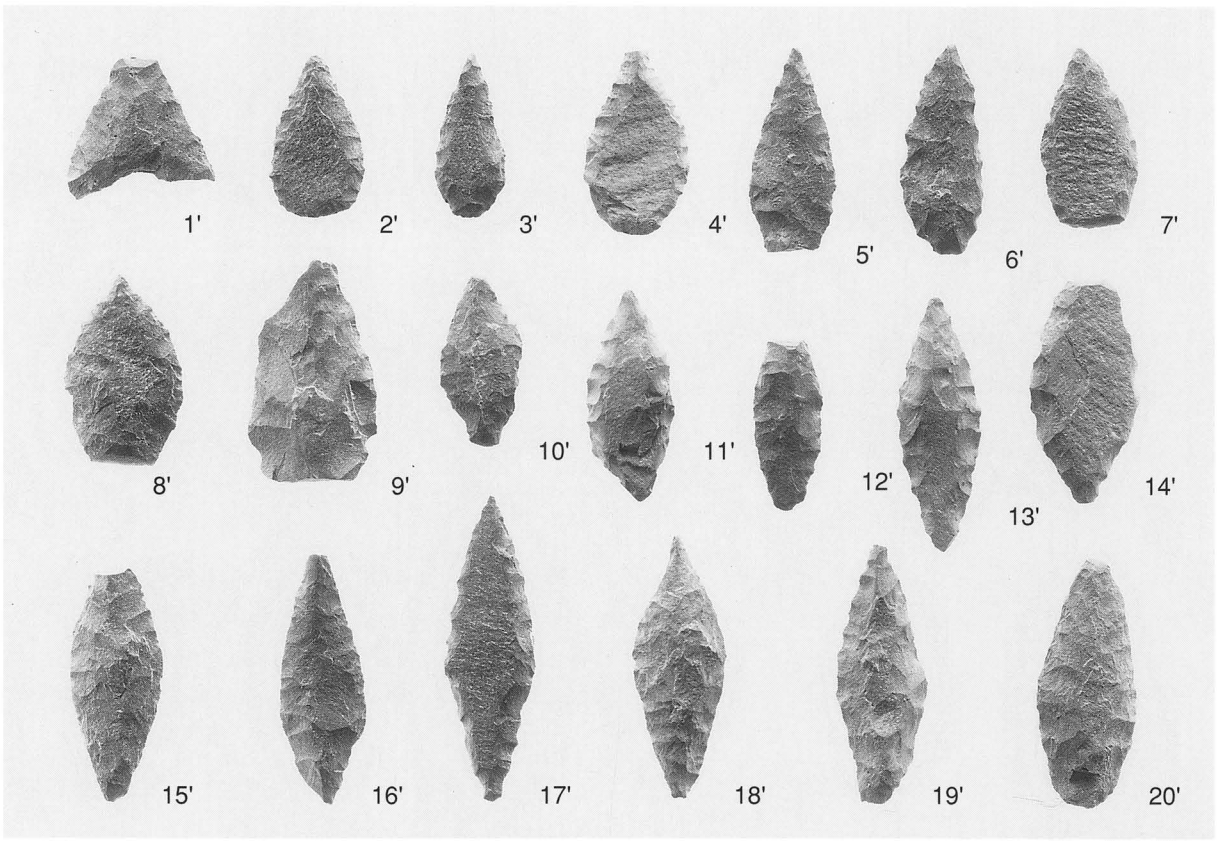
KS94　弥生土器（甕）



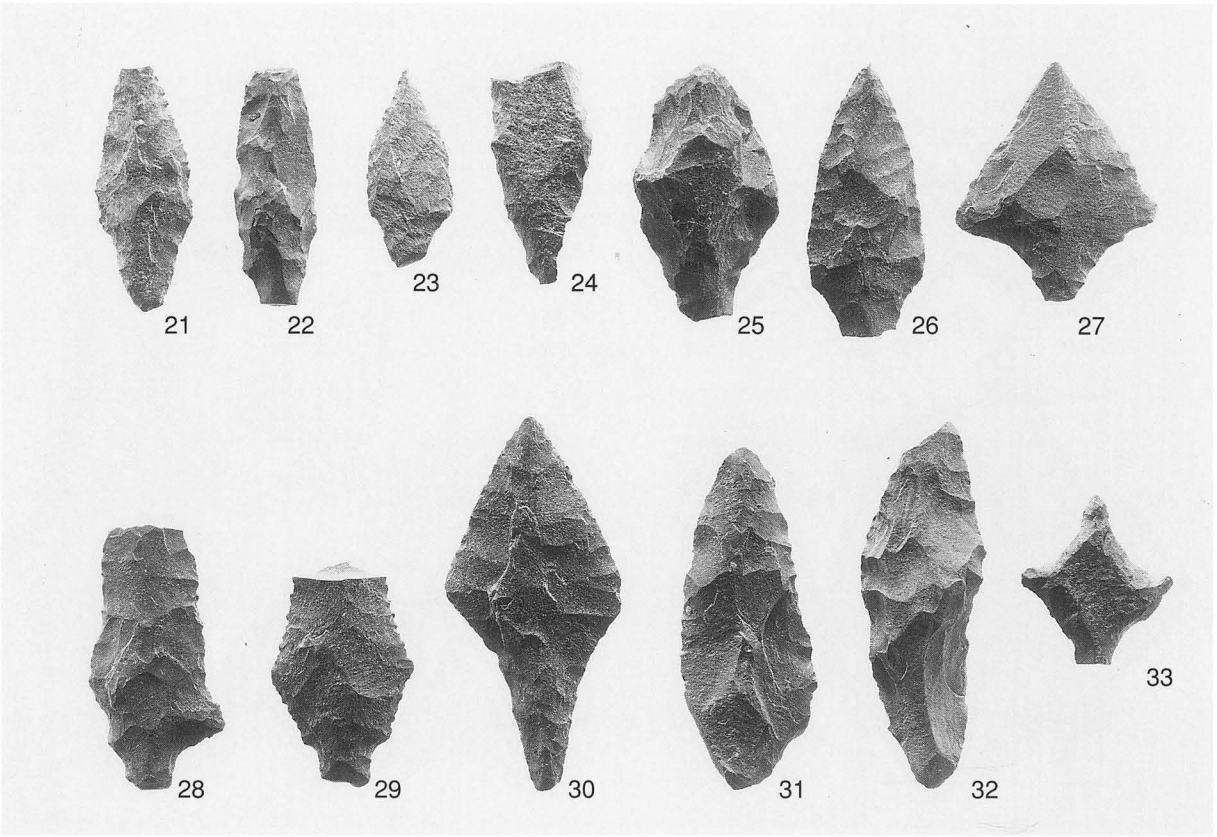
KS94　弥生土器（土製品）



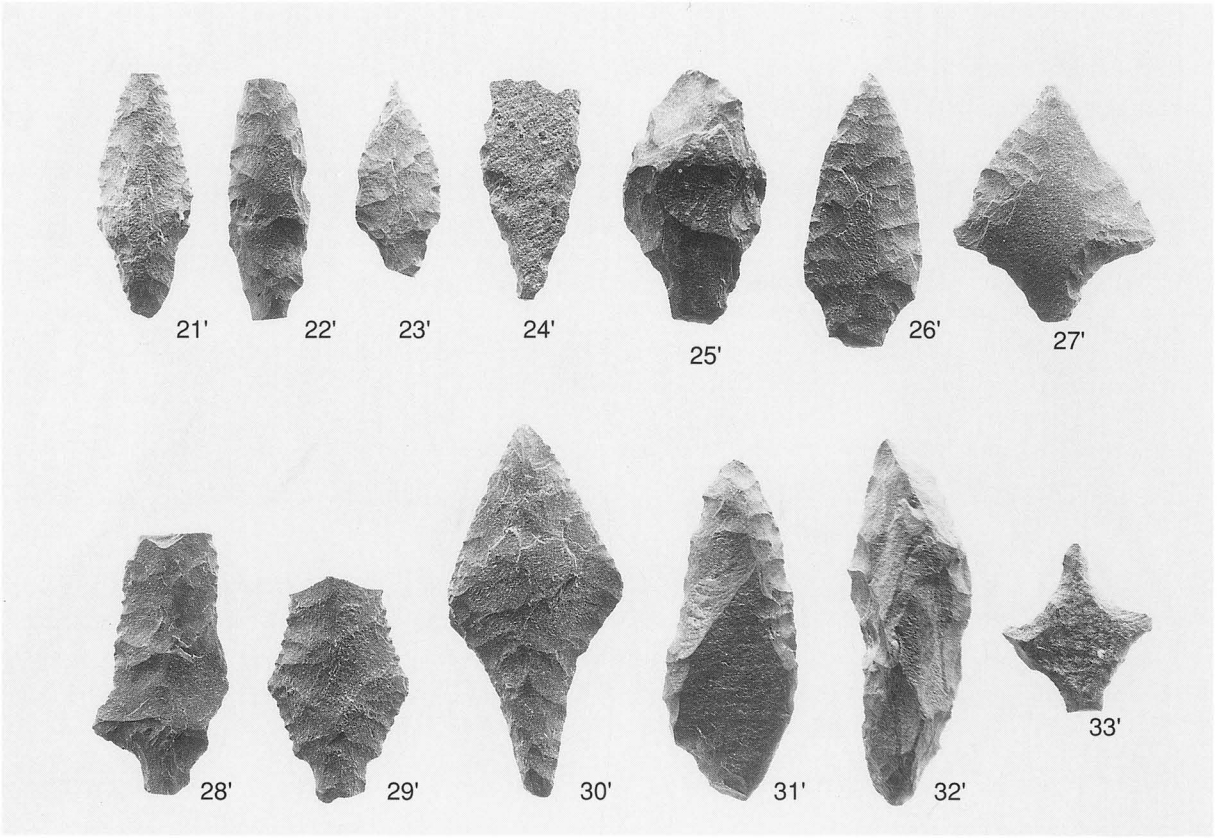
KS94　石鏃（A面）



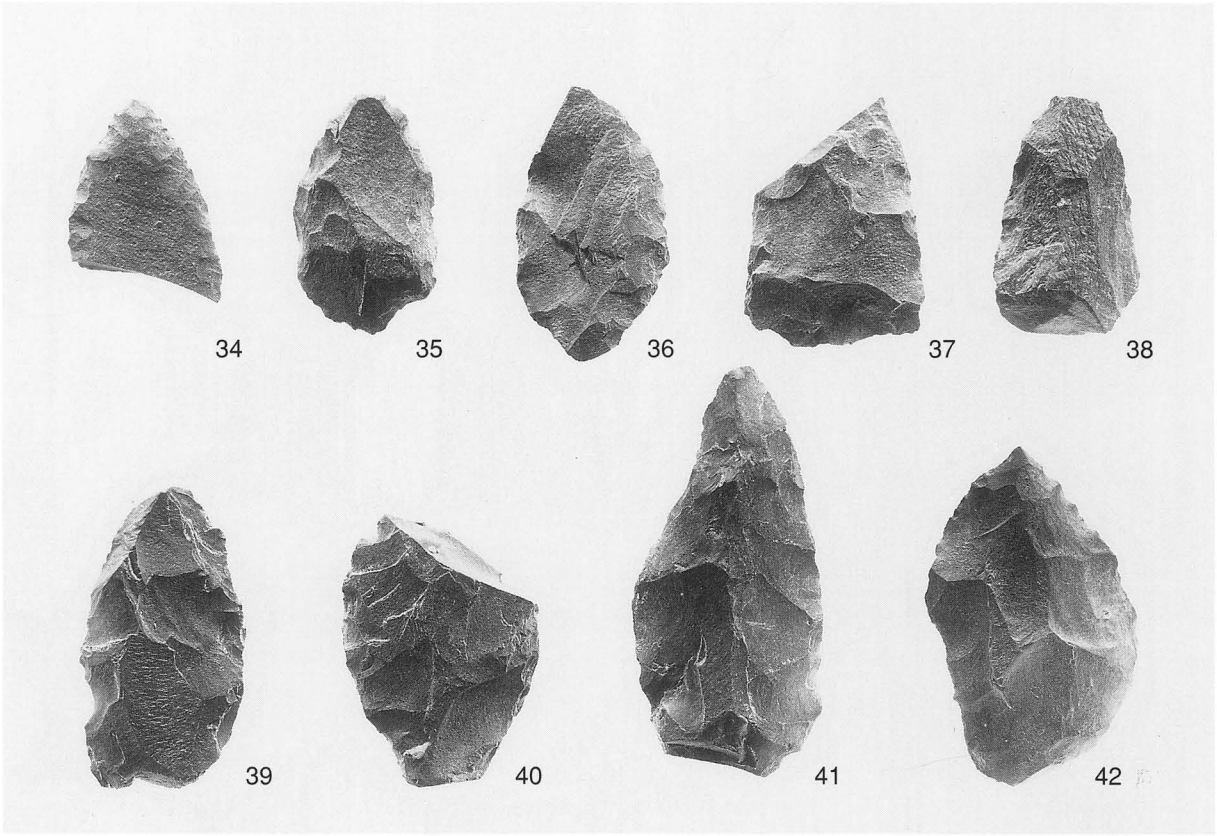
KS94　石鏃（B面）



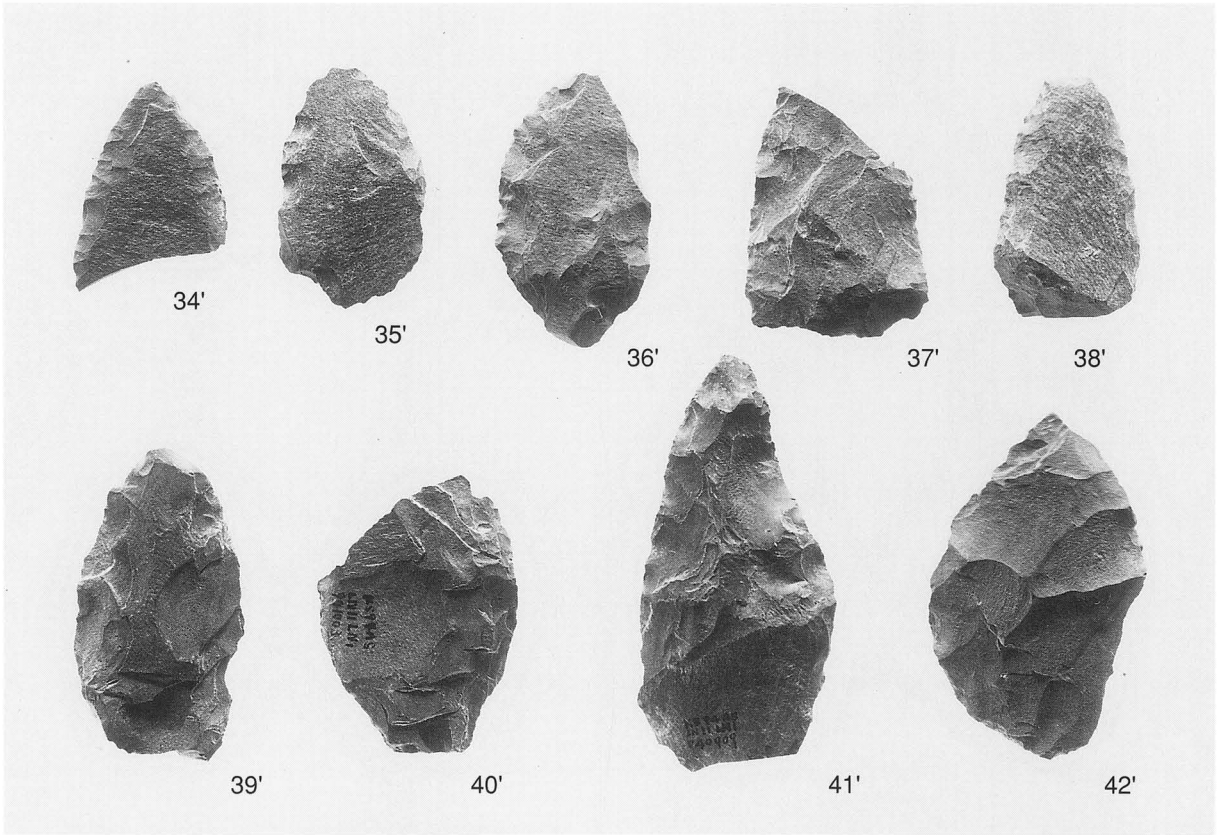
ＫＳ94　石鏃（Ａ面）



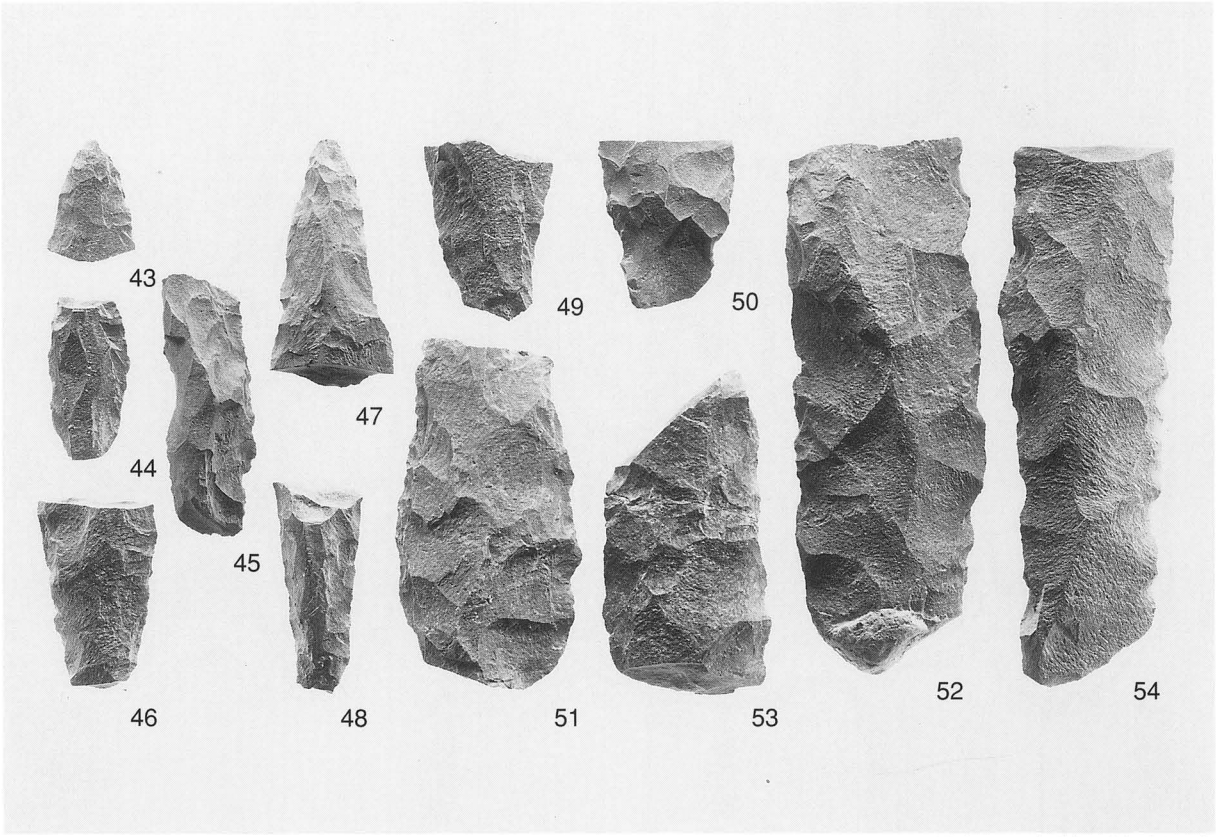
ＫＳ94　石鏃（Ｂ面）



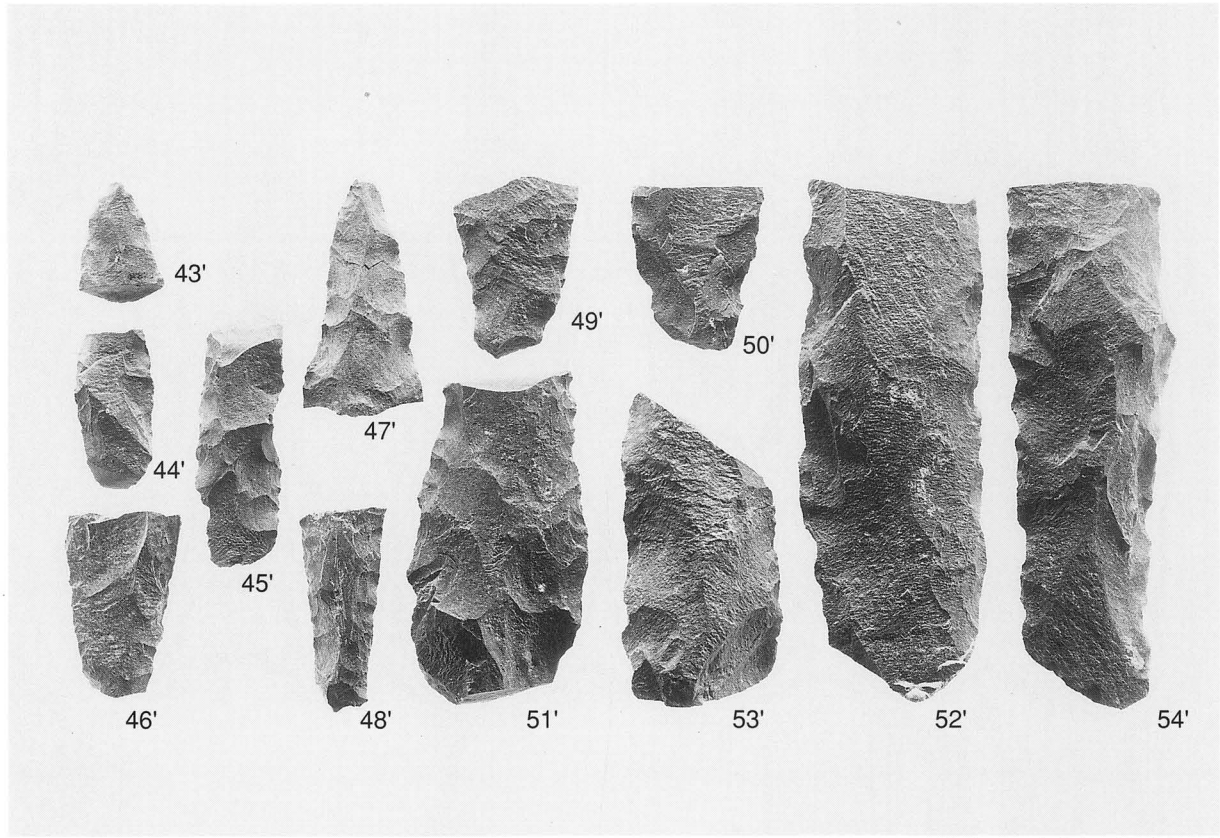
KS94　石槍（A面）



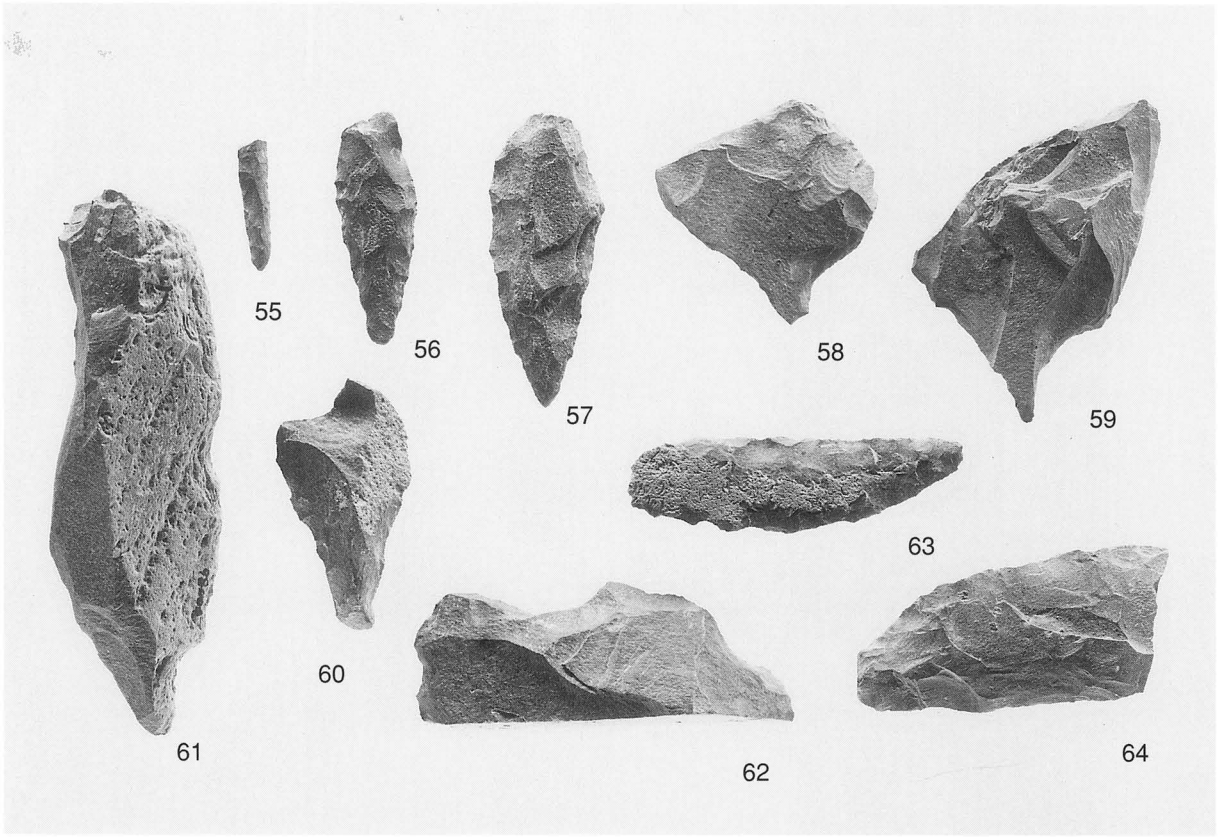
KS94　石槍（B面）



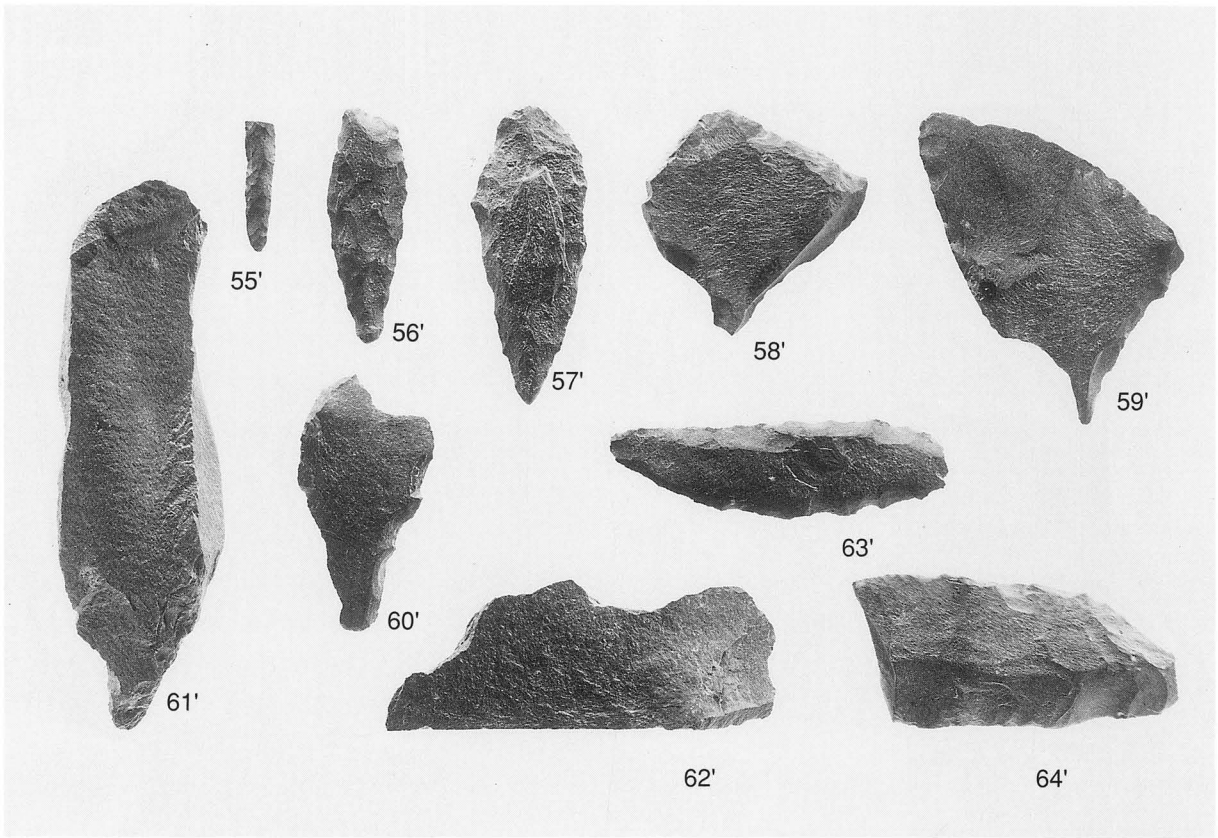
ＫＳ94　打製石剣（Ａ面）



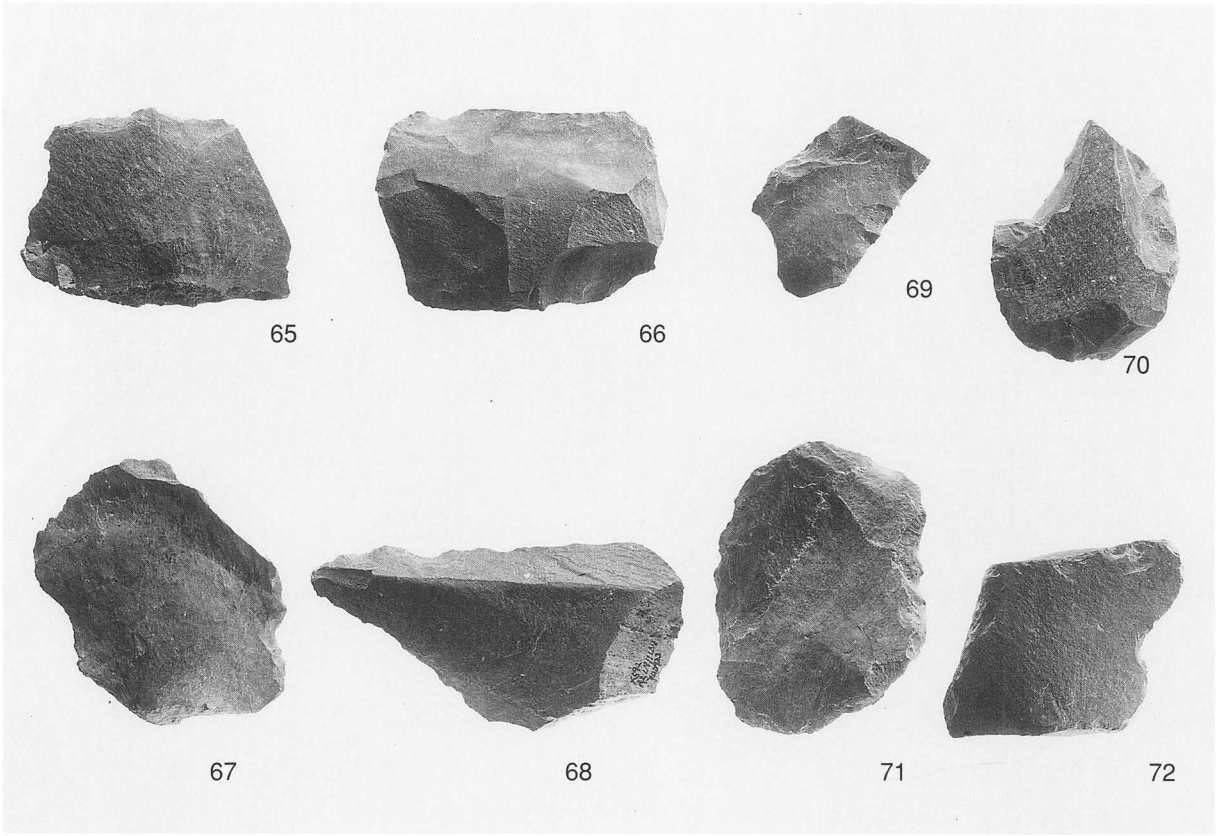
ＫＳ94　打製石剣（Ｂ面）



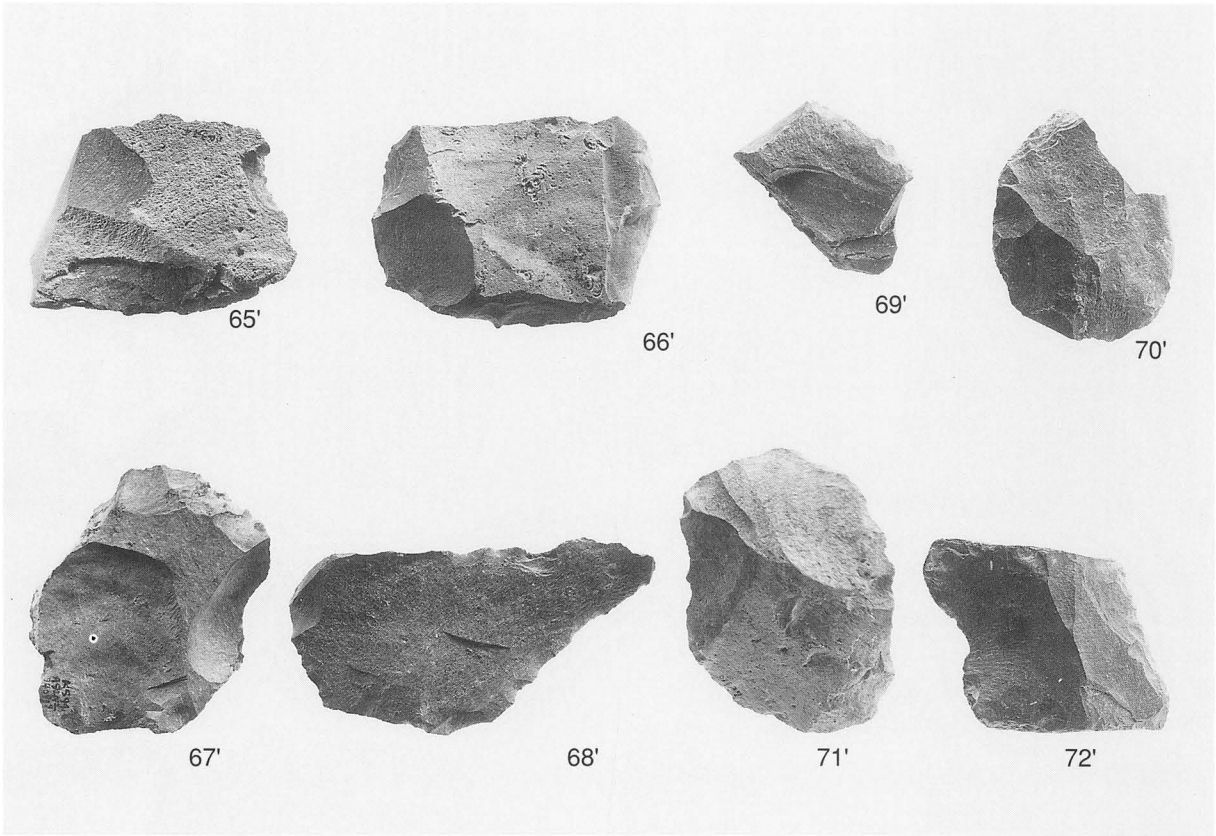
ＫＳ94　石錐，ベック，ノッチ削器，石小刀（Ａ面）



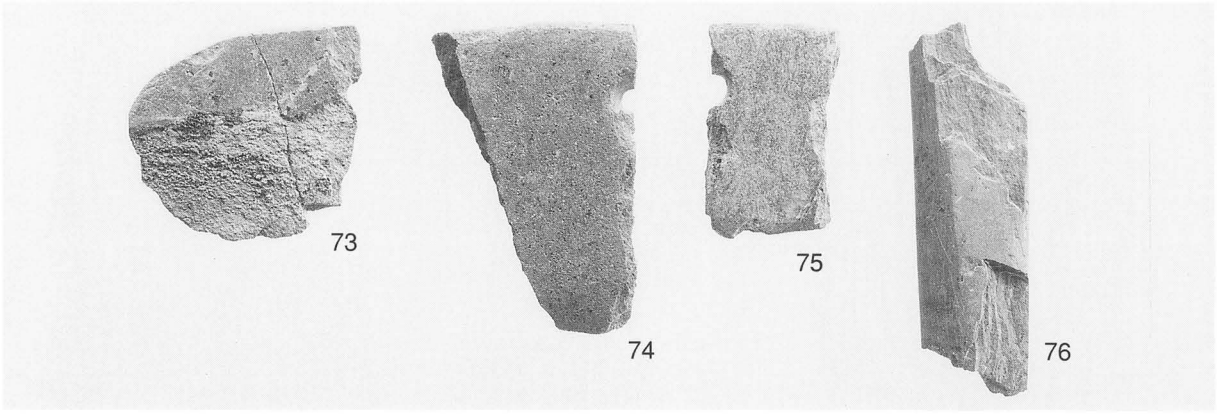
ＫＳ94　石錐，ベック，ノッチ削器，石小刀（Ｂ面）



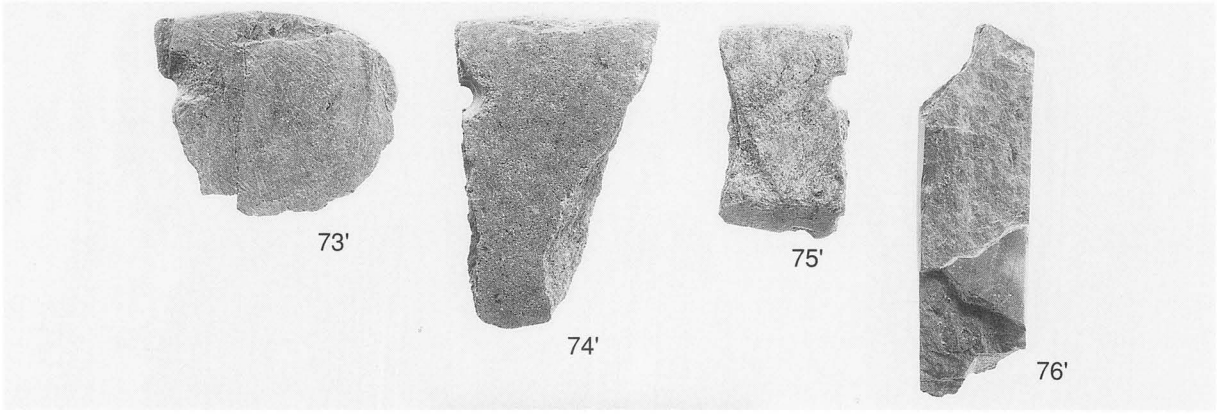
KS94　削器，楔（A面）



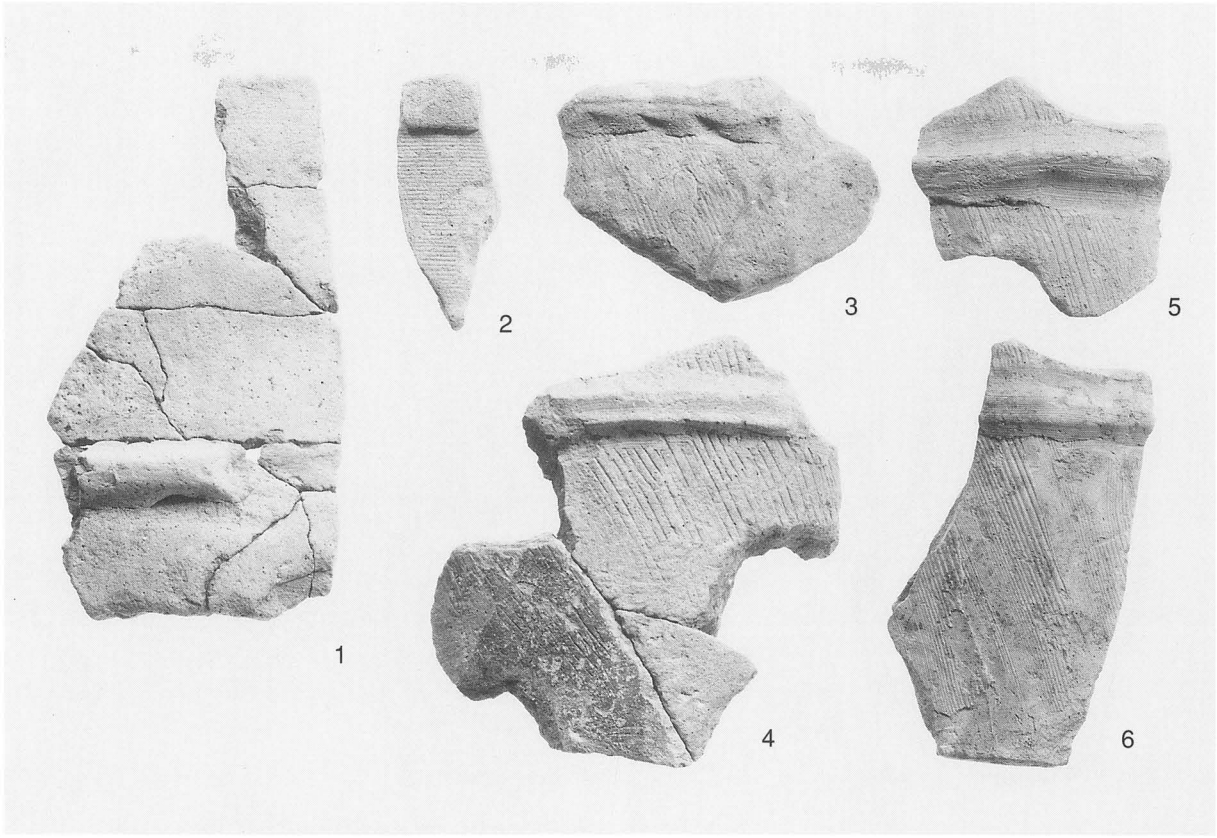
KS94　削器，楔（B面）



KS94　石包丁，砥石（A面）



KS94　石包丁，砥石（B面）



KS86　円筒埴輪

1

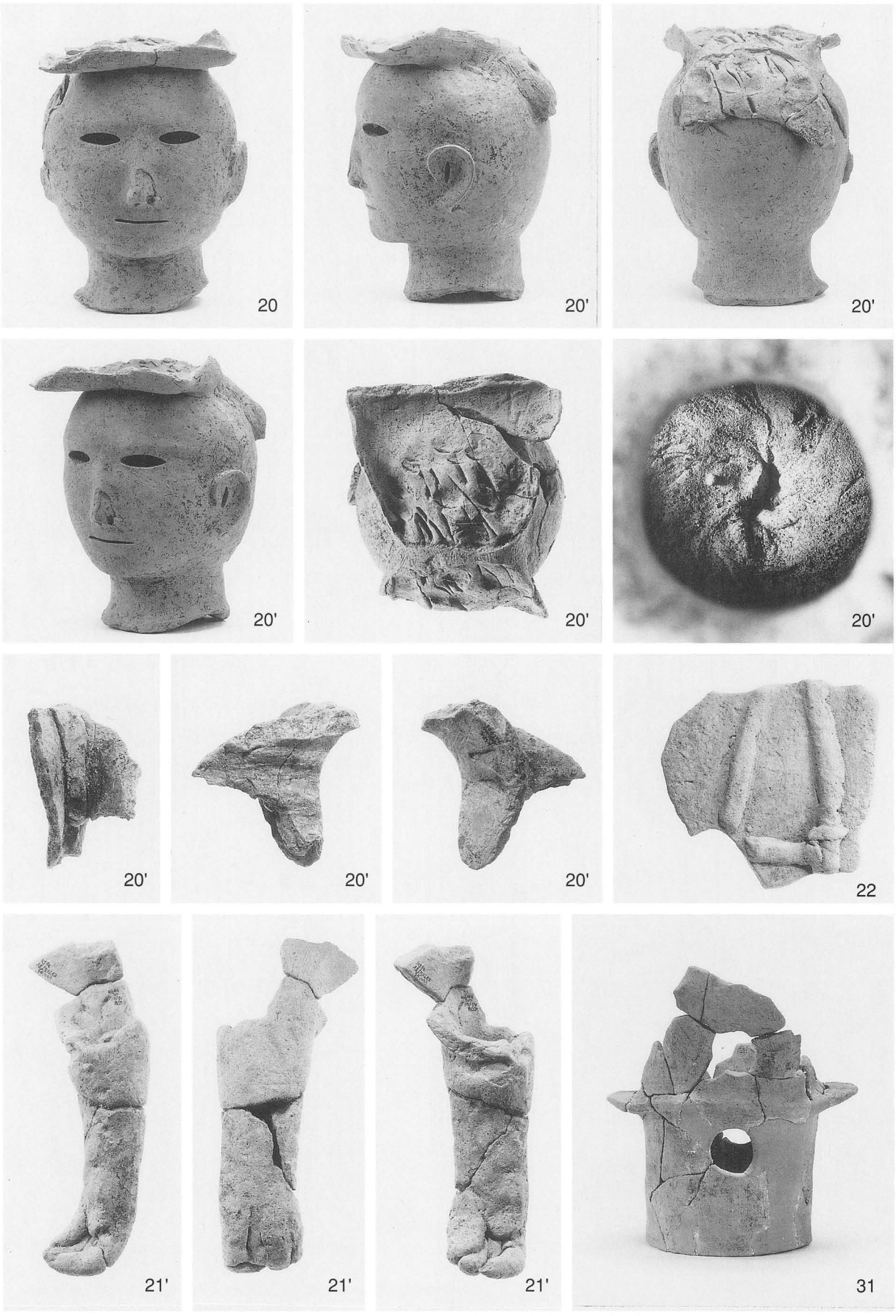
9

10

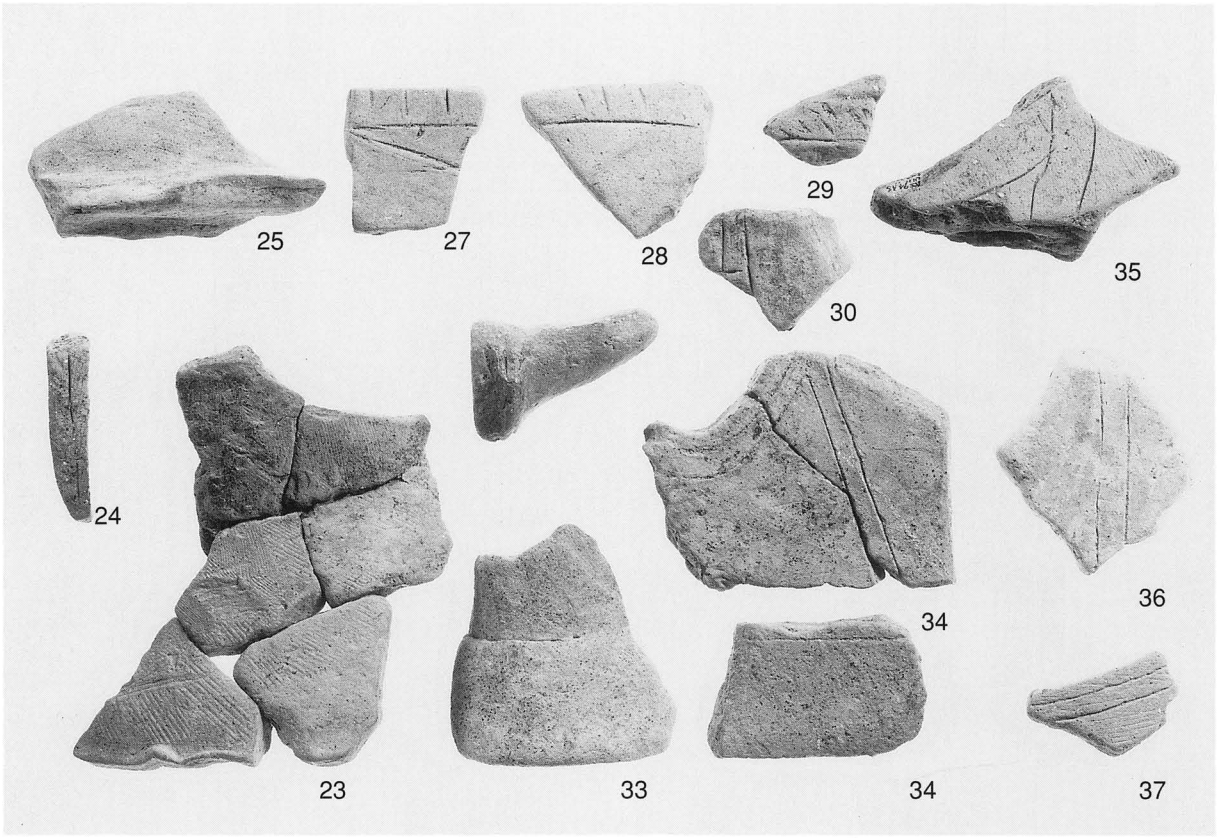
19

12

KS94　円筒埴輪，朝顔形埴輪

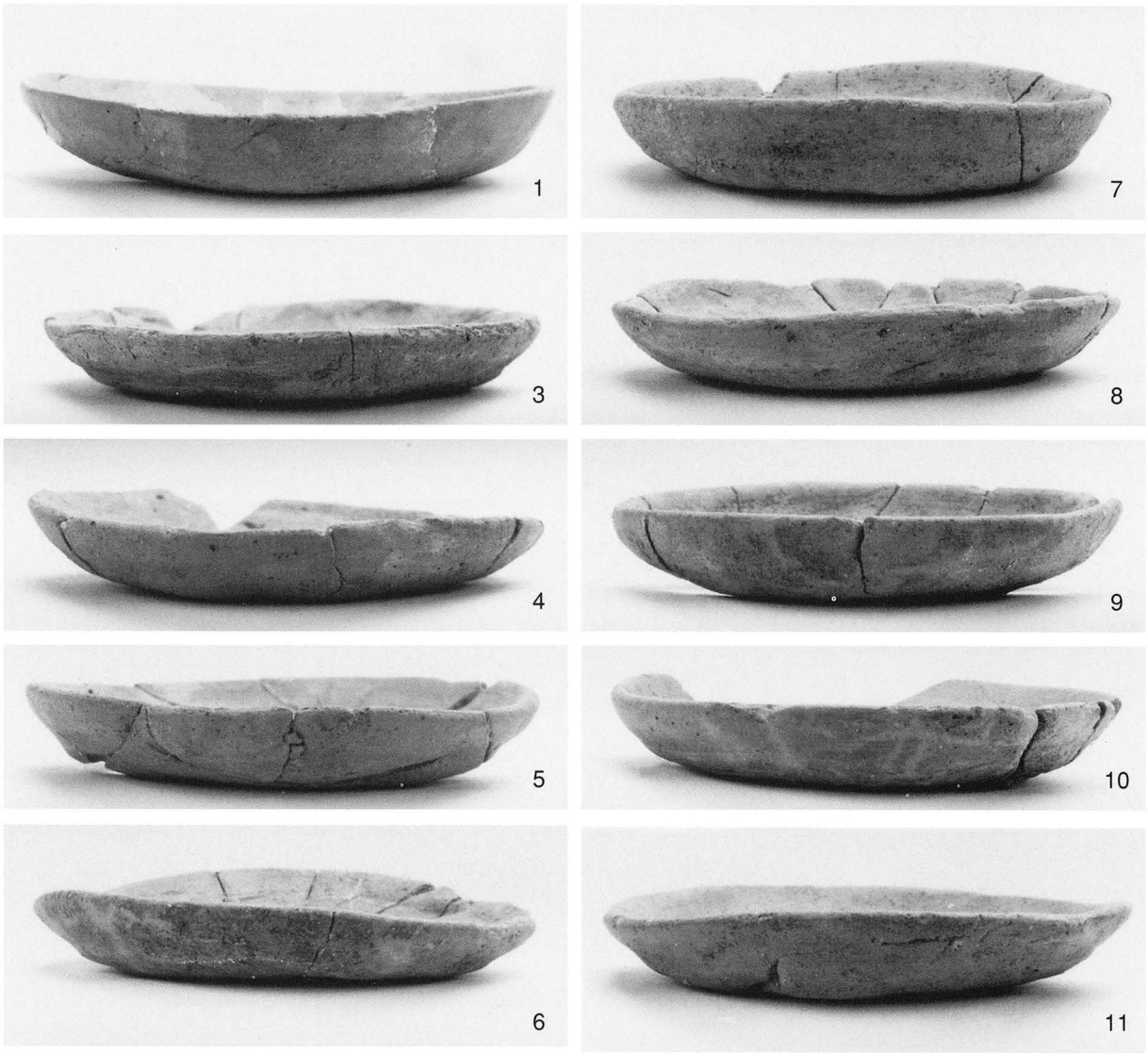


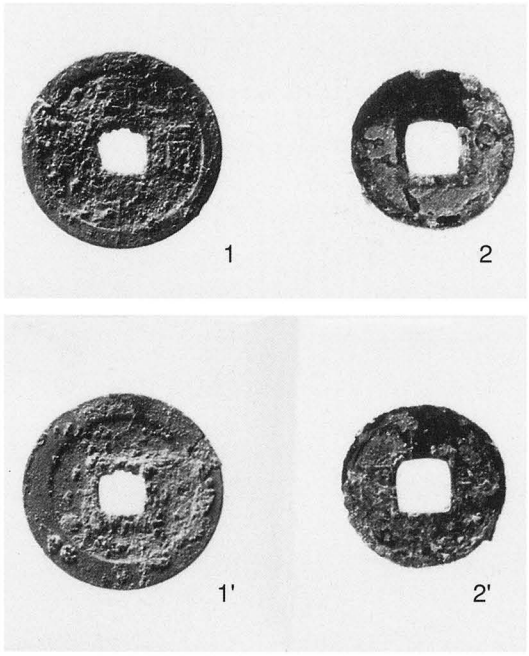
KS94　人物埴輪（頭部，肩部，手，衣装），鳥形埴輪



ＫＳ94　形象埴輪（衣装，みずら，眉庇付冑，靭，盾，馬，蓋）

ＫＳ94　蓋形埴輪

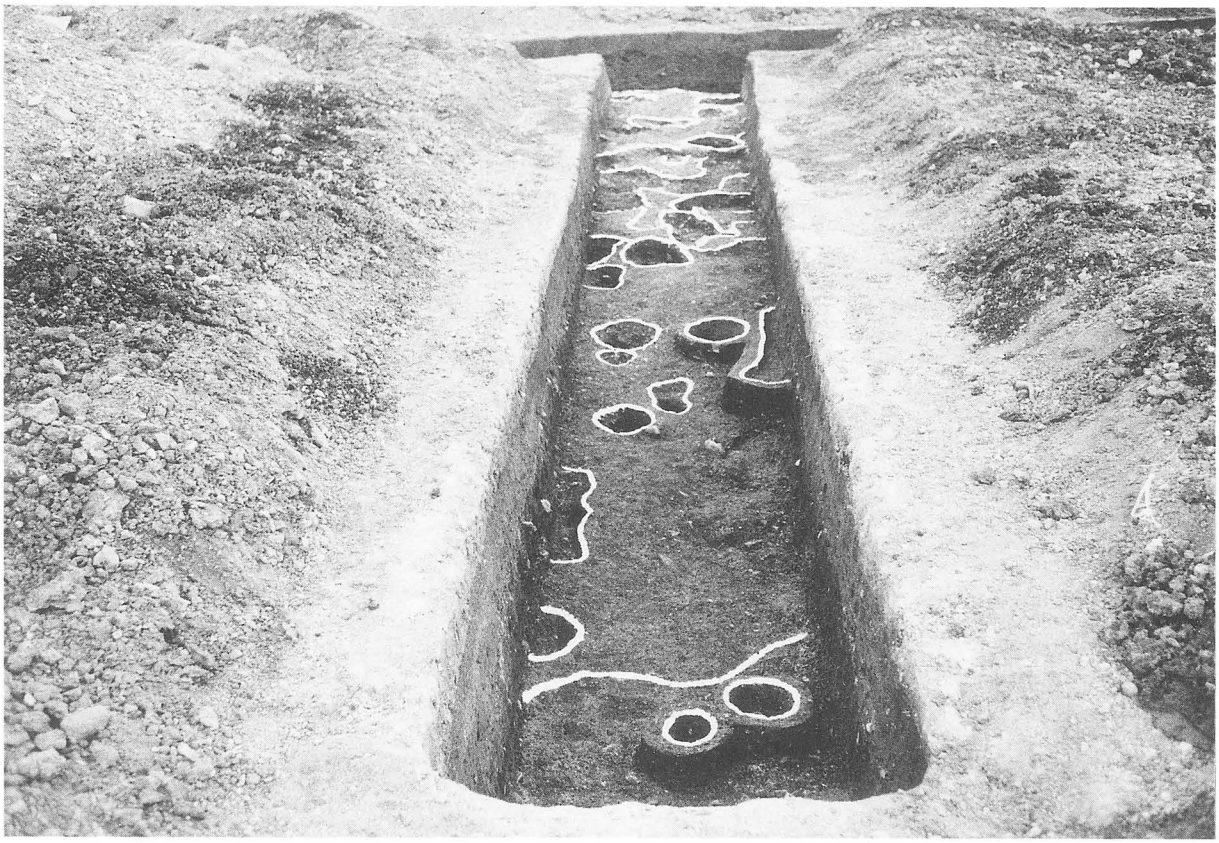




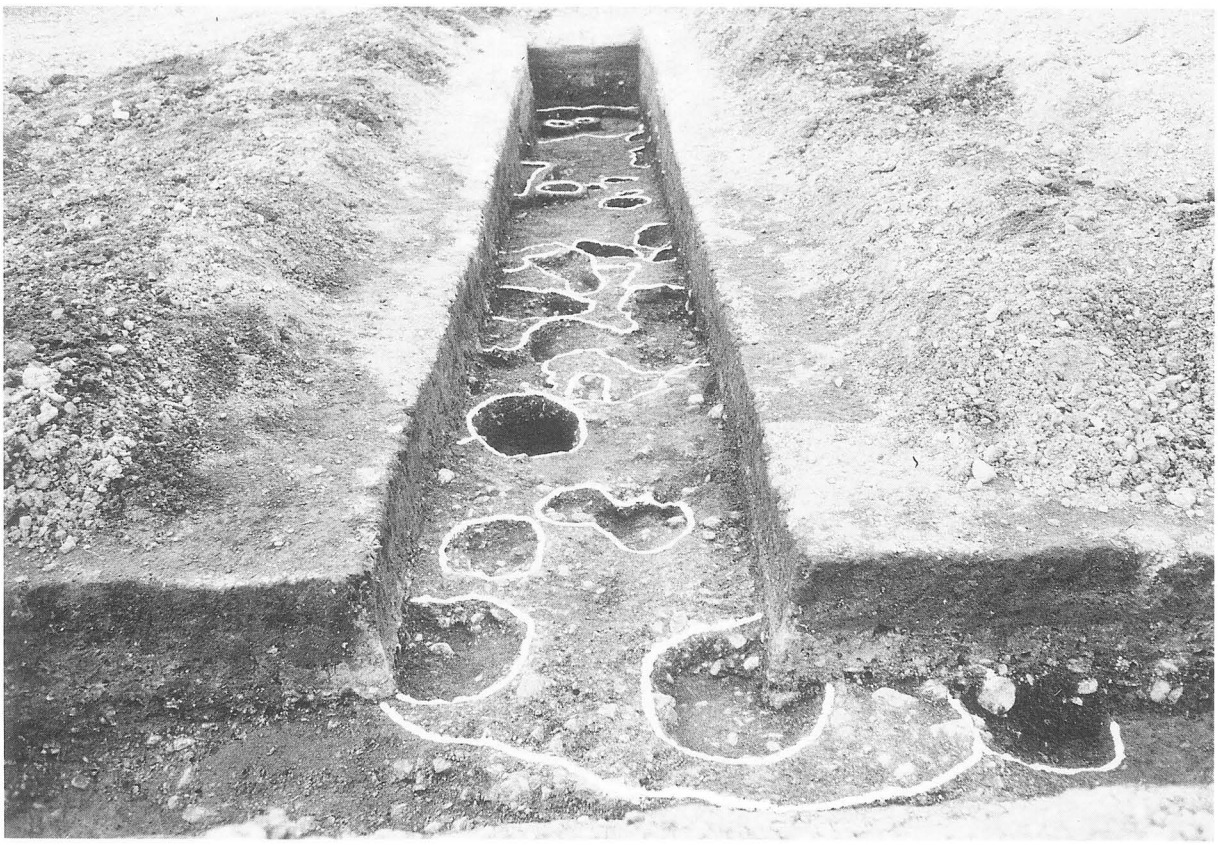
K S94　土壙１出土土師器，銭貨，土人形

ＮＮ94-1　Ａ地区全景　南西から

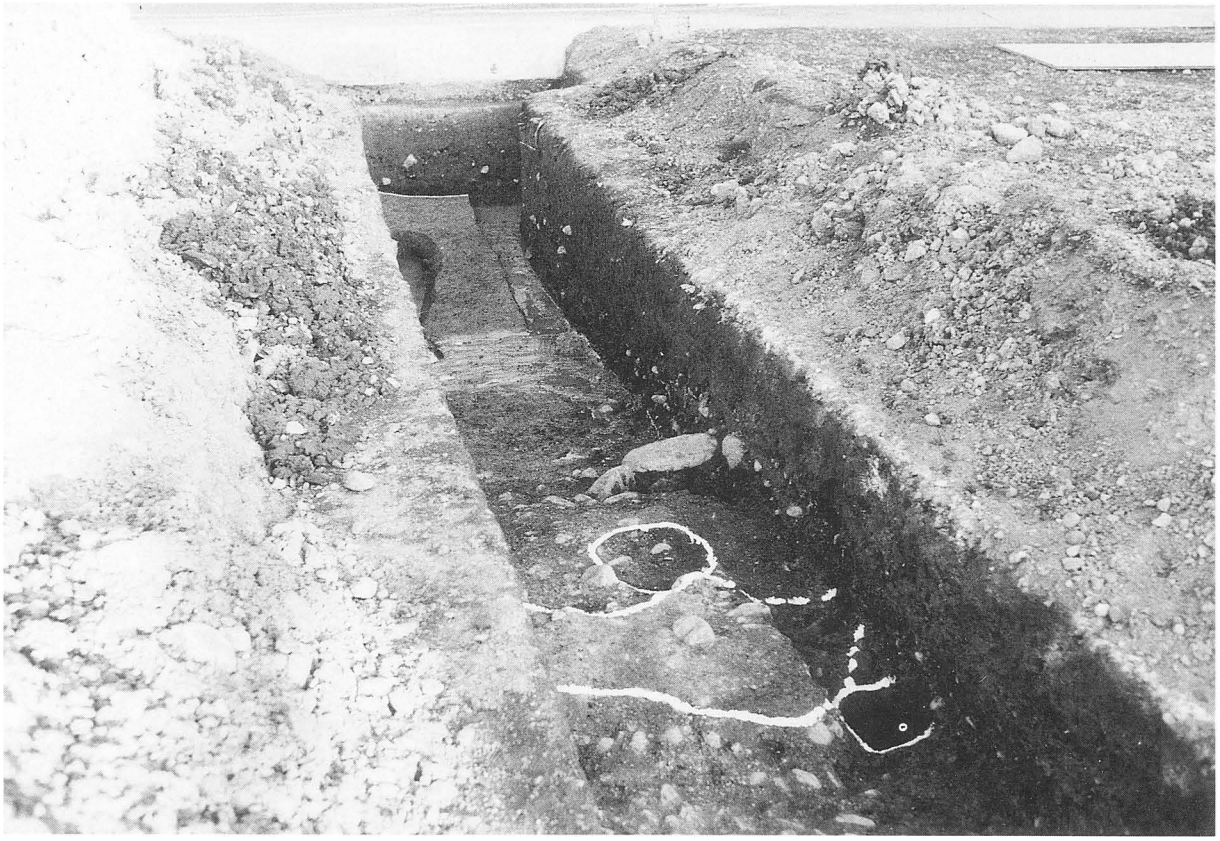
ＮＮ94-1　Ａ地区全景　北東から



ＮＮ94-1　Ｂ地区北半全景　北から



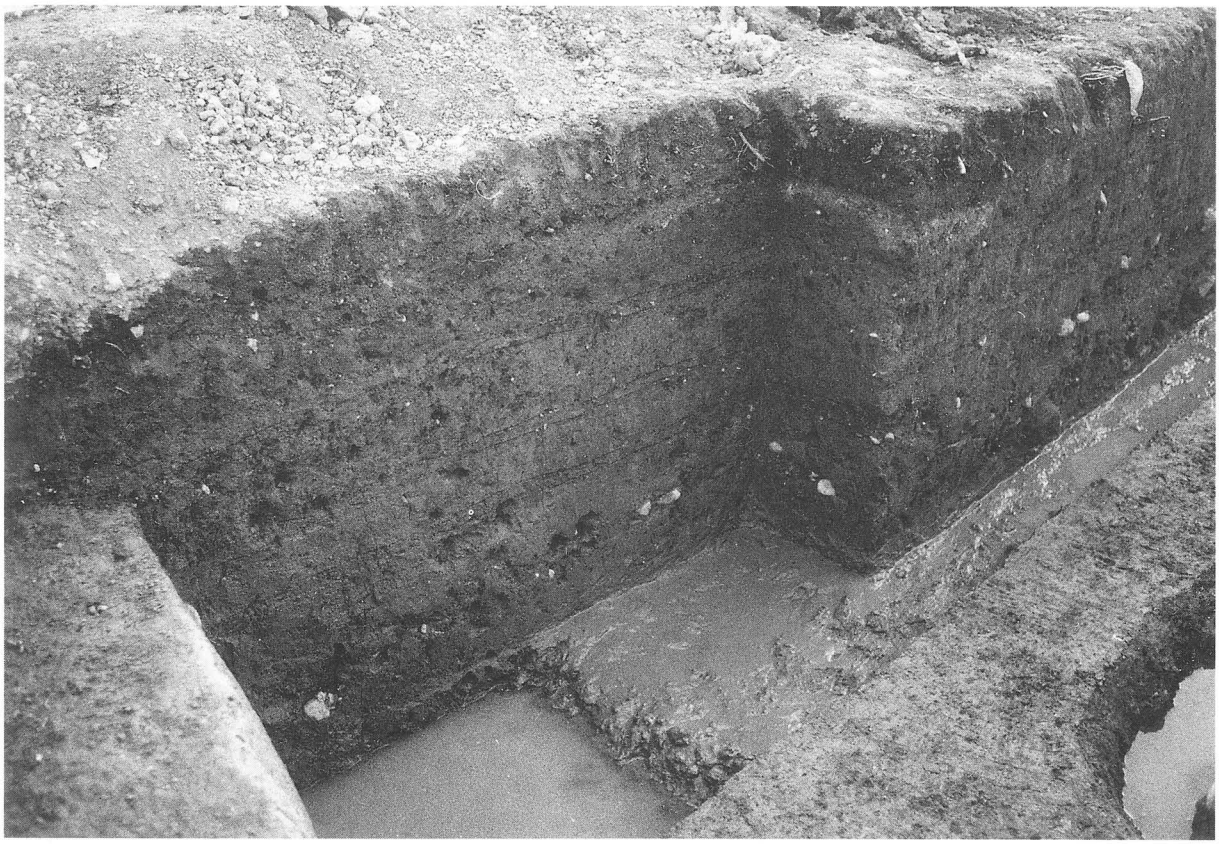
ＮＮ94-1　Ｂ地区南半全景　南から



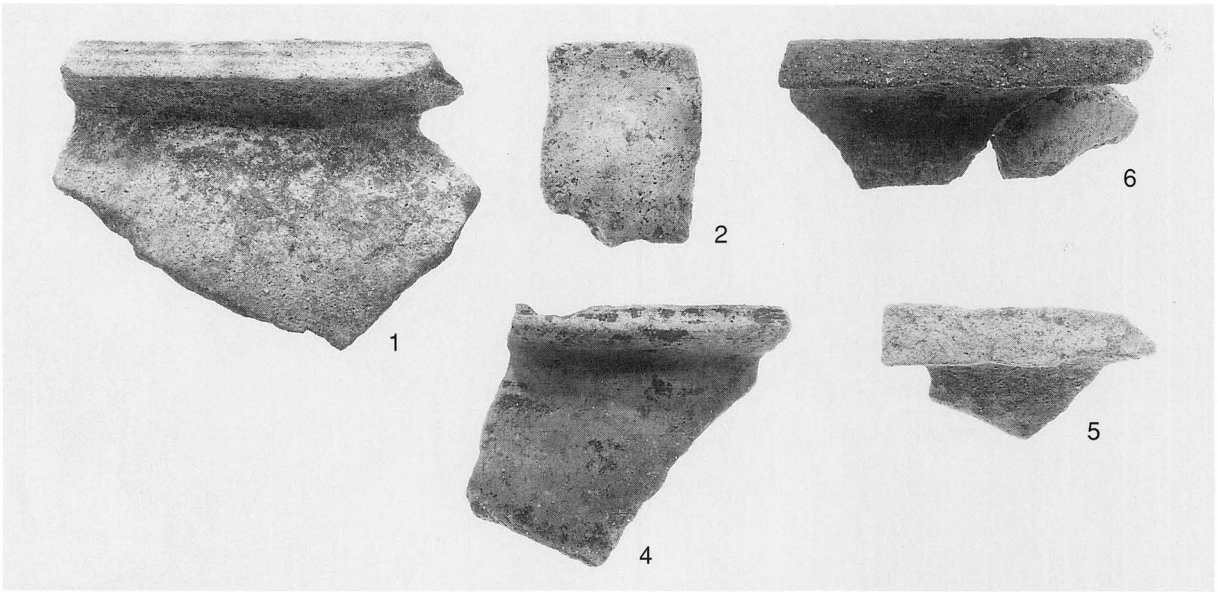
（上）ＮＮ94-1　Ｃ地区西半全景　北西から

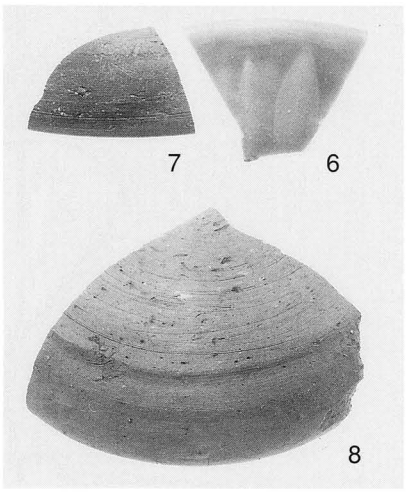
ＮＮ94-1　Ｃ地区東半全景　西から

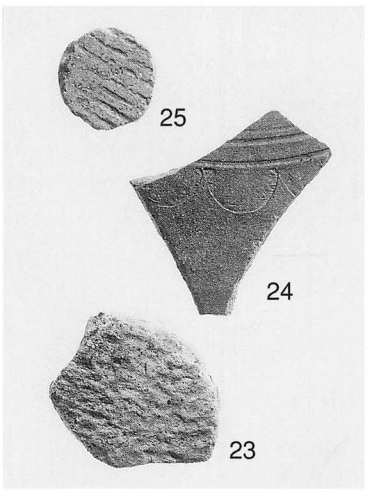
ＮＮ94-1　Ｃ地区東端溝４　南から

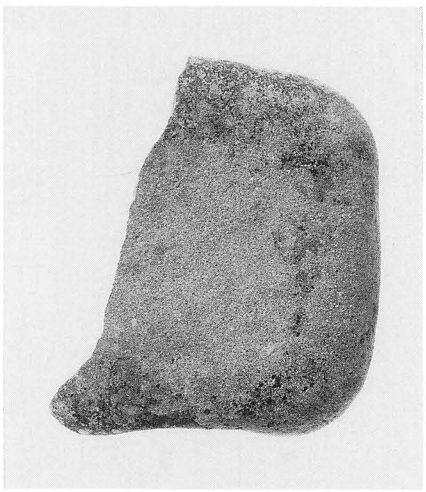


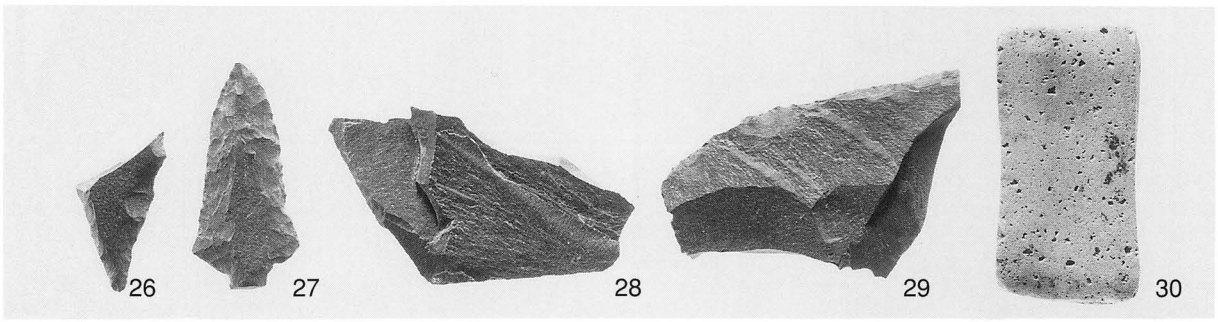
ＮＮ94-1　Ｃ地区東半南壁断面　北東から

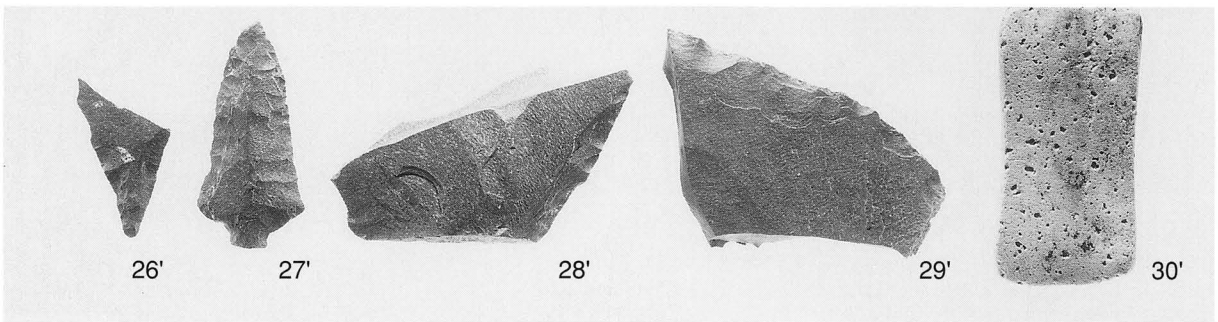




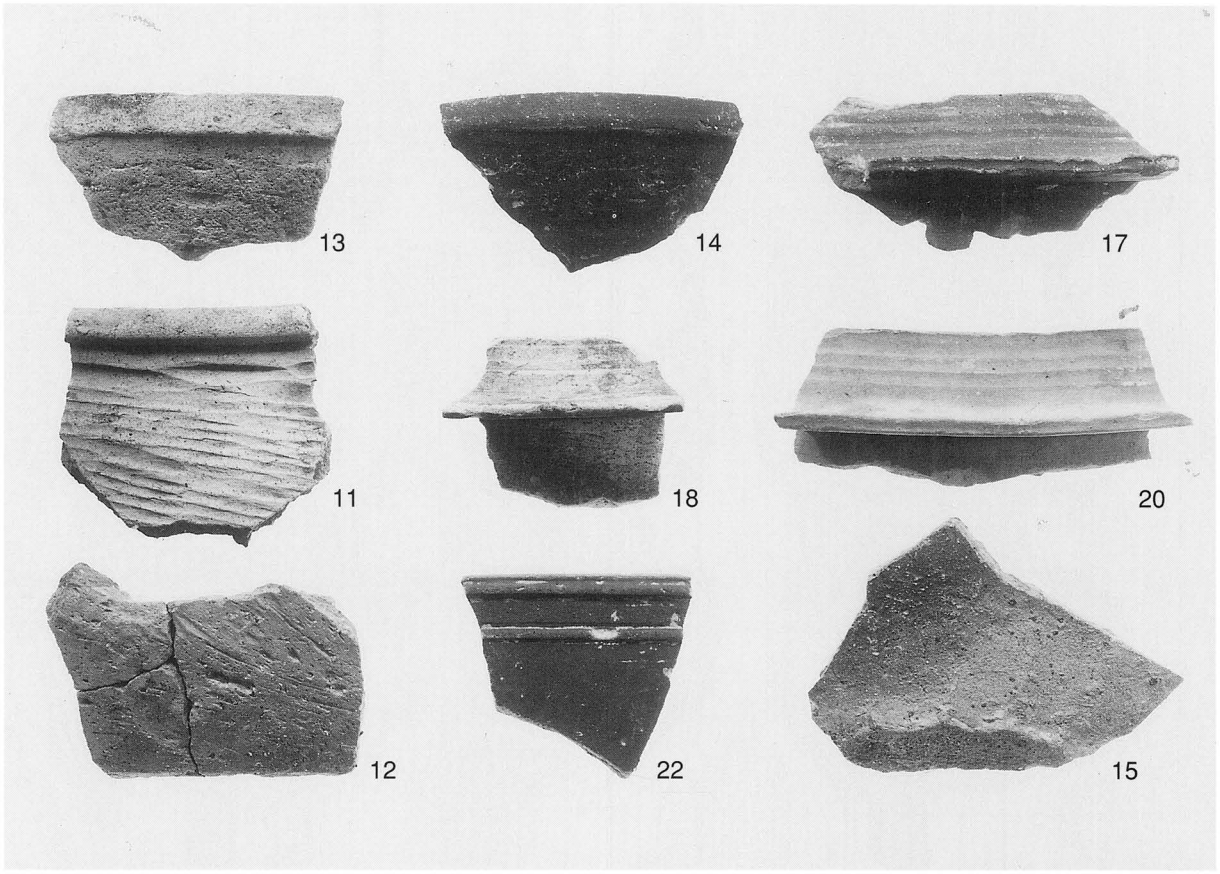


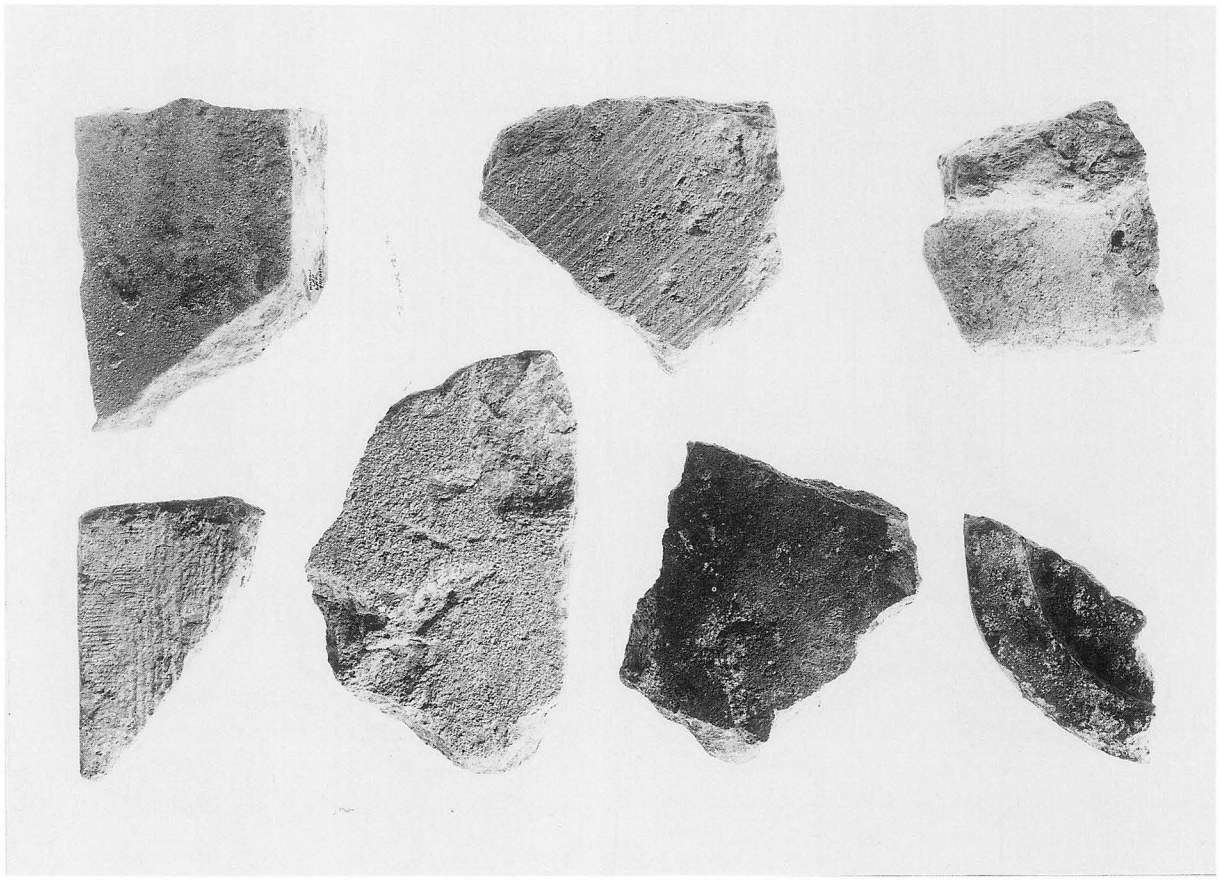






NN94-1　出土遺物（弥生土器，須恵器，青磁，韓式系土器，統一新羅系土器，石皿，石器，砥石）





ＮＮ94-1　出土遺物（土師質土器，瓦質土器，陶器，瓦）

富田林市埋蔵文化財調査報告26

発行年月日　1995年３月31日
編集・発行　富田林市教育委員会
住　　所　富田林市常盤町１番１号
印　　刷　橋本印刷株式会社

1995. 300